明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十年五月五日発行(毎月一回五日発行)

女學世界

第七巻第七號

博文館發行

本號は女學世界百號の紀念として福引券添付



◉美顔水は天下唯一の美白光艶劑なり◉

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今滿天下の貴婦人令孃佳人爭ふて之を用ひ賞贊の聲囂すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

（本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ）

▲東京市名は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す




新設寫眞部廣告
一、手札形（四枚一組）金壹圓
一、キャビ子（同　上）金貳圓
其他各種とも當店內新設の寫眞場に於て技師長柴田常吉擔任最新式の撮影を致し候
一御貸衣裳
御寫影用として元祿模樣其他古代服等の御貸衣裳も備付け置候間御隨意御使用被下度く尙は特別假裝服及び歌舞伎衣裳等は一日前に御申入被下候へば御取揃へ準備可仕候間續々御來塲奉願上候
三越吳服店
日本ばし
駿河町

女學世界 第七卷第七號 目次


軍陣必勝

(一〇一)

女(いの二)



カメリヤ
洗粉
カメリヤは色を白くし艶をよくする最新最良の洗粉なり
カメリヤは優美なる香氣を有し一度之れを用ゆれば芳香永く身邊に薫りて自から心氣爽快ならしむ
殊に貴紳淑女の高等化粧料として大に社會に高評を博せらるゝ本那唯一の洗粉也
定價
大瓶 廿五錢
瓶入 十二錢
袋入 五錢
小袋 三錢
本舗 東京神田 小林富次郎
發賣元 ライオン齒磨

(いの四)

つゝじ



日高嶋助筆

松みどり香油

松みどり香油は原料を吟味し製法を注意いたし候者にて優雅高尚なる香氣を長く有ち頭髪の光澤を増す特効ありて世に有り觸れたる香油とは大に趣きを異にいたし居候へば貴夫人令嬢方には缺くべからざる逸品に御座候御試用の上御高評願上候

定價
○大壜 四十五錢　○中壜 二十錢
○小壜 十二錢
○一合 三十五錢

製造本舗 東京上野廣小路 **山崎屋油店** 電話下谷一七三五番

◎販賣所は各化粧品店にあり

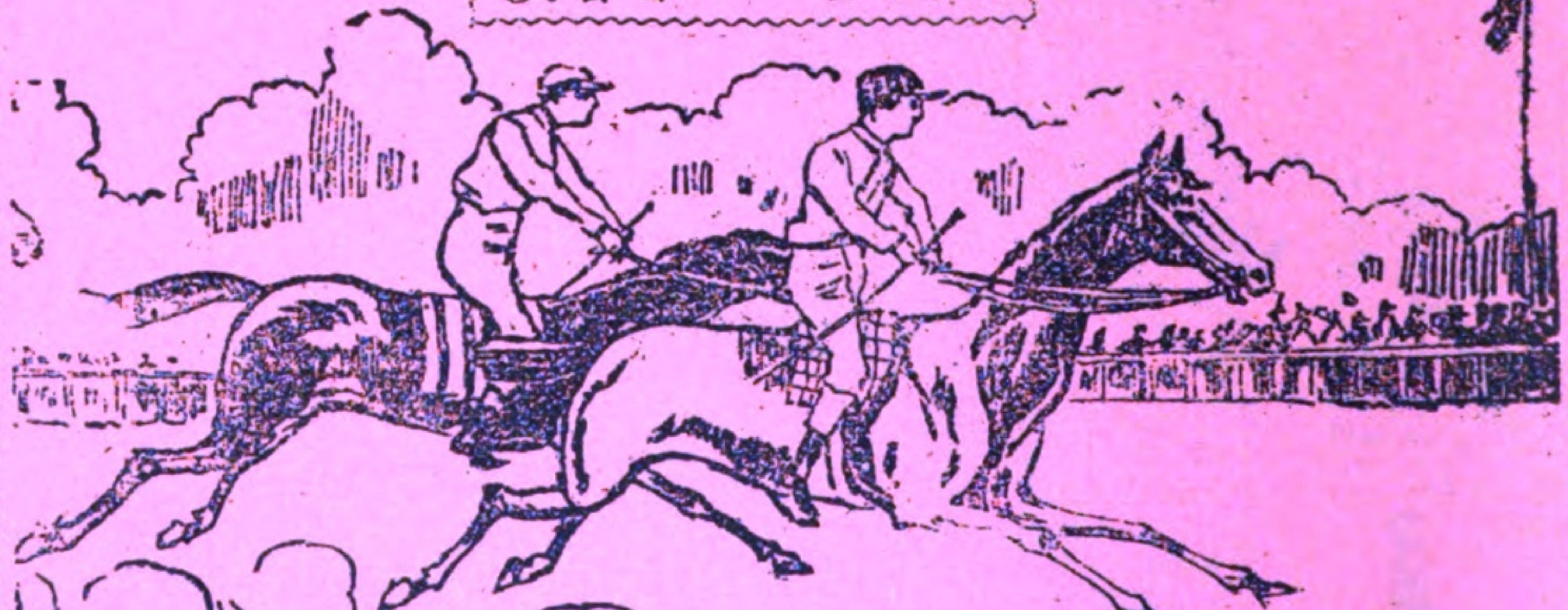


大好評 佛國製

ターバ香水

有名なる各和洋小問物化粧品店にあり

◎中瓶一本…………金壹圓
◎小瓶一本…………金廿五錢



化粧品雑貨直輸入商

東京日本橋橘町二丁目 **竹間商店** 電話浪花(一六一四番)

女(ろの一)

女(ろの三)

内と外





竹久夢二筆

女（はの一）



(其の二)

造花用材料一式

刺繡用材料一式

摘細工用材料一式

東京市本郷區眞砂町十五番地

百花堂

地方御注文ノ節ハ代金引替

小包郵便ニテ御送リ申上候

婦人科
小兒科 專門

午前宅診 午後往診

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

女醫 鷲山彌生

代々家傳の妙藥

月經通丸

やくぐすり

調劑元

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滑りし胃腸子宮等な痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五拾錢壹圓特製貳圓小包料は八錢

東京市丸の内

有樂町二ノ三

江戸屋

新刊

鏑木清方君畫

河井醉茗君序

溝口白羊君著

家庭小品

草ふぢ

上製洋裝頗美本

口繪艷麗三色版

挿繪木版畫數葉

定價 金七十五錢

郵税 金八錢

草ふじ!!! まア何といふ優しいそして美しい名でせう その花名に優しい美しい美文ばかりを集めたのが此「草ふぢ」です 今までにも隨分女が讀で美しい可い美文の書物は澤山出ましたが女子の手に成つたものといふと殆んど皆無ですし それかといつて又男子が書いたものは皆餘り男子的ですから女が習ふ手本にも成りません この書は即ち其缺點を補ふための適當な書物で各地の婦人會の賛養者として又女子教育の熱心者として常に女子の爲に深い同情を持つて居られる詩人溝口白羊先生の作ですから同じ男子の作でも女の讀物として最も適當な最も面白い書物であります 書肆は此書が現代紳士淑女の家庭及溫良なる女學生の几邊に一日も缺くからざる美しい書物であることを信じて疑ひません

發行所 東京市麻布區飯倉四丁目 益世堂

賣捌所 東京堂●上田屋●大洋堂

女(はの三)



山葉風琴

（保險附）

品名	價格
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二八、〇〇
第參號	二五、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	二七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾參號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷用オルガン壹號	二一〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇





○山葉洋琴・・・・金參百參拾圓以上
金壹千參百圓迄各種

●舶來洋琴 三百圓以上三千圓迄各種

●舶來風琴 百圓以上千五百圓迄各種

○鈴木ヴアイオリン
金貳圓以上百貳拾圓迄各種弓金七十錢以上五圓五十錢以上各種



●舶來ヴァイオリン及弓箱等各種

●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種

●戰捷紀念國旗印銀笛數種

●八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジヨレーット各樂器附屬品、和洋音樂書各種郵劵貳錢御送附あらば詳細なる目錄進呈す

◎文部省檢定濟廣告◎

デュエット トリオ 唱歌集 伴奏附

大形美本全壹冊
定價金六拾五錢
郵稅金八錢

發行以來多大ノ好評ヲ博シタル本書ハ今回彌々文部省ノ檢定ヲ經タリ希クバ一層大方諸賢ノ御愛唱アランコトヲ

ピアノオルガン
調律修繕

（振替貯金口座壹五八〇番）

東京市京橋區竹川町十三番地 合資會社 **共益商社樂器店** 電話新橋五二九 電報略號キヨ

（はの四）

皐月



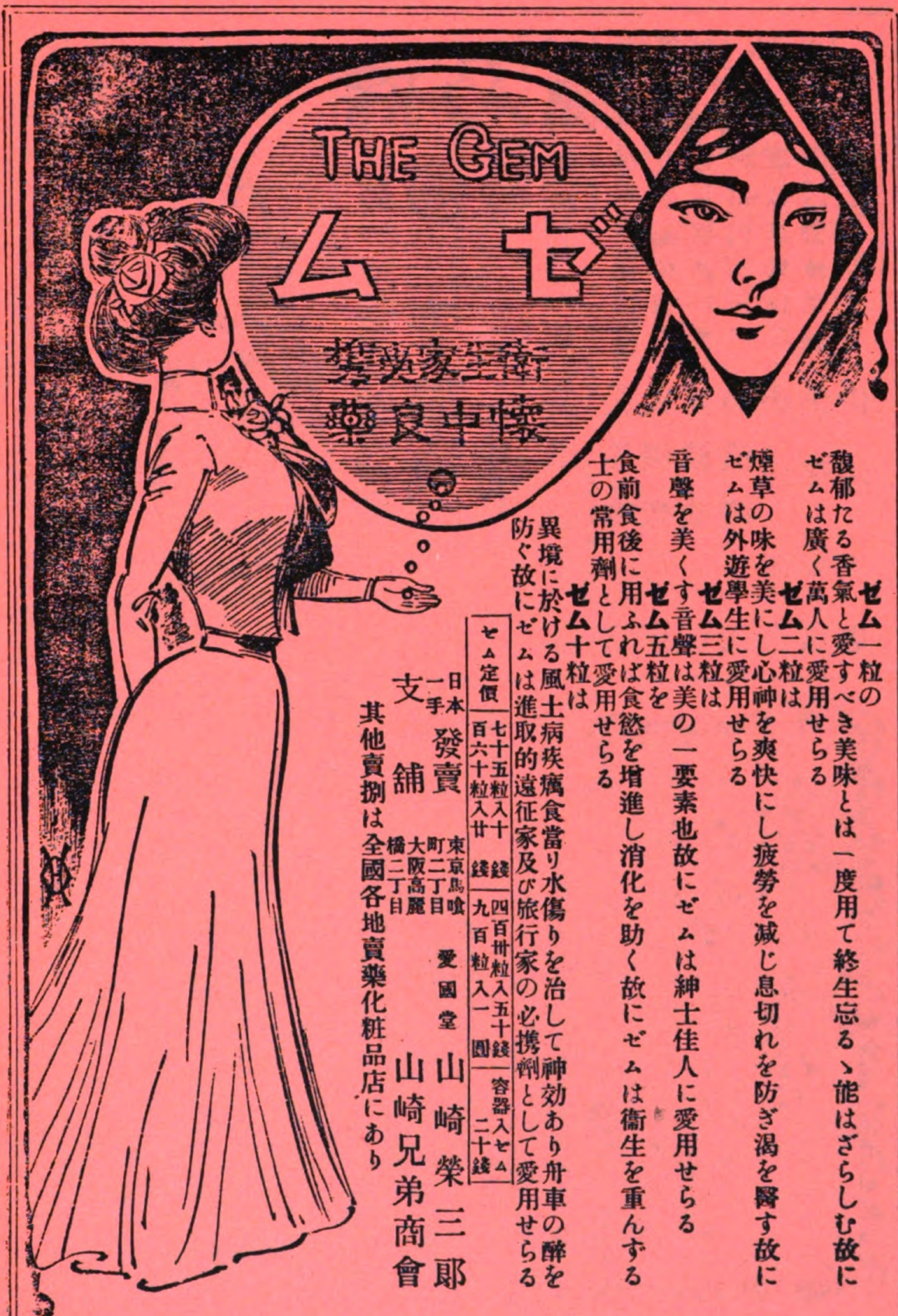
戸田玉秀筆

福田麥僊筆



上野の森

女（にの三）


THE GEM
ゼム
衛生家必要
懐中良薬
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の酔を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢 四百卅粒入五十錢 容器入ゼム
百六十粒入廿錢 九百粒入一圓 二十錢
日本一手 發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

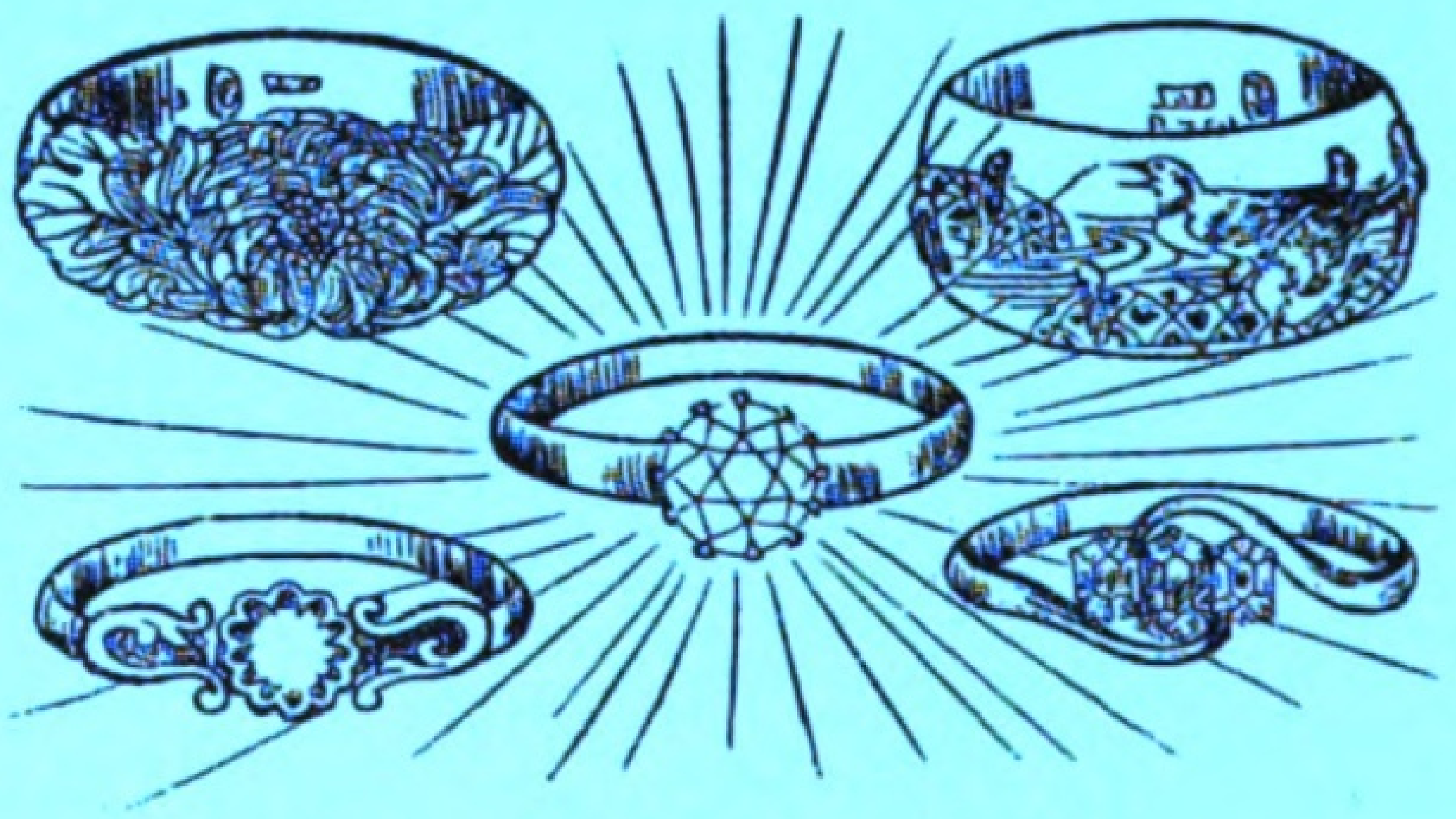
女(にの四)

初の夏



高橋天美筆

貴金屬指環



弊店は從來金細工を本業と致居候間金質其他確實に仕り候萬一相違等有之候へは他の品と交換又は原價を御返戻致候共貴需に應ずべし

切立。蒲鉾（無地鎚目）
純金二匁附　金十二圓二十錢
廿金二匁附　金十圓二十錢
十八金二匁附金九圓三十錢

片切彫刻　三匁附
純　金　金廿圓五十錢方
廿　金　金十七圓六十錢方
十八金　金十六圓三十錢方

高　彫　三匁附
純　金　金二十九圓方
廿　金　金廿六圓十錢方
十八金　金廿五圓方

寶石入
ダイヤモンド入
金三十圓方金千圓
ルビー及サツフイヤ
一個入　金七圓方
三個入　金十八圓方

○送料内地は十二錢臺灣清韓は三十錢郵券代用一割增

貴金屬細工
袋物商

東京市京橋區南傳馬町三丁目
丸屋商店
（電話本局二十番）

『注意』御注文の節は厚き紙にて指の太さを御送附被下度候

流行に後れざらんとする婦人方の注意を促す！

流行の魁を以て全世界に鳴ける佛國巴里に數年留學したる大西夫人は今回歸朝に際し我國婦人社會へ何か恰好の品を紹介せんと種々考案の結果從來我國婦人方の使用する頭髮用前髮じんの不衛生的たるに心付き目下巴里貴婦人交際場裡に大歡迎大好評を博しつゝある束髮用の前髮じんを我國婦人社會に紹介するの無用に非らざるを信じ原名「プランド、ヘーア」となん稱する本品數十打を持ち歸られ希望の方へ特に實費を以て分配せられんとす



佛國巴里製　束髮前髮じん
原名「プランドヘーヤ」
一個實費　金二十八錢
特別大形　金三十五錢
送料金八錢

一本品は毛髮の如き細き金線を以て製し覆ふに絹糸を用ふ其細工の輕便にして好妙なる事實に驚くべきものなり
一一般の束髮用及目下流行の「ヒサシ」髮に用ひて其工合の宜きは勿論夏時の衛生上に最も適す即ち本品を用ふれば頭部常に涼しく「フケ」を生せず頭痛を感ぜざる點に於て特に妙なり
一數に限りあり希望の方は至急申込を要す○郵券代用一割增

申込所　東京市京橋廣小路町　佐藤

佛國パリー歸朝婦人の土產
束髮前髮じん！

女(ほの一)

化學的大發明 旭印

人造金の完成



印章指輪 平打指輪 石入指輪 養生眼鏡 メタル 帶止金具 時計鎖 新式磁石 羽織紐鐶 襟止 以上拾種取揃箱入壹組 特別大減價壹金

壹圓とは實に驚くべき安價にあらずや 小包料拾錢代金引替料拾錢

弊堂專賣の旭印人造金は在來の延金消金細工の如き無責任なる僞品と異り學理と實驗とに依り發明したる最進歩せる名譽的美術品且品質純良高雅且**金色**燦爛として麗々たる光彩を放ち遙に**眞正の純金**を凌駕す故に上流社會殊に華族の御用蒙る其他實驗者禮狀山の如且本品に就ては永久無限の保險を附正確保證す



合成金側懐中時計

三枚蓋斜子刻薄形寶石入16より21まで アンクル龍頭卷引出針廻

價金 甲拾參圓 乙八圓（送料拾錢）

本品は英米商人の間に於て非常なる苦心慘憺の結果遂に大成功を來したるもの即ち機械は世界に冠たる瑞西タバン會社製側は米國ウォルサム時計商店に結託し茲に完成したる無缺の品なれば機械の堅牢正確なる申すに及ばず側は毫も純金に一歩も讓らず金色光々たるを以て貴紳の御持用として決して遜色なし◎殊に二十ケ年の**保險證**添付

大阪東區和泉町（無限責任）**金賞堂**商店

優美高尚極薄手形

米國形銀時計



本品は小店特約東洋一手販賣の時計にして價は頗る廉價なるも機械の精確なると形狀の優美高尚にして而も側の銀質等總て米國ウォールサム製に遜色なき良品なり

價拾三圓半 銀側兩蓋中蓋附16.17.18形機械金梨子地寶石入二枚車別爪石卷上向アンクル龍頭引出針廻し

價拾貳圓半 右同品乙號

價拾圓半 銀側兩蓋機械ニッケル惣寶石入別爪卷上向アンクル

價九圓半 右同品乙號

極薄手形太文字鐵針

◎保險三十ケ年

◎送料內地拾錢臺、淸、韓參拾錢

◎代金引替は卅錢前金○振替爲替口座百七十三番

注意 **大景品附** 注意

此廣告を切拔き御注文書同封の御方には鎖、磁石、一切の附屬を添へ景品として進呈す

東京銀座壹

伊勢伊時計店

最新流行 米國新輸入 SKIN-FOOD原名スキンフード

白色美容新劑

一劑金壹圓 二劑壹圓八拾錢 送料十二錢

日本在來の化粧品とは天地格別の舶來劑にて如何に天性色黒き人にても日にやけ黒き人にても本劑を御用ひあらば雪の如く白き中にホンノリと櫻色を呈し眞に玉の如き美人となる空前無二の最新卓効劑也從來迂腐の化粧劑と同視せずぜひ御試めし乞ふ

專賣 大阪東區釣鐘町一丁目 振替口座第六二四七番 **松雲堂**

女（ほの二）

子宮神藥

女宮丸

●ちの道●産前産後●ヒステリー●子宮痙攣●寸白●しらち●ながち●つわり●のぼせ●づゝう●めまひ●きのふさぎ●顔色あしく手足だるく食すゝまざる等に用ひて奇効あり特に身體滋健となりて子なき婦人に一日も缺くべからざる特効藥なり
藥價 七日分五十五錢●十四日分一圓●卅日分二圓●五十日分三圓●百日分五圓五十錢●小包料十錢

美容散

やせる藥

藥價(一週)七十錢(二週)一圓(五週)三圓廿錢
●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

皮膚病專門藥

をまづ	いんきん	たむし
あか鼻	ざくろ鼻	あざ
ぜにがさ	ひぜん	わきが

偽物注意

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢宛

專賣本舖 東京本郷區本郷三丁目 新宮藥館

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井 川名助次郎

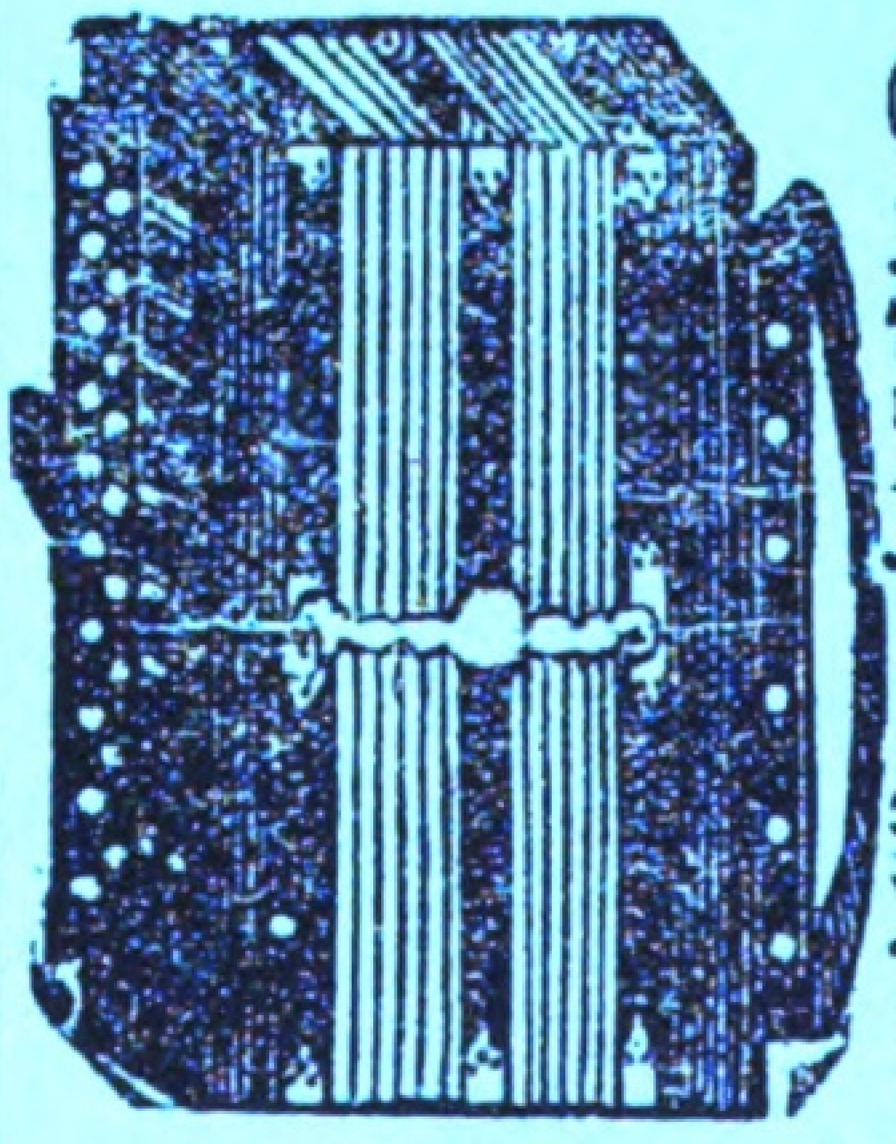
日本新式美術 改良造花 通信教授 元祖

◎二ヶ月卒業▲遠國に在て老幼男女誰にても造り花、和洋花かんざし等美麗に出來る▲卒業後は就職の便あり▲規則書は郵劵二錢、見本は十錢送れば直に呈送す

東京四谷須賀町八 美術造花傳習所

婦人諸病治療法

子宮病血の道月經不順産前産後長血白血其他總て婦人諸病を全治する新療法を詳記せる書冊を無代進呈 望の人は往復葉書にて大阪高麗橋長命堂宛申込あれ



堅牢無比懐中 手風琴

本品は最も優美且高尚の小形なる手風琴にして音律の正確なる音聲の强大なる事普通手風琴に異なる事なし左れば旅行散歩等には至極輕便なり獨習書附屬す

正價 上製金壹圓八拾錢 並製金壹圓五拾錢

送料拾錢切手代用一割增

大阪市東區和泉町貳丁目

發賣元 覗商店

女(ほの三)

素顔は常に何を以て美しくするか？

日本第一のクラブ洗粉は舶來石鹼よりも秀でたる文明の化粧品にして美身術に妙ある爲高評頗る盛なり



クラブの如き洗粉を以て其美を増す

クラブは三越呉服店を始め各化粧品店にあり

鳩



小林呉嶠筆



婦人世界第六號（昨年六月三日發行）婦人の日常生活中「十五」の條に弦齋居士が（髪の油は何を用ゆべきか）の題目の下に其の効能を確認せられし贊辭あり參照あれ

純粋椿

三宅油



◎近來僞物販賣する商店あり御買求の節は三婦人の商標に御注意を乞ふ（◎升賣は本舗のみに御座候）

定價

		小包料（內地）	小包料（滿韓臺灣）
改良大瓶	一壜金八拾五錢	拾二錢	卅五錢
中瓶	一壜金四拾五錢	拾二錢	卅五錢
小瓶	一壜金貳拾五錢	八錢	三拾錢

◎爲替は東京蛎売町郵便局宛郵券代用壹割增

本舗 東京市日本橋區人形町通り水天宮際 間宮三宅堂（電話浪花六二〇番）

◎其外みやけ香油、みやけおしろい、みやけ油製すき油發賣仕候

女（への一）

REINDEER BRAND

鹿印

TRADE MARK

コンデンスミルク

育兒上最も有効安全品として歐米各國中第一位の定評ある

シカ印 コンデンス ミルクは

最近通商條約の餘惠に依り、初めて英領カナダ州ツルロ煉乳會社よりわが國民に紹介せらる

品質純良にして最も滋養分に富み變質の憂ひ更に無き事を證す

從來有ふれたるミルク使用者は試に一罐を求めて比較せられんことを切望す

● 鹿印コーヒー入ミルク

便利滋養の好飲料！

東洋代理店

東京市京橋區鎗屋町一　日加商店

特約店

東京市京橋區竹川町一　龜屋鶴五郎

大阪市東區道修町二　武田長兵衛

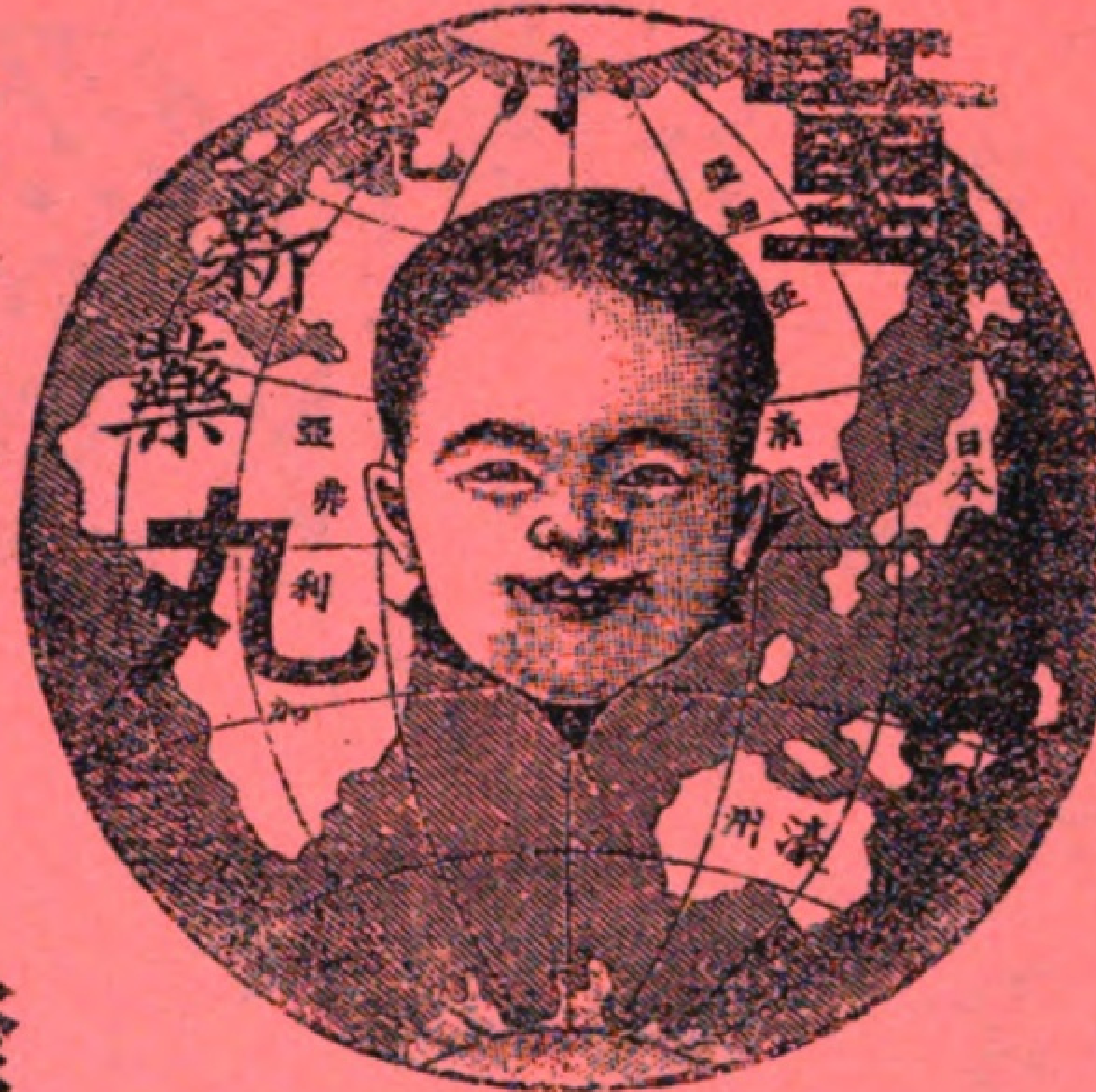
販賣店　各地食料品店藥店

女(への二)

女(への三)

小兒新藥童丸生る

小兒科專門醫學博士



瀨川昌耆先生方劑

●童丸は健童強兒の源泉なり

●童丸は二十世紀の育兒法に適す

●童丸は幼兒の生命也第二の慈母也

效能

●小兒失氣 ●吐乳病 ●五疳驚風

●膓加答兒 ●小兒食欲不進又は飲過

●小兒吐氣 ●膓痛中毒

●小兒虫氣一切又は熱さましによし

定價			
拾粒入	金五錢	八拾粒入	金參拾錢
廿二粒入	金拾錢	百四十粒入	金五拾錢
五拾粒入	金二拾錢	三百粒入	金壹圓

●童丸は有名藥店にあり若無くば發賣元へ御注文あれ

發賣元

東京市日本橋區通四丁目七
振替貯金口座第一六八〇番
津村順天堂

大阪市堺筋大寶寺町南入
振替貯金口座第三一六二番
津村順天堂

女(への四)

名流小照

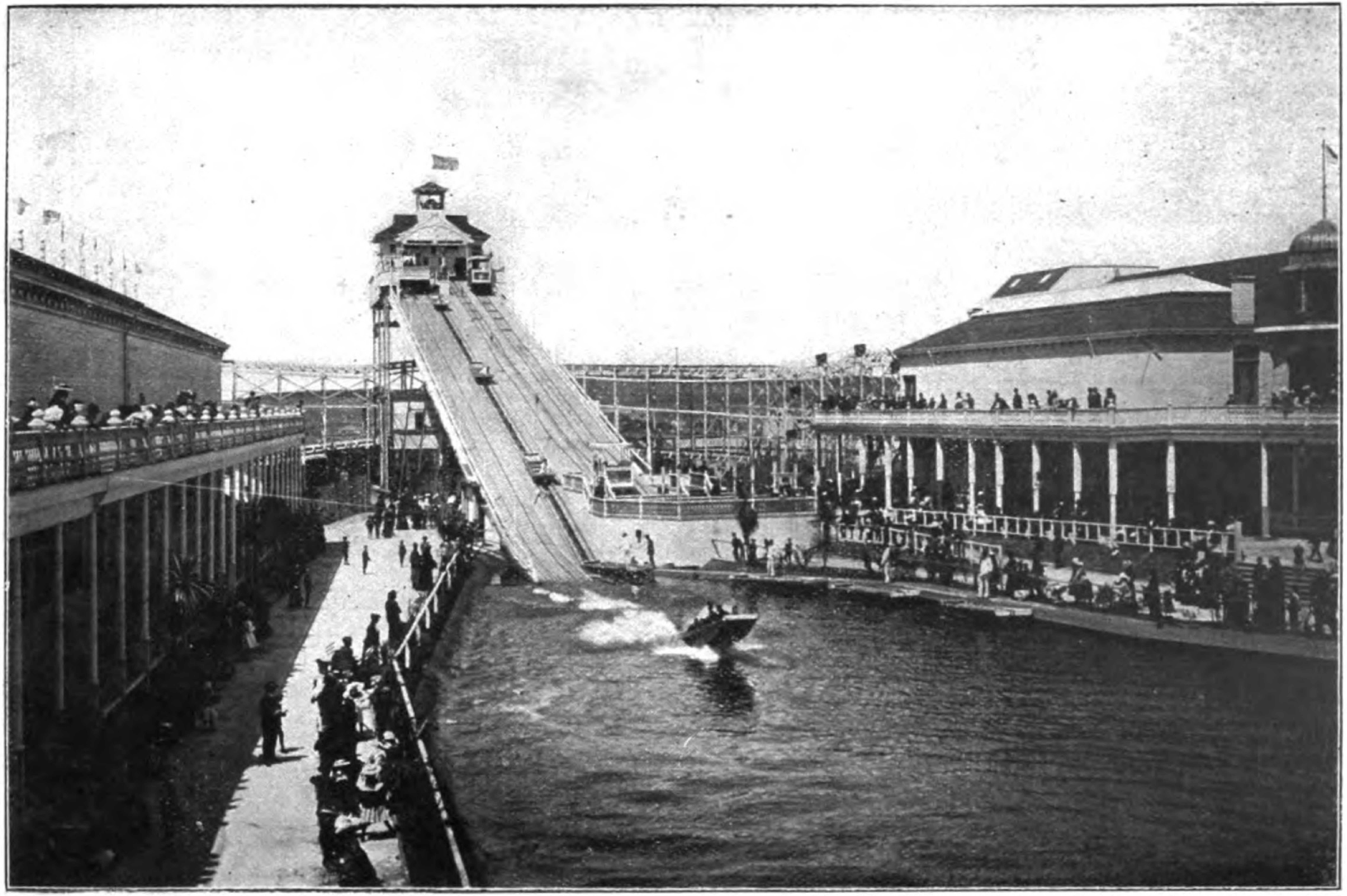


德川公爵夫人



九條公爵夫人

米國舟すべり



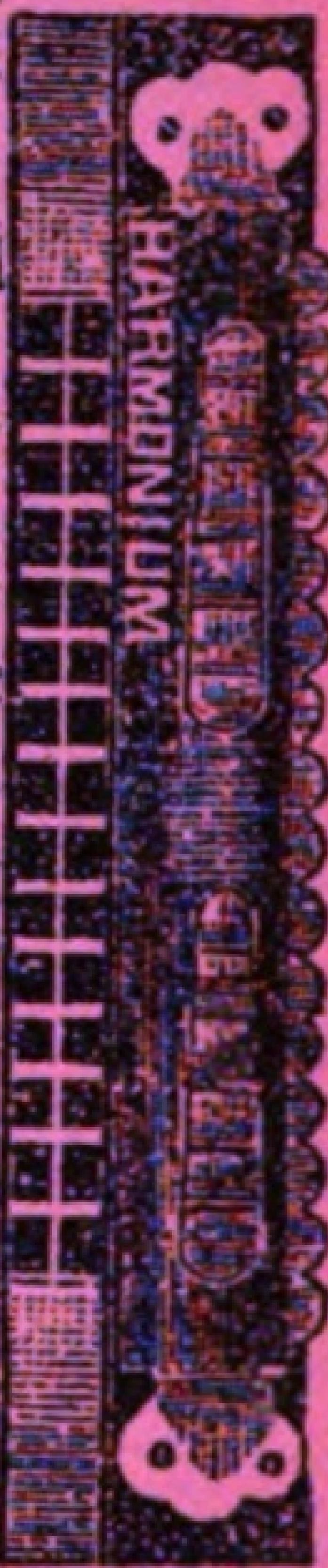
女(とめ一)

女（との二）

●樂器界の覇王

紳士、學生、淑女、其外一般諸氏の必携品なり

舶來 口風琴 ハーモニカ

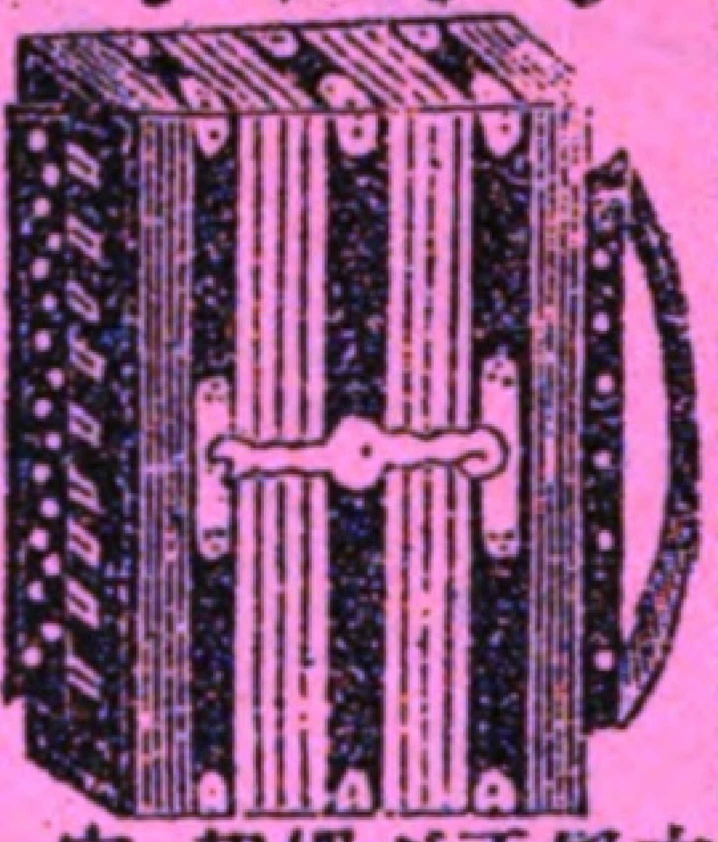


近時音樂の流行は頗る盛んで殊に本器は演奏會だの舞踏會だので青年諸氏及淑女諸子が熱心に樂器の嶄新なるを嗜好せらるの今日ですから弊號は先に獨逸へ特約して本器を新たに輸入したのです尤も樂器にも印しである通**ロンドン**及**シカゴ**で金牌を得ミユージクキングの符號を博したのですから音律の正確は勿論風韻清雅で舞人をして能く其美音に魅拜せしむるは本器の特長で舞踏會にピヤノ、バイオリン等の合奏にすれば其優美なる音調は兩器に勝る事無論であり升願くば世の音樂に熱望なる諸氏は速に一器を購められて其眞僞を試みられよ

◉定價 特製壹圓八拾錢 並製壹圓拾錢 獨習書添附 上製壹圓五拾錢 番外九拾錢 小包料拾錢

新式輕便懷中

手風琴



本器は小形なれ共音律正確風韻清雅彼の有名なる錠の手風琴と同調にて他品の及ばざる處也殊に散歩、旅行、娯樂用には尤も慰安の念を起さしむ◉獨習書を添呈す

定價 上製壹圓八拾錢 並製壹圓五拾錢 小包料箱代共貳拾錢

御注文切手代用一割増

●發賣元 大阪松屋町久寶寺町通 **常盤號**



定價金廿五錢 送費二錢郵劵代用を諾す

獨習書添一冊呈仕候

◉大阪東區内久寶寺町 天文堂

最近

子宮病 自宅療法

全一册

▲如何にせば子宮、血の道の難病を根治し▼

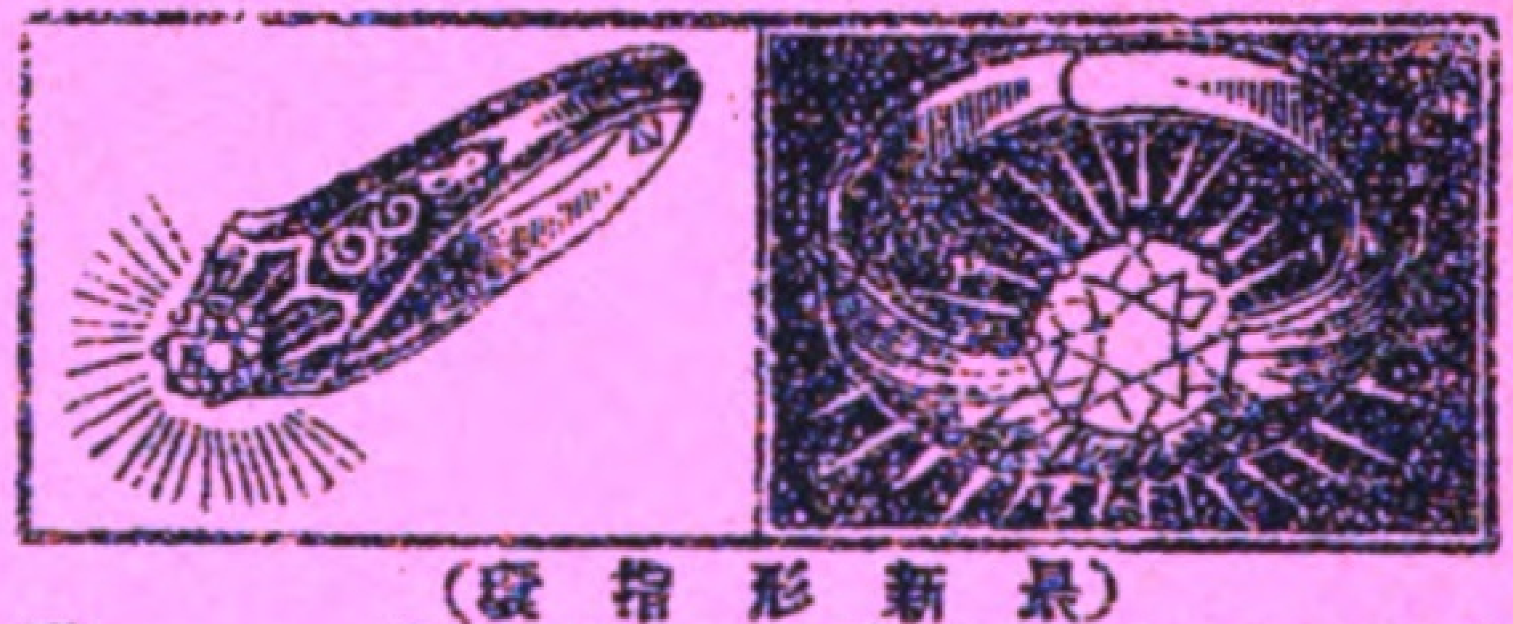
▲子寶を擧ぐべき健友性となるを得べきか▼

◉本書は著者が多年の實驗より得たる成効と、最近の學説を基礎とし、親切叮嚀に自宅の療法を記述せるもの◉郵劵貳錢を送れば當分の内無代進呈す

申込所 東京市築地新榮町四丁目一番地 笹岡省三

● 世界最安價の

ダイヤモンド發見 ●



(最新形指環)

本品は米國カルホニア州に産出する寶石にて彼の地にては是をカルホニアダイアモンドと稱し**光輝燦爛**として麗々たる光彩を放ち一見正しく數百金を價するダイアモンドを凌駕す故に近時歐米の**紳士貴嬢**間に大に愛用せられ宴會に於てパイプを指にしホークを手にする紳士夜會に於てピアノを弾じバイオリンを奏する令嬢達の中に**星**の如く輝き高尚なる優姿は是れぞ交際上装飾品として缺くべからざる貴重品なり◉美麗なるサック付

合製金寶石入	壹圓七十錢
十四金寶石入	五圓
十八金寶石入	八圓五十錢

發賣元 大阪市東區南久太郎町壹 やまとや

女(との三)

女(その四)

姊



妹



木彫人物





山崎朝雲氏作

女(ちの三)

女子大學の新寮舍



女子大學晚香寮



慈善市參考館



同上晚香寮側面

花の顔雪の肌眞正の美人となる



羽二重の如き皮膚となる

色白くきめを細かに艶を増し、絕世の美人となる、高等化粧水の大王と稱せらる〻……

▲キレー水の特色 は白色ロースルートを蒸溜して原液となす故にリスリン劑の如くねばりなく、又アルコール劑の如く、皮膚を刺戟せず年月を經るも沈澱する事なし。此キレー水を用ゆれば、羽二重のはく肌、櫻色の美貌となり、鉛毒の患ひなく白粉のりを能す

烏を鷺に黑人を白哲人に化するの即功はなくとも天資の容姿に一層の美艶を添へ豐頰紅を嘲し婉嬌宛かも海棠の露を帶びたる如く眞粋秀美の芳姿嬋妍として蘭麝衣袂に薫す若し夫れ其眞價を實際に知らんと欲せば乞ふ壹瓶を試み給へ。

○ハイカラ紳士、式部用美麗罐入發賣仕候

定價 小七錢 中十二錢 大二十錢
特製 五十錢 一圓
美艶罐入 廿五錢 美艶筒入 廿五錢

本舖 神田區花房町 山崎帝國堂製

女（りの一）

皇后陛下
東宮妃殿下
御料

登録商標 製造元東京新 發賣元

御料
御園白粉
みそのおしろい
無鉛

長谷部仲彦發明
日本一の無鉛品

◎御園白粉は忝くも皇室の御用命を戴いて調進する日本無比の無鉛白粉であります、衛生を重んぜらるゝ婦人達は必ず『御園白粉』を用ねばなりません。

◎煉製『御園白粉』は純白と淡紅色との二種あつて濃淡随意に用ひられます膚に乗りの好い事は勿論、幾度重ねて附けても際立つ事がありません。

◎水製と粉製　矢張白と淡紅の二種ありますが水製は薄化粧に用ひます、粉製は煉製や水製を用ひた上に附けても又洋風の濃化粧用としても随意です。

◎御園なでしこ　は懐中用打白粉として製した物で顔直しをする時に下の化粧を崩さずに用はれる軽便品です。

◎御園の蕾と『とき水』『御園のつぼみ』は洋風化粧下に用ひるクレームで『御園とき水』は煉製を薄化粧に使ふ時溶き伸る外普通の化粧水として特効があります。

◎四季の花　は濃厚化粧水として天下一品の白粉下でありますが是に調合した薬は皮膚の荒れを直すは勿論日焼、凍傷、皸裂等も直す功能を有つて居ます。

發賣元　東京 橋町　丸見屋　電話浪花 四四八番

(りの四)

關西の女學生



神戸裁縫女學校生徒

實用新案特許匙付白粉容器入



品質、内務省東京衛生試験所にて無害無鉛の報告を得たる純良の品にして貴孃諸子の常に愛用せらるゝものなり

香料、愛すべきスミレ、ロース、麝香、其他貴重なる香料を多量に含むが故に一度使用すれば其香氣永く身體にまでうつり馥郁として失わず故に香水を要せざる特點を有す

容器、優美便利にして有益なる新案特許を得たる佳品なり

定價 煉製、水製、何れも一個に付き廿五錢

本舗 東京日本橋區本町三 **月岡美艷堂**

登録 高木 商標

近來同名類似之品々多相見へ候に付御愛求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名義に御注意被下度候



定價

箱入 金一圓
同(ニッケルカン入) 金五十錢
同 金三十錢
金十五錢

紙包 金二十錢
同 金十錢
同 金五錢

女(ゐの一)

怒濤庵 江見水蔭君著並畫

海洋文學者として既に定評有る江見水蔭氏が、身自ら捕鯨船に乗り組みて、遠く朝鮮の惡灘に漂泊し、諾威砲手が狂瀾の裡に照尺を定むるの時、氏は怒濤の間に起ちて、一管の筆棹を呵し、捕鯨の大壯觀を實寫して、深く海底の秘奥を發く。本篇は此紀念帖也。氏の意氣や豪宕、氏の詩想や壯大、本書が如何なる快文字を以て成るかは玆に云ふを俟たざるべし。されば事實上の冒險小說として、頁紙を繰るに遑無き間に、遠洋漁業の智識をも了解し、傍ては韓國の風俗をも窺ふに足る。蓋し近時出色の好著述なり。



全一册菊判洋裝
紙數約二百頁
實況寫眞版入
正價三拾五錢
郵稅六錢

卷中目次

初版直に賣切れ再版着手

振替貯金口座番號 第二百四十番

東京本町 博文館

販賣部電話番號 本局二六二〇番

女(めの二)

一度内容を見て値價を知られよ

婦人世界

五月一日發行 第二卷 六號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎口繪 ◎彩色畫三枚◎名家若夫人◎各女學校の優等卒業生總代◎名家の令孃鑑◎跡見女學校の卒業生◎東京女學館生徒の演じたる活人畫

◎藤を詠じたる古來の名歌評釋(白水)

◎私の感心せる女學生 吳くみ子

◎婦人の眼につく博覽會の出品(月亭)

◎子供に親の云ひ附けを守らせる法 棚橋絢子

◎小說(女學生)……西村醉夢

◎弦齋夫人 五月の珍料理
△わらびの料理は如何にするか
△ぜんまいの料理は如何にするか
△鰺の西洋料理は如何にするか

◎少女欄 が號弦齋氏の筆に成る 女學校と家庭の大評判

◎跡見女學校御在學中の閑院宮女王殿下の御勉强……跡見李子

評判の大文字 婦人の日常生活法 村井弦齋
△智識は如何に必要なるか
△一身に關する智識は如何に必要なるか
△家に關する智識は如何に必要なるか
△國に關する智識は如何に必要なるか
△世界に關する智識は如何に必要なるか
△諸般の智識は如何に必要なるか
△技藝は如何に必要なるか
△高等教育は如何に必要なるか

◎我が娘を嫁に遣りたる時の實驗談……阿部夫人

◎記者の見たる東京女學生間の新流行

◎米國中流社會の住居と家具

◎小兒の消化不良症(加藤醫學博士)

◎活動的夫人鳩山春子女の面影

◎吃音全治實驗談 た巣枝生

◎結婚前の理想と結婚後の實際

◎婦人世界臨時增刊

化粧かゞみ

大好評(四月十日發行)定價一冊金拾五錢 郵稅一錢五厘

村井弦齋校閲 和洋新式化粧法 は悉く網羅せり美貌を望む婦人は讀め

(その三)

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番) 賣捌 全國書店

女（めの四）

母子の睦み



帝室技藝委員 海野勝珉先生圖案

美術 金銀製盃



宮内省御用達

商品目標

◎金銀盃木杯類各種
◎賞牌徽章類各種
◎金銀製床飾花瓶
◎香爐茶器類各種
◎貴金屬寶石類各種
◎時計及附屬品各種
◎男女裝飾品各種
◎美術袋物類各種

右の外貴金屬寶石美術品袋物一切何品に依らず迅速と廉價を旨とし誠實に新調又は改作の御用相勤め可申候間何卒一層の御引立を以て多少に不拘御用命被下度奉願上候

東京市下谷區池の端仲町

玉寶堂

電話下谷（特 九六五番 一二四四番）

女(るのこ)

幼年畫報 第二卷第七號 定期增刊

曾我兄弟

小波君作
靭彦君書

全一冊洋裝大判
正價金拾錢
郵稅金五厘

五月二十日發行

富士の裾野の夜の雨、篝火さへも消えはてゝ、血になく鳥の聲かなし、時に二人の同胞は、仇敵工藤を討たんとて、狩塲の陣に忍び入る、そのいで立は母上の、心づくしの小袖をば、襷十字に打ちしぼり、刀の目釘しめしつゝ、歩む足さへ勇み立ち、工藤の陣を探せども、あやめも分かぬ暗の夜の、知るよし更にあらざれは、二人は足を止めつゝ、如何にせばやと思ふ折、遙か彼方の幕營に、見ゆる火影は神明の、加護かあらゆが我目ざす、工藤の陣にまがいなし、勇む二人は聲かけて、下す刀の閃きに、血煙さつと立ち昇り、目出度く仇を復したり、あゝ富士の根の白雪は、千古の後の後までも、消ゆる例のなきが如、裾野の末の末かけて、孝子の名をば止めたり。



發兌元
博文館
日本橋區本町三丁目

(その二)

趣味の多方面と材料の清新なるとは本號に於て一層光彩を放てり

女學雜誌

日本の家庭

每月一回一日發行

五卷五號 五月一日

口繪 初夏（石版彩色） 柴崎美方女史筆

▲日本家庭の將來（麻生女子大學學監）
▲家庭と掃除（遠山醫學博士）
▲親なき後の兄妹（竹貫直人）
▲遊戲主義（父母教育家は必ず讀め）（記者）
▲子供の栽培（三宅花圃女史）
▲通俗教育問答（大村學習院教授）
▲造花の話（志水靜子）
▲自活の精神（加藤節子）

▲母しらぬ子（紫英）
▲多忙の幸福（柳子）
▲青葉若葉（△○）
▲子供の想像（峯子）
▲愛らしき子（參觀）
▲家庭へ註文（樂春）
▲良細君（渚山）
▲季節料理（鎮子）
▲落花生菓子（文月）
▲家庭重寶記（倭子）

本號より紙數增加 寫眞木版挿畫數十 趣味の豐富は彌充溢

定價 一冊金十二錢郵税一錢 六冊前金七十錢 十二冊前金壹圓卅五錢
（見本有合號金五錢）

東京高等師範教授 東基吉先生編

教育童話 子供の樂園

◎學校家庭の必須書!!!

お伽噺の大王なり!!!

壹冊金六拾錢郵税八錢

東京神田表神保町 同文館

女（その三）

女（るの四）

日佛協會副會長一條公爵夫人



地球印 薬用葡萄酒



發賣元 東京淺草 曾田爲次郎

電話下谷二六一番

●賣捌所は全國到る處にあり

五大軍醫合議製劑



定價 壹週分壹円、三週分貳円五十錢、二週分四十五錢、一週分二十五錢、二日半分十錢

本舗 [illegible]

山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

商標



●のぼせひき下げ○どく下し

神通丸（しんつうぐわん）

定價 二日分 金五錢 四日半分 金十錢
十日分 金廿錢 廿六日分 金五十錢

商標



●ぜんそく○たんせき百日せきの奇藥

中尾たんせき散（さん）

定價 一日分 金五錢 二日一回分 金十錢
五日分 金廿錢 十四日分 金五十錢

商標



●むねはらいたみ○くだりはら一切の新劑

腸胃特効散（ちやうゐとくこうさん）

定價 一日分 金五錢 二日一回分 金十錢
五日分 金廿錢 十四日分 金五十錢

調劑本舖 東京市下谷區南稲荷町八十番地 中尾維新堂

女（なの一）

明治卅四年十月創刊

毎號皇太子殿下賜上覧

▲天下無双青年筆戰雜誌之覇王

第七卷

青葉若葉（増刊四月廿日發行）
第十號（五月一日發行）
第十一號（五月十五日發行）

▲壇友之優待每號奬學大懸賞付

秀才文壇

▲每號選評擔任大家

○叙事文……文學士 中内蝶二
○抒情文……同 上
○短篇小說……德田秋聲

○俳句……高濱虚子
○新體詩……文學士 馬場孤蝶
○新派和歌……尾上柴舟
○和歌……佐々木信綱

○漢詩……小笠原虚舟
○評論文○日用文○五行文學○人物評論○文士會（以上編輯局選）

大判百三十頁

◁正價表▷

一冊郵税共金拾壹錢○六冊同六十三錢○十二冊同一圓廿錢○廿六冊同二圓卅四錢

每月一回 一日 十五日 發行 定期増刊二回

少年文壇

○普通文○日記文○はがき文○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟○スケッチ……

正價 一冊がたった金五錢 六冊郵税共金廿七錢○十二冊金五十四錢（郵券代用一割増）

日本 少年之友

少年少女作文雜誌 第二卷五號

五月一日發行

▲每號少年習畫帖を附錄 山中古洞先生 吉本雅美先生 執筆とせり

◉五月人形……記者
◉菖蒲の話……園丁生
◉ぼくの日記……ぼく生
◉黄金の林檎……宮地竹峰
◉皆さんから…皆さんまで……太郎
◉屋根の草……記者
◉ロングフェローの生立……はくう
其他懸賞作文澤山

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目（振替口座壹九五五番） 文光堂

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店

女（その二）

○高貴の御賞讃
御愛用を賜はる

日乃出はみがき



内務省東京衛生試驗所御試驗濟
内外歯科専門大家實驗證明

本品は歐米歯科大家最近の學説と實驗とに據りて調劑せられたる最も完全なる藥歯磨にして

▲歯牙を純白にし口内の悪臭を去り口腔を清潔ならしむるは勿論

▲殺菌防腐の殊効を有し歯牙歯齦及び口腔の疾患を豫防するは本品の特色とする所にして常に用ひ玉はゞ

▲歯痛其他歯患に罹ることなし且

▲馥郁たる芳香と愛すべき佳味を有して口腔を清涼にし心神を爽快ならしむる等

家庭の衛生上最も必要なる文明的歯磨で厶ひます衛生を重じ玉ふ紳士貴女は是非本品の御愛用を願ひます

發賣元　東京下谷練塀町　松島商會

特約店

京橋區銀座一　佐々木玄兵衛
日本橋横山町　天野源七
同　通鹽町　大和屋小兵衛
日本橋馬喰町　田中花王堂
同橋町四丁目　島村商店
淺草區材木町　石川伊勢松
日本橋横山町　武居萬年堂
神田區猿樂町　九州屋商店
同　花房町　山崎帝國堂

有名なる小間物化粧品店、雜貨店、賣藥店にあり升

女（その三）

大日本淑女學會

會員募集 規則書進呈す

第四回新學期開始

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◉五月三十日まで入會金**全免**す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四百番）

大日本淑女學會

▲報知新聞評　本講義録は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜録五十頁の附録あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小説あり凡そ天下講義録多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

福引番號箋

善き行爲には確かなる保護あり——英國俚諺

處女の心は暗き林のごとく迷ひ多し——露國俚諺

106902

勉强して光陰を作れば光陰化して黄金となる——アヴ井ナンド

注意の乏しきは知識の乏しきよりも害あり——フランクリン

注意

一福引の抽籤は六月三日日本橋區本町三丁目博文館內に於て警察官立會の上執行致し候

一此の福引番號箋は來る六月十五日女學世界定期增刊第七卷第九號を發刊するまで大切に保存せらるべし

一右六月十五日發行の第九號誌上には福引に當籤したる番號を發表する筈に付讀者諸君は同誌上を御覽になれば當籤か否やは直ちに判明する次第に候

一當り籤の方は此の番號箋を點線の處より切取り別欄の處へ希望の品物と、住所姓名とを明記して書留郵便に封入し、東京市日本橋區本町三丁目博文館女學世界へ宛御送り相成度し

一景品は此の當り籤番號箋の到着次第小包郵便にて送呈致し候

附福引に就て詳細の事柄は本誌の卷末を參照せらるべし

希望の品物	住所姓名



女學世界

五月

第七巻第七號

△杜鵑一聲

くれなゐの杜鵑花、ゆかりの色の藤の花もさかりをすぎて、今や百花の王は天品妖艶の姿をほこり、くねりたる風情を芍藥に見る時とはなりぬ。

池の汀にあやめ咲き、花菖蒲の妍なるは楊柳の賢なるといづれぞ、郊外百里新樹は綠を吐き池塘は青氈を敷く南風の薫するも今しばしとぞおもはる、輕衣肌によろしく、路上塵を立てず水は四澤に滿ちて苗代のほとり蛙聲の噪がしきを聞くは今なり西疇に事繁からんとするは是れよりぞ。



現今女學生の缺點

棚橋絢子

兎角今の婦人は表面上一寸見たところでは如何にも勇氣がありさうに思はれますが、偖その内部に立入つて見ますとまことに氣力に乏しうございます、現今女學生の缺點をと云ふお尋ねに對しても私は此の氣力缺乏と云ふことを掲げたいと思ひます、今では女學生上りの婦人で既に、家庭を持つて家婦と成られる方々が隨分ありますが、今其の學校に居つた所謂女學生時代と家庭に入りし後の家婦時代とを相比べて見ますれば實際上餘程齟齬して居る事實が歴々と見えます、學校に居りました節には隨分と學問も出來、人からも勉強家と云はれ、自らも家庭を有たば斯々に爲んなどゝ理想を畫て居りましても、偖愈よ家庭に入りまして家婦と成つた曉には、如何かと申せば在校中の理想は忽ち滅茶になり、昔日の勇氣は面影をだに止めず、家事の用向にはお尻が重く、臺所は下女任せに致し、家政の整理を面倒がり漸次我儘が増長して良人や子供の世話までも人に任せると云ふ始末になります、斯樣な惰弱な婦人は學校に居るとき幾ら學問を學ぶに勇氣があるとしましても、實際に婦人

の本分を盡さぬのでありますから、畢竟論語讀みの論語知らずと云ふやうな譯で、學問をして學問の用を知らぬ者であります、どうも恁いふ女學生には度々學校教育の目的を誤られて困り入ります。

學校で敎ゆることは何であるかと云ふに、決して學問を鼻にかけることを敎ゆるものではありません、一口に申ますれば其の學校で學んだ所を實際に應用せしめるのが目的で、詳しく言へば實際に莅んで氣力を增し臺所の整理食物の調理に至るまで萬事甲斐々々しく立働き、辛い事、面倒な事にも厭な顔を表はさず、況や良人や子供の世話などは己の第一の本分と心得、何事も人手ばかりに任せず自分も手を出して働き出來る丈下女の司配を實行で敎へ、始終快活愉快な顔をして家庭の業に就くのが、是れ學校の目的とする所で、學問をすると云ふのが畢竟此の目的に過ぎません、此事現今の女學生に特に記憶して貰ひたいのであります。

女子に最も必要なる德

山脇房子

今日の女子に何が一番の德であるかと申せば堅忍と云ふことであらうと思ひます、之を小にしては我が氣に入らぬ事をも堪え忍び之を大にしては事に失敗しても力を落さず、大小如何なる事にも忍ぶと云ふのが一番大切です、堅忍とは堅く强き耐忍にして家人の平和を保ち家庭の快樂を作るべき女子に缺く可ざる德でございます、彼の喜怒哀樂の情に對して堅忍の必要があります、喜怒哀樂を顯さぬと云ふ事は矯情とて人の心情に戻るかは知れませんが、さりとて餘り度外に之を顯すことは決して嘉す可き事とは申せません、私の申すことは喜怒哀樂の情に驅られて、一日の內に忽ち喜んで見たり怒つて見たり、又は今日は樂しき顏するかと思へば明日は乍ち哀

しい顏して人に不快を感じさせると云ふのです、設令ば女は多く神經質で多感の者と申されますが、少々位い怒りたい事がありましても、哀い事に出逢ひましても、意を堅固に持つて堪え忍ぶと云ふ事がなければ、人生を一日も愉快に繼けて行くとは出來ません、愉快といふのもつまりは堅忍の結果であります、忍ぶ事を知らぬ者ほど可哀相な者はありません、自分も悲しく思ひ、人にも悲しく思はれるのは、此の堅忍の心なき者に限ります。

現時の女學生を見まするに高等女學校でも卒業すれば最早百圓も取る良人を想像して居りますが、實際になりますと百圓はおろか五六拾圓位が關の山でございますから此位を理想としもしそれ以上の收入ある人に嫁するを得れば好運とよろこび餘り法外の野心を逞うしないやうにし、學校に於て學ぶ時分から家計といふ點に最も心を懸けて居らなければなりません、人生の不如意と家計の不如意は先づ一般の人に取りて諦めなければならぬ運命です、此際堅忍の心がなければ、どうして愉快に暮して行くこと出來ませうか、家計の意の如くならぬ所より種々面白からぬ事が起つて參ります、其時は最堅忍を要する場合であります。

婦人の德として愉快な顏をするといふのは洵に美しい花であります、その美しい花を顏に咲かせるまでには、心に幾回か忍ぶ所がなければなりませぬ、西洋の婦人は容易に喜怒哀樂の情を色に顯しますが、日本の婦人は比較的に之を顏色に顯しません、陰險だなど〻云はるやうな事もありますが、是れは却て日本婦人の美德と申して差支なからうかと存じます、喜怒色に顯れずと云ふのが東洋英雄の特性で、婦人でも場合によりましてはいかに悲しきことにあひましても淚を落さず乾と耐て居るのを善しと致して居ります、喜怒哀樂の情を抑へて常に愉快な顏をのみ持するのは、東洋婦人の特色でございます。

キリヤムハツトンと申す學者の許へ一人の婦人がたづねて參りまして申しますに私の夫が何時も私に不親切で內を外にして遊びあるひてばかり居りまして誠に困りますから何卒夫をよくする方法を敎へて下されと申し

ました、ハツトン先生、ソレは〳〵御氣の毒なとだが、其方法は格別六ケ敷とはござらぬ、只、何時も笑面で夫をアシラヒなさい、と教ました其後半年ばかり經ました頃其婦人が、いそ〳〵としてハツトン先生の許に參りおかげさまで此頃夫は夜遊にも出ず何時も私に親切にして呉れますと涙ながらに禮を申たと承て居ります。

女學生を完全にする方法（下）

寺田勇吉

◉學費の節約

女子教育は務めて質素にして費用の成く〳〵僅少ならんことを要す、是れ必すしも女子教育に限りたるにあらすと雖も、現今の實況に照らし特に其の必要を感すること深し、然れは質素の美德を守りて學資の濫費を防がん爲には、先つ其の衣服頭髮の裝飾、履物、洋傘等一切の附屬品に至るまて、一定の制限を設け、又筆紙墨の濫用を戒め、無益な書籍の購讀を禁する等、事細大となく冗費を節し、學費を減するの工夫を爲さんこと肝要なり、今日の女子校を觀るに此等の點に於ては特別の注意を用うるもの甚た稀にして、多くは女學生の隨意に放任するか故に、競ふて華美を衒ひ虛榮心を滿足せしめんか爲には學資の給せざるものは風紀紊亂の爲行を敢てするを恥ぢず、所謂女學生墮落の原因を玆に發するもの往々あり、是れ吾輩の特に質素の德を涵養するの必要を主張する所以なり、且つ夫れ學費の給せざるは墮落の一原因なりと雖も、學費の過剩富贍なるも亦墮落の誘因なるか故に、父兄は適當の學費以外には何等の口實ありとも、決して餘分の學資を給せす、一定の金額を以て諸般の學費を支辨するの方法を取らしめんこと肝要なり、是れ啻に風紀維持上に必要なるのみならす經濟思想を練磨せしむるの効も亦決して少小にあらさるなり。

●教科書及參考書の選擇

女子の風紀を維持せんか爲には教科書の上に注意を用ゐざるへからず、竹取物語、落窪物語の如き國文教科書を用ゐて以て女子の純潔なる德性を涵養せしめんとするか如きは、所謂薪を抱て火を救ふの類にして、寧ろ女子の德操を腐敗せしむるの誘因たらずんはあらず、今日に在りては最早此の如き教科書を用ふるものは固より之れなかるへしと雖も、教科書の選擇には十分の注意を拂はんこと肝要なり、而して教科書の選擇と共に大に審査を要するは女學生の誦讀する參考書、其他新聞、雜誌、小說等の選擇なりとす、就中小說の如きは其の書の善惡良否を問はず、一切之か繙讀を禁止するは寧ろ安全なるに似たり、學生時代に在りては一意教科書の誦讀に力を盡して其の他を顧みるの餘暇なき筈にして、教科書の誦讀を以て唯一の快樂と爲さざるへからず、然れは新聞雜誌の如きも成るへく精撰して之を繙讀せしむること肝要なり、今日我國の小說及ひ新聞雜誌中には皆男女間に於ける醜穢の事情を描寫して忌憚する所なく、心ある讀者をして顰蹙せしむるもの少なからす、故に意思薄弱なる妙齡の女子をして一たび小說等の愛讀に耽らしむるに至ては其の感情を激發せられ、其の良心を麻痺せしめらるゝもの蓋し尠からさるへし、是れ吾輩か特に圖書の選擇に注意するの必要を認むる所以なり。

●宗教々育の加味

女子の風紀を維持するの上に於て吾輩の特に必要なりと感するは宗教上の感化なり、此の目的を達せんか爲には女子教育上宗教々育を加味するに在り、然るに我國現時の女子教育に於ては基督教各派の設立に係る女學校を除くの外は、宗教々育を施すもの絕無なるは文部當局者の方針に基くものなるへしと雖も、是れ實に我國女子教育上の一大缺點にして、現今の如く女學生風紀の頽廢も其の一原因は宗教心の缺乏に由るものと斷定せ

さるを得す、試みに今日の女學生に就き宗教々育を受くるものと否らさるものと孰れか風紀善良なるやを檢せば、宗教教育の風教上に及ぼす勢力の決して薄弱にあらざるを知らん、夫れ宗教心は向上心なり、神佛を以て理想の標準と爲すものなり、之と消息を通じ之と其の心身を一致せしめんと務むる者なり、其風紀の振肅せるは、固より其所にて、彼の他働力に由りて風紀を維持せんとする者と日を同して語るべからさるなり、況や上は校長教員より、下は門衛に至まて、皆敬虔の念に富み、信仰の力厚く、嘗て汚穢の風、其間に入となければなり、歐米諸國に於て女子教育上特に力を宗教々育に盡し宗教々育を以て女子教育の首腦と爲者多は實に之か爲なり。

◉社會の風紀と女學生の關係

現今女學生風紀の頽廢は其の根源を社會に求めさるへからす、我社會一般に於ける男女間の風紀は果して如何、吾輩は遺憾なから健全なりと賞讃すること能はす、試に我社會の風紀如何を顧よ中等以上の風紀を壞亂せしむる動力の一は所謂藝妓にして、從來世の紳士淑女の唾棄する所なりしに、戰勝以來所謂凱旋歡迎會若くは祝賀會等の席上には名譽の戰士を周旋せしむるに必す紅裙を用ふるの風を生したるが如き、或は所謂紳士紳商なるものが相會し相談するに必す待合料理屋に會合して紅裙青袖を左右に侍せしむるが如き、而して此等の紳士紳商は少くとも一人の情婦を待合に有するを以て互に誇りと爲すか如き、我中流以上の社會の風紀を紊亂するものは實に此種の徒輩なり、又中流以上の社會に於ける蓄妾の弊風の如きは離婚の原因となり又私生兒の增加の一因たり是れ豈に我社會の風紀の日々に陥落しつゝあるを證明するものにあらすや、且つ夫れ戰勝以來の出版界を觀よ風俗壞亂の故を以て發賣禁止を命せらるゝもの枚擧に遑あらす、殊に組合せ繪端書の如きは其の發賣禁止を命せらるゝもの日々の官報紙上に掲載せらるゝか如きは、我社會人心の如何に淫靡に流れつゝあるか

を察するに足れり、我社會一般の風紀の此の如くなると同時に、女學生の將來伴侶たるへき男學生の風紀も漸次頽廢を來し、或は賣春婦に惑ひ、藝妓に溺れ、娼妓に欺かれ、娘義太夫の跡を追ふか如き、滔々として淫蕩の俗を爲すに至れり、女學生を圍繞せる四邊の空氣此の如く不潔なる以上は、女學生の墮落も亦實に已を得さる處にして獨彼等のみを罪す可さるなり、然は女學生風紀問題の解決は之を社會の風紀問題に求めさる可す社會の空氣の腐敗せる以上は之を呼吸する女學生の風紀の獨り清潔健全ならんことを望むは實に至難の業なれはなり。

女學生風紀の頽廢に就きて女子敎育當局者の說を聞くに往々其の頽廢を否認するものなきにあらす、曰く近來墮落女學生の增加せしは事實なり、然れとも比例的にして絕對的にあらす、十年前に千人の女學生ありたる時十人の墮落者ありたる比例を以て、今日は一萬人の女學生に對し、百人の墮落者を見るに過きすと、或は曰く現代の女學生の墮落は實に世人の喋々する所の如し、然れとも之れ明治以前の舊社會の女子に比すれは必すしも墮落の程度を加へたるにあらす、何そ深く咎むるに足らんやと、或は曰く女學生は天性の嫉妬心の深刻なるものにして、相互に猜旋の眼を以て他を監視し、文書の往復交際の人物出入の人家等に至るまで一々探索して漏さゝるを以て墮落の餘地なし、今日の女學生の墮落は實に寃罪にして世人の所謂墮落生は眞の女學生にあらす、皆賣春婦等の女學生風を粧ふもの、即ち僞女學生たるに外ならさるなりと、此等の辯護說も幾分は事實なるへしと雖も、吾輩は墮落者の增加は比例的なりとして安心するの危險を恐るゝものなり。明治以前の舊社會を標準として現代の墮落を看過すること能はさるなり、女學生各自の箝制に由て墮落を豫防するものよりも寧ろ女學生の競ふて墮落の淵に趨くものゝ多からんことを恐るゝものなり、夫れ女子の風紀は社會風敎の淵源なり、女子の風紀健全にして而して後社會の風紀始めて健全なるを期すへく、女子の風紀頽廢して而して後社會の風紀之に從ふ將來の妻たり母たるものゝ敎育に任する者、豈に風紀の維持敎養に一層の心を用さる可んや。



安場男爵未亡人の懷舊談

婦人記者

維新前は勤王家、開國家として聞え、維新後は猛斷家辣腕家として聞えたる、故安場男爵は如何なる夫人と一生を偕にせられましたか、記者は故男爵の未亡人露子刀自を麻布一本木町の御住居に訪問致しました。自刀は齢六十三、此頃御病氣後で立居も御不自由でありながら、唐突に伺つた記者を二階に招じて、直に上り來られし其元氣と其襟懷は流石志士の夫人として社交に鍛錬せられし名殘を忍ばしめたのです、加之此室に飾られた、伊藤、松方、山縣、福澤の諸名士が故男爵に贈られた古い手紙を張り交ぜにした二枚折の屏風故横井小楠翁結髪時代の油書肖像、刀劍、弓矢等が轉た往時を追懷せしめて限りなき趣味を感ぜしめました。安場氏は刀自の腹に、男子なきを遺憾とされた相ですが、其の令婿は實業界に官界に雄飛され、令孫には有望の麒麟兒が多いので、大に滿足して瞑目されたとの事であります、長女の令婿は製紙事業に奔走され、兼て代議士の重任を負ひて居られますが、目下臺灣に出張中、刀自は都合により五人の幼孫を膝下に撫育して居られます、次女の令婿は南滿洲鐵道會社の總裁後藤男爵で御座います。

▲藩で憎まれ者の良人

良人は何でも人より眞先に新奇に進み、西洋の趣味を賛成しましたので、維新前の熊本藩中では憎まれもので御座いました、其樣な事で始終私の心配は絶へなかつたので御座います、未だ藩では誰も洋服を着けぬ内に、良人は洋服を着て、京都の橋本(公卿)さんの若樣を連れて郷國へ歸つた事が御座いましたが、其若樣は容貌が美しい上に大髷に結んで居られ、島田髷とも見

まがへて、一寸婦人らしく見えたので安場の毛唐人め妾を連れて歸つて來たと皆さんが嘲笑したのでした、後には笑ひ話しの種となりましたものゝ、其當時は何となく辛く感じたので御座います。

▲刀自の花嫁時代

私は極年のゆかぬ内此家へ參りましたから、姑には母親同樣に面倒を見て貰つたのです、良人は未だ部屋住で毎日自修學館へ通學して居りました、其頃私共の郷國では女子に學問は不必要だと申して、手藝の方ばかり奬勵して居りましたので、主婦の仕事は隨分澤山で御座いました、味噌、醤油から酒まで手造りいたし、家内中の着類は皆織つて拵へますので、此糸取りが夜業の主なるもので御座いました、其間に親や子供の結髮、良人の髮月代、之れが隨分一と仕事であります。尤も味噌、醤油、酒などの作り込みは下女や家來に手傳はせは致しましたけれども、監督だけでも年中少しの暇もない位でした、東京へ引移りましてから、生活の狀態が悉皆變つて、東京と云ふ處は實に女の安逸をいたす所と存じたのです、併し昔の習慣が却々失せませんで、安閑と暮す事が出來ず、始終こせ〳〵と致すのを良人の御友人が御覽なされて、奥さん何時まで其樣な事ばかり爲るのです、宜い加減に思ひ切つたら宜いでせうと申された位でした、其頃東京の奥さん方は唯今と異つて安逸に暮さるゝ向が多かつたものと見へます。

▲姑の嚴正

私の姑は珍らしい解つた婦人で御座いまして、身贔屓と云ふ事は微塵もなく、私を實子にも増して愛して與れましたが、男子ではたつた一人限りの良人に對しては實に嚴正で、びし〳〵叱言を申しますので、知らぬ人は反對に推せらるゝ事もある位、私は間に立つて困る事が度々御座いました、間違つた叱言は申さぬ代に一度言ひ出した事は決して後へ引きません、良人が若し母の命に從はぬやうな場合には、最早目通りは叶

はぬなど〻憤つた位で、血氣の良人も此母親には頭が上らなかつたのです。夫れで此姑は學問の素養があるでもなく、又大して家事を働らくと云ふのでもありませんが、唯大體人間の蹈むべき道とか、社會の趨勢とかは不思議な程明らかに知つて居りましたから、良人に申す訓戒も拔目がありませんでした、尤も維新前後爭亂の頃には大早打と申して號外のやうなものが、東京から藩へ參りますのを、姑は人より眞先に之を求めて世の動靜を知ると云ふ風で御座いました。



▲妾を置くなら親が乘込むぞ

良人が權令を拜命致した際、妾を連れて任地へ參つたと云ふ噂を聞き込んだので、姑が非常に立腹いたし、何處の馬の骨だか分らぬ者を側に置くとは何事だ、其樣者を置くなら母親が其地へ乘込むから左樣心得るがよいと申し出しました、其頃蓄妾は出張する方々の常習ではあるし、身の廻りの御世話のため無據次第もあるから、何卒八釜しく言はずに許して上げて下さいと私がなだめましたが、例

の氣象で却々止りません、交渉の結果遂に良人の方から、私同道にて任地へ參られるやうにと姑へ申越し、家を纏めて出京する事になつたのです、其頃東京へ出張された方々は大抵藝妓を弄ばれたもので、乃公こそ今度出京して諸君を修めて見せるなど、片肱張つた方も、出京すれば直にペン〳〵ドンチャンの御仲間入りを爲れて了ふのが普通でした。

▲酒席に於ける姑の機轉

姑は御酒好の方でありましたので、御酒客のある際は良人が姑を席に招じましたが、斯る際は非常に客の待遇に注意致し、又良人の受ける盃を半分は姑が助けて飲み乾しました、此は良人が泥醉して失禮でもあッてはならぬと云ふ心配からで御座います、ハイ客來は始終絶間が御座いませんで、二三人御出で酒肴を出す内に又御客が殖へて參る事が多いのは、良人が店屋から取寄せるのが嫌ひで、不加減ながら、手料理でばかり出しましたから臺所元は却々煩忙で御座いました。

▲令孃の教育

私は唯女子二人だけ持つたので御座いますが、是の教育盛りには、未だ女學校の設備もなき地方へばかり赴任致して居つたので誠に不都合でありました。福島へ參つた際は、宅へ教師を招き他の令孃方も集めまして一寸女學校のやうな仕組を立てました、其後愛知へ轉任しました時は女學校が在りましたので之れへ通はせました。併し諸方へ引移りますと落着いて教育を受けさせる事が出來ず、誠に殘念で御座いました、良人も男子の無いのを大層こぼして居りましたが、長女に多勢の男兒が出來たのを喜んで、七年前亡なる際にも大に滿足して目を眠りましたので、何卒孫達は祖父の遺志に背かぬやう育てたいと念じて居ります、孫　頭は十九歳になりまして、唯今仙臺の高等學校へ遣はして御座います。此の孫は書が好きで、後藤の叔父さん(新平男)の書いたものを送つて呉れ、とよく申して參ります。

▲令孫の世話

長女の婿は製紙事業のために三年前から夫婦共臺灣へ參へて居りますが、毎年末に議會へ出席するために出京いたし、二ヶ月ばかりは兩人共此家へ逗留致すので、大勢の子供を引連て度々長途を往復するのが厄介で御座いますから、私が悉皆預かつて世話いたして居りますが、何分女ばかりの家ですから隨分氣骨が折れる事で御座います、子供達は兩親が居りませんでも案外平氣で居ります。

▲武運長久

私は別に宗教に依ると申す事もないのですが、唯昔から獨り考へて武運長久と云ふ事を念じて居ります。何事に關らず此運が強くなければ成就いたしませんと存じ、孫共の行先やら氣候のわるい臺灣に住む娘夫婦達の健康やらを毎朝天照皇大神に祈つて居ります。斯樣に致して居りますと何となく心丈夫で餘計な取越苦勞を致さぬだけ幸と存じます。



新渡戸博士夫人の家庭談

婦人記者

農學博士、法學博士新渡戸稻造氏の夫人を小日向臺町の御住居に訪問致しました處、博士は夫人と共に入り來られ先づ談緒を開かれました。

妻は十七個年も日本に居ますが日本語は全然出來ません、これは私が惡かつたのです、何しろ書生が澤山居たから皆の練習になつて宜からうと云ふ考で、英語ばかりで互に用を足して居たのが習慣になつて、妻の方の練習を怠つて了つたやうな次第です。今通譯の婦人を此室へ呼びませう。が、ナアーに別に是れぞと云ふ面白い話もないでせうよ、近來婦人の雜誌も却々殖えましたネ。左樣サ何でも具體的に限る、抽象的は駄目だ婦人に關しては尙更でせう。忠孝〳〵と口うるさく

唱へたつて無駄な話しだ。學生に孝經を百遍復讀させるより、親へ一度手紙を出せと敎へた方がましだつて此間も末松何んかと話したんですが、實際左樣ですよ。口ぢやア倫理の講釋を立派に振廻して居る癖に國元へ音信不通と云ふ學生が多いんです、夫れと云ふのが手紙を厭に氣取つて書うとするから臆劫になるのです。近況を有の儘に知らせるのが一番宜いじやアありませんか、一寸妻の事で例を話すと、昔から此年になるまで月に二回づゝ船便のある度に必らず手紙を親に出して居ますが、其事柄は實に詰らぬ事で、今日は北風がヒユー／＼と吹いて硝子戸が鳴つて居るとか、自分は今斯樣な仕事を爲しつゝ在る所だとか云ふ、現在の實況を書いて送るだけの事で、親からも矢張其通りの寫眞的手紙を寄越と云ふ風です。それだから遠く隔だつて居ながら何時も手紙で、直接に相逢ふて居る心地がして愉快なばかりでなく親子の愛さへ益深厚になり行くので在ります。愛さへ深ければ別に孝道の何物たるを勉强しなくたつて、差支へないと思ふ。何でも孝の捷徑は關係を密接にして御無沙汰にならぬに限る。兎角學生が手紙を書くのに、正直に自分の事を露出するのをソッチ除けにして、緣遠い高尙めいた文を連ねたがるから困るのです。

記者は尙御話を伺ひ度と存じましたけれども「私は出る時間が迫つて居ますから……。イヤ日曜は田舍行を定めて置きます。東京へ來てから本を讀む時間がなくつて閉口です。せめて日曜だけでも逃げ出さなければ」と、倉皇 折鞄を抱へて立上られ、夫人が後より手早く打掛けらるゝ外套を忙し氣に羽織つて出で行かれました、丁度此時通譯者松村女史來られ、初めて夫人の御話一二を伺ふたのです。

▲女學生の運動に就いて

女子には學問が無論必要でありますけれども、先づ何より自分の身體の事を注意するのが肝要だらうと思ひます。日本の女學生方の運動に就ては最少し注意がありたいと存じるのです。女子は一ヶ月に一回必らず

本誌の景品選擇上に就ての注意

◎化粧水と白粉

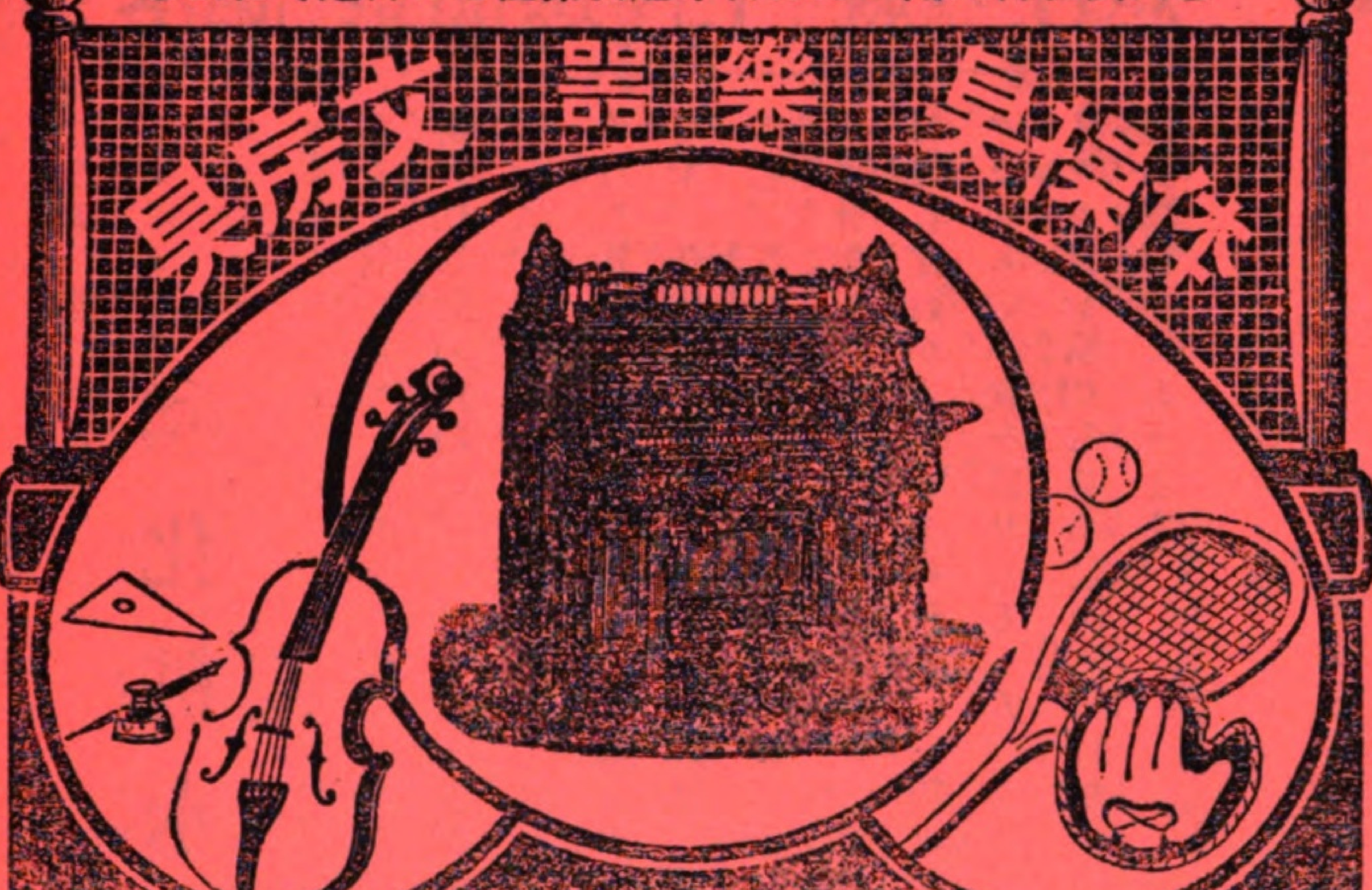
暑季に於ける化粧水と白粉の關係

追々と暑が近づいて來ますので、化粧法も又從つて變つて參りますが、別けて御婦人には、一番大切な顏の白粉を、つけまするのが中々ムヅカシクなりますので、たとへば是れ迄の如な時候では、白粉をつける前にクリームを用ゐまして、白粉ハゲを防ぐ事が出來ましたが、是れから汗が出る如になりますと、油氣の多いクリームなぞでは、イロ〱な不便が生じますのみならず、汗の爲に塗たクリームが溶け、爲に顏の色が日に燒けた如に、テラ〱と黑光に見えますし、又油顏になりますから、なんとなく心持がよくありません。

萬能化粧料として、ローヤル水が、到底他品の眞似の出來ない、優れた特色を持て居ります事は既に定評がありますけれ共、白粉ハゲを憂る人、無鉛白粉のツキの惡るいのを嘆かるゝ方、クリームの不便を感せらるゝ人、普通白粉の弊害を覺られし人々は、其の缺點を補ふには、ローヤル水を常用なさるより外に道がありません、販賣店は全國重なる處の洋物食料品化粧品賣藥及雜貨店にあります。

本誌の紀念景品に當籤せられたる方は一讀あれ

◎代價表御入用の方は御申越次第直ちに御送可仕候◎



東京市本郷區 南江堂教育品部 湯島切通坂町

電話下谷一三三〇番 振替貯金口座第一四九番

東京府知事 男爵千家尊福君題詠
東京商業會議所會頭 中野武營君序文
東京博覽會協贊會 理事葦原清風君序文
東京市長 尾崎行雄君題辭
田山花袋君編
柴田常吉君撮影
橋本邦助君裝畫

東京寫眞帖

東京博覽會

紀念出版

●總クロース金文字金畫入頗美裝製本横八寸五分縦六寸●製本四月中旬出來●正價金壹圓五拾錢小包料金拾錢●東京市郡詳密全圖●東京博覽會全圖石版極彩色●東京名所舊跡、諸官衙、公署學校、銀行會社商店等寫眞版約四百面彩色刷頗鮮明▲コロタイプ數葉入●附録東京遊覽案内

發兌元 東京本町 博文館 ● 發行元 東京小石川 日本葉書會

女(わの二)

女（わの三）

文藝倶樂部の增刊

ふた昔

博文館創業二十週年紀念

全一冊洋裝菊判　正價　五十錢
紙數六百四十頁　郵稅　五錢

來る六月十五日博文館創業第廿週年の吉日を紀念する爲東洋文藝雜誌の覇王「文藝倶樂部」は、左記現代廿名家の傑作を網羅し普通號の二倍大――菊版六百四十頁の日本に於ける雜誌界未曾有の大册を發刊し、表紙に、繪畫に、用紙に、裝釘に、出來得る限りの善美を競ふのみか、愛讀者諸氏より募集せる名什佳作をも披露し、尚雜録以下また例號に倍せる趣味と實益との向上を期す。發刊の日を待ち賣切れざる內に愛誦を賜はらん事を祈る。

—(六月十五日發行)—

紀念號執筆者

饗庭篁村君　幸堂得知君　江見水蔭君　渡邊霞亭君　國木田獨歩君
須藤南翠君　宮崎三昧君　巖谷小波君　泉鏡花君　島崎藤村君
塚原澁柿君　川上眉山君　山田美妙君　柳川春葉君　田山花袋君
幸田露伴君　廣津柳浪君　遲塚麗水君　德田秋聲君　石橋思案君

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女(わの四)

田口掬汀氏著

小説 伯爵夫人

（口繪 鏑木清方氏
裝書 平福百穗氏）

前編 八版出來

後編 六版出來

クロース製最美本定價一冊金八十錢送費一冊八錢

「伯爵夫人」は人心の光明を寫せる大作也、戀愛と友誼との美しさに向ひて人間の感情を興起せしむる小説也、現代社會の人情は此一大鏡に反映して諸君の眼前に活躍すべし、清純清新の思想に觸れて、高く潔き趣味を貪らんとする人は必ず此小説を讀まざる可からず。

▲新作小説 **心の波**

上下二卷再版發行

洋布製定價一冊金七十錢送費上卷八錢下卷六錢

父子の愛と友愛とを描けるものは是なり、富と力との爭ひを寫せるものは是なり、此書を讀む人は必ず生活の意義に就いて會得する處あらん。

女（わの五）

發賣元 東京 東京堂 上田屋

大阪 杉本 吉岡 久留米市 菊竹

寫眞畫報臨時增刊

東京みやげ

大好評再版出來

◎正價金貳拾錢郵稅貳錢

文藝俱樂部定期增刊

落語十八番

本館賣切に付賣捌店より御買上げを乞ふ

◎正價金廿五錢郵稅貳錢五厘

農業世界臨時增刊

農家便覧

好評嘖々再版出來

◎正價金貳拾錢郵稅貳錢

五月十五日創刊

英語世界

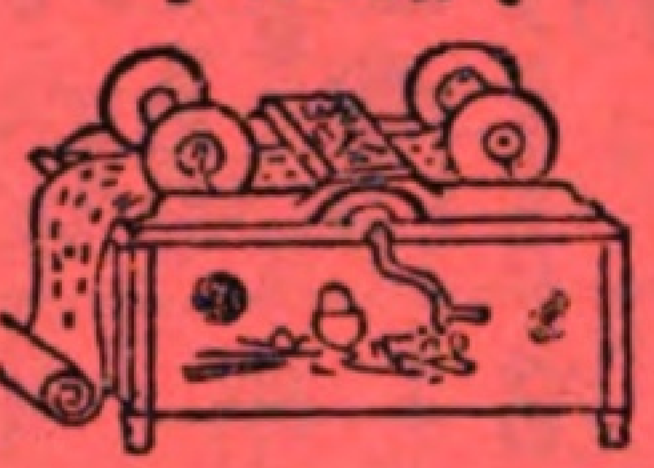
第一號は大好評にて一時に數萬部を賣盡し再版直に出來せり

◎正價金拾錢　郵稅壹錢

振替貯金口座第二百四十番　東京本町 博文館　販賣用電話本局二六二〇番

（わの六）

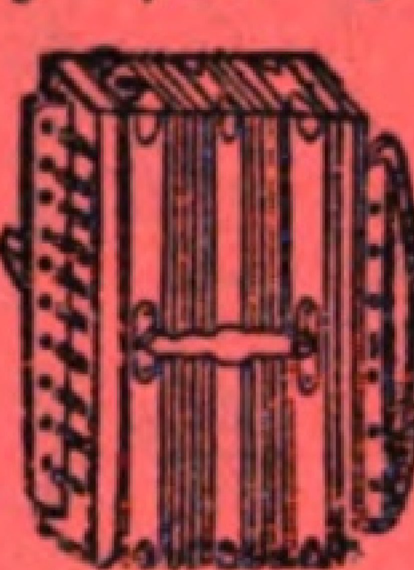
無師獨奏
紙腔琴



本器は誰人にても習はずして自由に奏曲し得る美妙の音樂器にして是に配する曲譜は長唄端唄常盤津其他軍歌唱歌流行唄等數百種あり

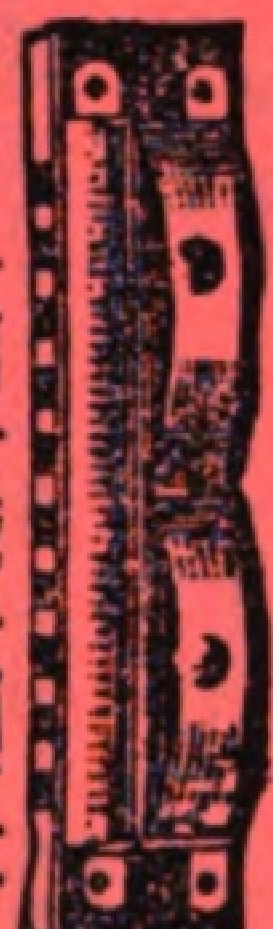
定價
大形上製拾五圓
同 中製拾圓
小形 五圓

舶來
手風琴



●定價金參圓參拾錢、參圓五拾錢、六圓、六圓五拾錢、七圓、五拾錢、八圓、九圓、拾圓以上拾八圓迄各種

西洋横笛



金三十錢四十錢五十錢六十錢七十錢一圓一圓廿錢一圓五十錢二圓以上各種

◎平圓盤發音器 正價金貳拾五圓、四拾圓、五拾圓、五拾八圓、六拾圓、八拾五圓●音譜數百種出來

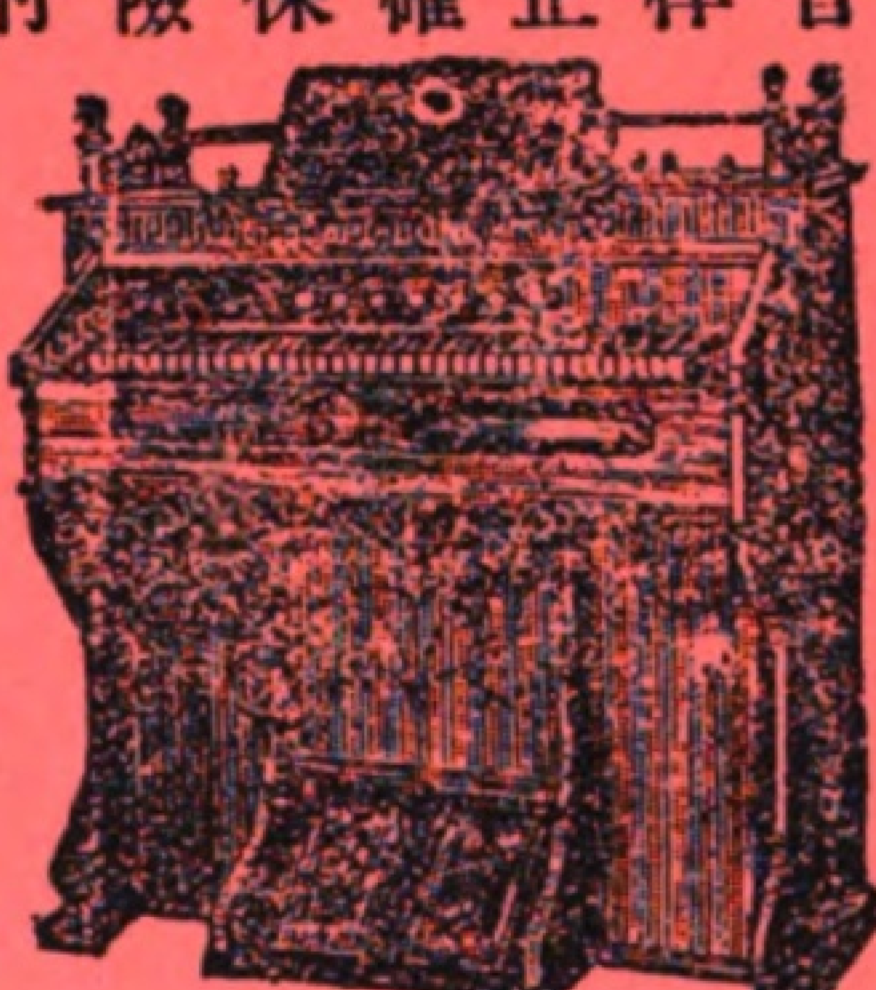


◎大聲蓄音器 正價金貳圓、五圓、金參拾參圓金五拾五圓、金六拾五圓●配用蠟管數百種出來

◎教育的高等玩具類

◎軍樂隊用樂器類各種

日本製造元祖
西川風琴
音律正確保險付



一號形	金十八圓
二號形	金十九圓
三號形	金二十一圓
四號形	金二十八圓
五號形	金三十三圓
六號形	金三十八圓
七號形	金四十五圓
八號形	金五十圓
九號形	金五十八圓
十號形	金六十八圓
十一號形	金八十圓
十二號形	金百圓
十三號形	金百十五圓
以上廿號二百七十圓迄	

和洋
バイオリン
弓箱外附屬品一式



和製 金貳圓以上五拾圓迄
舶來 金拾參圓以上七拾圓迄

◎瓜生繁編 進行曲 正價四十錢 郵稅六錢 ◎文部省檢定濟 山田唱歌集

◎長原政二郎著 歐米各國舞踏大觀 正價六十錢 郵稅八錢 ◎同著 舞踏必携ダイアモンド 正價卅錢 郵稅二錢

◎新案遊戲 闘球盤 金一圓八拾錢金貳圓金貳圓五拾錢金參圓五拾錢金五圓五拾錢金六圓

◎舶來バイオリン及附屬品澤山新着

◎新刊バイオリン曲多種相蒐有之候

◎東京銀座三丁目 電話新橋一二五九番
十字屋樂器店
振替貯金口座 七一五八◎

女(わの八)

身體に障りのあるものですから、是に構はず體操などを致しますと、分量が多くなつたり、少くなつたりして完全の經過を取る事が出來ません。是等の事は親御及び各自も深く注意致さなければ永き間に餘程害を起しませう。如何しても生理は充分に解得ありたいものです。私の郷國では幼少の内から生理思想を發達させる事に熱心でありまして、私が拾歳位の頃、敎師が一々實例を示し、牛の骨など持つて來て關節の工合を見せて呉れたりした事をよく覺えて居ります。生殖生理で御座いますか、是れは總て公けには敎へません、多くは母親が男兒に話し、男兒から姉妹に話すとか、母親が娘に話すとか致しますが、何れにしても年頃になつた際に大略を敎へるのであります。



東京名所寫生——龜戸天神

夫人の衞生に熱心忠實な事は出入の者が皆敬服する所で、昨秋令息が重き腸窒扶斯にかゝられし際など、看護婦の先き立となつて一身に御世話を引受られた相で、夫人の行屆かれて在るために醫師は安心して一週に一回より見舞なかつたとの事です。而して消毒豫防の嚴重であつた爲に、家内に

一人の感染者もなく濟されましたと松村女史は語られました。御此令息は博士兄君の御實子を極幼少から貰ひ受けられたのですが、夫人が五年間米國へ連れ行き、言葉や其他を教へ込まれたとの事です。

▲夫人の務

私の家は、主人が用務多端の上に可なり來客も多ふ御座いますから、夜分遲くなつて、朝も定り通りに起られぬと云ふ場合が度々で御座います。夫れ故キチンと一日の用務を時間割に致し難のです。併し部屋〳〵や、寢床へ、新鮮の空氣を入れる事、臺所、食堂の整理、皿やナイフ類の磨き等は一々私が目を通して油斷なく注意して居ります。

夫人と松村女史は部屋〳〵の裝置を一寸見せんとて案内されました、拜見して記者の最も感じましたのは食堂に於ける戸棚の仕組で、手付茶碗類は悉く折釘に掛け連ね、數多き皿、鉢等 各 一目瞭然たるやうに置かれてある事です、「食器を一々箱に藏つて置くと急の場合に見出すのが煩はしいので彼樣に致して置きます」と、夫人は語られました。博士の書齋、及び應接間には鎧櫃、奉天の城瓦等を初めとして、古い木彫の豆人形が星のやうに列べられてありました。

▲夫人の趣味

主人が古い道具類が大好ですから何んですか澤山に集めて御座います。私も彼樣な事は大好であります。讀書ですか、私は歷史が一番好きで、而して何國の人でも開化した人の履歴を愛讀致します。日本なら秀吉家康と云ふやうな開化した偉人の傳記を面白く感じるのです。

此日は夫人の應接日で御接客の御仕度に御忙しい御樣子ですから、御暇を告げましたが、御玄關に來客の忘れ物を置く小な卓子が在つて、手袋など數々列べられてある所を見ましても、よく御行屆きの事が分りました。

家族會館の事ども

植村正久

數年前、英國倫敦の東端に、社會主義一派の人々が、「人民の會館」と云ふものを立てた。之れは平民の倶樂部と言つたやうなもので、貧者、勞働者などが相集つて色々の事をする處である。又日本では「華族會館」と云ふものが在つて、其處に貴族が集つて色々の事をしてゐる。既に恁う云ふものが在つて夫々活動を爲てゐるから、今一つ爰に「家族會館」と云ふものを設けたいと思ふ。これは多くの家族が打寄つて睦じく語らひ共に良い事を學び、共に高雅な興樂を得る仕組のものです、一體今日の處ろ多くの家族は何處へ集つて樂むかと言へば芝居、寄席など云ふ如何はしい處で、何うも適當な設備が出來て居らぬ。又田舍では從來鎭守の祭禮や盂蘭盆などが却々盛んで、其の日に村落中の男女が集つて色々歡樂をする風があつた、隨分立派な家族的の會合も見られたが、近來此種の會合も段々衰微して今は殆んど廢絶の姿である。去れば、玆に新に家族會館なるものを設けて、高尚にして有益な歡樂を家族に得せしむることは、最も必要なことかと思ふ。家族會館てふ建物は兎に角、先づ之れに適當した集會を設けることが急務であらう。這度富士見町教會の婦人會が發起して「家族講話會」なるものを設けたのは乃ち此の趣旨に外ならぬわけである、さて會館を設けて、如何云ふ事を爲たら宜いかと言ふに、幻燈も宜い、音樂も宜いお話しもよい。

要するに高雅な興樂を主とせねばならぬ、又極めて通俗の學術談も宜ければ、普通の家庭談も宜い、其他世間の新聞、大陸探檢談、北洋航海談等もおもしろからう。一體家庭に居る者は、兎角恁う云ふ事には暗いから、其れを通俗的に話して聞せるのは頗る有益である。次に又趣味を養ふと云ふとも結構である。タトへバ、爰に新趣向の曲が輸入つて來たとすれば其れを聞いて面白く玩味ふと、又音樂は何點が面白いか、之れ

には何んな種類があるか、何んな點に耳を澄べきか、或は如何なる調子が愉快であつて如何なる調子が悲哀であるか、乃至は日本音樂と西洋音樂との相違の點等に就ての趣味を養ふことを奨勵せねばならぬ。それから先日舶來の出版を見ると、「自然の爲に自然の研究」と云ふのがあるが、其れには黎明の空、夕の雲、水の面林の蔭、禽鳥の飛ぶ、獸類の走るなど總て自然なるものゝ如何に味ふべきものであるかを述べてある。

それから又「繪の意味」と云ふ書物があるが、其れには古來の名畫に就て、一々如何にして此の繪が出來たか、是れに如何なる暗示があるか等の事が說いてある。總て斯かる類の事を成るべく平易に講義して精神修養に充つるのも亦非常に有益であらう。それから又家庭に居る者は人を知るの便利が無いから、色々工夫して社交的の教育を施すも宜からう。其他斯かる種類の事柄は澤山あらう。が、其の孰れに就ても專門に涉ることは成るべく避けたいと思ふ。

而して大體に於て高雅で、質朴で、又平民的、進步的、革進的の諸要素を備へ、且つ自ら禮儀的であつて欲しい。又從來我國に於ける家族的の會合は、鎭守の祭禮にせよ、盂蘭盆會にせよ、又其他のものにせよ、多くは宗教が中心となつてゐたが、將來設けんとする家族會館の如きも、矢張り立派なる宗教、堅固なる信仰を中心として之を創めるのが宜い。我が家族講話會の如きも勿論以上の理想に基いて設けたのであるが、何分草創の事とて未だ組織も立たず、人物を選ぶのも却々勞だ。併かし、追々之を熟成せしめて、行々は立派な家族會館を形成つて見たい考である。

（文責記者に在り）

◎最も弱き處ろより絲は切れる

◎學ぶ暇なしといふものは暇あるも學ぶ能はず

◎小事を精密に觀察するは功績を奏するの秘訣なり

◎五色も暗中にありては皆黑し

月の手帳（五月）

遲塚麗水

柳の花は綿を飛し、蓮の葉は錢を敷く、二十四番の春風に躑躅に薔薇に、牡丹、芍藥に名殘を留め、藤を隣りの初袷、春行くといふ此宵の月の、せめては朧るれかしと惜まるゝ月の初、青葉、若楓、燕子花、玉卷く芭蕉、香る橘、夏の景色のやう〳〵に整ふは此の月なり。

▲一日、今日より五日まで靖國神社の臨時大勅祭あり、前回の合祀に漏れたる征露戰役の殉國の人を祀らる、職務に斃れたる赤十字社の看護婦亦た此の中に在り、東郷海軍大將勅祭の委員長たり、遲櫻雪と散り布く瑞垣の邊の燎火、夜闇の招魂の祭の場に、英魂彷彿として來り降るなるべし。

柳島の妙見祠、開帳、押上の普賢菩薩の開帳、この菩薩、德利周遍、仁慈惠悟を司どり、福德智慧を授くとぞ、妙相端麗、白象に騎るの畫幅は、此の日開展されて、隨喜の人に觀るを許さる。

▲二日、兩陛下、靖國神社行幸。

▲四日、小網神社の祭禮、名にし負ふ江戸生粹の勇み肌、任俠の人の集まりたる日本橋の萬河岸、祭の派手なるは言ふばかりなし。

▲五日、今日は端午の佳節なり、男兒あるの家、鯉幟、吹流しを江戸紫に晴れ渡る中空高く押し立てゝ、其の子の生先壯んなれと祝ぐ、晴れたる朝の高きに登りて見渡せば、實に〳〵百萬の大軍押寄せたりなど思はれん、勇ましなんぞ云ふばかりなし、菖蒲湯、菖蒲酒、定紋の金蒔繪したる重の中には柏餅、菖蒲葺く軒より出でゝ幟立てたる門に入る。

▲六日、靖國神社の例祭なり、勅使參向し、酒饌幣帛を供し、陸海軍の諸隊參拜す、臨時大勅祭につゞきて煙花、相撲、能樂などの餘興あり、いと賑し。

▲十日、小石川の氷川神社の例祭なり、祭神は素盞嗚尊。

▲十一日、下谷神社の例祭、倉稻魂命を祀る、名高き稻荷社なり。

▲十三日、堀の内妙法寺の開帳。

▲十四日、麹町紀尾井町の清水谷公園なる大久保利通公哀悼碑前に祭事あり、青山に公の墳墓を展する人亦た多し、三十年前の此の日の朝、公が參朝の馬車を此に要して、島田一郎、長連豪、杉本乙菊、脇田功一杉村文一、淺井壽々馬の六士、公を刺してこれを殺せしことは人の知るところなり、墮涙碑畔の丘、多く躑躅を栽ゑたり、猩紅燃えんとす。

▲十五日、下谷區根岸の三島神社、例祭。

▲十七日、淺草公園、淺草神社の例祭、一寸八分の靈像を淺草川より網にかけて引き揚げたる濱成、武成の兄弟と、進の中知を祀る、此の日より三日の間、びんざゝらの神樂あり。

▲二十一日、日本橋茅場町藥師佛の開帳。

▲二十一日。川崎の大師詣、新橋及び横濱より川崎驛へ臨時汽車を發す、賽客雲集、西荒井の大師も亦た賑ふ。

▲二十五日、小石川の牛天神の祭禮なり、社記には北條氏康兵を率いて此の地に來りし時、一夜菅公牛に騎り、一枝の梅花を持ちたまふと夢みしかば、後畫工を召して夢中の姿を繪にかゝせ其の陣營の跡に祀るとあり。

▲二十七日、日本海海戰の第一紀念日なり、東郷海軍大將が『皇國の興廢はこの一擧にあり各員それ奮勵努力せよ』との信號を大檣頭に揭げて露國海軍提督の率ひたる波留的艦隊を對州冲に邀擊して、振古未曾有の大勝を博し皇威を世界に耀揚したるの日なり、國民誰れか太白を浮べて此の日を謳歌せざるものぞ。

▲二十八日、地久節、皇后陛下の御誕辰なり、宮中には此の御式を行はせられ、皇族内外の臣僚、參内して壽を上つる、各女學校亦た講堂に御影を拜して御製の歌をうたひまつり、國母萬歲を奉賀す。

此の日、目黑不動尊の開帳あり、下總國成田不動尊も亦た開帳。

此の月、花は躑躅に始まりて牡丹、芍藥となり、やがて風薫る藤の花の、寸紫細かに笛に及ぶ、美人の眼を病

むに似て憐れなりと歌はれし菖蒲の花も、心字漸やく綻びんとす、躑躅霧島に大久保のつゝじ園を初めとし音羽の護國寺、染井巣鴨の各園、日比谷公園、日暮里の花見寺など皆な好し、牡丹は本所四ッ目の植文、多く栽たり、芍藥も、植文松倉町の養花園、引舟の吉野園など、藤花は龜井戸の天神社、小石川の植物園には此の月の花を盡して栽ゑられたり。



新茶は市に上りたり、筍はまた旬を過ぎしが、これも好し、青簾の軒、去年の古巣に歸る燕子、明やすき夜の黎明に、檀かつ散る窓の竹、初鰹、初茄子、覆盆子もこの月の中ごろより出づ、白磁の西洋皿に盛り、牛乳を交へて銀の匙を添へたる、先づ見る目も美しゝ。

野外の遊びには小鮎釣あり、多摩川の黄昏、さら〳〵と晒す布の暮れ殘りて、桔梗の色に鮮へて小さき富士の遠山、釣に上るもの水より碧き一寸の小さき魚なり、此の間の興味は詩するに堪へたり歌ふに堪へたり、又た鯉釣あり、八十八夜の後に此の魚の旬なり、猗々たる三間の竿、房州縱の玉網、中川べりの堤の下に綸を垂れて、悠々と心を行く雲の遠きに寄すれば、何物か來りて靜坐石のごとき我を動すぞ、浮子は沈み圓波は揺

く、玉網を執つて魚を掬へば靜流忽ち雪を噴いて、三十六鱗、躍つて龍とならんとす、亦た快心の閑事業なり。

海の鱚釣も亦一面白し、兩國附近の釣船屋は、多く乘合の鱚釣船を出す、夜半より起きて行き、三更には孤燈を載せて早や川を下り、昧爽には舟中の飯を終へて既に海上に在り、鰹の背の色よりも鮮へし、曉の色海を染めて、鷗淺く潮の頭に還ひ行く頃、靜かに脚榻の上に坐して綸を垂る、空は次第に晴れ渡りて天地は夢より覺め來る、遠く見れば脚榻の人、鶴翼の陣、魚鱗の圖、曉の品川は斯くのごとく賑やかなり。

魚の旬には丸鰆あり、手古比良魚あり、黑鯛あり、海鰻あり、鰻あり、鰯あり、介には石决明あり、蔬菜には蓮芋あり、牛旁あり、蠶豆あり、茗荷の子あり、枝豆あり、薑姜あり、白瓜、靑瓜、薇あり。

◎行路の難きは人情反覆の間にあり

風流筍料理

少々遲蒔ながらこゝに一と風變りたる筍料理を御覽に供すべし、先づ誰も謂ふべきは筍飯にて此は甘くして木の芽など散りて食ふに風味のよきものなるが、甘煮として鯛などの汁にて煮るも惡しからず、京都は筍の本場とも云ふ可き處なれば、從つて其料理にも種々あり、普通行はるゝ仕方は筍と切昆布との清汁なり。此も淡泊したる處に風味多し、されど最も食い者のよきは筍の味噌料理なり、ひこずりといふもの仲々によし、自然燒、是も一寸面白し、ひこずりといふは茄子などを和へると同樣にて、先ず山椒、砂糖味噌を能く擂り混ぜ置き、筍の皮を去り、釜にて一沸き湯煮て、能く水を切り、右の擂鉢に入れて不同のなきやうに攪き混ぜるなり、晩酌の好き菜なり、又自然燒とは新鮮なる筍を取り根を切り最後の二三節を殘して中を通し倒にして前の如く拵へたる味噌を詰め、大根にて蓋をなし藁火に埋めて燒くなり、暫くして之を取り出し皮を去り小口より適宜に刻む、風味甚だ佳し、但し燒く時には決して皮を剝くべからずとあり。



英國の家庭觀察

理學博士　松村任三

私はツイ先頃政府から派遣されて植物研究のために歐米を旅行し、二月に歸朝しました。その旅行では專問の學問の上に利益された事は勿論多いのであるが、他の種々の問題に關しても參考となつた事、啓發された事が少くない。殊に暫時英國の中等社會の家庭の中に居た事は、私をして英國人の家庭生活、小兒の教育方法等を親く觀察させる好機會となつたのであります。で、こゝには其觀察記を少しく御話しやうと思ひます。

一體私が英國の家庭に居たといふのは、倫動を中心として歐洲諸國を旅行したからで……先づ初は米國へ着いたが、これはシャトルから紐育まで殆ど素通にし、船で大西洋を渡つて、英國のリバープールから倫動へ入りました。そして倫動を本據として、佛國の巴理、獨逸の伯林、匈利のブタペスト、土耳其の君斯坦堡等へ研究に出かけた、だから最も長く居たのは、矢張り倫動であります。

美術家の家庭

英國では、外國人が暮すのに先づ大體三種の方法がある。——即ち部屋だけ借りる下宿と、普通の旅館に

泊るのと、家庭に入るのとで、此他半家庭の如き下宿屋もあります。この家庭に入るといふことは、第一、下宿屋に居ては夢想だも出來ぬ和樂、慰藉といふものを得られ、第二、英語を絶えず耳にし口にする事が出來、其他色々の利益があるが、苦しい方を數へると其も仲々ある。――無論風俗習慣の異なる故でせう。あちらの家庭では、中等の家でも明間があれば、寡婦も居れば、八十になる老未婚婦人も同居する。而して食事なぞも、日本のやうに一室に割據して喰るといふ風でなしに、皆食堂に出て會食する。濟めば四方山の話をするといふ鹽梅だから、樂いやうなものゝ、さて食樣、話樣、食卓の禮儀作法等に就いて、かなり心配もあり、初めは苦しい。で、倫動に居た私の知人たちは、私が家庭に入つたのをみて「先生の勇氣には驚く！」なぞといつて吃驚してゐました。

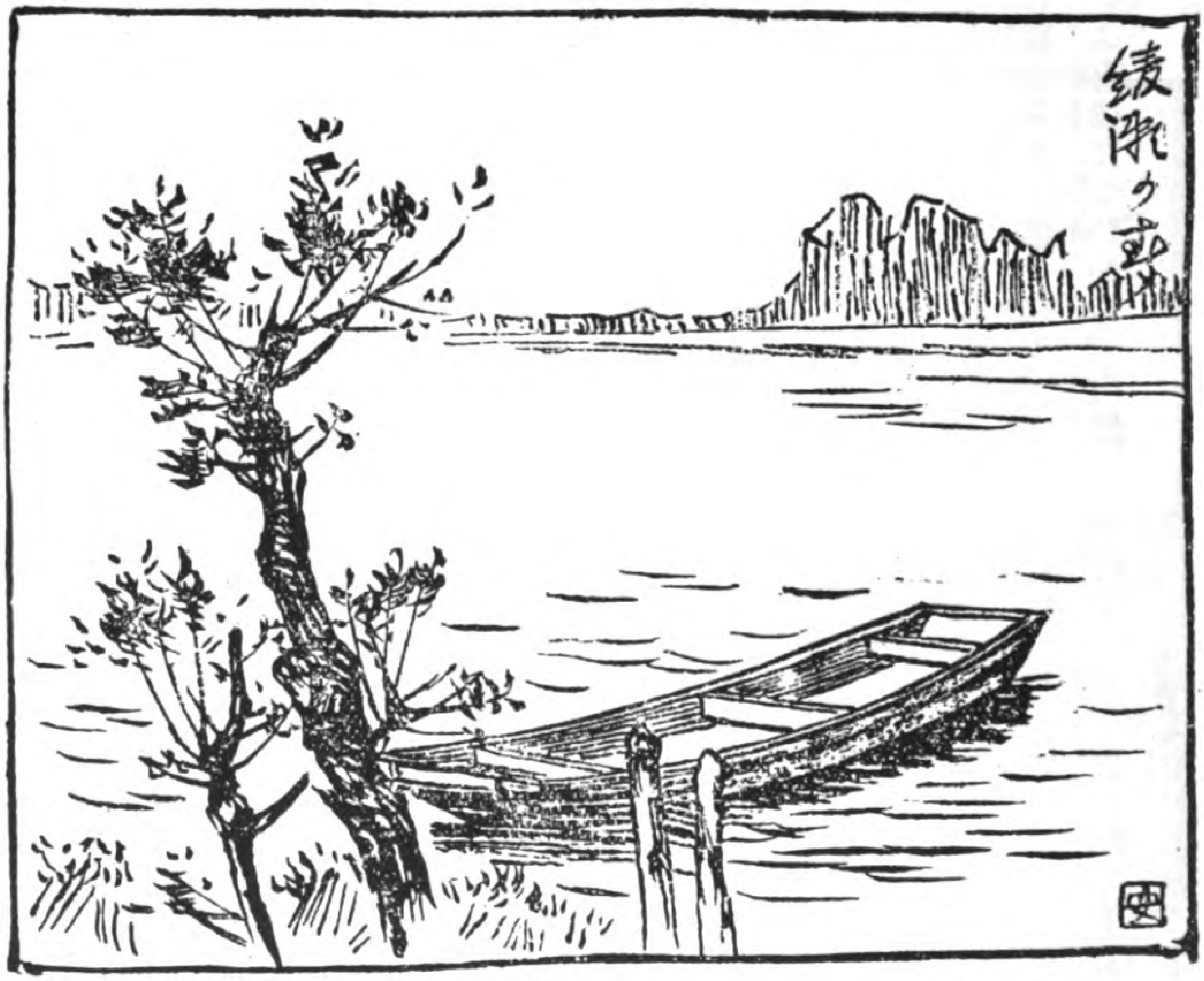
ところで私が滯在してゐた家庭は何かといふと、それは倫動の大學を卒業して、今は某中學校の敎員を奉職してゐる一美術家の家でありました。主人はなかなか働き手で、學校の掛持もやれば、家には畫室があつて、そこでも生徒を敎へるといふ有樣。けれども職業柄で、家の内は、座敷といはず、食堂といはず、奇麗な油畫が掛け列ねられ、至極居心の快い家でした。

小供は二人で、兄は十二三歲、妹は五六歲でありました。此家は主人初め、妻君、下女、同居人に至るまで、揃ひも揃つてそれは〳〵熱心な同じ派の基督信者であつたが、その故にや家庭の嚴格なることは夥しいもので、私はほと〳〵感心してしまつた。美術家などは、えて放縱なものが多いが、此家はそれと反對で、いはゞまア日本の武士道を重んじた武家の如き感がしたのであります。

嚴正なる食堂

英國の風は概して然うであるが、此家でも朝飯は八時、晝飯は一時半、午後になつて茶といふ奴があり、夕飯は夜の八時に喰べる。それで食事の用意が整へば、下女が合圖の鐘をカン〳〵と鳴らします。すると一同

食堂へ入つて來る……無論小供達も食卓に就く。此食卓に於ても、何處までも英國風の嚴正な習慣が發揮されたもので……小供が少しでも御喋りをすれば、母親が「叱！」といつて止めさせる。或時の事、女の兒が粗忽をして、フォークの端についてた食物を私の袖にくッ附けた。すると主人は赫と怒つて、情け容赦もなく其兒を勝手へ追出しました。勝手には下女がゐるから、女の兒は其許へ行つて暫時シク〳〵と泣いてゐたやうであつたが、



やがて泣止むと自分で出て來て「もう爲ませんから勘忍して……」といつて御詫をした。父親はとみると、もう柔い平生の顏つきをして、小供の頭を撫でながら「あゝ、御父樣も辛かつたのだよ」といつて、仲直りをし、再び和氣靄然と食事をするのでした。

　私もかういふ事には覺えがある。——幼い時分に矢張り、食事中御喋りをしたり、喰物の我儘をいつたりして、叱り飛ばされたのを憶ひ出したから、それを主人に物語ると、「いや私の國でも御覽の通り、みんな然

うですよ」といつて居りました。

小供の日課と家庭教師

兄の方は中學生であつたが、其頃何かの事情で退學し、別の學校へ入るまで暫時家に居りました。が、親たちは此兒を決して遊ばせては置かん。丁度同居人に二人の御婆樣があつたから、其中の一人に家庭教師となつて貰ひ、時間制度のもとに課業を與へるのでありました。——つまり朝の何時間は算術をやるとか、晝の何時間は佛蘭西語を習ふとか、英文學をやるとかいふ塩梅で……英文學などは頻に詩の暗誦をやらせられて居つたと思ふ。それから英國の中等社會の家庭には、必ず一臺のピアノは備付けてある。此家には客座敷にあつたが、男の兒はそれも隨分ピシ／＼と習はせられたとみえて、餘程上手であつた。定つた時間に少しでもピアノの音が絶えると、母親は束々と出て來て、「さツさと御やり！」と小言をいふ有樣だつたから、自然進歩も早かつたのでせう。

家庭教師の御婆樣は、あれで婦人會の幹事とかで忙しい體なので、朝夕小供に附いて居るといふ譯にゆかぬ。そこで算術ならば問題を出し、佛蘭西語ならば飜譯の課題を命じて置いて外出します。ところが小供は遊びたいが山々だから、時々怠けて放ぽかして置くと、婆樣歸つて來て、イヤその八ケ間敷い事は！　直樣主人の前へ行つて、遠慮會釋もなく、御子息の不勉强な次第を陳述する。かういつた工合で、日本で御世辭を列べるのとは大違ひ。また其間に立つて、誰も小供を調停さうともしないのです。

下女の權利

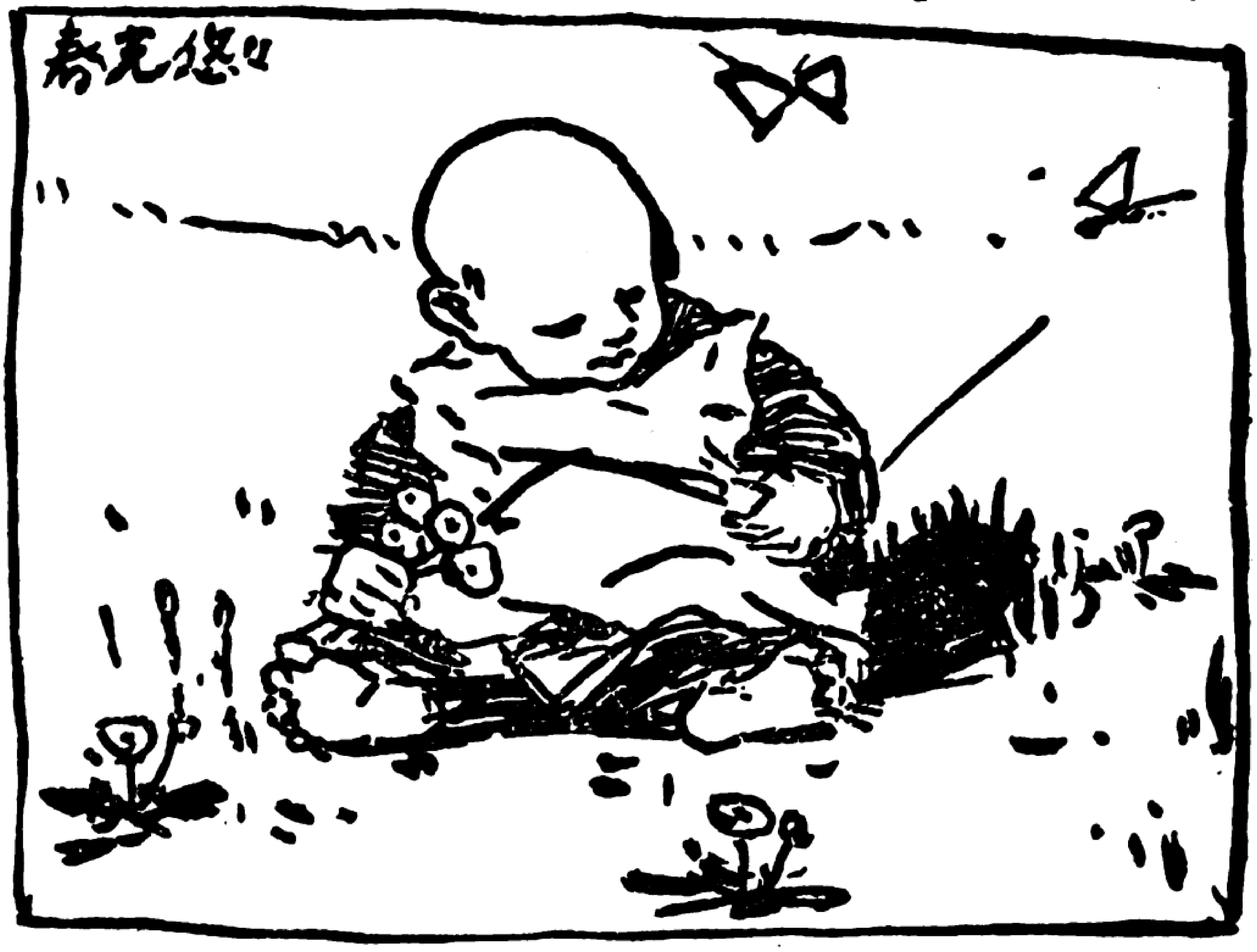
家庭教師が無遠慮なばかりではない、英國では下女に餘ほどの權力を附して置きます。此兄妹ぐらゐの年頃の小供は、下女に從はねばならぬ風があつて、例へば兄妹喧嘩を始めると、忽ち下女に目玉を喰つて、妹は勝手へ運び去られて了ふ。小供の方でも大變下女を憚かつてゐる形がある。——男の兒にしても、ピヤノ

を怠けてゐる所へ、折惡しく下女がやッて來やうものなら、「や、來た〳〵！」といつて、慌てゝ臺へ取附いて彈き始める。

これも日本で、若樣、孃樣、なぞといつて、惡い事を教へながらへエ〳〵いふ下女とは雲泥の差であります。英國では若樣、孃樣の代りに、ジャックとか、ジョンとか名を呼捨にする……それからが最早違つてゐます。

小供の娯樂

家には大きな鳩小屋があつて、數多の鳩が飼つてあつたが、これは小供の娯みの爲で



ありました。其代り鳩飼ふ役は矢張り男の兒で、妹の方は猫を飼つて居りました。全體私は猫を好かぬのに、英國ときたら大抵の家に此が飼つてあるから閉口した。――小供には生物を授けるのが好いといふ主義から出たものでせう。

また庭にはブランコがあつて、私は屢く女の兒に捕つては、御相手をさせられた。それを母親が見掛けると、「貴君御邪魔では御座いませんか？」といつて心配する。此邊の禮儀は屆いたもので、小供までが其に化せられて、男の兒などは、私が客座敷で讀書

でもしてゐるところへ來れば、「先生！　僕音樂をしやうと思ふんですが、御邪魔ぢやありませんか？」と訊く。「いや、私は大へん君の音樂が好きだ」といふと、初めてピヤノを彈きだすのです。其他、二人の兒が寢に就く時には、乾度私の前へ來て「御機嫌好う！」といつて握手する……朝飯の時に合へば「御早う御座います」といつて握手する……ほかの同居人にもする。

私は日本の家庭で實見してゐるが、どうも日本の小供はこれ程に禮儀が厚くないやうに思はれる。父母の方でも、西洋風だ〳〵といつて、無暗に小供を甘やかせ、下女が小供の事にでも干渉すれば、却て立腹するといふ有樣であるが、甘やかせるといふのは、これ極めて皮層の見でありて、少くも今日の西洋では、今いつた通り嚴格に敎育してゐるのであります。

小供の寢室

嚴格なる習慣について、も一つ驚いた事は小供の就眠時間を勵行する事でした。——小供の寢室と私のとは御隣り同士であるから、よく聲などが聞えてくる。私が行つてからまだ日數を餘り經ぬ或夜の九時頃の事であつたが、例の御隣から「先生！」と小供の呼ぶ聲。「どうしたの？　もう寢たの？」といふと、「もう寢ましたよ」と答へる。「また睡くはないのだね」と訊くと「えゝ、ちッとも睡くはないの。」

そこで私は、はゝア、これは睡くなくても何でも寢かすのだなと初て思ひました。段々解つてみると、此家庭では小供だけは、一同と共に夜食の卓に就かせず、勝手の方で早く食させ、八時には否でも應でも床の中へ押込むでしまふ例になつてゐるのでした。

これらをみても、英國の家庭の一般が御推察出來るでありませう。

◎水の深さは靜なるものなり

◎品行の正しきは最上の美服なり

◎今日の榮華は明日の塡土

愉快なる家庭

三輪田元道

言ふ迄もなく愉快なる家庭は家婦によりて作られるものであります、勿論一家團欒の樂しき生活は家族全體の一致和合より出るものでせうが、然しながら家婦の懸心注意動作等與つて最も力あるものです家婦は一家和樂の中心であると言つて差支なからうと思ふ。

ですから家婦は常に精神を快活になし、顏色を愉快にして、今日も面白い、明日も心地よいと云ふやうに、見る人毎に會ふ人毎に愉快な觀念を與へなければなりません、兎角婦人は涙脆いもので、些少の事でも悲しい時には直ぐと顏に顯れるものですが、然し常平生よりも精神を快活に致し、心を愉快に保つて居れば、側の見る目には、何を悲しんで居るか、何の氣に入らぬ事があるかは、露程も知れぬのであります、實を申せば己が悲しいからとて、人をも悲しませる理はありません、勿論人を悲しませやうと思つて悲しむものはあるまいが、悲喜の情は最も移り易いものですから、人の悲しんで居るのに、自分が喜ぶと云ふやうなことは義理でも出來なくなつて了ひます、況んや一心同體の如くなつて居る一家族の間柄に於ては尙更の事です、されば家庭を愉快にして始終和氣靄然たらしむるには、家婦の懸心か最も大切であります。

一體家庭の快樂を招くには精神的注意と物質的注意の二つがなければならぬので、以上申上げた事は精神的注意より出る結果ですが、之には又物質的注意も並行して居らなければならぬ、物質的注意と申すのは、例へば室の間取であるとしても、それ〲適當の配合と云ふものがある、臺所は客間と離れて居らねばならず、又家族の居間は其の談笑の聲や子供の泣聲若くは騷ぎの音などが來客の耳に入らぬやう矢張應接所に遠かつて居らなければなりません、斯樣にしますれば誰が目にも一見して高尙淸新の家庭であると人の眼に映ずるのであります、間取の事は建築の法にもよりませうが、家婦の懸心によつて如何にでもなるものであり

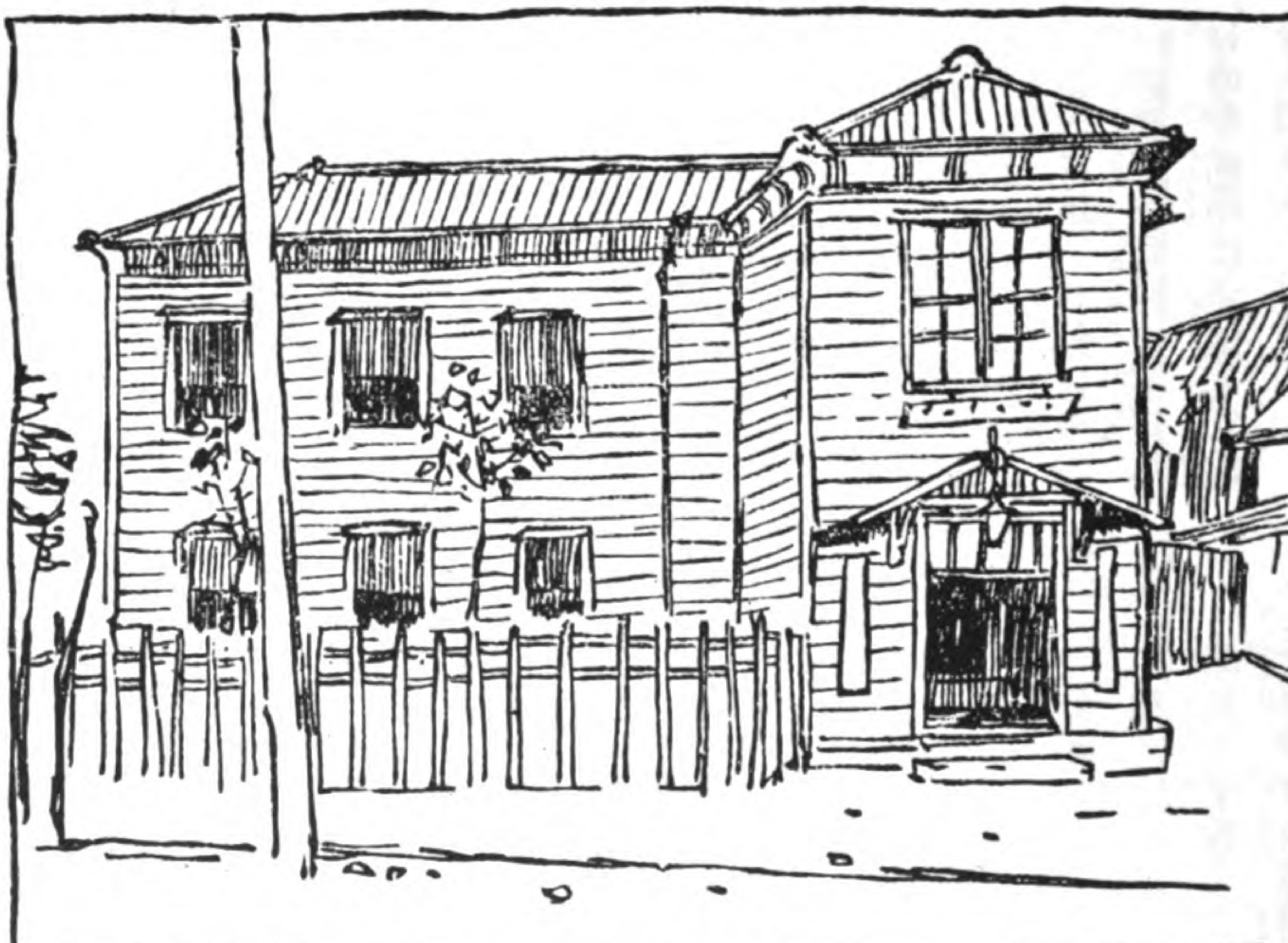
ます。

物質的注意の方は姑く措き主として精神的注意の方面より申せば、家庭を愉快にするには二種の大切な事がありますそれはあきらめることと我が一身を犧牲に供することである、婦人は良人に對しても家内の人々に對しても、したゝるばかり愛嬌にこやかに玉の露を帶びたる菫のやうにありたきものであります、古語にも笑ふ門に福來ると云ふことがありますが、家婦の顏色がにこやいで居るを見れば、良人を始め家内の者も皆樂しげに暮し、各々其業に就き嬉しき日月を送られるのであります。

乃で我身を犧牲に供すると云ふのは何であるかと云ふに、我が此の一身は良人の爲、子の爲親の爲に獻げられたものと思ひ、設令我氣に入らぬ事があらうとも、元來獻げられた身であれば悅んで忍び全力を盡して良人や子の利益を計らなければなりません、楠正成や文天祥やナイチンゲール抔と云ふ忠臣名婦の出まするのは、身を犧牲に供するを厭はざりしに基くのでありま す、獻身と云ふ事は古來多くの美事壯擧を天下に企てたものですが、家婦は之を家庭に實踐躬行して其の嬉しき結果を示さなければなりません。

次にあきらめると云ふのは設令可愛い子が死んで悲哀の情に堪えられません際でも、天命なれば致し方なしと思ひ、其他種々不幸な目に遭ふことがありましても、世には我よりも尙不幸の人のあるものと思ふて、心を慰撫る事です、之を夫婦間の心情より申せば、一般の人々は婚姻を結ぶときに、我が良人より良き良人はなく、我妻より良き妻はなしと思つて結婚したでせうが、偕夫婦になりて月日が經過と共に男は先づ我妻以外の婦人を見て、彼の女は我妻よりも美人である智識もあり、交際にも長けて居ると云ふやうに我妻以外に優れた婦人の在るのを想像する場合がないとも限らぬ、斯る場合にはあきらめるのが最上である我妻は一番美人である、學問も相當に備へて居る、敎育も一通り受けた者である、尙其上貞操の高き者で、此點に於ては恐くは、我妻に勝る者多くあるまいと思ひ直すこ

とでありますが、婦人側の方から申せば、他に我が良人よりも豪い男子があるとしても、斯うあきらめるのである『我が良人は實は豪い、但だ不幸にして今、世に用ゐられぬので、潛龍淵に在るのである、若も一朝世に容れられたならば、定めし豪い働きをなし、功名一時に顯はれるであらうが、何事も時機である、時機を待たなければならぬ、其内には天運循環して我が良人のときめくこともあらう。』と思ひ直して、先づ其れ迄は甘味いおかずの一つもしつらひて我が良人に



女子商業學校

饗しませうと云ふやうに立働くならば家庭は始終愉快が繼いて行きます。

要するに愉快なる家庭は重もに家婦の留意と責任とが係るもので、之を作る主要なる原由は右申しました通り快活なる精神あきらめの心、及び我が一身を犧牲に供すると云ふ事所謂獻身的精神の三者であります。

（雪子）

西洋の家庭日課

時間の觀念に富み、規律を守るに忠實な歐米人の家

庭には、概ね左の如き日課が設けられてある。此の日課表は、目下米國に遊學して現に學僕をして居る人が、參考にとて書き送ッたもので、日本の家庭に應用すべき點も尠く無いし、旁々こゝに大略を記す。

△月曜日。室内の掃除を終つてから、窓や扉の硝子を拭く日である。この硝子拭は一週に二度する家庭と一度限りの所とあるが、其方法はアルコールを布片に浸し、最初それで裏表とも摩り、それから乾いた布巾で充分に拭ひ去つて、少しも簇や曇りのないやうにする。これと靴磨きとは婢僕の役で、主婦は又前日の安息日に外出した家内中の晴衣を整理する。

△火曜日。遠國の友や旅先の知己に送るべき書信を認め、主婦は午後から最も親しい友や、今日面會日の知人を訪問に出かける。其他には、日記以外の記簿を整理するので、厨の必要品や食料の不足なものを買整へるには、此日の午前中に主婦まで申出でねばならぬ。

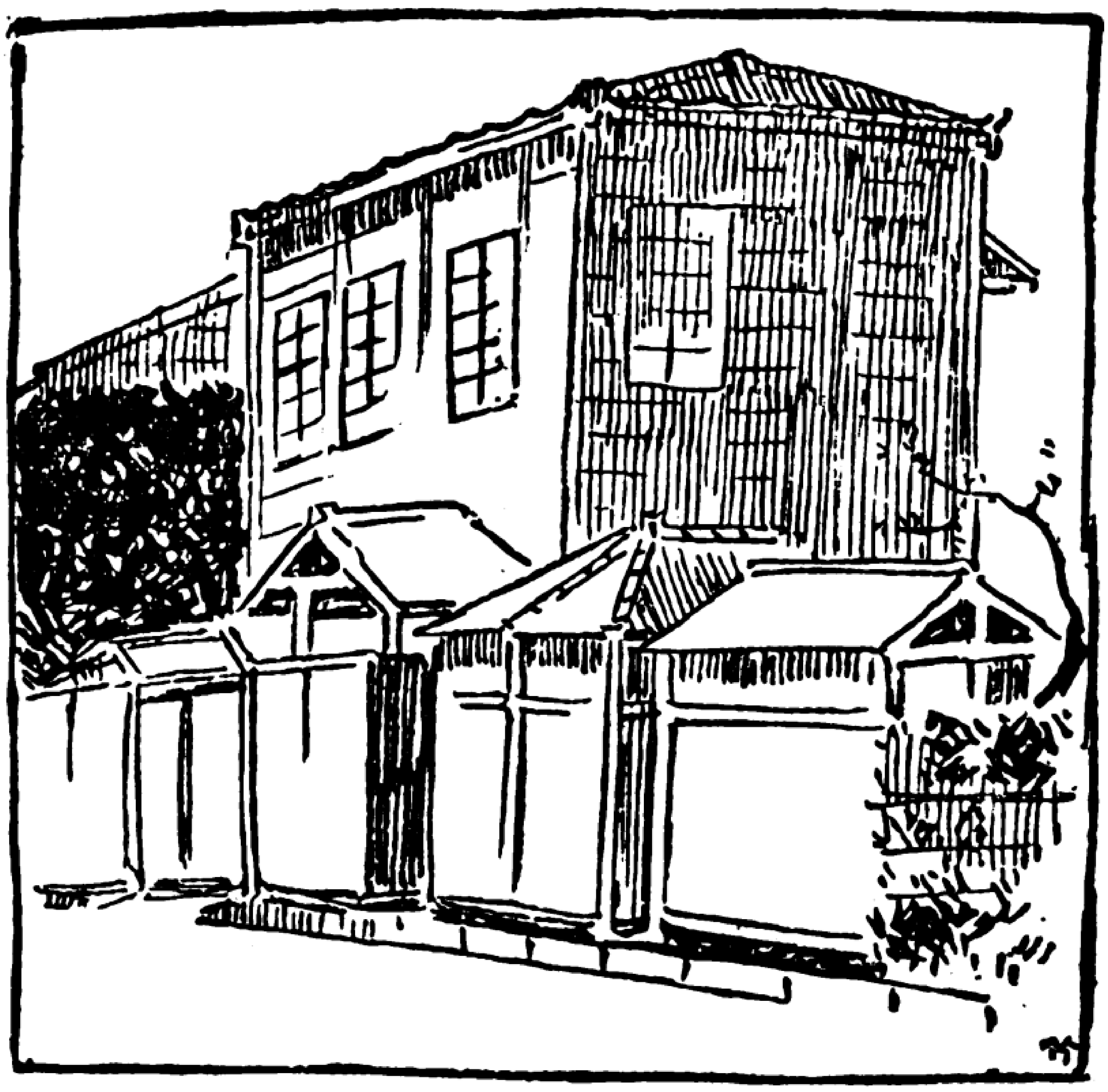
△水曜日。寢具の上被を取換へる日である。元來寢具は、各自に起床の際裏がへして其濕みを冷し、雇人等は自ら整理しなければならぬが、其他は主婦が一切整理するので、毎週この日に其上被を取換へ、垢染みぬ中に洗濯屋へ廻して、清潔にさせる。時に、自分の家で婢僕などに洗濯させる向もないでは無い。尚ほ主婦は午後から、小供の學業成蹟を見る爲め、學校や保姆、家庭教師などから習つたことを目の前で復習させる。音樂教師を雇つて居る家庭では、大抵この日に或る時間を定めて、その稽古をする。

△木曜日。此の日を面會日と定めて、訪問者に應接する。而して最も親しい人々を晩餐に招き、或はオペラや、音樂會に同伴し、尚ほ大抵は今日を擇むで舞踏の會を開く。随つて室内や卓子、椅子などの整理は前日より此の日の午前中にかけて、僕婢の最も注意してしなければならぬ仕事である。

△金曜日。室内の掃除を了り、塵の沈まつた頃、撒水

で雜巾を絞つて、絨氈を拭き清める。恁うすると汚れた絨氈も一見新らしいもの丶やうに、模樣まで鮮かに見えて、誠に心地よいものである。主婦はこの日良人の書齋を掃除する役目で、中々忙しい。

△土曜日。主婦はこの日、洗濯屋が持つて來た衣類其他に目を通し、釦の離れかゝつたのや、既に取れて糸ばかりなるを繕ひ、又た明日の日曜を休む爲めに、必要な仕事を夫れ〲整理し、パンも燒いて置けば、菓子も拵えて置く。尚ほ洗ひものは深い籠に入れて、洗濯屋が取りに來れば直ぐに渡せるやうにして、玄關と臺所の掃除は別して丁寧にして置く。今日も小買物を落ちなくして置いて、主婦は雇人等の給料勘定を濟ませ、其他月曜日の朝迄は差支のないやうに萬事の用意をして、平日よりは一時間位遲く寢室に入る。



櫻井女塾

△日曜日。例日より小一時間も遲く朝餐を始め、了つて家族の祈禱と聖書の研究がある。これは主人が勤め、最後のロードプレヤア（主の祈）だけを家族一同で唱和し、夫れから教會に行つて、讃美歌を謳ひ、說教を聞いて來る。歐米人は斯の如くにして自己の品性を修養するの

で、随つて日本から往つた者などが、私はクリスチヤンで無いからなど〻、この集りに加はるのを潔しとせぬか、よし集りに加はつても讃美歌一つ覺えないと、少しの過失をでも直ぐに摘發されて、即刻解雇されるといふ風で、恁うした雇人は不信用の者として甚だ喜ばれぬ。此日は午餐がディンナアであるから、午前中の外出は許されぬが、午後から夜にかけては主人も雇人も無く、上下を通じて皆が自由の體で、隨分はめをはずして遊び暮らし、前日に貰つた給料を一文殘らず使つてしまうものが多い。

以上の日課の外、冬季暖爐に焚く薪は、毎日主人が運動の爲めに自ら割るので、焚付の外は雇人等が薪割りすることは無い。其他主婦は婢僕を連れて市場へ食料品の買入れに出掛けるし、此等の生活狀態は日本の中流以上の家庭には大いに鑑みるべき點がある。又た日常三食の献立や、招待日の御馳走などは、毎週主婦自らこれを取り定め、月曜日の朝或は土曜日の夜、雇人等に示し置くを例とし、其品書きは家々によつて一樣で無いから、こゝに一々は記さぬが、兎に角、都べてに規律が立つて居るのは、前に列擧した丈けでも承知することが出來やう。日本に生れて、日本に成長し、扨て斯の如く秩序正しい國に來て見ると、最初の一ケ月位は此等の日課が何となく苦痛に感ぜらるゝが、次第に馴れると、忘れたやうに其苦痛が去つて、今度は日課の一つでも等閑にすると、夫れこそ反つて氣がゝりで、苦痛になる位です。社會の萬般が複雜になつてゆくと共に、家庭の仕事も複雜になりゆくのであるから、日本でも家庭の日課を定めて、規律正しくこれを踏む必要があらふとおもひます。

不良少年と家庭

授職所植物園長　山科凌雲

△犯罪の源泉

最近の統計を見ますと、全國在監不良少年の懲治人

は總數七百七十一名で、前年に比較しますと、二百十九名の增加であります。

斯の如く、不良少年の數は年年に增加して、隨つて一般犯罪者の數も多くなつてまゐりますが、其の源泉は全く家庭の如何にあらうと存じます。私は元來十餘年間監獄教悔師の職を奉じて居たもので、其後不良少年の感化と出獄人の保護の爲めに、今の授職所植物園を創立しまして、彼此三年になりますが、其實驗に徵しましても、罪惡は家庭から生るゝことを斷言するに憚りませぬ。

極く無遠慮に申しますと、戰後上中下の社會を通じて、一般に世人の風儀が紊れまして、私通とか離婚とか、乃至夫妻別居とかいふ忌はしい現象が著しく增加し、就中生みの母がありながら、繼母と同棲して苦い、悲しい生活をして居る薄命兒が多くなりました。

一概にも言ませぬが繼母こそ犯罪の源泉に棲む水靈で、不良少年は實に此等の家庭から生るのであります。



淑德女學校

△繼母と不良少年

それでは如何にして繼母が不良少年を生むか——換言すれば繼子は何故に罪惡の恐るべきに近づくかと申しますに、抽象的の說明をする迄も無く適好の實例がありますから左にそれを記すとしませう。

昨年の春のことでした。一人の紳士が私に面會を求

め、連れて來られた一少年を指して、此兒は私の實子でありますが、此頃惡い習慣がついて、兎角家內の衣類諸道具を持出し、それを屑屋などに賣拂つて買食をしてなりません。何んとか矯正する方法は無いものでせうか……と殆んど當惑の態であります。見ますと其少年は、未だ十三四歲の、誠に可愛らしい、那邊かに品格のある、紳士のいはるゝやうに買食などする卑しい者とも思へません。けれども、物恐れする、沈着の無い、上目で人を見る態から察しますと、首肯かるゝ點が無いでもありません。で、段々糺しますと、少年の母親は一兩年前に歿しまして、今居るのは繼母といふことが判りました。

そこで、私は取敢えず其少年を感化して見やうと決心しましたので、早速引取ることを承諾しまして、其日から手許に置いて種々研究しました。

聞けば少年の繼母は、其懲戒に減食制度をとり、少年が些少にても過失すれば直ちに三食を減じ、或は全然一回の食事を與へざることあり、爲めに少年は空腹の餘り、竊かに買食せんとて、家財を持出し、紳士の言ふごとき不都合をしたことをも度々やつたそうで、去るに臨むで紳士は恁う私に注意しました。——お宅には種々玩具類や彼の目をつけさうなものがそこ此所に置いてありますが、私の家などでは昨今何一つ出して置かないやうにしてさへ持出すのですから、もうぞ其邊はお含みおき下さるやう——併し私はこの注意があつたのも拘らず、何一つ藏ひもしませんし、依然舊どほりにして置きましたが、少年は一品たりとも持出しはしませんでした。

此等は全く減食そのものが少年を不良ならしめましたので、夫れゆゑ來たてには誠にガツ〳〵して、三度の食事か待遠しさうでしたが、衞生と規律に害の無い限り、その欲するまゝに任して置きましたら、今では悉皆矯正まして、末賴もしい一少年となりました。

△感化の方法

全體不良少年や出獄人等の性行を善良にしやうとい

ふには、先づ其の腹中に立入つて、根本を治さなければいけません。私はこの方法として、最初彼等の嗜好をたゞし、それによつて矯正感化の方法を講じました。

彼等の多くは其の貌かたちが異るやうに、嗜好も亦千差萬別でありましたが、そが五分の四は演劇を好むことに一致して居りました。此の一事最も彼等の感化に必要の眼目で、何故に彼等が而かく演劇を好むかと申しますと、演劇の多くは變化に富み、波瀾多く、前幕にて乞食同様の姿であつたものも、二幕目乃至三幕目には、堂々一個の美丈夫となり、射倖を夢み、成功を急ぐ彼等には其理想に(?)適するからであります。乃ち彼等の射倖心や、成功を急ぐこゝろが、遂に罪惡を犯すの動機となるので、彼等に善良の感化を與ふるには、此所に意を用ゐて、此の心を矯めねばなりませぬ。

私が其方法として植物栽培の事業を擇びましたのは、取りも直さず、植物は諸所に移植すべからずして、一つ所で培はねばならず、又た花開き果を結ぶには一定の時間と順序があつて、花咲かずして果を結ぶことも無ければ、嫩芽の中から蕾は出ませんから、彼等の動き易い心と、一足飛びに成功しやうといふ考を漸次に消滅させ、物事は順序と時間を經なければ思つたやうになるものでは無いといふ實驗を與へますから、それで此の植物栽培を主として、啻に精神的に於てばかりでは無く、物質的に於ても矯正感化するの要があると存じまして、斯くは此の方法に隨ひましたわけで、今日迄の成績によりますと、頗る良好の結果を見ることが出來ると思ひます。で、ならうことなら、家庭に於て、父兄母姉の方々が、愛子弟妹の教育に、此等の方法を應用して下すつたなら——而して前に述べたやうな忌はしい現象が減じたなら、今日の如く不良少年が多數になることは斷じて無いと存じます。



獨逸の育兒法

清香

この篇は獨乙の家庭雜誌にあたつもので或は日本の御婦人方には適せぬ節も御座いましょうが兎に角育兒には注意した事柄とおもいましてこゝに

乳兒の發育上壯健な母の乳が一番好い事は云はずもがなで御座いますが、その乳離の時は何時がよろしいかと申しますに先づ乳兒に乳齒が三四枚はへかけた時で御座います、尤も母親の乳が惡なかつたとか、又は乳兒の發育がわるい樣な時はこの限ではありません。

そしてこの乳離をするのは、數週間の内に漸次にするもので御座いまして、その間に乳兒には何か食物に馴らして置く必要があります、決して俄にお乳を離す樣なことをしてはいけません、そうすると母親の方にも亦乳兒の方にも乳を離したがために攪擾が起る事はありません、乳を離した婦人は乳の上に綿などい位を溫にして、乳がはつて重くなれば布で高くつり上げるやうにして、鹽氣のない牛酪又はワセリン軟膏などを、堅くなつてる乳まめにつけるのがよいのです、決して刺戟する膏藥などを用ひてはいけません。(日本の田舍なんかへまゐりますと乳を小供にのませないやうにとて唐辛や生姜などを乳まめにつける人を時々見うけますがこれは大なる間違だらうと思ひます)

乳離前後は身體を殊に大切にして熱氣のある時などは御遠慮なく床につく方がよろしいのです、が發汗劑吐下劑などを用ひると害があります。

乳離後は如何なる事情があつても、小兒に母親の乳を飮ませてはなりませぬ、その代り牛乳とか山羊の乳とかを飮ませるのです、そして一番子供によろしいのは、水又は茴香茶で薄くして（砂糖は入れないで）あたゝめ（列氏二六度より二八度迄の温度にて）た牛乳又は山羊の乳で御座います、茴香茶と乳との割合は、茶が⅔、乳が⅓です、この混合物は容易に酸化するものですから、乳兒に飮ませる度毎に一々新しく作らなければなりませせぬ、それから乳を飮ませるには、例の

玻璃製の瓶を用ふればよいのでして、この瓶も吸管も勿論用ひた度に充分清潔に洗つて今度用ひる迄は水中につけて置かなければいけないのです、又この乳を吸ませる際に注意を要しますのは、お乳が俄に澤山口の中に流れ込まぬやうにして胃が急にはらないやうにすることです、又萬事清潔を旨として乳が惡くならないやうに氣をつけねばなりませぬ。

　乳離後二週日もたてば牛乳の量（混合の量）



を段々と多くして二ケ月の末頃には益濃くし四ケ月五ケ月となつて子供が壯健であれば微溫の牛乳（山羊の乳）計りにしてよろしいのです。

　又母乳或は牛乳を乳兒に飮ませるには常に規則正しくする事が發育上大に關係を有するものです、乳を飮ませる時間は一度飮ませてから少なくとも二三時間の猶豫を置かなければなりません（やれ泣いたからやれ笑つたからと云つちや飮ませ

又忙しかつたから半日も飲ませないでゐて、暇になつてから半時も一時間も續け樣に飲ませると云ふ風な不規則なやりかたは勿論大に謹む可き事だろうと思ひます）してこの猶豫を置くと云ふのは前に飲ませた乳が充分に消化してしまう時を待つのでしてもし、前に飲ませたのが半分しか、或は全く消化してゐない時に追つかけて飲ませるのは滋養にならないのみか却て病毒を作るやうなものです、かくの如く規則正しく育て上げられた子供は不規則に慣らされたものより遙に壯健であると云ふ事は爭はれない事て御座いまして、不規則に育てられた子供は稍もすれば乳の飲過のために家族を煩はす事が多いのです。

愈二枚乃至四枚の齒がはへた時――大抵第一年の後半期に――於きましては穀粉類のスープを一日に三度づゝ與へるやうにし、又は粥狀のものを又は肪脂氣のない肉汁を一日に一度位與へる樣にし、小兒が咽の乾いたり、飢を覺えた時には好い牛乳を少し計り飲ませるのが一番適當てあります、その後に於ける食料の事は段々はへて來る齒の順序品質によつて多少の變更して差支は御座いません、第二年目の終頃から漸次堅い食物を與へ、湯水の類を飲ませてよいのです、それから肉類（始めの程は細く截つたもの）パン野菜などは三年目の初期から食べさせるものです、もうこうなりますれば三度の食事は每日屹と定まつた時にさせるのです、しかし凡て食物は軟かに煮たきしたものでして大人と同し樣に藥味などを矢鱈に入れないやうに御注意なさるが必要と存します、パン類は第一年目には決して與へないやうにしないとそれが爲めに體が病的になつて身心共に空しくなる原因となります、處が一度でも味を覺えさせると實際なか〳〵斷念させられないですよ、又多くの子供は塡充的の食事の爲めに身體を損ひ勝であります、これは人がよく注意致すところでは御座いますが、さて實行し又させると云ふ事は六ケ敷ものです、そしてその食物が假りに非常に滋養に富んだものであつても、つめこみ的であると消化する事なく却て害を及ぼしまして少なくとも子供の一生涯を

病的に終らしめるのでありますから充分にどなたも御注意遊されたいものです、要するに小供の食料は、滋養に富み、單純で、無刺激物であつてこれを適當に與へるのが原則でしやう。

コーヒ、茶、チヨコレートを始めその他の揮發性の飮料は小供には全く禁制物であります、勿論これ等は眼に見えて急に體にさわると云ふのではありませぬが必ず漸次に毒がまわつて有望な子供の健康を損ひ、かよわい身體を愚鈍にするものであります。

お話が少しかはりますが赤兒を抱くには四肢が充分に動く樣にするのは必要な事で御座います（私が時々見ますやうに襁布で捲いて捲きあげ丁度まき／＼煎餅のやうにするのは惡いだろうと思ひます）でないと漸次にその害があらはれて或はせむしになつたり或は各部の發達が變則になるのです。

牛乳試驗法

牛乳の良否を試驗するに手數を要せず、無雜作に爲し得る方法を紹介すべし。

一 コップに水を盛り、之に一滴の牛乳を落すべし、かくする時は良き牛乳程沈下すれど、不良のものは其儘散亂して水に混ずるものなり。

一 爪の上に乳の一滴を置いて之を撿すべし、良き乳程玉となりて更に壞れざれど、稀薄なる物は直ちに壞れて垂るゝを見るべし。

一 色によつて識別せよ、其色純白にして稍々黄色を帶び、且つ不透明にして濃厚なれば良乳なり。

一 牛乳をコップに盛りて內側を撿せよ、かくしてグラスに接したる部分が、帶黃靑色に見ゆる者は、稀薄の證なり。

一 飮用のコップに乳を半分程入れたるを、半傾けて急に立直して其色を見よ濃白色にてブツ／＼したる者が多く見ゆる程良質と見て差支なし。

一 牛乳を沸かして見よ、沸騰後上面に白色の膜を生ずるものは、何れも佳良なり。

一 配達を受けたる折に壜の底を撿べよ、其の底清潔なれば乳も良く、又牛乳屋の注意も行屆き居ると見て差支なけれど、萬一壜の底不潔なるを見なば、宜しく牛乳屋に注意してやる可し。

季節 總菜料理

△蕨の酢煮　蕨のゆでたるを、鰹節の出し汁と、醤油とにて煮、おろす前に、酢をさすなりこれは淡泊にして時節柄よき菜なり。

△蕗のから煮　蕗を生のまゝにて、皮をむき、前の如く切り、粉唐辛を加へ、醤油は鍋の中の蕗のひたひたになる程いれて、弱火にて能く〳〵煮込むべし、斯くする時は、何時迄も有つものなり、なほこれを長く有たしめんとするには、皮剝ぎたる蕗を、一日ほど、日に乾して後に煮、出來あがりたるを、壺の類に詰めて目貼りし置くべし、取り出して、つかふ時、かびを生ずれば、更に一寸醤油を加へて煮直し〳〵して、久しくつかふ事を得るなり。

△蓮根の煎豆腐　豆腐二個程鍋にてざつと茹で之を味噌漉杯に揚げ置き、別に小鍋に鰹若くは椎茸にて煮汁を作り置、蓮根の細き所を撰み薄く刻みて醤油、砂糖にて薄く味を着け、右の水を切つたる豆腐を入れ、杓子にて突き崩し掻き混ぜ更に二個程の鷄卵を加へてぬる火に煎り着けるなり。

△たゝみ鰯のいろ〳〵　此たゝみ鰯は醤油をふりかけて焼き食するを常とすれども之を遣ふに酒鹽或はあはせ酢杯をかけて食する杯妙なり、又ほぐして豆腐汁に交せたるもよろし、又二日程水に浸し置けば生のごどくなるこれを獨活杯と薄醤油したぢにて吸物に仕立上に淺草海苔をもみておくなども妙なり。

△烏賊の木の芽拌　烏賊をよく洗ひ骨を去り皮をむき、腸の墨袋を取出しざつと湯煮して（煮過ぐればこはくして老人などに合ざれば半煮へ位がよろし）程よく切り味噌をよき程丸め火にて炙り擂鉢に入れ山椒の芽を加へてよく擂り、右の烏賊をあへるなり、但し味噌堅きときは鰹節の煮汁或は味淋又は酒を少し加ふるもよし。

△土筆のむき味あへ　土筆の袴と穂とを除き一と沸湯煮て苦味を去り、一寸位に切り、又むき蜊を湯煮して之と和し、山椒の芽と味噌とを能く擂り混ぜ酢にて薄

め右の土筆とむき蜊とを投じ能く攪き混るなり。

△季節の椀盛　鮢、竹輪蒲鉾、摘菜、吸口は木の芽とす、偖此調理法は鮢は三枚に卸し、背より四半に切り、鹽を少許散りて湯煮するなり、又竹輪蒲鉾は大きく切り摘菜は湯煮して水に冷し、醤油と鰹節の煮汁をよき鹽梅に仕立つるなり。

△白魚の蕎麥切仕立　蕎麥の粉に水を加へて者く捏ね麵棒にて薄く伸べ庖刀にて長さ一寸、巾二分位に切り、一沸茹るなり、是れ蕎麥切なり、蕎麥切と白魚とを鰹節汁にて味を着ける香料には山椒或は紫蘇を細く切りて出す。

△白魚の三杯酢　白魚に沸騰したる湯をかけ、別に若布を水に浸して柔かになりたるものを刻みて右の白魚に和し、之に酢醤油、砂糖にて鹽梅したる汁を懸けるなり。

△大根の切漬　三月大根を根葉の嫌なく縦長に細かに刻み、鹽にて能く揉み、其の出でたる汁と共に桶に入れ押を懸け置くなり、恐らくは朝用意して晝飯の膳に上し得べし。

△菜飯田樂　菜飯田樂は時候ものにて、一寸風味佳なるものなり、或る地方にては、親近打集ひて花見の小宴を張る時などには缺くべからざるものなり、先づ菜飯のたきやうは蓮華草を採り丁寧に洗ひ一葉づゝ摘み涵したる米に混じ、水加減して焚くなり、又一法は右の菜に沸騰せし湯を懸け能く水を切り、食鹽を見計らいて混じ焚き立の飯を飯櫃にとるときに混じて能く攪き混せるなり、田樂を拵らえんとするには、豆腐屋に絞りたるものを頼みて（地方に依ては固き豆腐あれば、巾八分長さ二寸計に切り竹の串を注意して差し火の上に置き少し焦げたる時木の芽砂糖等を加へたる磨り味噌を不同のなき樣に塗り少し火を加へて味噌の剝げぬやうにして置くなり。

△椎茸の紅梅煮　新の椎茸（生なるは、最も可なり）と、白魚とを酒三分、醤油七分の割合にて、からめに煮るなり、紅梅煮とは色の赤くつく故かくは名づけたるなり。

△鯛のすつぽん煮　大鯛のきりみをよしとす、さて、味淋酒と醬油とを薄めて其中へ、生姜の絞り汁をおとして、煮込むべし。

△鯛の腹子と筍との旨煮　鯛の粒子、袋のまゝに、砕けぬやうに、紙にて卷き、其兩端を固くくゝり、薄鹽の湯にてゆでし後、味淋と醬油とにて煮、これをよきほどに、小口切りにして、皿へ盛るべし、しら子はゆでず、其まゝに煮てよし又筍は、ゆでゝほどよく切り、鯛の腹子を煮たる汁を薄めて、其れにて煮込み、つけ合はすべし、山椒の若芽を、其上に添ふれば、猶よし。

△土筆の鷄卵とぢ　土筆の袴を取り、ざつとゆで、酒と醬油とにて煮、汁はひた／＼にして、おろす前にかき立て、置きたる鷄卵をかけて、一と煮えさするなり。

△切乾の煮しめ　切乾大根を、宜きほどに切り、湯煮し、和らかになりたる時、酒と醬油とをさし、砂糖を少しく加へて煮、さて、油揚を入れて煮込むべし。

△椎茸と長芋との煮しめ　椎茸を水につけ、能くほとびたる時に出だし、大きなるは、二つに切り、酒と醬油と砂糖、又は、味淋と、酒にて、煮、さて後芋をゆでゝ、皮を去り、宜きほどに切りたるを入れて、崩れぬやうに、煮あぐべし。

△莢豌豆と粒椎茸の旨煮　莢豌豆を靑煮にし、粒椎茸は、前の如くして煮それに胡桃をざつとゆで、細き竹串の先にて澁皮を去りこれに、食鹽と、白砂糖とを加へて煮、三種を、四つにつけ合はす時は、靑、黒、白、色どり麗しくして、味はひも亦可なり。

△筍昆布　筍を十分にゆで置き別に菓子昆布を水に浸して、宜き程に切りたるを入れ、鰹節の出し汁にて、能く／＼水煮して、和らかになりたるを、酒と醬油とを加へて能く煮込むなり。

△根芹の油煮　胡麻の油を煮たゝせ、これに、芹の根を入れて炒り、さて後に砂糖少しと、醬油とを加へて炒り、あぐべし、猪口などに用ひてよし。

△筍と鱒の吸物　鱒を三枚に卸し、水にて能く洗

ひ両身に淡く塩をふりて暫く置き、後水氣を去り、之を一重結びに結び、別に筍の湯煮たるものを取り（可成穗の所が可し）軟かなる物を薄く剝みて右の鱚と共に鰹煮汁に入れて一寸と煮て椀に入れ出すなり、吸口には時候柄山椒を可しとす、風味佳なる吸物なり。

△比目魚と筍　比目魚を宜き程に切りて、味淋と、醬油、又は、酒醬油、砂糖の鹽加減よくして煮るべし、さて筍はゆでゝ、輪切りにし、大きは半月形に切り、比目魚を煮たる汁に、湯をさし薄めて、其れにて、能く煮込み、皿に盛る前に、一寸又、魚を暖めてかけ合はすべし。又生姜を繊打ちにして、添ふるもよし。

△比目魚と款冬　比目魚を、前の如くして煮、款冬をゆでゝ皮を剝き、大凡長さ二寸ほどづゝに切りて盛るべし。

△白魚の餡かけ　白魚を、なまのまゝ、鶏卵の白肉と共にかき交せ、葛粉を繫ぎに入れて、一塊づゝにまろくし釜にて蒸しあげ、これを椀に盛り、其上より餡をかくべし、餡のこしらへ方は、鰹節の出し汁の中へ、醬油、少しからめにさして煮置き、其汁にて吉野葛を入れて溶き、文火にて煮かへすべし、濃さはとろりと成る程なるがよし盛りたる上はおろし山葵を載せて出す。

△獨活の芥子和へ　獨活の皮をむき、小口より斜に切り、沸湯にてザッとうで水にあげ、だしと醬油少しでざつと煮、かいた芥子を水にてゆるめ、右の獨活を和へるなり、さて芥子のかき方はまづ芥子を茶碗に入れ、大根の絞り汁少しを加へ、芥子の手につかぬやうになるまでよく手にてまぜ、清潔なる布を掩ふて、其上より五六回も沸湯をそゝぎ入れ、膳の上に三十分間ほど伏せて置くなり。

△ほうれん草のスープ　まづ牛の臑肉一斤に水二タ杓子位入れ、それに切りたる胡蘿蔔を入れ、三時間ほど弱火にて煮、ザッと漉し、別にほうれん草の葉だけうでゝ庖丁にて細かに剝み、擂鉢にてすり、前のスープでのばし、鍋に入れて沸かし、胡椒と鹽にて味をつけ、葛を少し溶きて入れて火より卸すなり。

△あかえの旨煮　まづあかえを小さき賽の目に切り鹽水で洗ひ、沸湯に入れてザッと茹でこぼし、味淋で煮、別に里芋の皮をむき、沸湯にて能く茹で、だしと味淋タップリに砂糖少し加へたる汁にて煮、甘味の十分しみたる頃適宜に醤油をさし右のあかえと一緒に煮るなり。

△黒鯛の鹽燒　黒鯛の切身に鹽を充分ふり一時間ほどたちて洗ひおとし、串をうち、更に薄鹽をふりて燒くなり、附合には新牛蒡のあちやらなどよし、これは牛蒡をごく細かに繊にうち、ザッと茹で水にとり絞りて酢につけ、暫くして絞りあげ砂糖をふりかけて置くなり。

△鰆のつけ燒　鰆の切身をザッと鹽をふり、暫らく置きて、洗ひ落し、醤油に一時間位つけ置き、これに金串をうち、あまり强からぬ火にて燒き、更に一度醤油をつけて燒き皿に取るなり、附合には莢豌豆の青煮などよし、これは莢豌豆を洗ひて鹽をふり、笊にひろげ、沸湯にてザッと茹で、鍋に砂糖を入れ、水少々鹽少々加へて煮立て、その中に右の豌豆を入れてザッと煮、器に取るなり。

△赤貝の酢の物　まづ赤貝を貝より出し、わたを去り、笊に入れて鹽をまぜ、笊をふりながら水をかけよく洗ひ味淋を鍋に入れて沸かし味淋一合に六勺ほどの割合にて酢を入れ、冷めてから鹽少し加へるなり。

△煎り菜　小松菜にても、鶯菜にても、葉ばかりつまみ洗ひて、湯の煮立つたところへ入れ湯煮をするなり、尤もこれは澤山一度にゆでゝは色がわるくなる故幾度にもゆでるのがよし。湯煮をしたときは水へとり、今一度水をとりかへ、絞つて細かにきり、鍋へ胡麻の油を布き、その中で煎りつけ、それへ煮汁五勺、味淋五勺、砂糖十匁を加へ、汁のひた〳〵になるまで煮るなり、これには丼ものにも鳥ソボロをかけて用ゐてもよし、又煮肴、燒肴のつけ合せにしてもよし。





家庭園藝

倭翁

桃の栽培

朝顔を作り、菊花を育て、梅を栽ゑ、櫻を仕立つるなど、その樂は今更云ふに及はす、若し花もあり實も得らるべき盆栽を仕立てたらんには所謂一擧兩得にして如何に嬉しかるべき、勿論從來とて佛手柑、林檎など果物を結はせて誇りとせるもの尠きにあらねど、此等はその花に代へて單に結實を賞翫するまでにて、もと其果實の美味を賞味する目的にあらざればいふに及ばず、されば眞に花もあり實もある實用的盆栽の實例として茲に桃と梅の栽培を紹介すべし。

△假植　桃を盆栽に培養せんとするには、先づ晩秋十一月の落葉後より翌年二月中旬頃までの間に苗を購ひ、その儘にて假植をして置き、二月下旬に至りて剪枝、截根して盆栽となすなり。

△苗木　芽接と切接との別あり、成るべくは芽接を良しとす、芽接ならばその前年接ぎのものを撰み、切接ならば當年の春接を採るべし。

△剪枝　何れも接目より一尺五六寸の高さに其幹を截り、枝は最上部にあるものを一寸位とし、漸次五分、一寸位づゝ長く圓錐形に剪定するものとす。

△截根　太き根は短く、細根は太き根より少しく長く先端を截りつめ、新根俗に云ふ所の白根はその儘に置き、全体にて鉢の内部の太さより二三分少さく切り詰むべし。

△植土　豫め粘土質壤土に過燐酸二分位混じたるものにて作り置くものとす。

△鉢　鈍圓形にて口徑六七寸大のものを適度とす。

△植方　苗木の接目の土隱れざるやう、鉢の上縁より二三分低く土を盛るべし、その鉢と鉢との間は約二尺を隔てゝ、南面して日當りよき所に排列しおくを要す。

△施肥　肥料は根つきたる頃、植付より凡そ二週間の後に於て、人糞又は油粕の腐熟したるものへ水三四倍混じて一回施すべし、是れ大切なり、其他は結實まで一切施肥することなし。

△灌水　もと乾燥し易きを以て水は十分に與ふるを要す、併し八月のみはその量を半減すべし、これは大切の事なれば忘るべからず、九月より落葉までは又元の如く十分に與ふべし、その落葉後は非常に乾燥するにあらざれば自然に放任してよし。

△防蟲　あぶら蟲、髄虫にかゝり易きゆゑ注意して最初に取除くとを怠るべからず。

△防寒　落葉後より翌年二月下旬まで鉢面を地平と同じ位置に土中

に埋め置くべし。

△二年目の手當　先づ前年の通り新枝を剪定し樹形も同じく圓錐形に仕立つ、新枝は三寸より五寸位の間に整理し樹枝を不平均なからしむべし、初年と異り花芽を有ち居る枝あるを以て剪定にはよく注意すべし、三月になりて埋め置きたるを採り出し北を塞ぎ南を開けて日當りよき處に排列すべし。

△開花　開花期に至れば好天氣の日、幹に近き枝にある花の最初に咲きたるものは成るべく人工媒助を施すをよしとす、幹に近きは往々落實する恐れあれども止まれば果形大に發育して見事なり、初年植付から云へば二年目に多く實を結ばしむるは悪し、一枝に二三乃至四五顆に止むるを肝要とす。

△防虫　蟻の産卵の爲に襲來するものなれども早熟には其害少し、たゞヘプリ虫の種類が果液を吸取る恐れあるを以て、新聞紙にて防虫袋を製し、五月下旬頃、果實が梅子位に發育せし頃、袋の口を果梗と枝との所へ括り着けて、糸にて結び置くをよしとす。

△灌水　前年に異ならず、結果中は特に多量に施すべし。

△施肥　熟果採取前最も多量に行ふべし、油粕の腐熟せるがよし、其他魚のくさらしたるもの、人糞等何れもよし。

△採果　七月上旬に至らば成熟して採果し得るなり、神田の青物市場にて六月下旬より七月上旬の走りは、「アムステルレ」「アーリーリバース」、及び早生水密桃、傳次水密桃等の熟果は一個十錢以上の市價を有し、盆栽相場一圓五拾錢乃至貳圓なりと。

△移植　八月以後は前年の通り取扱ひ、三年目の春に至り拔き取り鬚根の上、徑約一尺大の鉢へ移植するものとす。

大要前に述べたる如くなれば假に素人にても栽培難からず、自家用料として二三鉢なりとも試みらるべし。

苺の栽培

家庭園藝も盆栽と同じく趣味深きものなれば、第一に勧むるは苺の栽培なり、苺の我國へ傳來せしは何れの時代なりしか明らかならざれども、普通和蘭苺の名ある所より考ふるも德川時代なるべきか、その維新後にては北海道開拓使試驗場の栽培が嚆矢にて、當時該試驗場より歐米輸入の種苗を各地方へ配附せしとあり、爾來年を經るに從ひ漸く栽培を試むるもの多く、遂に今日の如く季節に至れば八百屋の店頭を賑はすに至る、而も未だ歐米諸國の如く大いに供給し大いに需用せらるゝに至らず、外國に在りては一個人にて百町歩を栽培せるもの敢て珍らしからず、取分け米國にては一個人にして培作一千町歩以上に及ぶものありと。

元來此物は土地を撰はず栽培も又容易なれば、住居の周圍に幾分の空地あらばその傍へ多少とも植へおかんには、春夏の頃朝夕新鮮なる美果を得て家庭團欒の樂みを助くべし、若し又庭に餘地のなき時は直徑五七寸の植木鉢に試培するもよし。

△苺の種類　四季苺と大苺との別あり、▲▲▲四季苺と云ふは四月より十一月まで漸次開花して果を結び春秋二季に最も多く熟す、白色と赤色との別あり、されどこれはその果の小さきを以て廣く栽培されず、就中ラージ、レッド、アルパイン種は果梗直立して穗狀をなし結實のとき見事なれば多く花壇の縁取に栽す、▲▲大苺は通常苺と稱するものにて就中ローヤル、ソペレン種は早生にして而も果實の大なる良種とす、又レーチスト、オブ、オール種は晚生中の最良種にして風味優等なり。

△栽培地　もと氣候土質を擇ばず、砂地粘土に係らず成育すれども殊に上層深き砂質の壤土、成るべく肥沃なる土地にて溫暖なる場所をよしとす、畑地は豫め深く耕し土塊を碎きて、刈草、堆肥等を鋤込み置くべし。

△肥料　堆肥、人糞、油粕類の腐熟せしものを用ゆ、之に過燐酸石灰木灰等を加ふれば頗るよろし。

△種苗　實生と匐枝とあり、▲▲實生は果實より仕立つるものにて、▲匐枝は母株より採るものなり、さて夏季に至れば母株より長き糸狀の莖即ち匐枝を出しその末端に一節を生じ其處より葉及び根を出して各獨立の新株となる、斯くて一株の母體より多きは數十株の新株を生ずるに至る、然し良苗を得んには最初の莖より出でたる數本を殘して其他を切去り成るべく新株を肥大ならしむるを要す。

△移植　夏八月より翌年三月までは差支なし、八九月頃新株の稍發育せる時をよしとす、成るべく早く植へかへ新根を年内に生ぜしむるを利とす、遲くなれば寒氣の爲めに根の發育充分ならず、但し餘り早ければ炎暑の爲め枯死する恐れあるを以て注意すべし、素人の栽培にて安全なるは先づ九月中旬より十月末迄なるべし、實生は面倒なれば新株に限る、確實なる種苗商より買ひ取るが得策なり。

△植方　曇天の日、殊に驟雨前後がよろし、畦巾一尺五寸乃至二尺位の距離に植溝を切り、七八寸乃至一尺の間隔に一本づゝ植うべし、新根を損せず、深植せず、長き根は適宜に截根すべし。

△施肥　翌年開花前に一寸中耕を行ひ、稀薄なる人糞の如きものを施すべし。

△結果　花を開き實を結び少し赤らむ前に株の兩側の畦間に藁を敷きて、豫め果實の雨露の爲に汚損腐敗せざるやう防ぐべし、四月中旬より開花し五月中旬頃に成熟せるものより順次摘み取るものとす。

△手入　結實が止まらば盛に匐枝を出すゆゑ、適宜に繁殖せしめ、若しその必要なきときは出づるに從つて截取り母株いよはらぬやう保護すべし、栽植の後二年目は結實最も多く、三年後よりは大に衰ふものなり。

△盆栽　新株を秋季に口徑六七寸の鉢へ移植し、冬季に至るまで肥培して鉢にて十分仕立つるにあり、植土は粘土と腐敗土とを混じ砂と過燐酸石灰、油粕、木灰等少量を加へ、排水よき鉢を撰ぶべし、斯くて日當りよき暖庭へ地上一尺位の床樣のものを作り、防寒の爲め藁又は板にて周圍をかこひ、殊に蓆苫の類にて斜に北面を覆ひ、南向を開

き置くをよしとすれど、夜中又は雨天には雨をも覆ふべし、次で適宜に灌水を誤らざれば、普通畑地の採取が五月なれば盆栽は四月頃より採取せらるべし。

もと草木植物なるを以て結實早く本年秋季に苗を植へ置かば翌年春より收穫あり、殊に他の果物に先つて熟し五月中旬より、既に多漿甘味の美果を味ふを得べし、而して其用途も廣く、生食の外ジャム、セリーに製し又苺酒、苺水等を造るべし。

△製法　苺を水にて洗ひ蒂を取去り、ザラメ砂糖を混ぜ、底の厚き瀬戸引鍋又は行平に入れて煮つむればジャムを製し得べし、其割合は蒂を除けたもの六十匁に砂糖四十匁とす、砂糖は一度に入れずして初め半分を鍋に入れて緩るき火にて煮、苺の水液も煮へて砂糖の融けたる頃、更に殘りの半分を入れて煮ながら靜に匙にて攪拌し、浮上る泡を匙にて掬ひ取り、三十分乃至一時間にて出來べし、此の製法は苺の果形はその儘にて液汁は濁らず殆んど透明にて極上等品を得べし、永久に貯藏するには鑵詰となすなり、その普通なるは苺と砂糖とを等分に鍋に入れ蓋をして煮立て木杓子にてかきまぜ、後ち裏漉にして用ゆ。

規律生活

一體日本人は萬事に規律が無い、是れ實に日本人の歐米人に劣る處ろ適實なる一例である、歐米人は毎週一回一月の休養日を定め、此の日は竈の下さいも炊かぬ位にして食事も冷物で間に合せる樣にして居る、クリスマスを始め其他の祭日は一年中數回あるが、この祭日には全く安息して精神の休養を計つてゐる、然るに日本人は官省とか會社とかに形式的の日曜日はあるけれども一般の社會は年中打通して休息の日といふものがない、勿論平日精神や肉體を勞すること歐米人ほどに烈しくはないけれども休む時がない爲めに疲勞を招くことは遙かに多い、偶々休むやうな事があれば今日休日だといつて直ぐに牛飲、馬食、若しくは平素に反して急に過度の運動といふ樣なわけで休息が却て非休となり、其の結果は休まざるに劣つた非衛生的になるのである。

麥食の必要と其効能

醫學博士 男爵　高木兼寛

今回新たに發明されし「よばし麥」の効用並に一般麥飯の必要に就て高木男爵の説を得たれば其の大要を掲ぐ。

（前畧）麥飯と云ふことに就いて御話を申上げやう。

麥が何故に良いかと申せば偏に此中に含有致して居る滋養成分の分量に依ることである、米は外觀の美なる特色があるに拘らず、何故に麥を勸めて米を多く用いざるやうに主張するかと云へば、米は白米であれば比較的に身體の強壯を持する上に於て必要なる滋養成分が少ない、同時に其價は如何かと申せば、即ち米の價は麥の二倍である、而して其中に含める滋養分の價はどうかと云ふと、米一升の價と麥五合の價と同一である即ち倍の價格を拂つて之を求め、食用に供すれば米の外倘牛肉に致せば三十目位づゝを副食に供せされば麥のみを食するだけの滋養成分を得ることは出來ないのである。是は聊かのやうに見えますか存じませんが私の考で見ますと中々聊かのものでない、一圓で濟む所へ二圓の金を使はなければならんと云ふことになる、それだけ使つた上に倘副食に牛肉を副へて食料に供せなければ身體の健康を保つに不充分なりと云ふ譯であります、此をよく研究したならば實に馬鹿〳〵しい話である、不經濟である、我同胞は毎日三度三度〳〵此の馬鹿〳〵しき不經濟を繰り返しながら、平然としておる。

私が十分に麥食を實行しなければならんと云ふ決心を致したのは明治十五年で、十七年に至り始めて之を實行することが出來るやうになつたのであります、是迄日本に於て麥を病の豫防として使用したる例を申し上ければ、舊幕時代より江戸及び大阪等に於ける大なる商業家の中にあつては夏の間麥飯を供して脚氣病の豫防に備へたものであります。

明治十三年には内務省に於て日本全國の囚徒が獄内に居つて別段其時分迄は勞働等も未だ規則正しく出來てない場合でありまして、徒に飲食をして居る所から

當事者がどうも彼等に米飯を供給すると云ふことは勿體ない、彼等は罪人である、罪人であるから食物も劣等なものを與へた方が宜からうと云ふやうな考を持せらるゝ所から、明治十三年下半期から全國の囚徒に對麥を六分米四分の割合で供給せらることに制定されたのであります、此時迄各監獄の脚氣病其他が甚だ多數でありました、所が六分四分に米麥混合食を與へることになつた後は頓に脚氣病及び其他の病氣は減少致したのであります。

此事を始めて聞きつけた大阪鎭臺の軍醫長が自分の方でも食はして見たいと云ふので明治十七年十一月、始めて大阪師團の方に麥飯を七分三分の割合で供給された、其結果は頗る好良で、其迄に絶へず出た脚氣病の數が非常に減少した、是が陸軍に於ける麥飯を用いた初めであります。(中略)

そこで是迄麥も種々に製造され販賣を試みられました、今日迄大體に於て丸麥と引割と「ヨバシ麥」と斯うなつて居ります。

丸麥を其儘在來の習慣通りで調理致して食用に供することは不便な點があります、數時間之を煮て多量の水を以て洗い、然る後米と煮ることになりますから、之に伴ふ煩勞經費が甚だ多い譯ですから、食して味が好いと云ふ說はあれども、經濟上避けた方が宜からうと信じます、さて麥を使用することになりますと婢僕の受けが惡いので皆樣之に辟易なされる、主人並に其配偶者等は成るべく實行したいと云ふ考を以て試みられても、婢僕が中々不承知を申すので致方がない、何か吝なことでもするやうな風に云ふて女中等が居附かぬからどうも仕方がない、斯う云ふことを御仰しやる方が多いのであります。(中略)

どうしても麥食に依らなければならぬと云ふ決心を以て御實行になれば、遠からずして家族中變化して參る、又人が來た時には麥飯などは無禮であると云ふお方がありますが、私の宅に於ては明治十八年以降白い御飯を人樣に上げたことはない、何時でもどんな祝事があつても遠方から珍客があつても麥飯以外を差上げ

ることはない、何故かと言へば自から信ずる所は白い御飯を上げればお客に惡いと信ずる、外觀は立派だが之を差上げれば人の爲めに害になると知つて居るからお客樣だからと云つて知らぬ振りをして待遇をすると云ふことは出來ませぬから麥飯を上げますが、大抵皆喜んで召上ります、二杯も三杯も重ねてお上りなさる。麥はどの位お入れになりました、好く出來て居ります。宅でやつて見るとどうもグシャ〳〵したりして旨く出來ませんが是は妙だと云ふのでお上りになります、長い間焚きますと飯を焚くものが段々覺へて口に適ふやうに焚き上げることが出來るやうになりますが、其研究をせずに唯麥飯を焚けと云ふのでやるとどうも旨くない、遂に人々が厭がつて之を廢することになります。

　此から新案の「ヨパシ麥」に付いて私が實驗したことを申します、此麥はどうであるかと云ふと精白げて即ち搗いて、よく洗い蒸して乾燥したもので、之を二三時間の間水に浸して置くと自然と開けるそれを米と共に炊くと云ふ順序になるのであります、是はドナタも御承知と思ひます、斯樣にして見た所が出來榮へがどうかと云へば第一に多く殖へる。

　是迄多く世人が使用し來つた引割麥、又其他櫻麥とかヘラ麥とか云ふものがございますが是等の麥は殖へることが誠に少ない、引割麥と「ヨパシ麥」と、比較致しますと「ヨパシ麥」の方が遙かに殖へる頗る殖へる二倍以上に增加する之に依つて一般の人が受ける所はどうかと言へば嵩が非常に殖へると云ふことで中々受けが宜いかと思ひます、是は嵩の殖へる殖へぬと云ふ方から申します、第二には食して味がどうかと云ふと味も頗る好い、それから良いことは「ヨパシ麥」の中に石のチッとも混じつてないことであります、引割麥は引割る時に業を容易ならしめんが爲砂の類を用ゆると見へます、其爲めに石が混入して居りますから食する時に石を嚙んで齒を損じ迷惑を感ずる方が多かつたのであります、然るに「ヨパシ麥」は頓と石が這入つて居ることはございませぬ、尙「ヨパシ麥」が便宜なることは引割麥は矢張洗はなければなりませぬが、「ヨパ

シ麥」は洗ふと云ふ必要がございませんから是又經濟と言はなければならぬ。

故に何の方面から見ましても今日の所では先づ「ヨバシ麥」を一般に用ゆる方が最も自分には宜からうと信じて居ります。

私は「ヨバシ麥」……この一番良い麥を廣く多くの人が用ゆるやうに致したいと思ふ然し是非共コレに限つた譯ではございませぬ、引割も宜い、丸麥も宜い、兎に角麥を米に混入して用ふることは帝國人口の增殖と共に必要であります、食ふ米は日本ので足らないから外國から買なければならぬ、倘五十萬餘の人が年々增しますから、それは毎年米を食つて往ませば米を多額に外國より買はなければ養へませぬから、成るべく麥食を奬勵することは我國家の生存上極めて必要であります。

「よばし麥」は此儘二三時間水中に浸して置けば自然に開らけるそこで直に御飯に炊ける若し朝お炊きになるなら晩から漬けて置けば極く良い加減になる。

「よばし麥」は何時まで貯藏して置いても黴が生えたり變味することは決してありません値段は時に高下あるも當時

一升	十二錢五厘	一圓に八升三合
一斗	一圓二十錢	一俵(四斗入以)四圓七十錢

▲豆と野菜の効用

▲豆類は一般に不消化物なれども其成分中には乾酪素と名づくる窒素分の多量を含み又澱粉及び脂肪を存し鑛質成分も亦少なからず其滋養質に富む事大に他の食品に超ゆるものなり、此れの製品たる豆腐は消化し易く滋養の効亦著明なれども夏期は腐敗し易を以てよく注意すべきなり、又豆類は蛋白質に富みて澱粉少く粉類は澱粉に富みて蛋白の量少なきを以て之れを併せ用ゆれば大に利あり。

△菜類は一般に滋養分には乏しけれども、少量の蛋白質、澱粉、糖、酸類及び多量の水分を含む故に欠くべからざる食品なり壞血病、即ち血液に必要なる鑛物質を欠くによりて發する病は宜しく此類の食物を交へ用ふるときは該病を防ぐを得可し、且野菜の淡泊なる味は之を濃厚なる肉類に添加して人の嗜好に適し、又其鹽漬、酢漬等は乳酸といへる酸を含有せる故に消化を助くるものなり、但し野菜類中馬鈴薯は比較的消化し易くして滋養品なり。

愛情の冷却と同情



沼田笠峰

多年相思の愛人を棄てゝ、冷やかな金銭勲章と若干の年金とに嫁する婦人、その心事の酷薄陋劣なのは、禽獣に比べても尚慊りないやうに思はれます。併しながらこれに反して、美しい戀のためには、すべての名譽も財産も抛つて顧みない、否、生命を捧げてさへも何の惜しむ所がない、といふ位に、互に深く愛し合つたものが、結婚後まだやう〳〵一年か二年と經たぬ間に、早くも當初の温かな心がさめ衰へ、遂にはよしなきことから不和を生ずるやうな例も、世には決して少なくはありますまい。孰れにしても、はかないものは婦人の境遇ではありませんか。

人の妻となッたものが、第一に願ふところは、良人の限りなき愛、圓滿なる家庭の平和でありませう。いかに美服を身に纏ひ、幾多の金銀珠玉を蓄へましても、もし良人の愛が得られなかッたならば、婦人の胸中はいかばかり落寞悲愁の思ひに擾き亂されることでありませう。實に、婦人が唯一の幸福とし、最大の慰藉とするものは、愛を措いて他にないのであります。然るに、この最重最大なる愛が、往々にして早くから失はれ、かよわい女の運命に、われと我が身を歎かねばならぬものゝ多いのには、果していかなる理由が然らしめるのでありませうか。

これを婦人の側から見ましたならば、男子の冷酷無情を、あくまでも責めなければならぬ、と思はれるでありませう。まこと男子は、婦人に比べますと、愛の力が足りないのかも知れません。昔から屢々證據立てられたやうに、婦人は愛を以て生命として居りますが、男子に取つては、愛は人生の一部分に過ぎないのですから。

青春の血に燃ゆる頃には、すべての希望と精力とを戀に捧げ、この戀が完うせられなければ、生きながらへる甲斐もない、と全力をこれに傾注したものも、一たび蜜のやうな戀を味はうて、心に望むほどのものを得た以上は、もはやそれを以て永く滿足して居ることが出來ないのです。人の欲望は、かぎりなく進歩するもので、殊に年齢と境遇との如何によつて、その對象が次第に變つて來るのであります。

やさしい妻の愛情を浴びては、いかなる男子も、必ずこれに對する溫かい心を抱き、互に相俟つて圓滿なる家庭を構成するのですが、この際男子は、家庭の愛ばかりに引かされて、その社會的活動を中止することは出來ないのです。否、愛を得た上は、更に他の或るものを得やうとして、大なる活動を試みなければ已まないのであります。これが即ち、男子の社會に貢獻する事業なのであります。すでに男子の精力が、家庭以外の事業に集注した後には、もはや結婚當時のやうな、春の野の芳香に醉うたやうな若々しい愛情を、妻に向つて注ぐことが出來ないであらうと思ひます。從つて妻は、さも良人の愛情が冷却し去つたかのやうに心得て、ひとり悲愁に沈む場合が起るのであります。かやうな境遇に身を處いた婦人は、良人の無情を恨むべきか、將たまたこれが正當の解釋を、他に求むべきでせうか。

もとより夫婦の間には、とこしなへに愛情がなければなりません。併し愛情には、少なくとも二つの方面があると思はれます。即ち、主に感情の上から見た愛情と、よほど知力を加味した同情とがあります。前者は、たゞもう可愛い〳〵と思ふので、時によると、義理や四圍の事情を沒却してまでも、ひたすら蜜のやうな甘い快樂に醉はうとするのであります。然るに後者は、愛情に知識の分子が加はつてゐますから、相互の知識の程度や、志望や氣質やが、十分了解された上で生ずるのです。從つてこれは、容易に衰へることはありません。それですから、たとへ若々しい一時的愛情が冷めましても、この知力的同情さへ保たれますれば、

夫婦の心情は何時までも和合して、幸福な家庭の中に、大なる慰藉と激勵を見出すことが出來るのであります。

世の婦人たちが、春の野のかげろふのやうな、極めて感情的な愛ばかりを望んで、それを何時までも家庭に要求しましたならば、恐らくは大なる失意の境に陷いるであらうと、私は思ひます。良人の事業に對しては、熱心なる同情を以てこれを助長し、而もその裡に幾多の希望を見出すやうに勉める時には、自らしんみりとした情合が生じて、一種の新たなる生涯に入つた心持ちがするであらうと信じます。斯くして婦人は、單に一家の内部を治めるばかりではなく、良人の事業を通じて、大いなる社會的貢獻をなすものと言はねばなりますまい。



家政を掌ることは巧みで、温順貞淑の徳を兼ね備へながら、一家の平和と幸福とを齎し得ない婦人が、今もなを世に往往あるのは、知力的同情の何たるかを解しないからではありますまいか。なるほど裁縫や料理法には通じて居ませう、舅姑に仕へてもしとやかでありませう、子女を育てる法にも心得が深いでせう、けれども良人の希望や事業に對して、少しも與り知るところが無かつたならば、その間に溫かい同情が通ひませんから、何となく夫婦の間に、物足りない感じが起

り、延いては家庭の中に冷やかな空氣が漂ふのでありま す。斯やうな場合に立ち至りますと、妻たるものは、ひたすら良人の愛情が冷却し去つたものと考へて、憂鬱の感に堪へられなくなるのでありませう。併しその原因を探りますと、上にも述べましたやうに、男子は家庭以外の活動の天地で奮闘して居るのに、妻がこれを慰め勵ます術を知らないからであります。それですから、單に家計を處理し、子女の教育に當るばかりでは、未だ眞の良妻賢母と稱することが出來ない、なほ數歩を進めて、良人の境遇や事業を、大畧ながらも了解して、これに同情を表し得るだけの知識がなければならぬ、と私は考へるのであります。

こゝに、誤解を避けるために申し添へておきたいことがあります。元來知識の判斷は、感情に比べますと、よほど冷やかなものですから、知識を加味した同情が何となく沈んで感じられるのは、申すまでもないことであります。それ故に、家庭を壯快ならしめるには、時々この冷やかな知力的同情が、暖かい愛の光に包まれなければなりません。即ち、晩餐後の一家團欒の席上、さてはまた家族手を携へて、近き郊外に散策を試みる際などには、恰も子供の昔のあどけなさに立ち返つたかのやうに、或は新婚當時の樂しさを繰り返すやうに、なるべく若々しい情を以て對しなければなりません、家庭の娯樂といふのは、これ等を指すのであらうと思はれます。而して家庭を愉快なる場所たらしめむがために、その娯樂の法をはかるのも、また婦人の任務の一つではありませんか。

温かい愛情！　これは家庭を平和ならしめる源泉です。人の心に希望と奮勵とを與へる根底です。從つてそれは、永遠でなければなりませぬ、高潔でなければなりませぬ。然るにこれを狹義に解して、ひたすら情熱の方面にばかり偏しますと、或は悲しむべき運命に弄ばれないとも限りません。世の婦人たちが、この點に深く思をめぐらされて、知識的修養に努められると同時に、其偉大なる感化の勢力を、良人の事業を通じて、廣く社會に及ぼす樣に心掛られんことを望みます。

主婦の機轉

日本人の見る處ろで、西洋人は多く肉食をする樣に思へど、實際は然らず、毎日一度は肉食なれど二度は多いと云ふ位ゐにて、上流の人は二度、通常人は一度、即ち中食が肉なれば夜食は魚、鷄卵位のもので、西洋人の常食物は朝はベイコン、ハム、鷄卵、ソーセーヂパン、牛乳、其他茶、珈琲類、又小兒には燕麥の粥の如き輕くして淡泊なるものを食はす、殊にベーコンは上貴人より下貧民に至るまで食はねばならぬといふほどにて、まづ日曜日の午餐には骨附の牛肉か羊肉又は鷄肉へ、馬鈴薯、莢豆、其他二三種の野菜を交へて調理し、是れに魚肉か、スープの内の一種を加ふ、晩食は下女を休ませる爲め、コールミートに珈琲位にて客來ありても別段に馳走はせず、又日曜を除きて他の日は午飯にはコール、ミートに麵包或は前夜の殘物にて別に新らしく調理せず、食事を樂しく濟す。月曜日には前日の殘肉をコールミートとかサラドとかにして用ゆ、又よき處にてはこれを下の食として上の食を新らしくするなり、火曜日には又其殘肉をスチウにするとか、器械で粉碎し鷄卵其他の物を混せ、料理にする、四日目にはマットンを付けるか又は魚類を購ふとかするなれど、魚肉は高價にして食用する人は少し、まづ毎日の食事は以上のごとし、若し親しき友の來る事あれば晩餐にはスープ、又は魚肉牛肉を用ゐ、出來る丈け種々の御馳走をするなり、而して彼の地にては燕席、來客の時のみでなく、家族丈にても食事の時間は正しく毎日恐らく五分とは違はず、唯朝飯丈は時間を定めずして八時より九時、若しくは七時より七時半とかいふ風に成り居れり。前述の如く普通の處にては決して我國人の想像する如く所謂西洋料理を食し居るにはあらざれど、唯食卓を美麗にし、花などを挿し、又器物の色などもよく食物に配合する樣にして家内むつまじく心持よく食事をするなり、即ち是等の事はすべて主婦の機轉にあるなり、又酒類はビール、葡萄酒等にて彼地の婦人は日本の婦人よりも飲酒するもの多き樣なり、而して酒は主人に屬するものとして一々主人が出し入をするなり、若しこれを出し放にする樣の事あれば召使に對して甚だ不親切となし、この種の不注意を痛く責むるの風習なり。大略この如き有樣を日本の風に比すれば、タトヘ食料品の程度は高しとも一家の經濟は豫想外に超過する事なし。

女流畫家　博覽會出品の評

さくら生

今回東京勸業博覽會へ出品された婦人の繪畫は、割合に澤山でしたが、嚴格な鑑査の結果、西洋畫では僅かに三人で四點丈け出品を許可されたのです。日本繪の方でも漸やく廿點位なものです。今西洋畫の部から一々感じましたまゝの下馬評を試みますと、

前記三人の中足助恒子女史と會津周子女史とは油繪を各一枚づゝに吉田ふじを女史は水彩畫の風景を二枚出品して居られます。

●●●吉田ふじを女史の「ベニス」と題する景色畫は先年旅行中伊太利の空蒼く水清き「ベニス」の水市を優しい筆振りで寫されたものです、着筆は穩當で色彩も善く整ひ、美事な作です、觀る者は不知不識畫中の人となつて伊太利に遊ぶ思が致ます、一寸難を申しますと空の色が少々暗いやうです。(陳列番號七九)

次に「アルカザルの庭」もなか〳〵美事な出來です、色が少々生つぽいのはまだお修業中のことゝて致し方もございませんが、圖中に直射した光線の工合は誠に結構です。幾枚か有る水彩畫の出品中、堂々たる男子の作と比べて一歩たりとも遜色の見えないのは大いに御婦人連のお鼻が高い次第です(七八)

●●●足助恒子女史の「村娘」は一寸見て何んと美しい仇氣ない表情だろうと思はず見惚れるのです、唯だ人物の形に不確實な點があるやうです。娘が背負つた籠なども稍々畫き足りないやうに思はれます。だが人物をこれ丈けに畫けるお方は日本中他にはあるまいと私はお譽め申ます。「死んだ本家のお花坊に善う似とるのう」と赤毛布のお爺さんが相手のお婆さんへの述懷。(六四)

●●●會津周子女史「風景」これは小川に沿ふて建つ壞かゝつた煉瓦の藏に美しい日影が射して、その赤く輝いた煉瓦の色と蒼い空とが、前方を流れる靜かな水に映つて居る、極めて鮮麗な、所謂繪のやうな景色を寫したものです。色彩の調子も明るく感じの善い繪です。遠距離から見ますと細かに寫してあるやうに見えて、割合に着筆の大膽なのは御婦人方の作には珍らしい位です。(五〇)

以上は女流三家の略評に止まりますが世間往々意氣地のないものとして女子を觀察し、殊に藝術家としての婦人の立脚地を危む人が有るやうですが、そんな方々は、先づ宜しく美術館へ行つて、あのお手際を拜見しての後徐に口をお開きになるのが當然かと存じます。と申したらば、それでは美術館にあるものは何れでも、立派な作かと申しますと、決してさうではないのです。數多い中でも情實に驅られて無理に出品させた日本畫の中には、隨分亂暴なものも見當ります。偖て日本畫の方をお紹介致しますと、

●●●榊原蕉園女史の「花の陰」は櫻樹の下に花見姿の美人が懷中鏡を取り出してお化粧をして居る圖ですが、圖の構へ方も描線もよう整ひ美

術館中多く人目を惹くものゝ一です、色彩に光澤がなく浮立たないのは瑕璉とでも申しませう（一四）。女史には別に「吾等のたま」と題する圖があります、姉妹らしい三人の中一番の姉が小猫を兩手で持つて居ますと、末の妹が自分のミルクの管を猫に與へやうとして居る繪です。人物に表情があつてよく活動して居ます。着物の模樣なども別に難はありません（三〇）

●●●●石川蕉玉女史「春の日」島田に結つた美人が散り來る花を金地の扇子に受けて居る圖ですが、人物に生氣がなく、顔も煤けて美しいと云ふ感じが薄いやうです。繪の上部から垂下つた糸のやうな櫻の枝は態とらしく、面白味がありません（十五）

●●●●三浦永園女史「孝婦養姑の圖」これはまた殆んどお話にならない繪です。繪の組立と云ひ畫方と云ひ、見るに堪えないこんなものを出品するとは、寧ろ鑑査官の過ちでせう。（六七）

●●●●中山彩畝女史「孔雀放光」刺繍のやうな繪です、剝製の孔雀でも前に置いて寫生をしたものと見えます、繪としての趣味は欠けて居ます。二片三片飛んで居る櫻の花瓣は全く無意味です。（未詳）



●●●●村田紫園女史「青海波」舞曲から取つた畫題ですが人物の活動の態を寫さうとして、局部の着筆に用意が足りない爲め、作り附の人形のやうになつて仕舞つたのです、色彩のみ徒らに深く調子も整ふて居ません。（七四）

●●●●池上緑畝女史「秋雨」敗荷の下に水禽を三羽窮屈さうに集めたものです。敎へて貰つたまゝを描たと云ふ樣な跡が見えます。（一四二）

●●●●河崎蘭香女史「冷美」とは少々受取りにくい畫題ですが、薄墨色の櫻花を背景に今樣なハイカラ美人の立姿を表はした圖人物に用ゐた線が強過ぎて目障りかとおもはれるです。併しお腕はなか〳〵お達者なものです。そして何となく詩的趣味を催させます。前掛をした商人體の人曰く「お孃さんが庭先へ寢ぼけ出したんだね。」諸評にや。（一五三）

●●●●岸田蕉華女史「庭つたい」圖柄は白萩、燈籠などを背景にして鼓を持

つた一佳人が庭の飛び石を踏んで歩む姿を輕妙な筆で描き上げたものです。腕は相應に出來て居る方です。(二一九)

●●●武谷睢子女史「花吹雪」櫻花の庭に元祿美人を畫いたものですが技が極めて幼稚で圖案も平凡です心細い繪だなあと云つてた人があります。(二四四)

●●●野口小蕙女史「藤花に牡丹」綺麗にまとまつた丈けが見所でせう。(二四五)

●●●馬杉青琴女史「山水」解谷翁の筆法を十年一日の如く守つて別に工風もせず改良も加へず、覺えた丈を絹地に繰り返して居る人と見えます。この圖も例の定まつた型に入れて作つたものです。(二五九)

●●●大久保鏡湖女史「涼風」唐美人の水際に佇みながら涼風に吹かれて居る圖です。着筆が至極臆病で線も全く體を成して居りません、色彩も濁つて居て不愉快な繪です。(二六〇)

●●●水谷淸園女史「ハーモニカ」美しい二人の姉妹、妹がハーモニカを吹奏し姉はこれに諧を見せて居る圖です。優美な繪ですが表情に乏しいのと、線が目立ち過ぎるのは感心致しません、何うも皆さんが線を用ゐるに餘りお上手でないやうです。髪は二人共漆器製の假髮でも被つて居るかと思はれます。(二六二)

●●●木下靜涯女史「細雨」群をなした水禽が先を爭ひつゝ陸から水へ飛込む處を描いたのですが、何うも筆がまだお若いやうです、草の色も單調で、生々して居ます。日本畫のサッパリした趣が、少々足りません。(二六三)

●●●横田小霞女史「猛虎」「何んだまあ女の癖にこんなものを畫えて、美人でも畫えたら善えに。」と小さい布呂敷包を背負つた田舍者が云つて居ましたが、何も美人や花鳥ばかりが御婦人の領分でもありますまい。併し兎角慣れないものは六ヶ敷いもので、此の繪などは骨は折つてありますが、まだ〳〵研究が足りません。猛虎と題するからには今少し活氣のあるものでなくてはいけません、米俵の腐つたやうな色だなどと虎の毛色を評して居た書生さんもありました。御婦人として決して惡い出來では有りません。(三二四)

(完)

◎疾病は快樂の租稅なり
◎不朽の名譽は獨り德に存す
◎惡人は我が手が造りしものに捕へらる
◎芳香は墓所に花咲く
◎疑心は友誼の毒藥なり

救世軍の內容

山室少佐談

救世軍の何たるかを語るには、今回我國に來遊せられたる、ブース大將の、經歷を語らねばならぬ、何故かと云ふに、救世軍なる者は、ブース大將か創め、大將が經營し、大將が成功さしたので、切言すれば、救世軍は大將の變體であるからだ。

今から凡そ四十年程前、英國の倫敦に「在來の傳導の形式や、一切の虛儀虛禮を捨て、新に剛健勇敢なる神の軍隊を組織し、罪惡、勁敵と戰はん」と勇ましい宣言を爲して、勇敢なる青年男女の一團を率ゐ、大道布教を以て、專ら貧民間に神の福音を宣傳しつゝ、あらゆる罪惡と勇戰した一青年傳道師があつた、是れなん今日世界の偉人と稱へらるゝ、ブース大將其人で、亦た此の一團こそ實に、今日の救世軍の萌芽である。

▲軍隊としたる理由

嘗てブース氏は何故に、傳道するのに、從來の形式を捨て、軍隊組織となしたかと云ふに、夫れは傳道の成蹟を擧げるのには、今迄のやうに、單に教會の講壇の上から、手緩い道德的の會話や、說教をして居たでは、迚も實効を收められぬ、元來傳道の精神は、罪惡を征伐するにあるのだから、傳道の方法も、最も敏活に迅速に而も統一ありて有力なる運動を爲し得べき軍隊組織にしたらよからうと云ふので、其處で斯う云ふ一種特別の手段を採つて、其の名稱、組織、制服、位階等に到るまで、悉皆軍隊に眞似たのである、夫れから、また此の神の軍隊が、特に貧民窟を選んで、傳道したのは、斯う云ふ階級には、罪惡の數が殊に他の社會よりも多いのと、又た此の階級には、他の普通傳道師の力が、行き屆かぬからである。

▲最初の難戰苦鬪

斯う云ふ次第で、救世軍は武者振り勇ましく、社會の裏面に打つて出たのであるが、元より是れと云ふ財源があるのではないから、或る時には餓に責められ、或る時には寒に苛まれ、其の困難は一通りではなかつた、殊に最初は其の言動や、傳道の方法が、餘りに大膽で、且つ飛び離れて居たので、世間からは狂人視せられ、誰れも眞面目に相手に爲なかつた、單に相手にしなかつたのみならず、盛んに嘲笑、罵詈、迫害を加へた、斯う云ふ次第で最初の困厄は、並大抵ではなかつたで、世間の人は迚も是れでは物にはなるまいと、一同其の前途を悲觀して居た。

▲最も光輝ある成功

併しブース氏以下救世軍の將士は、千挫屈せず、萬折撓まず、一難加はる毎に、其の勇氣を百倍させて猛進した、で不撓の精神と、巧妙なる畫策とは、着々世人の豫想を齟齬せしめて、年一年救世軍は其の版圖を擴げて、僅か三十年經つか經たぬに、人類の息み所、洋の東西を問はず、其の血と火の軍旗の飜へらぬ隈もなき程になつて、到頭ブース大將は、世界最大偉人の一人となつた、夫れと同時に、救世軍の眞價は、追々世間の認むる所となつて來た、其節英國女皇陛下から、「女皇は其帝國の各方面に於て救世軍が不幸なる多數の同胞の爲め勇敢に經營する偉大なる各種の事業を充分に認識せり女皇は神の嚮導と祝福救世軍の將來に對する凡ての努力に伴はんことを熱切に信頼する者也」との難有き勅詔を賜はつた。

▲大將の人と爲り

長け高くして犯すべからざる威嚴を具へ、雄辯なる說教家で、又た大なる統率者である、而して其の文章は明快雄健で、著述の數も決して尠くない、殊に其の精力の盛んなることは「着物を着たる蒸汽機關」と思はれる程で、又た其の貧民を憐れむ心と、人の靈魂を救はん爲めに係かる丶熱心は、一度彼れに會ふ者をして、欽慕の情に堪えざらしむると云ふことである。

▲大功ある他の二人

他に二人或る時は大將の相談相手となり、或る場合



には大將の片腕となり、軍の成功に多大の力を致した偉人がある、其の一人は大將の長子ブラムウエルブース氏で、此の人は德望技倆兩つながら絕倫で、早くから其の父を輔け、力を致したが、今は倫敦の救世軍萬國本營で、參謀總長の重任を帶び、全世界に亘る諸種の軍務を主宰して居る、夫れから他の一人は大將の妻ブース夫人である、夫人は今から十七年前に、不幸にして病死されたが、斯の夫人は亦た近代の英國に偉ひなき豪い婦人である。事業創立當時から、常に良人を輔けて其の謀に與かり、高尙なる品格と、周到なる思慮とを以て、軍隊の進步發達に多大の貢献を爲したが、夫人は又非常の雄辯家で、且つ亦た非常の能文家で、其の講壇に立つて、軟舌を鼓する時には、聽衆は皆な其の心を刺さるゝが如くで、非常の感動を與へたが、又た其の文章は讀む者をして、聖き生活と、犧牲的献身の奉事に入らざれば止まざらしむる如き、魔力を有て居て、其の著述は多くの人々に愛讀されて居る、夫れで今日でも尙ほ夫人は、全世界に遠征して、罪惡と戰

ひつゝある軍の士氣を鼓舞する、靈火となりつゝある。

▲救世軍の現況

夫れで今日此の貴き神の軍隊が、人類救濟の事業に從事して居る國の數は五十三ヶ國に亘り、其軍隊の士官兵卒の數は、數十萬に上り、定時出版物の數は六十八種(各國語にて)あつて、其の毎號の發行部數は、百萬部以上に達すると云ふ、次にこの事業を視察する上に於て、見逃がしてはならぬことは、其の經營して居る、社會事業である。

▲社會事業部

社會の最下層に墮落して、極々困窮零落に陷つた人々を救濟するには、唯だ說教や、訪問だけでは足りない場合によりては其の身の上の世話をも爲すべき必要がある、即ち新に監獄を出た者には、之に宿泊すべき家と、又た務むべき職業を與へねばならぬ、墮落した婦人には身を寄すべき避難所を授けて、其の境遇を轉換せしめねばならぬ、其の他失業者には、業を與へ、宿無しには、宿所を供へ、飢に迫る者の爲めには、之に食物を供する必要がある、此の必要からして、社會事業部と云ふ者が出來た、是れが即ち救世軍の基督教宣教師や、教會と異る所以で、又た社會が救世軍に對して最も感謝せねばならぬ點である、ブース大將は、夙に此の必要を感じて(明治廿三年)に、有名なる著述『最暗黑の英國及び其の救濟策』を公にして、爾來其の書物の中に發表した筋書に由りて、盛んに社會事業を經營することになつて、非常の好成蹟を擧げた、で今其の事業と成蹟の一般を紹介して見るならば、社會事業部の總數が七百五十六個所、是に從事する士官の數が二千餘人で、是れを類別すると婦人救濟所の數が百七個所あつて、去る一年間に此の救濟所で救ひ上げて、正業に就かしめた婦人の數が、五千五百人に達するさうだ夫れから又た宿無しや、食ふに困つて居る人間を救濟する木賃宿及び安料理店の數が、二百餘軒、出獄人救濟所の數が十五個所、授産場及び工場の數が百餘個所、勞働者紹介所の數が四十七個所、其他農業部とか、育

兒院とか、禁酒院とか、感化院とか澤山ある。

▲婦人救濟事業

軍の事業中、最も注目すべきは婦人救濟事業である、軍で一番力を入れて居るのも又この仕事で、且つ其の成蹟の今日一番擧つて居る事業である、偖て何故に婦人救濟事業に力を入れるかと云ふに、今日の實情に於て最も多く救濟を必要とするものは婦人であるからだ、見玉へ今日の社會で婦人程割の惡い、氣の毒の位地にある者はあるまい、例へば男女の關係について見てもだ、男子は多少放蕩をしても、若しくは多くの處女を玩んでも、社會は格別制裁すると云ふやうなことはなくて、立派に妻を迎へる事も出來るし、又養子にも行けるが、女子は爾うは行かぬ、一朝不圖した出來心で、不品行でもしやう者なら、社會は毫すも容赦はせぬ、直ぐに傷者として取り扱ふ、で人並みに嫁にも行かれねば、養子を迎へることも出來ぬと云ふ實際の狀態で、一生浮む瀨がないから、其處で自暴自棄して闇黑界へと墮落してしまう、斯う云ふ具合に少しも悔悟の餘地を與へぬ、是れは實に慘酷で、其の罪寧ろ多く社會にありと云つても差支へないのである、夫れに


ニコライ堂

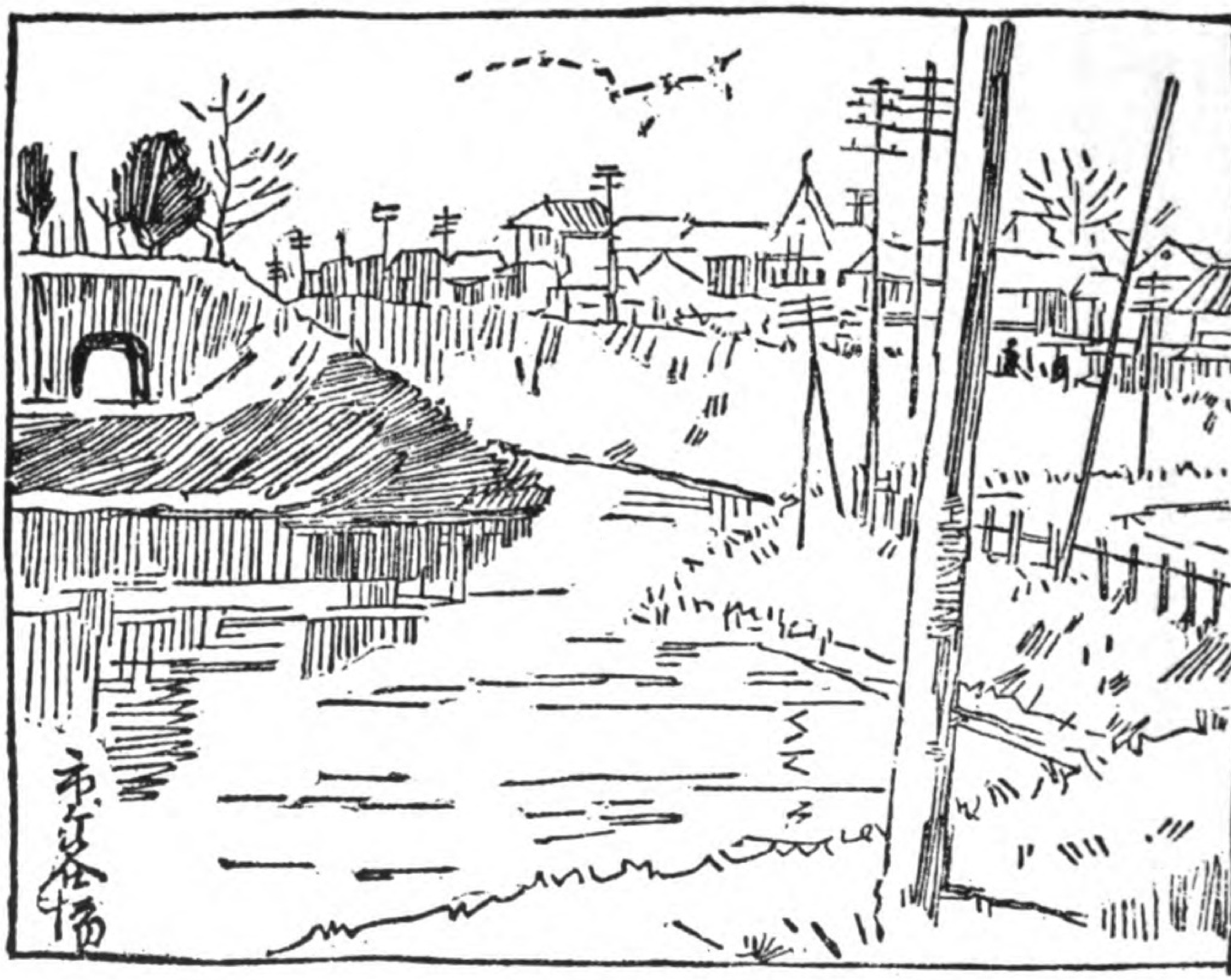
婦人の不品行は大抵他動的で、多くは男子の誘惑に原づくのであるから、愈よ以て氣の毒の次第である、と云はねばならぬ、若し今日に於て、志士仁人の救濟を要する仕事がありとすれば、墮落婦人救濟事業の如きは、正しく其の一つであるこれが救世軍に婦人救濟事業の出來た理由で、又た救世軍が一番是れに力を注ぐ理由であるのだ。

▲日本に於ける救世軍

軍が、始めてライト大佐を日本司令官に任じて、之に數名の男女士官を附し、種々の罪惡を征伐せしむべく、遠く極東に派遣したのは、明治廿八年の夏であつた、此の一隊は上陸すると直ちに、凡て日本の服裝を爲して、九月の廿二日の夜、神田の青年會館に於て、第一回の野外演説を營んで、勇ましく日本に於ける開戰を布告した、此の時日本國民が、斯の勇敢にして大膽なる、而して又た珍奇なる一隊に對して、取つた態度は、頗る珍妙であつた、で東京の諸新聞は、筆を揃へて、『ドンドコ連』『亂臣賊子』『狂氣染みたる宗教』と罵倒した、殊に戰勝の餘溫尙ほ殘つて居て、殺伐の風が盛んであつたから、あらゆる迫害と虐待は彼等の頭上に雨の如く注がれた、併し人類救濟と云ふ事業に從事すべく神の前に一身を捧げて居る彼等は、家屋を燒かれた時も、器物家具を打ち壞された時も、自己が體に血を見る時も、毆られて蹴られ身動きが出來ぬ時も、犧牲の精神を振り興して、『ハレルヤ、ハレルヤ』を連呼して倦まず撓まず猛進したのである。

▲死の前に敵なし

一難加はる每に勇氣百倍すとは、將士の意氣組で、事業の前には、好んで死を選んだのである、死の前には敵はない、爾來十一年の今日では、士官の數が百五十人、小隊及び分隊の數が三十七個、機關新聞『ときのこゑ』の每號發行部數一萬部に達し、其の他社會事業としては水夫館、(水夫を宿泊せしめて、其の靈と肉との救濟に從事する宿泊所)が一個所出獄人救濟所が一個所婦人救濟所が三個所ある、此の婦人救濟所で救濟して、立派に正業に復した婦人が、去る一年間に



七十一人あるさうだ、其の他宿無しを救濟する木賃宿失業者を世話する勞働紹介部、男女學生の向上に資する學生寄宿舍等、樣々の事業がある。

▲醜業婦救濟

這般の事業の中で、軍の將士が最も苦戰したのは、醜業婦救濟事業である、而して功果の最も早かつたのも實に此の事業である。

明治卅三年の八月、軍は社會事業の手初めとして、東京に婦人救濟所を開き、其の機關新聞『ときのこゑ』の婦人救濟號を發行し、娼妓の最も耻づべきものなる事を敎え廢業する者は、導いて正業に就かしめんと書いて、白晝最寄々々の遊廓に賣り步いた、是れから醜業者の反對迫害となり、輿論の勃興となり、到頭其の十月になりて、內務省の娼妓取締規則の發布を見るやうになり、全國の娼妓は何時でも、自由に其の厭ふべき醜業を、廢することを得るに到つたのである、是れが爲めに從來有らゆる壓制暴逆を娼妓に加へて居た、醜業者は餘程娼妓に對する待遇を改むる樣になつた、

加之らず明治三十二年には、五萬二千四百十人居た娼妓が卅八年には四萬二千百七十五人に減少し、同時に心ある人々の間に、遊廓に近づくことを耻づる心が大に増加した、斯の婦人救濟事業は實に救世軍の諸事業中最も特筆大書すべきものである。

▲諸種の特別運動

この外に、救世軍には種々臨機特別の運動がある、即ち昨年春東北三縣凶作地の子女救濟の如きは、正しく其の重なる一つである、即ち凶作地の子女が、貧苦の餘り惡漢輩の口車に乘せられ、誘拐せられて一生を誤まらんとする者を救濟する爲め、士官を現場に派して、彼等を引き取り、東京に送ると同時に、一方には東京に女中寄宿舍なる者を設け、臨時に之を收容し置いて、それ〲堅氣なる家に奉公させた、で當時凶作地より收容したる子女の數は、實に百五十人に達したさうである、此の以外三縣にて約五百戸の困窮民に對し、稼業用の器具を與へ、田畠の肥料を給するなど、最も適切なる生業扶助を行ふたのである、尙ほ臨時事業として年の暮れに東京の貧民窟約一千戸に、慰問籠なるものを送り、之を慰藉したが、此の慰問籠の中には、食物、玩具、日用品、書物等を、一杯につめ込んだものである、此の外まだ救世軍には、種々の臨時運動がある。

▲幹部の組織

最後に日本に於ける、救世軍の幹部と組織の一般を述べて見やう、目下救世軍日本司令官は、武羅士大佐と云ひ、廿餘年來救世軍に盡力し去る明治卅二年に渡來した上長官である、次ぎに書記長官は、チユース中佐と云ひ、明治卅年に日本に渡來した人で、其の夫人は東京婦人救濟所の書記官を勤めて居る、又た戰場書記官は、山室軍平(少佐)氏で、此の人が日本人としては救世軍中の巨頭である、同時に山室夫人も亦た献身的に救世軍の事業に從事して居る、以上幹部の諸將校の外に、尙ほ本營勤務、統計部、商業部、特務等に、夫々受持ちの士官が居れる、夫れから組織であるが、目下日本に於ける救世軍の戰場は、東京大隊、關西大隊、

上野中隊等に分れ、是等各隊は、銘々受持ちの管區があつて、夫れ〲其の方面の戰爭に從事して居るが、以上の諸隊の外に屯田中隊及び、大隊に屬せざる小隊があつて、本營より直ちに之を統轄して居る、夫れで凡て小隊に於ては、一定の營內及び野外集會を營み、下士官及び兵士は、各自其の受持士官を輔けて働いて居る、次ぎに救世軍の士官や兵士は、何うして造るかと云ふに、凡て求道者、改心者等は、之を養成して兵士とならしむる方針で、此の兵士は、『軍中の約束』に記名調印し、救世軍人として、軍律を守るべきこと、聖き生活を營むべきこと、力の限り他人を助け之を益し、之を救ふ爲めに、働くべきこと等を誓約した者で、下士官は右兵士の中より信仰篤く相當の力量ある者を選むと云ふ方針である、固より此下士官兵士は、凡て皆な篤志にて之を爲す者であるから、從つて何れも其の日常の稼業に從事しつゝ、時間と勞力の許す限り、神の國の擴張に盡すのである、次に士官の養成法であるが、之は士官學校があつて、其處で養成するので救世軍日本士官學校は、牛込市ケ谷にありて、校舍は宏壯なる二階建の建築である、是れは去年六月開校したもので、其の第一回卒業生は、先頃士官に任せられて、夫れ〲任地に赴いたが、何人にても人類の救濟てふ貴き事業に志あるものは入學の出來る規定である。

吾人は我が姉妹が救世軍發達の歷史について、偖ては亦た七十九歲の頹齡を以て遙に我國に來遊せられたるブース大將の風丰に接して、多大の敎訓と、感化と光明と、慰藉とを得らるべきを信じて疑はぬものである。

洗濯の心得

一　絹布及び木綿、麻布、毛織類を洗濯するには、椋實、洗粉、米泔水、豆腐の搾汁、石鹸、曹達、硫酸等を用ふるをよしとす、但し其布地と色合とによりて適當なるものを選ぶべし。

一　白き絹布を洗ふには、先づ雞の糞を水に入れて布を浸し置き、二時間經ちて後石鹸にて能く洗ひ、次に水にて濯ぐべし。

一　小兒の肌衣、襁褓等は曹達、石鹸などにて洗ふべからず、皮膚を害し或は皮膚病を發する恐れあれば注意すべし。

一　毛織物は微温湯に石鹸を加へて能く洗ひ、冷水にてそゝぎ、然る後更に清水に精製石鹸少許を加へて洗ひ、洗ひ終れば又清水にて濯ぎ、速に乾し火熨斗を施すべし。

一　染模様の物を洗ふには、之を解き離して雨水か河水の冷かなものに鹽水一握を投じて洗ふをよしとす、而して之を乾かすには白布を卷きて數時間置き、その乾くを待ちて火熨斗を施すなり、又た火熨斗を施すには薄紙或は金巾を敷きて其上より施すをよしとす、然らざれば光澤を損して大いに外見を害ふものなり。

一　フランネル等の如き毛布は、冷熱の甚しき者に遇へば收縮し易し、故に微温湯で洗ふを良とす。

一　油染たるもの、紫色のものなどは灰汁などにて洗ふをよしとす。

一　繻子、天鵞絨などは石鹸にて温湯の中に洗ふべし、洗上げたらば能く清水にそゝぎ、乾くを待ちて火熨斗を施すべし。

一　赤、青などの木綿物は灰汁にて洗ふか又は石鹸水に酢を少し入れて洗ふべし。

一　黒色の古帛は燒酎にて洗へば清淨になるなり。

一　深紅色の絹布は橡に熱湯を注ぎ、之を漉して其滓を去り、尚其熱き内に之を洗ひ、更に湯を注ぎ洗ふべし。

（麻軒生）



女性観察 十人十色

抜衣紋

されば紀州の南海の濱、水には近う山にも遠からず、新緑未だ若うして桃の花紅に、故園の春色今將に酣に候。

其の後誰方様にもお變りは居らせられず候とや、何よりも〳〵お嬉しく存じ上げ參らせ候。

先年自分歸郷の當時、いろ〳〵と身に餘る御親切なる御教訓に預りまへり候ひしものから、彼の頃は唯夢見る樣に當て無き空想に憧憬れ居り候事とて、女學校卒業の上からは、斯くして此の儘朽ち果てむも何とやら口惜しき樣にも考へられ、飽くまで淡き青春の血氣に驅られ候ては、其の上とも大に勉強して、何して見んか彼して見てん、文學者も面白からん音樂者も可笑しかるべし、あるは一層繪師とも美術家ともなりて、一世は花の春美しう、心行くばかりの華美かな生涯を送つても見まほし等と、一向に思ひ上がり候ひし身には、良薬却つて口に甘からねばかや、時にはあんまりなお同情心の無さと、他人の知りた事でもあるかの樣に自分一人勝手に腹打ち立てゝ、隨分と愚痴らしうお恨みの數々も聞こえ上げ御憎しみも致し參らせて、果ては泣いて拗ねて、丸で無茶な駄々も捏ねて、散々の御苦勞を掛け奉り候事、思へば四とせの夢や昔、其の頃匍匐〳〵遊ばせしばつかりのお坊樣の、男のお兒樣だけに幼稚園通ひの御活潑さが過ぎて、近頃脇縫ひお袖口等の綻び拵へ玉ふを記えさせられては、時にはお袴の裾眞つ黒う泥だらけに遊ばされ候やら、今更其れもお懷戀かしう眞に御教訓のふじ〳〵身に泌みて、嬉しく有り難く忝く存じ參らせ候。

扨ても申さばお腹を抱へて大笑ひし玉ふべし、況し

て彼のお口前のお惡い御良人の君には、甚麼むつかしい難題を持ち掛けてずんとお揶ひ遊ばされ候やら、お恥かしけれど彼の頭首筋の痛くなる程厭々で頭を振り通して、死むでも僕は田舍へ歸るの等と、澄まし込むで威張り散らし居り候ひしほどの身が、何時の間にやらもう〳〵二人の兒供の母親と相成り候て、此の頃一層見る影も無くあはれに世帶染み申し候、お總菜は山獨活に早蕨、土筆に嫁菜、折ふしは鯛の濱燒に鹽から〳〵と、好物は芋の煮轉がし、添へ乳する間の片手業に團爐裏つくろふ容子の如何にも思ひ切たる世話女房らしさと、昨晩も姑樣に澤山笑はれ申し候 位に御座候。

實にや余旦の網の目は知らねど、白龍たりとも魚服たる時んば、終に定まる運命には免れ得ぬものに候ぞとよ、されば鰯網にも鯨のかゝる事ありとさへ云へば、余旦は愚か余旦以上の誘惑の網の目、罪惡の網の目、腐敗墮落の大網の目には、か弱き女子のいかでか逃れ得候べき、其の後同窓の友の二人迄身の置き處なくなりて、一人は品海の沖合近う、一期の花はあえなく泡沫の露と消えて、哀れは同じ一人の友の上にも降りかかり候とやら、奥州は仙臺の大川側の二階屋住居、横鬢櫛のあつさりと洗ひ髮の大島田、素足にからむ絽衣禪のちらほらと風にも翻れて、見し俤の誠や迂詐ならぬと云ふ人も候へど、同窓の友すら共に齒するを恥ちとするとさへ申し候ほどなれば、近頃しみ〳〵思ひ出でゝ、總身肌寒う悚然なりて人事ならず面赤うなる樣な心地もせられ候。

同卒業生二十四名、今は大方人の妻とし人の母ともなり居り候筈ながら、未だ〳〵其の中の五人程も、昔ながらの大前髮に海老茶の裾短う澄まし居り候が之れあり候、二人は去る地方の女學校の教師、一人は何やらむ會社の事務員とやら會計員とやら、殘る二人は未だ去る高等の女學校にて頻りと勉學中との事に御座候、其の頃皺々だらけのお袴着け給ひて、女子の樣にも無い少し反り身の肩厳めしう、すつかりともう塾つて居るぴちやんこの日和下駄を平氣に穿いては、人一

倍の外出好きで居らせられ候友の一人の、今現に女敎師致し居り候に、何故々々未だに結婚はし給はぬと、終此の中の消息の序に申し送り候處、家庭に趣味を持つ事の出來ねばとの返り言、眞面目も面眞目も餘りの眞面目さに可笑しくもなりて、つゝ掛け草履の印半纏にも嬶と云ふ者は候へ、其處此處都は四ッ辻の交番と云へるに、晝は終日夜は夜もすがら、むつちりと御職務大切に卓立たせ給ふサアベル樣にも、御新樣と申し上ぐるが在し候よ、昨晩三筋の絃の冱えに、撥胼胝たむと拵へ給ひし



美しい方々樣も、今日シルクハットの御側近う、館の御令夫人となりすまし給ふ止ん事無き社會も渡らせられ候は何をか家庭の趣味と申すか存じ候はねども、斯御獨居淋しう、私等の目から見れば微塵香ばし氣も無き御境遇にどれ程の趣味か有ち玉ふ、其れ第一に聞かせて給はれとて、飽くまで執念調戲つてやり候處、其の後一週間ばかりしてから繪葉書の表に、貴女樣の御口づからとて特の外重々恐れ入り參らせ候とばかり、流石に友が例の惡皮肉、憎らしければ猶も重ねて、されはこそ其處にて候へとて、妹が通學

り居り候學校の先生の事をありの儘に、卵とは知りつゝも終筆の辷り候て、申し送り候ひしを何とか聞き給ひ候ひけん。

お色の白うて眉の美しうて、教員にして置くには勿體なき容色と、兎角男子は之れを直きに云ひたがり遊ばされ候を、知り給ひしか知り玉はでか、倫理等の教壇に立たせ玉ふ時には況して、「皆樣決して結婚はし給はぬものぞよ、人間には人間の自由てふものはある筈なり、されば女子も一箇の人間たる以上には人間たる女子の自由もあらねばならぬ筈ならずや、さるを婦人一度人の妻となりなば、婦人が得べき當然の自由を皆不遜なる男子の爲めに蹂躙されつゝあるにあらずや」等と、時には情激し給ひては慎ましうハンケチ嚙み給ふ事も在すと云ふ、其れも漸う一月二月、近頃妹共の話しに依り候へば、近くに去る文學士の君と結婚遊ばさるゝとやら遊ばされしとやら、口の悪い妹共の、能うまあ彼のお口でもつてと思つたら、何かしら無性に可笑しくなつて來て、今日穴のあくほどうんとお顔を凝視て上げたと笑ひ轉げ居り申し候ひし。

と申し上げて置いて、

さればにこそ候へとて、重ねてぐつとハートとやらに擽りを掛けて上げた意に候ひしかど、其の後何の返り言も候はねば、之れは之れながらに其の儘泣き寐入りと相成申し候。

之れは結婚致し候同窓の友の一人、小説では蘆花樣の時鳥と紅葉樣の金色夜叉とが大好きな女にて、少し薄肉の脊の高いすらりつとした美しい方の、近頃何を感ずり給ひ候てか、「家庭は矢張り子孫を製造する工場に過ぎず候」と墨痕鮮明に筆太と〳〵と手紙の端に記され候には、聊か辟易いたし候。猶其の外にも大方は同じ意味の事を申し越して、愚痴らしう翻し居り候。

斯くて卒業致し候てより四年、眞に變れば變るものと我れながらつく〴〵感心仕り候、尺蠖の屈むるは單に伸びんがためなりとのみ、我れから我が短を飾り候譯にては無けれど、かくても自分に何事の不平も煩悶も無きが嬉しく候。

今朝良人は例の仕事着になり候て、お裏の桑畑を雇人の指圖に立ち出で候ひし後、姑樣小唄のお椽側に仕事箱持ち出し玉ひでの陽春四月の十時は日盛り、澁茶煮る間を盜みて此の手紙漸う書き終り申し候、花は都の往き來るさ、一度は上京も致して、いとせめて御面のあたり御禮の幾分も聞こえ上げ度くは存じ候へ共、之れより、追ひ〳〵農事多忙の昨日今日、失禮ながら取り急ぎ御意を得參らせ度く、いづれは後便を期し申し候。

しく

田舍の四季

春は四方の山々に霞棚引き、椿は笑を含みて人に媚び、鶯は谷の戸出で、梅が香慕いて鳴く床しさ、青柳はそよ吹く風に靡きて水鏡に姿を寫し、桃櫻は馨ばしく咲き匂ひ、若草は道の邊りに人を迎へ、菫たんぽゝれんげなど咲き亂れて錦を敷ける如き春の野に、乙女子の摘草をなす愛らしき、雲雀は空高く囀り、胡蝶はひら〳〵と花より花へ舞ひ遊ぶ。

夏は草木老ひ茂り、田草取る農夫の鄙歌面白し月未だ出ぬ夕暗に、柴の戸出づれば螢群れいて飛び交へ美くしき廣き田面に青波を漂はして吹き來る風の涼しさ、軒端にかゝる蜘蛛の糸は白露を宿して恰玉の簾と見ゆ、磯邊に行きて舟浮べば暑さは浪に流れ行く。

秋は吹く風心よく大空は高く晴れ、小鳥は森に友呼び交はし、千草咲き亂れ、野に山に茸狩り、紅葉狩りなど催すも又興多し、夜な〳〵蟲の奏せる自然の音樂を耳にす、月清き夕べ野邊をそゞろ歩きす心地よさ岡の松風天津乙女の掻き鳴す琴の調べと聞こゆなり。

冬は霜雪深けれど夜毎爐火近く集ひて一家團欒四方山の話に時を移す愉快さ、宵にちら〳〵降りだす雪朝起き出れば野も山も一面の銀世界、常盤木の緑に白妙の雪を頂く麗はしさげに面白の景色やないでゝより雪見せん降れよ雪積れよ雪田舍の四季なか〳〵は一笠。

婦人の敬慕する性質

婦人は如何なる男子を最も敬慕するかとは、先頃或一人が英國婦人に向つて問掛けた問題である、元來斯る問題は時代に依て異り世の文野に依て甚しき相違があるから一概に答ふるとが困難である、同じ文明國婦人でも米國の婦人は財産家を慕ひ、獨逸の婦人は軍人を喜ぶ傾きあるは爭はれない處で、即ち所變れば品變る、借て英國婦人は何んと答へしか、こゝに紹介するのは堅實なる英國婦人の理想の一斑である。

女子が男子に就て最も敬慕する性質は、勇氣、力量並に不羈の精神である、表面は兎も角、心では自分が仕へる程の志望者を敬慕するのである、是れは野蠻時代から同様であつたが、文明の進歩に連れて男女同權といふ説が行はれ來て、外面男女の關係に變化を來したところで、其內心を叩けば矢張り強健にして自分より立勝つた男子を最も敬慕して居るのである、一婦人の辭を借りて言へば女子の最も敬慕する男子は黑衣の人と赤衣の人とであると、さてその黑衣の人とは何であろ、これは牧師の事である、赤衣とは軍人である、何ゆゑ牧師を敬慕するかと云ふに、牧師は道德上人の標準となつて精神界に堅實なる人であるからで、又軍人は膂力に於て人の上に立つからである、要するに女子は強健の性質を欠いて居る、故に成べく此要素を備へた男子を得て、自分の頼りにしやうと云ふのである。

右は多數の婦人に試問した結果、一致して動すとの出來ない處である、約言すれば『自分を服從せしむる丈けの強健なる性質を有するものであつて女子は喜んで其下に仕ふる事を甘ずるものである。』と云ふに歸するのである。

所で發問者の意外とせし處は、右婦人の意見中に男子の醜美は女子の敬慕を捧ぐるに無關係であると唱へて居る一點である、その理由とする所は女子は男子の美醜に對して何等特別の嗜好を有して居らぬから醜き男でもこれを擯斥する譯はないのである、男子には女子の外觀に對して鋭敏な感覺が天然に備つて居るやうであるが、女子には此感覺が薄いのである。そうして女子が男子を慕ふに至るのは、男子が自分に對してこの敬慕の感覺を起したと云ふとを悟つた時に生ずるものである、男子には女子の目を引くに足るの美貌があつても無くてもそれは餘り重大な關係を持たない、稍事物の判斷が出來る位の女子ならば決して男子の美醜に拘泥して取捨するものではない、と云ふとであつた。

小説



虹の棧

上

有明

新婚の嬉しさに心は躍り、一足飛の豪奢に小さい虚榮心は張り切れる程満足して、浮々とした君子は其友を歡待のである。

『まあ能く入らつしやいましたわね、有難う何樣やらねホ、、、、御替りも御座いませんか皆樣、今日は日曜で宅でもひつそりです、終日ゆつくりなすつて頂戴な、御話しも澤山あるし御目にかける物もありますからね、サアみどりさん此處へ、厭よ其樣に御遠慮なすつちや。』

疊敷きなば三十疊もあるべきか、萠ゆる若草其儘の色美しき絨檀敷き詰めた西洋室、オレンヂ色の卓子掛したる卓を中に、海老色フラシの椅子を勸めながら、之れ程とは思はざりし氣に茫然たる友を促す。

『は有難う。』

と言つたまゝ何となく氣が引けて、昔の樣に馴れ馴れしくは言れぬ。

『本當に久し振りですね、滿三年ですか？　でも貴女は些も御替りなさらない、私等は最早ホ、、、、。』

左手を延べて赤い手柄照の中差し、水の垂る樣な鬢を撫し途端、キラリと輝いたのも目を射られる如く不快を感じて、

『アラ彼樣なこと。』
と氣の無い返事をしてつと目を反せば、南の窓は絹レースの窓掛を通して、庭の芝生が限りなく青々と見える。
『庭へ出ましやうか、櫻は最早散りかゝつてますけれど、然樣々々溫室にはみどりさんの御好きな西洋花が澤山ありましたつけ、入らつしやいな。』
と立上つて柱の電鈴を押しつ、ストーブの棚にある置時計を指し、
『可愛いでしやう、あのキユッピトがね、私嫁た時目覺しになんて貰つたのホヽヽヽ、ヲルゴルン仕掛けで宜い音がしますよ。』
其前に思ひ出深さうな片えくぼして立つを、
『さうですか。』
と一寸目を遣つたばかりで、直に視線を其花やかな新夫人の服裝に移した。
常着の儘でと御斷りあつたれど、薄松葉地に栗皮茶白茶臙脂の矢鱈縞、御召縮緬の袂しつとりと、花筏を織り出した都織の丸帶と共に目も覺むる樣なり。マア何といふ幸福！　紋羽二重の被布に歡天喜地のよろこびをした其人とも思はれぬ。大會社の社長吉水氏の令夫人、一體何が取得で？　貧家と言つたら貧乏士族、學問だつて女學校がやつと三年まで、半途退學も學資がどうかうと、友人仲間の噂もあつたのに。
全く容貌!!
と思つて目を止めると成程美しい、が自分だつてそんなに劣るつもりは無い、それに財產だつて學問だつて口惜いッ御父樣は何故彼樣な夏目さんなんかに御決めなすつたらう、工學士位、ヘッポコ工學士、職人の頭。
昨日まで夢にも戀しくなつかしく、一日も早うと思つた其人を、アヽ淺間しきは富と愛とを權衡にかくる人なりけり。
扉がすつと音もなく開いて、
『御召で御座いますか。』
と中腰で、小間使にはちつと粹なのが顯れた。
『アヽあの作三にね、溫室の案內をする樣に言つて御

呉れ、それから歸りは直ぐ食堂に行くからね、しつかり御馳走をたのむよ、御客樣は洋食通で居らつしやるから其つもりで。』

畏つて小走りに引返す足音遠く消えたと思ふと、園丁が鍵をチャラ〳〵言はせて迎ひに來た。

『只今夏目さんがお見えになりまして、御新宅の圖取中で彼の邊取り散らしてありますが。』

と夫人の意を伺ふ。

『イヽわ、夏目さんなら御馴染だもの、旦那樣も御一所だらう。』

『然樣でございます、お構ひになりませんけりや御伴をいたしましやう。』

何? 夏目とは、圖取といへば!? それよ彼人に相違あるまじ、をりもをりなり、心に呪ひし其人に逢ふ



とは、苦しき限り辛き極、如何にせんと途つおいつの胸中知るよし無ければ、

『サア行きましやう、幸だわ、富郎にも逢つて頂戴な　それにしても夏目さんといふのは、些も構はない方なのよ工學士でね銀行の方も此西洋館の方もね、設計して戴いたのですつて、宅と同國で中學時代から世話してたさうで、今でも時々入らつしやいますがね、さつぱりした好い方よ。』

戸口から廊下へ出ると直ぐ二三段下りて、直された草履を穿き乍ら、行きしぶるみどりを顧みて言ふ。唯さへマザ〳〵見ゆる驕の色の、羨ましく嫉ましく、おのが緣の幸なきをもどかしみ、掻き亂れ名利の雲に影薄れたる良心の月を、此一言で闇黑にした。我未來の

夫は我家の食客たりしとや、此家の御蔭で成業したりしとや、さらば唯一の彼の肩書も吉水家の賜物、遊びにとは何れ御機嫌伺ひなるべし、これほど寵愛の君子夫人、きつと其前にも跪くなるべしと、意久地なくも忌々しくも思はれて、矢鱈に逢ふのがつらく／＼、

『君子さん、わるいわね團取の御邪魔しちや、此邊で澤山ですよ。』

とある櫻の木蔭に立ち寄つて、雪と散りしく落花の中に佇んだ。

薄鼠地の片矢筈、小豆色の裾廻がだらり翻つて、派手な桃山模樣の長襦袢を見せた、低首勝ちの襟元すつきりと、金茶がかつた帶が實によくうつる。

『何故？　又みどりさんはあんな事、宜いじやありませんか、邪魔になぞなるものですか。』

手を取る樣に近付いて、

『マア奇麗な、花が方々に。』

と結目に止つた花を拂ふ擧動もあでに嫻かしく、正にこれ緋桃彼れ杜若。

中

『桂さん最早十一時半ですよ、早くおしなさいな厭に澄したり氣取つたりしてないで。』

食堂へ續く廊下を身輕に、ハタ／＼と驅けて來て、庖厨の入口に立つた先刻の、小間使が、左手にお太鼓をポンと叩いて、右手に後れ毛を搔き上げながら、派手やかな目をきつと見張つて言ふ。

何某樣のを眞似た建築、理想通りの設計で瓦斯つくめのハイカラ道具、ストーブの上の鍋からは好味さうな匂が立つてる。火加減をして居たコックは振り返りもせず、

『目の前の時計が見えない程耄碌はしてないよ、十一時から十二時で十二時が午食位は先刻御承知だ、ガミガミ言ひなさんな、三人前や四人前にまごつく桂さんじやないや。』

『アラ怒つて？　御免よ、だつて御客樣はそろ／＼御着席らしいもんだから氣が揉めて。』

『御尤樣、三十人五十人の御客樣を扱つて、ホツとも

言はないが御自慢のお八重さんでも、夏目さんが來ると。』

『又ッ！』

二三歩板の間へ踏み出したのは空元氣で、とんと片膝桂さんの前へしやがんで首を突き出して器用に働く手許を見ながら、

『けど全く夏目さんはよく出來た人ね。』

『ドタバタしちや塵埃が立つよ、夏目といやあれだ、まるきり夢中さ、最早宜いよ早くお運びな、早く／＼十二時だよ、いやに澄したり氣取つたりしてないで。』

と、鸚鵡返しに遣り込めながら後の料理に取かゝる。



『十一時から十二時で、十二時が午食位は先刻御承知ですよ、ガミ／＼言ひなさんな。』

と、負けず遣り返してつッと立つ拍子にチリンと呼鈴を彈く、女中部屋から若い給仕女が二人顯はれて運ぶ、

『御夫婦と夏目さんと、それから一人は誰だい？』

立返つた給仕女に聞くと皿を持つたまゝ、

『奥樣の御友達ですつて素敵な女よ。』

と、にやり笑ふ。

『流石に旦突も此際浮いた心は起すまい、君子ならでは日も夜もあらぬで。』

『けども、何だか變よ。』

笑ひすてゝ行く、入れ違ひにお八重はくす／＼、

『桂さんまるで芝居だよ、何がつて素敵なといふ女はね夏目さんと、約婚してるのだとさ。』

『エヽッ？』仰山におどろいて、
『御察し申ます。』と小聲になる、
『人ッ、うるさくからかふのね、何樣せ此方等の相手じやないのよ。』
『と仰しやいましたかねつだ。』
『交つ返さないでお聞きなさいよ、夫れが分つた時つては桂さん、本當に見せたかつたのよ、旦那は殘念さうに女を見る、夏目さんは恥かしがつて眞赤に成る、奥さんは何氣なく崇爾してる、彼れが本當の腹藝だね、各自種々考へてるんだもの。』
桂さんは鷄卵を破りながら首を振つて、
『傍にお八重が氣もそゞろーッチチン。』
『お株だわ可笑しくもない、だがねー、此度の奥さんも今しばらくだね笑つて居られるのも、然し金持は宜いものさね、取り換へ引き換へ若へ美しい女が好き自由なんだもの。』
『何女つて奴は皆そんなものよ、實だ情だつて知つてるな雨夜の星だ、殊に今時のハイカラ上りは酷いとよ金さへあればよた〳〵爺の處へも嫁き兼ねない、金時計や金剛石が女の命なんだね、馬鹿氣たものさ。』
『皆が皆然樣でもあるまいけど、此家へ來るのはそんな氣がするね、だが此度のもまさかお園者があつてお馴染があつて、あつちこつちに隱しつ兒があらふとは知らずだらふ、それを思ふと可愛相だね。』
『叱ッ。』
小聲で警戒したコックは何氣なさゝうに裏口へ出るキヨロリとして四邊見廻すお八重の肩へ、
『何が可愛相なの？』
と輕く置いた右手、左手は、ずれかゝる羽織消墨色のずつしりしたのを搔上る、肌理の細い色の白い面長な下豊、仇つぽい銀杏返し。』
『ヲヤ、ご新造さん、何時の間に此樣な處へ？』
『先刻裏門からそつと忍び込んだのさ、御客樣の樣だから茶室に居たけど、退屈でふらり〳〵出たばかり、今日は桂さん獨りなの、廣いから淋しいやうだね。』
手を退いて懷に入れながら身を反して裏口を見た

が、斯樣言つてニッコリした、向ふで辭儀したのだらふ。

『イ、エ、炊婦は二人共物置に居ます、まあ彼方へ入らつしやいよ。』

とお八重も起つ、くるり踵で廻つてとんと足拍子を踏みながら、

『あんまりうろつき廻ると奥樣に見付りさうだから止さう、日陰者の悲しさはねェ、。』

『晃さまは？』

『伴れて來ないの、面倒だから。』

『大きくおなりでしやうね、お五つですか。』

『ア、年弱でね、早いわねー、最早二年經過かしら、此間まで此處に居たつけが。』

『旦那樣は隨分ですね。』

『何故さ。』

『だつて御子樣まであるのに御新造さんを別莊へ出して、本室が立派に出來上ると知らない顏して奥樣をお娶りなさるんですもの。』

『仕方が無いわ、因果を含められて見りやあね、頑張る事は出來ないよ、どうせ浮氣なんだもの外に增す花よりは本妻の出來た方がまだしもだわ、けどねお飾りにといふ筈なのが大分お氣に入つて何樣やら此方が怪しいものさね、あんまり足が遠いから不意にやつて來たのよ、新橋から使は來ないの？』

『珍らしいもんだから此頃は何處へも御無沙汰、お雛樣見たやうですわおホヽヽ。』

『顏が見てやりたいのね、性惡ッ。』

言ひ〳〵廊下を辿つて中庭を控へた小座敷の前まで行つた、

『此所へ。』

と合點き合つて障子を開けた時、食堂で呼鈴が鳴る、目配せして立去らうとするお八重に、

『一寸耳打してお呉んなさいね。』

柱にもたれたまゝ後から言ふ。

食堂では、君子夫人の樂しさうな、笑ひ聲がひゞいた。

下

卓子を少し離れて、小間使が林檎剝く手をじつと見詰つゝ、心の中はむしやくしやと思ひ亂るるみどりがベルモットや強いられし、ほんのり赤き横顔のぞきて

『本當に貴女もびどくつてよ。』

と君子は白眼む眞似するに、

『エッ?』

と振り返れば、窓際につくねんと庭を見渡して居た夏目が此方面きしとハッタリ出合ふ。富郎は來客とて今出たところ、

『だつて此樣にしてちやんと極つて入らつしやるのに知らない顏して、夏目さんだつても然樣よ、始終御目にかゝつてるのに何にも仰しやらないんだもの。』

『何隱す譯じや無いのですが、別に申上る機會もあると思ひましたし、御知己とも氣付きませんから。』

と夏目は眞赤になつて頭を搔いたが、嬉し相に一寸みどりを見た、みどりは色も動かさす非常に眞面目な顏付をしてる。

『みどりさんは先刻溫室の方へは行かないつて仰しやつてね、夏目さんが入らしつてると作三が言つたもんだから、ホヽ分つてよホヽヽヽ。』

君子は笑ひ崩れる、夏目は目の遣り場に困つてる、そでないにしてもヤレ指輪だの時計だのと、あらゆる富のほこりを見せつけられて、女心の嫉さ悔しさ、見ろ今にわれも公爵家の夫人ともなつて、目通りさせて遣らんか、玄關拂ひさせてんか、とよしなき意地に許嫁まで忘れんとせしみどり、端なく其人と落合て何も彼も事明白、勝に誇つて君子は斯樣言ふのだらふ、自分の宅で世話した夏目の家內と言はれる樣に聞えてくやしさが込み上るを無理に押へて苦笑ひする、

君子も相手の樣子が變なので調子を低め話を轉じて

『八重、御客樣は何誰?』

八重は素知らぬ顏で林檎を盛り分けながら、

『何とか仰しやいました、あの時々御出になります方。』

『然樣、早く濟めば宜いのね、淋しいわ。』

うつとりした目付をして口を閉ぢた。
『あの、私は最早御暇します、初めて上りまして……』
みどりが不意に起つて挨拶したので、おどろいて、
『アラまだ御歸はしませんよ、何ですね漸と二時ぢやありませんか。』
『それでも。』
と言ふを聞きもせず、
『富郎が來てからにして頂戴な私の御扱ひが惡い樣で後から叱られますわ、一寸夏目さん貴君お留めなさいよ。』
何氣なく言つた言葉も邪に聞けば命令的もきこえて、
『まあ宜いでしやう。』
と口籠りながら言ふ夏目のさまが堪らず卑しく見える



其むつつりと面白からぬ顔色も、夏目との仲知られし耻かしさ故とばかり怪まぬ君子は、みどりの眞面目な程からかひたくなる、
『あなたが其樣に眞面目で入らつしやるからなほ可笑しいわ、ねー八重、よくお似合ひの御夫婦だわね。』
仕方がないので寄らず觸らず、
『エヽもう。』
とみどりは曖昧な返事をして早速引退る、出口で、
『ヲヤツ、お客樣はお歸りで？』
『ア、今。』
白を切つて悠然と美髯を撫つゝ立つた富郎の左側をスルリ腰を屈めて脫け通りながら笑顏を盃に押付けて

小股に走る。
『お客樣には失禮ですが、一寸急用が出來て出かけます、然しお構ひなくお遊び下さい、君子、師匠でも呼んで賑かにおもてなしするが宜い、今夜は歸宅ぬかも知れんから。』
と富郎は椅子に輕く身を寄せて、半身を捻ぢ向けながら夫人を見る。
『ヲヤ、お獨り?』
出るにも入るにも影を並べぬ事なかりしに、不意に獨り出かけるさへ心地よくはあらぬを、況して歸らぬかもしれぬとは、
『ア、大磯に居る、お前はまだ逢はないが私の從兄がね、少し快ない樣だから。』
『只今のお客樣はそれで。』
『ウム。』
『じや御一所ですか。』
『イヤ一足先へ行つて貰つた、竹村さん御ゆつくりなさい、夏目君失敬するよ。』

と立上る、富郎、君子も立つ、みどりも立つ、
『あの私もそれじや御暇して。』
みどりは身づくろひする、君子も今は止めぬ。
『然樣ですか、折角でしたのにね、貴君が入らつしやるまでと無理にお止めしたものを、お出かけで詰りませんわ、それじや又お近い內にきつと入らして下さいましよ、今日は本當に失禮しました。』
『お歸りですか、まだ宜いでしやう、私が居ないから今夜はお泊り下すつてほしいのだが、然樣もなるまいじやお宅までお送りしやう、そんなに廻り道でもないから、少しおまち下さい直ぐ支度して、それじや夏目君、先刻の圖を二三日中に賴むよ、まあゆつくりし給へ。』
と富郎は言ひ捨てゝ出る、君子も從はふとするを、
『宜しい、着換へは八重にさせる、馬車の支度が出來るまでお相手するがいゝ。』
制してさつさと行く、
君子は何となく物足らぬ樣な淋しい樣な厭な感じに

うたれて見送つた。

　間も無く馬車は玄關に廻つた、富郎は流石に君子の思わくを兼ねて逡巡するみどりを强いて掻き乗せつ、

『行つて入つしやいまし。』

と細い聲で兩手をついた君子を、富郎はぢろり見下して輕く合點いたが、直に馭者を顧みて遣れと命じた。

　馬車が門を出ると、通りすがる人々は悉くふり返つて見るに氣が付いたみどりは、傲然と胸を張つていささか當惑らしい色も無い、知らぬ人は、よい夫婦と囁いた。

　夏目君が規丁面に圖面や書類を整理して、さて暇を告げ樣と夫人を尋ねて、其泣顔を食堂に見付た頃は、みどりが己が部屋の姿見に影を寫して、自烈度氣に唇を噛んだ時、新橋の待合室に、喃々として富郎が例の私語く時。

評、やゝ當時の所謂實業家なるもの、閨門を描き得たるがごとし、筆は幼稚を免かれざれども

二等賞

賞金送呈致し度候間作者の住所姓名を至急御報知あれ

落花のうらみ

秋津子

まごゝろ

『でも兄樣、も少し優しく遊ばせよ……餘り義姉樣がお憐然ですわ。』

　林下の兄を見上げて云へる面のいたくも瘦せたり。透き通る樣なる襟元に油の失せし黑髮亂れて、血の氣見へぬ顔の蒼く白く、哀れ見る目も痛ましき迄の憔悴れよう、あたら咲匂ふ盛りの花の、つれなき一夜の雨にそぼ濡れて、風にも堪へがたう惱ましの風情、俊子病ひの人と成りしはそも今より幾日の前なりけむ。

『俊ちやん、だつて仕方が無いさ、僕は恁ふ冷淡な性質なんだからね……優しくしろつてつたつて別に仕樣が無いじやないか。』

『だつて兄樣もう少し親密に遊ばしたつて……兄樣以前は其樣に冷淡な方じやなかつたんですもの。』

『さうかねえ……。』

淋しく微笑で取合はねど思ひは同じ妹のいとしき姿をうちまもるなり。

『兄樣のお心は妾ようくお察し申上ますわ……けれども以前の事はもう過ぎた事、どうかお忘れ遊ばして、何時迄も義姉樣を他人の樣にあそばしてちや、お母樣は那麼に御心配だか知れません。義姉樣だつて。』

多く語れば喘む息苦しげなるに、

『俊ちやん、もういゝよ。兄樣の事なんか心配しないでお呉れ、第一心配しては身體に障るよ……。』

『はい……ですけれど是計りは是非聞いて戴きませんでは……妾もう此度は迚も癒るまいと思つて居りますんですから……。』

『馬鹿な、其樣な氣の弱い事云ふ物じやない……そんな氣だから中々治癒らないんじやないか。』

『ですけれど、どうだか分りませんわ……。』

心細き事云ふて笑む顏淋しかりし。

『どうぞ兄樣、妾お願ですから義姉樣に打解けて上げて下さいまし……兄樣のお心に成れば夫りや何でせうけれども……妾義姉樣にお氣の毒で、義姉樣のお心に成つたら何樣かと存じますわ。』

優しき眞情面に顯はれ見上る眼には露さへ宿りぬ。

『夫に會社の方も面白くないと仰有つて此頃は度々缺勤遊ばすし、お母樣は大變心配して居らつしやいますですから……。』

『俊ちやんの親切は感謝する、皆兄樣の爲を思つて呉れるんだから徒には聞かないけどね……あゝ何故恁ふ氣が弱いのか知らん。此儘何所か人も來ず靜寂かな思ふ事も何も無い樣な所へ行つて了ひたい。僕は全く何かして居るんだね……。』

『眞實其お氣をお棄てに成りませんじやあ……。』

『所が棄てられないんで自分乍らつく〴〵厭に成つて了つた。』

跡は復云はず、入りがての夕日華かなるに、色一入美しき椽先の海棠眺めて打沈み物を思へる樣、心はここに有るべくも見へざりき。

底の心

戀は七彩虹の輪の敢果なき物とは知乍ら、尙去り兼ねる煩惱の、迷ふは誰も之れなるかや。

六尺の男子と生れて高等の學を修め法學士といふ肩書もあり、物の道理明かに辨へたる身乍らも、胸のうき雲晴るる由なく、鬱々と面白からず、日を送る兄新二が心、底を探ぐれば皆戀と云ふ物故ぞかし。

數ある友が中に殊に親しみ厚き藤田とて、中學時代よりの中らひなりしが、春風樂しき家庭に咲く一本の美花、妹に淸く美なるがありて其名も艶なる櫻子とや、新二が心鏡の曇りはこれ。



水魚の喩へ物古りたれど、前つ世いかなる宿縁しやありけん、新二藤田を二なき友と睦めば、自づから家の人々とも親しく成りて、度々の出入心おきなく、さながら他人の樣にはなかりし。櫻子とも親しく言葉交へつれど、戀なかりし昔の目には、星の眼蕾の口美しとは見乍らも、遮る影とは成らざりけるぞ。

ありしや昔人醉ふ春の櫻の四月、藤田の家に慶びありて終日を彼家に暮せしが、是ぞ忘られぬ思出の日とぞ成りぬ。家人の厚き待遇云はずもがな。藤田が尺八櫻子の琴と合奏せて心行く計りの興限りなく、珊々珠を轉ばし鏘々璧を鳴らすにもまして、行く雲停

めしむる何等の妙音、三年經ぬる今日も尙餘韻は耳に殘るぞあやし。人にも醉ひぬ、曲にも醉ひぬ、曲果てて後下立つ庭は池もあり橋もあり、廻りて出づる築山の藤咲き亂るゝ櫻花の下にゆくりなく出逢ひしは美しの人、今の曲は大變面白かつたですよ。兄様の尺八も巧いが櫻子さんの琴も聞物でした。稱ふる言葉何とか聞きしいゝへちつとも出來ませんで。と恥らふ面に散るや紅葉の花より紅なる潮みちて、折からの春風に落花のはら〳〵。又なく艶なる様のさながら活きたる畫のごとく、此時の姿永久に忘れ難く腦裡に刻まれて、幅廣の白丈長高髷品よく、矢絣細かき京御召二枚重ねて、模様派手なる帯配合よく、手にせし薔薇の眞紅の色、殊に鮮かに見られしが。

其夜更けて歸るさ辿る朧の月影、夢路を行く心地の耳に殘るはなつかし琴の音、浮ぶは花下に佇む佳人が俤これより新二淸く澄める胸底に、深く、深く、何物かの影宿すように成りぬ。

始は心も着かざりし。是ぞ戀と見て取る俊子。身はまだ戀てふ想知らねど、優しき兄想ひにあはれ此戀成らせたしと、且や自らも近よりし事ある其俤。彼優しく美しき君我義姉と成給はゞとはかなき空想胸に描きて永遠の夢に幾度か微笑みしか。

青葉の茂みいや增る其六月。新二事なく大學を卒業し校門出でゝ後も藤田との親交變らざりしが、其年も僅か二月を餘す計りと成りぬる月の末つ方。さらでだに物悲しき秋の空、雲の深ひ淋しく胸を刺す風冷たき或たそがれ、藤田の家訪ふて歸りし兄が打沈みたる氣色常ならず、悩みありとは誰目にも著きに、兄様どう遊ばしたのと俊子案ずれば、俊やちん、櫻子様はお嫁に行つた相だ。今日藤田に聞いたんだがね。と復物云はず、まあと驚きて俊子夢かと疑ひぬ。

夫れより兄は兎角浮立たぬ氣色、戀は左迄に切なきものにやと俊子しみ〳〵哀れにぞ覺へし。

心の傷手、母は知らざるとにはあらねど、此儘に過ぐさん事をとすゝむる縁談避けにさけて、まぼろしに描く花の俤。

幾度かの縁談皆頭を振るに、困じ果てたる母が涙の諫め。之には流石否をも通し兼て今の光子を迎へしては、去年の春の名殘りを之に止めて、ゆかりの紫懐かしき、藤の花盛りの頃なりし。

好きが上にも好きを選みて、氣立も優しう、眉目も清く、女學校出なれば今時の蝦茶に珍らしきしとやかさよき嫁がと喜ぶ母に、俊子も、義姉樣々々と隔てなけれど、新二獨りは妻には名のみの他人扱ひ、見し昔の夢忘れ兼てや、見る目も氣の毒のやうの冷かさ、母が頭痛の種はいつもこれなり。

兄樣も餘りな、何程お想遊ばしたつて、もう何にも仕樣が無いのに、あゝ何時迄も外々しくして居らしつては姉樣もほんとに御氣の毒と根ざしの深く思草は、彼樣に何時迄も枯れる事の無い物かと、つく〴〵思浸みて果は兄の心恨めしう、さりとて事情は義姉にも明しがたう、いつと成らば隔ての狹霧薄らぎて親しく打解け給ふ樣に成る事かと、義姉の胸をも推量りて、小さき胸痛む俊子が心扱も優しや。

いまはの願、庭の海棠一雨毎に色あせ行きてあはれ艶麗なりし昔の俤やいづこ。

行く春の落花の雨しと〳〵と細き或夜なりき。

俊子が病俄に重りて容態只ならぬ樣なるに、母も兄も義姉も召使ふ竹も皆枕邊に寄り居て安き心もなく打守り居れば、うと〳〵として覺むると思へば眠れるがやう、瞻る母の目は涙にうるみぬ。

互に聲を呑みたる室の内森閑として、厨の方にがたごとゝ鼠の音のみ高し。

軒の玉だれ淋しき音の夢にや入りけん。

『お母樣……。』と力なき聲に呼掛けられて、

『俊子、母樣は傍に居ますよ。分るかへ……確かりおし……え、何所か苦しいの……何、義姉樣かへ義姉樣は此所にお出でだよ……。』

『義姉樣……。』

『はい……。』

澤の黒髪無造作の束髪にして、まだ初々しき妻振、片手を疊に面寄する樣にすれば、

『義姉樣……。』
『はい……何所かお切ないの。』
優しう夜着の襟に掛くる手を緊と取つて、
『義姉樣、あの義姉樣は何時迄も……何時迄も妾の義姉樣でね……。』
『はい……。』と計り答へは胸に迫りて口に上らず、涙の眼に朧と優しき妹の面見入れば、母は堪へがたなき斷腸の思ひ、容態追々怪しく、吭の邊り支ふる痰の今は吐出でん勢もなくて、義姉は脱脂布指に卷きて支への物を取上ぐれば舌唇乾き切りしも悲しく、羽筆に潤し遣るも母は中々涙なり。
『兄樣……兄樣……。』
『兄樣は居るよ……俊ちやん、確かりおし、え確かり。』
『兄樣、もうお永別れ……何卒妾が最後のお願ひ……ね、姉樣と中好く遊ばして……親しくして……。』
途切々々の言葉悲しく、光子は聲立てゝ泣きたきをぢつと噛緊むる切なさ。

『兄樣……何卒妾の……。』
『ほろ〳〵と涙こぼして屹と兄の面見入れば、
『俊ちやん、兄樣は悔心した。俊ちやんには永々心配掛けて濟まない。今日迄の自分は何て馬鹿だつたろう俊ちやん安心してお呉れ……此後は義姉樣とも親密にする……。』
臨終の際に迄、我爲心配させんのいとほしさよと新二つく〴〵心動かされて、男子の我れが今日迄の心恥づかしく、今ぞ拂ひ棄つる心鏡の曇り。
光子はよゝと泣き崩るれば、傍の竹前掛しとゞに共に泣きて泣きて。
滿足げに微笑みして目を瞑ぐ俊子。
『俊子確かりしなけりや、不可ないよ、俊子……俊子。』
嗚呼花哀し、月も冷かなり、妙齡の人去つて永遠へに歸らず。

選外一等

賞品送呈致し度候間秋津子女史の住所姓名を御報知あれ

弊店發賣の美顔料日ノ出クリーム幷に日ノ出煉香油は非常の御好評を辱ふし奉深謝候弊店は之の御高庇に酬ひん爲め一意美顔料に意を注ぎし結果昨年夏

金貳千圓餘（六千法）の懸賞を以て佛國に募集したる最新最良

のクリームにして眞の**美顔料**を得たり

乞ふ一度本品が如何に天**美**を**現はすか**

如何

せば歐米人の如く美人たるか

には五月一日以後發賣の美顔料

日ノ出クリームはそれなり

希は弊店が二千有餘圓を以て得たる世界唯一の本品を使用せられんことを

●則ち五月一日以後の美人劑日ノ出クリームは汎く歐米の美顔術を併用したる唯一の品なり

（詳細は本品の使用法に於て見られよ）

	日ノ出クリーム美顔料						日ノ出煉香油			
定價	五圓	貳圓	壹圓	五十錢	三十錢	試用十五錢	壹圓	五十錢	三十錢	十五錢
郵税	廿錢	十錢	十錢	十錢	四錢	四錢	十錢	十錢	四錢	四錢

特約店

南傳馬町 大西 白牡丹　小川町 信盛堂　竹川町 同支店　通三 順天堂　本郷三 兼康　神樂坂通 山城屋　神保町 中久

銀座壹 佐々木　諏訪町 中百　須田町 三井屋　四谷 白牡丹　池ノ端 守田　名古屋 村瀬　大阪 小林支店

東京日本橋區村松町

舶來化粧品商

須原啓三郎商店

郵貯口座七〇五七番

到所信用アル化粧品店販賣ス

（切取券）

此券御添の方は

女學世界第七號

一割引

◉東京博覽會紀念特賣五月三十一日限◉

▶期限後又は期限内と雖部數満つれば特賣を撤回し金拾圓に復す◀

帝國大學教授文學博士 芳賀矢一先生
女子高等師範學校教授 下田次郎先生
編纂



世上百般の知識を網羅し、日常實行の方法をも指示したる本書は何人にも必須の寶典たるは勿論なれども、家庭の女王たり家庭の中心たる婦人社會に向つては眞に一大福音を傳ふるものといふべし

本書はもと歐米に行はるゝ婦女辭典の精粹を抜き本邦婦女に緊切なる事項を加へ親切丁寧に模範的家庭の要件といふ要件を悉皆説明したるを以て嫁入道具としては鏡臺と共に無くてはならぬ持參品にて主婦にとりては時計と共に一日も見ずには居られぬ必要品也

育兒教育 ◉小兒は如何にして哺乳すべきか、如何にして教育すべきか。玩具の種類用法、遊戯の方法順序。禮儀作法の躾方より心理教育の原理に至るまで平易に且丁寧に説明したるものは本書也。

衛生醫療 ◉健康の幸福は如何にして維持すべきか。姙娠出産産後の養生月經等婦人衛生の各項目は勿論、小兒の疾病衛生療養に就ては特別の注意を與へ傳染病、精神病、呼吸器病を始め、内外科一切の疾病原因經過注意懸急手當等を親切明瞭に詳記したるものは本書也

料理裁縫 ◉飲食の料理鹽梅日本支那西洋食物の養分献立料理の方法より各種菓子の製法に至るまでを、最も明細に説明し、衣服の調製織物帯地の産地縞柄色合選擇の注意裁ち縫ひの仕方等懇切に圖解を加へて詳記せるものは本書也

裝飾技藝 ◉婦人美にして一層美ならしむべき裝具は如何。寶石には如何なる種類あるか。簪笄櫛指環は如何、香水白粉の選擇は如何、編物刺繍造花抹茶香合生花等の流派方法等を懇切に手に取りて教ふるが如く説明せるは本書也。

音樂遊戯 ◉音樂の嗜、舞踏の術も亦社交上婦人の心得べき事にして東西音樂の發達異同變遷及び樂器の種類樂譜の讀方、奏樂の方法、遊戯舞踏の抱旋方法等に就て明細に遺憾なく叙述せるものは本書也

文學美術 ◉婦人の品性を高尚にする文學美術、古今の詩歌、文豪の略傳著作書の解題を始め繪畫彫刻建築美術工藝品の特色、作家等に就て文明國婦人の知らざるべからざる知識一切を網羅し解釋したるものは本書也。

女子問題 ◉二十世紀の一大問題たる女子問題とは何ぞ。家庭社會國家に於ける女子の位地、權利、要求は如何、職業は如何、歐米女子の現狀は如何、是等の問題に就て最も確實精細に叙述したるものは本書也

以上は特に女子に關する重要なる事項なるが其外歷史地理理化博物宗教政治經濟軍事等何事も容易に且適切に説明したるものなれば娘としても母としても女學生も女教師も看護婦も小遣錢の一部を節倹して本書一冊を購ひ給はゞ生涯の便利驚くべきものあらん。裝釘の善美、挿畫の艶麗贈品としても乃至は單に家庭の飾物として價格以上の價値十分なるべし。

◉裝釘善美 ◉四六倍判 **千五百頁** 石版廿回極彩色 **挿畫**及**地圖卅一枚挿入**

◉**特價** 一時拂六圓五拾錢(着金順五月五日ヨリ送本) 月賦拂六圓九拾錢 月賦拂込金壹圓五拾錢以下毎月壹圓八拾錢拂込 ◉小包料市内四錢市外廿二錢臺灣韓清各七拾錢 ◉大冊挿畫入見本往復はがきにて御申込次第進呈

東京神田電話本一〇三六番
振替貯金五〇一一番

合資會社 冨山房

女(かの三)

法學博士 文學士 有賀長雄先生著

大日本歷史

▲上卷

●正價 金貳圓

●小包料 拾六錢

（既成發行）

全部上下二卷

菊判脊皮總クロース金押美本函入

紙數各約壹千百頁

特價（六月廿日迄の申込に限り）**金壹圓七拾錢** 外に要郵稅

有賀博士の帝國史略は本邦史籍中の覇王にして國體の完璧なるに均しく多大の聲價を有すること海內無比なり宜なる哉同史の歡迎せらるゝや累刊既に數十版戰勝國の紀念として玆に帝國史略の舊版を改訂し其缺陷を增補して大日本歷史上下二編の大著述を世に公にせらる。

博士筆を神代の太古に起して皇統連綿の國體を祖述し征露詔勅の煥發に至つて擱筆す其間事實の排列順序より日本社會の文明進步に於ける原因結果の次第を懇示し努て新說奇論を避け成るべく正史傳來の事實を紹述し處々に博士卓越の識見を加へらる例せば大化以前の血族社會の編制は博士が社會學の原則に依り特別研究を以て立てられたる見解多く又た中古戰國の狀態は憂ふべきに似たれ共其結果として地方到處に文化の中心を生じ所謂城下町なるものは今日の地方文明の起源なり是れ封建の餘澤なりとする說も博士の始めて本史に唱導せし所にして今日は通論となれり此他博士の創見に懸れる高論少なしとせず是れ本史が史界唯一の寶典として社會に濶步する所以なり殊に博士の謙遜なる更に本史の正確を得ん爲め閲を國學の諸大家に請ふて根抵的の修訂を加へられたるを以て綿上花を添ふの完全を得たり故に世上幾多の國史ありと雖も之を本史に對すれば其優劣月鼈も啻ならずと謂ふも決して誣妄にあらざるなり。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（かの四）

▲第三卷六號 五月一日發兌 懸賞佳作滿紙に溢る

口繪（三宅氏水彩畫（雨後の山水）○長原氏繪端書○重松女史繪手本○六大女學校の本年卒業生大寫眞、優等生、誌友面影數葉挿入

女子文壇

毎月一日發行外年四回增刊

紙數一冊大判百三拾頁

口繪 水彩畫、繪端書、繪手本、寫眞數葉入

價 送共一冊拾壹錢○壹年分壹圓六拾錢

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行

振替口座一七二九番

▲壹號より增刷取揃あり最寄になくは本社へ申込を乞

五月十五日增刊 ▲價拾錢

▲花百合 女子詩文滿載

水彩畫、繪端書、八大女學校卒業生寫眞、誌友面影數葉挿入

本誌見本に內容限り金六錢にて見計らひ送る

（かの五）

巖谷小波君著



全一冊洋裝
四六判上製
紙數三百五十頁
正價金九拾錢
郵稅金八錢
五月上旬發行

題して『子供心』と云ふ。內容は大方判じ得べし。蓋し子供を主人公としたる、清新高雅なる家庭小說、總て七編を收めたるもの是也。著者が當代のお伽作家たる事は、世已に定評あり。而もそれと同時に、巧みに少年少女を寫して、紙上に躍如たらしむる技量も亦文壇の珍とする所とす。本書の如きは、即ち其傑作中の傑作を集め、更に子供畫を以て獨特に妙ある、宮川春汀氏の極彩色挿畫七葉を添えたるもの。苟も世の子煩惱者にして、此書を座右に置かざらん乎、共に家庭を語る可らず、共に兒愛を語る可からず。

(かのた)

東京 博文館 本町

女（かの七）

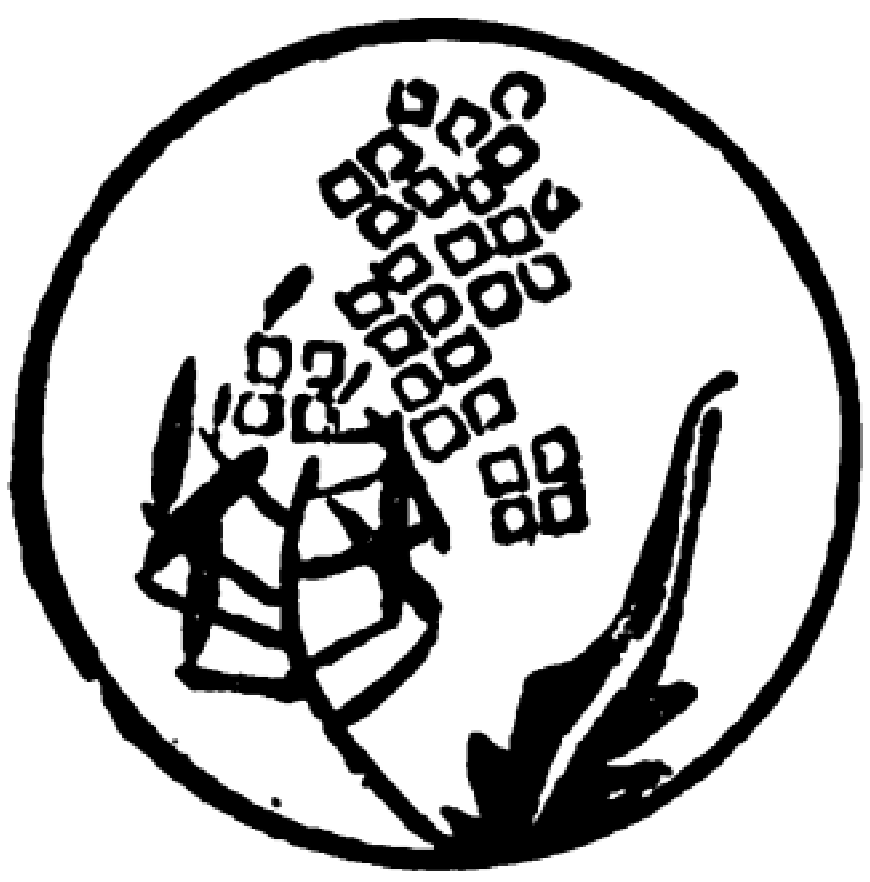
女(かの八)

黒髪

兒玉花外

今朝やさ髷の崩れてか、
　玉の双頬に涙雨、
模様褪せたる花袖を
　重ぬは京の清水の
美き人形に似るといへ。
その神ならで飲みがたの
　髪一筋は人を結び、
國と國とし繫ぐべし、
　あゝ千人の浮男を
縛りて浮き界に去れ。
伸びては空の極は垂るゝ





　雲に比へる黒髪を、
腕に捲いて脊にかけよ、
　衣にさららと音のして
匂ひそゞろに溢るなれ。
富よ、位よ、はた命、
　をみなの前に何ならむ、
日も彩雲にたゆたふを、
　君、東海の藻髪もつ
胸あたゝかの少女なり。
油艶かの黄楊の櫛、
　鬢も愁もとく〱と
紅の小指にときね君、
　さば新しき麗人よ
夏の花とぞ讃へまし。

初夏――若葉のひかり



端午の節句

端午は男の子の節句とて昔しは武家などにては、玄關の前に定紋染めたる、武者人形繪きたる、大幟をたて並べて子供のさいさきを祝ひ一門の繁昌を誇りたるもありき。今はさる事もなきやうなれど、なほ富める家は幾旒の幟鯉を屋上高く飜がへし、家の内に麗しき人形飾りたて、貧しきも紙幟の一つは買ひて、此の日を祝ふ。わが子の可笑さに古今貴賤のけじめはなきぞかし。

昔は端午に飾る人形としいへば、神功皇后に武内宿禰、さては八幡太郎、義經、清正、金時などなりけんを、今は大山大將も兒玉大將もさては乃木、東郷の諸將軍も其の列には漏れじとこそおぼゆれ。

當日の主人公たる腕白太郎君は、軍服に正帽帶劍の姿いさましく、喜び勇みて室内をかけまはり。今日は坊のお節句よと、姉妹を人形の傍に近よらしめず我物顏なるを、叱る母親の心の悦び、包まんとすれどほに出でつ。

一家の慶を粽の中にまきこめて、親戚知人に配りたる家庭には和氣靄然たり。

粽を贈る

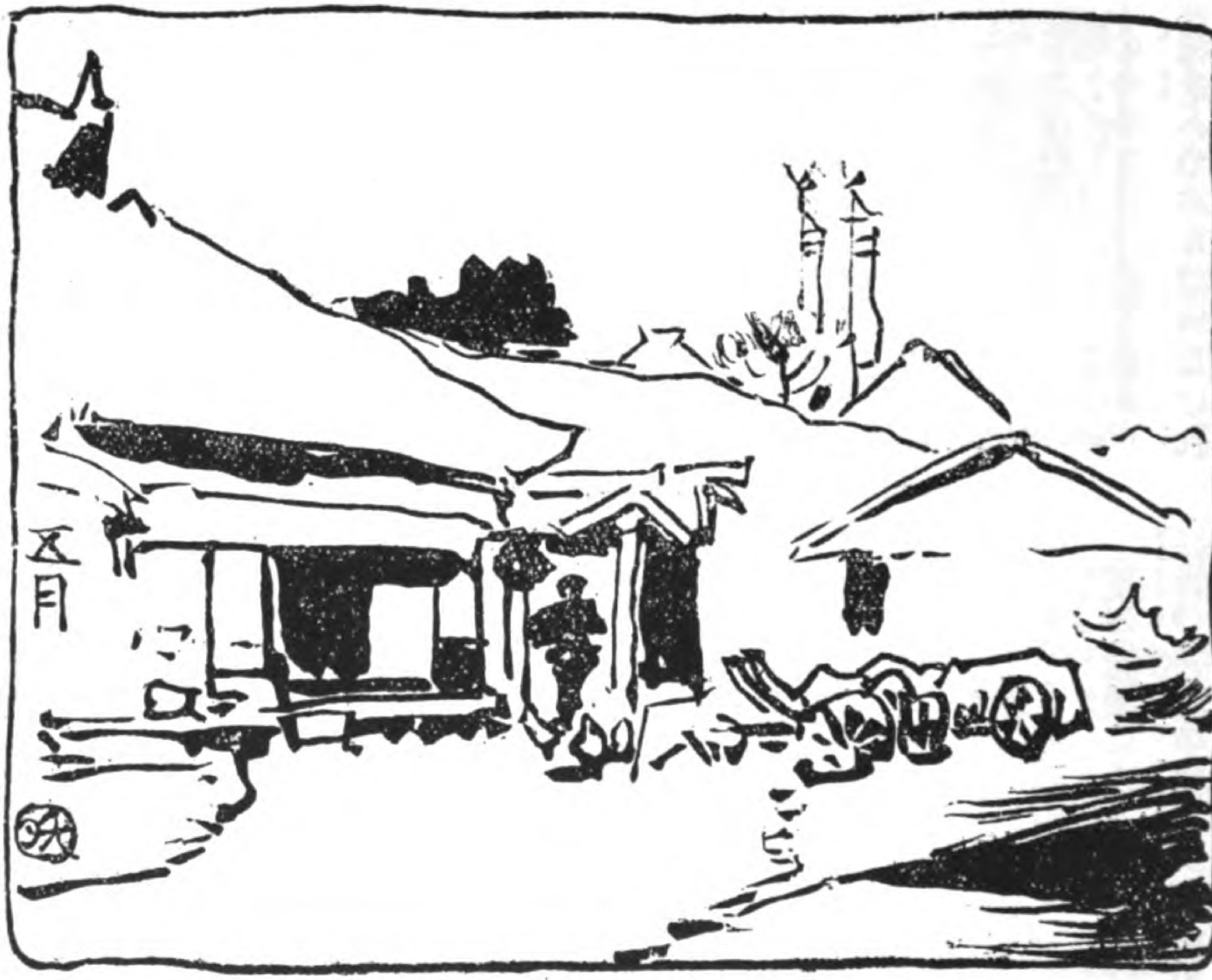
先日は長男の初節句にとて見事なる幟鯉御祝ひ下され大に屋上の光彩を添へ候段厚く御禮申上候娘を相手に手づくりの粽、不加減の上に不恰好に候へども御目にかけ候御召し上り下され候はゞいと嬉しう存ずべく候かしこ

きのふまでなれし袂の花の香にかへまくをしき夏衣

かな

新樹緑を吐く　土御門帝

梅子は黃ばみぬ。栗の花は咲きぬ。池の面は荷葉田田として浮びぬ。時節違へず降る五月雨の、或は急に或は緩やかに小止みなく、門前泥深きこと幾寸。たまぽこの道行く人もと絶えたり。近く響く簷滴の音、遠く聞ゆる蛙の聲、初の程こそ面白くも聞きたれ。程經ては却て耳に煩はし、薄暗き書窓の下に書讀みて暫しは徒然を慰むれど、これもすぐ倦み果て、庭の杜鵑花色やいかにと窓おしあくれ



ば、濕雲、席を襲ひて衣袂忽ち濕ふ。椽側には蛞蝓の這ひ廻りし痕、銀線を描き、物干竿は垣根に立て寄せられて、蝸牛の一つ宿り居るもあはれなり。

かゝるいぶせき日の夕暮になりて雨暫く歇み、ゆくりなくも松間に明月を見付けたるはまたなく嬉し。

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉

五月雨の雲吹き飛せ大井川　同

湖の水まさりけり五月雨　去來

さみだれや蚯蚓の通す鍋の底　嵐雪

さみだれやある夜ひそかに松の月　嵐雪

玉ぼこの道行き人のことづてもたえて程ふるさみだれの空　定家

夏の田家

梅雨始めて霽れ、水は犂きかへしたる千町田に滿ちぬ。山も林も倒に影を水面に映す。苗代の早苗伸ぶること幾寸、村は今揷秧の季節となりぬ。

夫や妻は言ふまでもなし、息子も、嫁も、兄も、姉も、妹も皆野に出で、家に在るは年よりたる老婆と、幼き孫とのみ。中には戸を閉ぢたるもあり。

うらわかき少婦は、今日を晴れに新調の紺の手おひに紺のはゞき、赤襷かひ〳〵しくかけて、菅笠被りたる姿、鄙びたるなかに優しきところあれど、田の中に腰かゞめて、われ劣らじと秧を植ゑては、あたら新調の衣裳も泥に塗れ、よごれぬものは歌のみなりけり。

畔に積み重ねたる七つ入子の中やなに。握り飯か、澤庵漬か、さては梅干か、御馳走とてあるはづなけれど、これぞ星を戴いて出でし朝來の勞を慰むべき晝餉なり、土瓶に入れたる澁茶は、彼等が渴を醫すべき甘露ならんかし、傍に置きたる籠の中なる嬰兒の泣く聲にひかされて、植うる早苗の筋亂るゝも、ありぬべし。

たそがれ時までも働らきて植ゑ終りたる幾反の田の面に、はや微風のそよぎ渡るを後に見て、家路に急ぎ、浴して泥かきおとし、夕餉はてゝ後、ふしどに入る。かゝる人々の夢には神や宿るらん。

水澄みて籾の芽青し苗代田　支考

里の子の燕握る早苗かな　同

苗代や仁王のやうな足の跡　野坡

折からの嫁くらべ見ん田植かな　鹿言

けふばかり男をつかう田植かな　千代

夏の住居

夏の庭園にありたきは陰、濃やかなる綠樹、數竿の綠竹、井上の梧桐、窓前の芭蕉、苔むしたる燈籠。離



外には涓々たる清流、庭内へ引き入れたるは尚よし。

一泓の荷池あれば更に佳なり。

家は茅屋こそよけれ。座敷は八疊若くば十疊の二間、ぬき椽なるに籐筵敷きつめ障子とりはづして、伊豫簾または青簾の品よきを簷に懸け、風鈴、しのぶ草など程よき處に釣る。床には墨書の夏山烟雨の圖など掛け、下には香爐、石菖の水盆など置く。違ひ棚に夏蜜柑、葡萄、林檎など盛りたる籠、金魚入れたる玻瓈瓶など排置せるは見る目涼しく、當世流にナイヤガラ瀑布の大寫眞など壁に掲げたるも惡しからず。椽先近く置きたる紫檀の机の上には硯、硯屏、水滴、文鎭など位置よく並べ、一輪活に白百合の花、挿したるは一しほ雅致あり。かゝる處に身を置きて心靜かに文學の書など讀まば、いかに樂しからむ。三伏の暑さもさまで苦しとは思ふまじ。

現にかゝる境界に在りて夏知らぬ人もあるよと思へば、羨ましうも嫉ましうもあれど、世にはまた九尺二間の裏店、どぶ溝に近く三疊か四疊の室に、家族の五六人も雜居し、釣る蚊幮だになければ夜もすがら蚊に

盤されて安眠せぬものもありと悟れば、わが境界の優れるを覺ゆ。げに上見れば及ばぬ事の多き世の中なれば、人は各々身の程を守るこそよけれ、分を守り命に安んせば、心自ら平靜にして清風に臥する心地やせむ。

夏の曉

春夏秋冬、朝早く起き出でゝ快からぬはなけれど、夏はことに然り、朝まだきに、臥床を出で、庭園を逍遙すれば、草も木も土も露に濕りて、さしもの夜熱は迹を留めず。爽涼秋の如し。空には一片の殘月影淡く籬には朝顔の花ほの白し。どことなう清き香のほのめくは、垣根の薔薇に朝風の渡るらん。椽側に煙草盆持ち出で茶を啜る老人もあり、碁を圍む雅客もあるべし。更に歩を移して郊外に出で、野路の朝露踏みしだきて靑田の中に立てば、四顧一碧。さながら大海の中に在る心地す。やがて日輪東の山の端にさし上るころとなれば、炊烟こゝかしこに颺る。春にも秋にもなき眺なり。夏を唯苦しきものと思ふは、朝寢して此の曉色の美を知らぬ人にこそ。

夏の雨

七八日照り續きて一滴の雨だになく、木も石もみな渴するがごとし、昨日今日の暑さ。まだ午前九時過ぎしばかりなるに、寒暖計ははや九十度を示し、なほも刻々に上りゆく。

午過ぎては暑さ金をも爍さんばかりにて、起きて見つ寢て見つ身のおきどころなし。汗は拭へども拭へども、にじみ出でゝ、濡手拭も水團扇もかひなし。げに、言ふまじと思へどけふの暑さかな。

きのふは餘所にのみ雨雲を望み雷鳴を聞きしが、三時過ぐる頃より雨雲のけはひ、たゞならず。けふこそは此處にもと噂して喜ぶ間もなく、雲脚ます〱忙しく、あたり俄に暗うなりゆき。やがて、さつと吹く風と共に豆粒のやうなる雨滴、二つ三つ芭蕉葉を叩く、すはこそと、洗濯物とり入れ麥の筵、疊むひまもあら

ばこそ、電閃き雷轟き大雨沛然として降り注ぐ。簷端の伊豫簾、風に飄へりて風鈴と共に墜ち、机上の紙片吹き散りてあはや椽先へ飛ばんとするにぞ慌てゝ雨戸閉ぢんとする者、盥持ち歩きて雨漏に備ふる者など、さわがしきが中に、手早く蚊遣釣りて潜み居るもあり。庭は一面の湖となり、門前は時ならぬ灘つせをなして水勢いとすさまじ。

やがて雲漸く薄く、雨歇み雷収まり、窓推しあくれば涼風室に満ち、暑さは洗ひたるやうなり。樹々の梢には露の白玉を宿し、東の空には虹たちのぼる。いづれも蘇りたる心地して端近う出れば、空さりげなう夕月の懸れるはまたなく涼し。

夕立や洗らひわけたる土の色　　其角

涼しさや夕立ながら入る日影　　去來

夕立に走り下りるや竹の蟻　　丈草

庭のおもはまだ乾かぬに夕立の空さりげなく出る月かな

暑さに堪へかぬるころ、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹き落ちたるに、柳、蓮葉なんどの、葉うらしろく見せたるもすゞし。やがて、大きやかなる雨の間遠におちたるが、後にはしきりに降り來て、ものおとも聞えず。土の匂ひきたるもいと心地よし。軒ばは珠の簾、懸けたらむやうに、たまみづの、たえまなく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし、または水はしらせたるに、人々しばしものいはで、打まもり居たるもおかし。

やゝ雲うすくなれば、池の面には、かぞふるばかり雨見えて小鳥など庭へおどり出で、餌ひろふさまなり。はじめ雲のたち出でしかたは、はや一しほ碧に見えて、虹なんど見ゆるに、木々のみどりの庭潦にかげ見ゆるもいと涼し。老いたる女など、かみの音におどろきて、はい出でたるが、けふのは若かりし時の如く、よく霽れにけり。いま時のは、かくはるること稀なり、なんど、早や繰言いふもあり。かれ

は、かく周章しなどいひて、かたみに笑ひよどみつゝ、けふは蚊も少かるべし、かみの音もいとかすかなり。此の頃のあつさも忘れぬとて、端近う出づれば、夕月の光り、さしわたりて、草木の露も玉なすに、こえふくれたる蛙の、ものまちがほに、空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもおかし。

五月の花

自然兒

櫻謝し桃散りて、四月の春は夢の間に過ぎ去つて、早くもこゝに初夏の景を迎へ、野にも山にも、うら若き綠葉の生ひ茂る世に、彼の躑躅や花菖蒲は、萬綠叢中の一點紅と思はるばかり、折りから一入の風情を添へて居ります。

されば日曜の散策に、府下大久保村に躑躅を賞し、堀切、蒲田邊に花菖蒲を見るべく、子女を伴ふて出掛ける人も、定めし多かるべく、之れが生態若くは形態に就いて、子女の質問に答ふべき參考にもと、聊か說明を試みませう。

總じて人が庭園に植ゑて、其花を愛賞するものを、觀賞植物と云ひます、何れも最初は野生の雜草で御座いましたを、人工的に肥料や日光水分を適度に與へて、久しき間培養を繼續した結果は、或は艶美なる花色を呈し、又は馥郁たる香氣を放つ樣になり、其形態も殆ど野生植物に見ることの出來ない、見事な園藝變種が出來上つたのです。

で日本固有の觀賞植物として、最も著しいものは櫻、梅、躑躅、菊、花菖蒲、牽牛花、牡丹などで此の中には日本の原產のものもありますが、又支那地方から傳來した物も少なくはないのです、殊に近來は舶來の觀賞植物が、到る所で培養されて居ますから、年は一年每に、園藝變種の數は多くなるでありませう。

さて躑躅には園藝上の變種が頗る多くありまして、今日日本の花戶に栽培する所のもの丈でも、優に六七十種あります、勿論之れは山躑躅の變化したのもあり

ませうが、原種が只一種でないと云ふことは、明かなる事實です。

躑躅の内で、殊に其花部の變化に富んで居るものは蓋し霧島の變種でありませう、即ち此の内には、本霧島と云ふて、單瓣のものも有るし、又二段霧島と稱して、複瓣のものも御座いますが、特に最も奇拔なものは、夫れ金蕊躑躅でありませうか、抑も此の金蕊躑躅は、肝腎な花の部分が、悉く雄蕊に變化して仕舞つて、一も花を見ることの出來ぬ種類なのです。

躑躅の花は、他の花の如くに上を向かないで、多くは横向きになつて咲き、そして其花瓣の上方に當れる部分には濃厚なる斑點が夥だしく附着して居ますが、之れは全く昆蟲を招く爲めの目印であります。



又躑躅の雄蕊を採つて、葯の部分を衣服に觸れて見ますと、其中から夥しい花粉が、極めて細い糸に繋がり、恰も念珠の如くに成つて續々現はれて殆ど無盡藏なるかと思はるゝ位でありますが、之れ等の花粉は、巧みに蝶や蜂の脚部に附着して、以て異花受精が完全

に行はるゝ事と爲つて居ます。

羊躑躅は別名を鬼躑躅とも云ひまして、普通の躑躅よりも大きく、木の高さは六七尺、葉も長くして粗毛が有ります、花は黄色で、やゝ赤味を帶び、多く山野に自生する種類ですが、此の花には非常に激烈なる毒がある故、若し誤つて羊が其葉を食へば、立所に躑躅して斃死すると云ふことが、古書に見えて居ります。

花菖蒲は、德川時代から、既に盛に人工で培養され、變種も極めて多くなり、今日では優に三百餘種に達して居りますが、猶年々新種の造出に勉めて居る故、此の後どれ丈變種が生ずるかは、殆ど知ることが出來ないのです。

花菖蒲の培養地として、古來最も有名なのは、東京府下の堀切村を第一とし、近年蒲田にも菖蒲園が出來ました、野生の花菖蒲は本邦の中央部から、東北地方へかけての高原に多く、元來陸生の植物でありますが、多少水質の地を好みます。

野生の種類は、花輪も瘦せて小さく、且つ花蓋は細長くして外方に垂れ、內部花蓋も又小さくて直立し、花の色は概して赤褐色を呈して居ります。

然るに之に反して、人工で培養されたるは、其變化は獨り花輪の形が大きくなつたばかりでなく、花の形態も非常なる變化を呈して、內部の花被が著しく發達して、爲に一見すると六瓣花の如くなり、且つ其瓣の數が變じて四、又は五と成れるもの、或は雄蕋や雌蕋が瓣狀を呈するものさへ出來たのです。

次ぎに花色も、形態の變化に伴つて、著しく變つて來て居ります、由來花菖蒲の原色は赤褐色でありますが夫れが次第に變じて紫色を帶び、更に紫、碧などのものがあるかと思ふと、絞り、斑入り或は白なども御座います。

のみならず其變化は、終に葉にも又之れを見ることが出來るので、此の植物の原種の葉は、彼の燕子花に較べると、硬くして直立し、幅も狹く、色澤の如きも甚だ濃厚でありますのが、一度園藝變種のものを見ると、之れ等の特徵は全く影をかくして、寧ろ大に燕子

花の夫れに似て居ることを、知らるゝでありませう。

此の樣に躑躅を見ましても、花菖蒲を見ましても、所謂園藝の變種に於ては、遙かに其原種と遠ざかり、恰も別種のものゝ如き觀があります、して見ると人爲の力のなかなかに恐るべきものであるとが解ります。



園藝家が多年の歲月を經て、其培養に依て得た所の善良なる變種を、更に繁殖せしむる手段は、之れ種子の力に俟たないで、多くは無性生殖、即ち挿木だとか根分だとか、接木とかと云ふことに依るので、夫れは種子に依つて繁殖せしめる時は、折角得たる良變種の特性を、完全に子孫に遺傳することが出來ないので、此の點は無性生殖に依るの外、良好なる結果を見ることは出來ないのです。

序に申しますが、近來は都鄙共に家庭に於て、園藝術が著しく流行して來ましたが、之は女子の敎育上にも、又婦人方の娯樂としても、實に面白いもので、殊に子供の内から、充分に植物を愛賞する觀念を養成すれば、啻に高尙なる思想を有たせることが出來るばかりでなく、世の中の事々に就いても、觀察が綿密になり、後日之に依つて受くる利益は多いでせう。

齲齒の豫防

△齲齒は、胃腸直接の關係物にして、隨て身體の健康を害し大いに壽命を妨ぐるの疾患をなすものなり誠に怖れざるべからず、此れが豫防法は種々あれども、先づ掃除の完全と食物の選擇等を以て主なるものとす、而して其掃除は毎朝、起床後は勿論、毎食後、齒刷子を精密に使用し、齒間に食物の殘留のなからしむるにあり、これ第一の要にして、第二は食物中過度の硬固物の咀嚼を避け、以て琺瑯質を損ぜざらしむるにあり、然れども吾人の食物中には皆に柔軟なる物質而巳を以て、充分なる營養を得るものにあらず、故に硬固の食物も滋養ある物は、時として食すべきの必要なきにあらず、されば能く過度の硬固物のみを避け、能く注意して用ゆれば琺瑯質を損ぜざるのみならず、齒牙並に齒牙を抱圍せる骨をして堅固ならしむるの効力あり、若し又不幸にして、齲齒發生せる時は速かに齒科醫に就き相當の治療を乞はざるべからず、齲齒の爲め續發する恐るべき疾患は實に多し、故に豫じめ防ぎて、大事に及ばざる様注意ありたし。

△齒石の掃除‖齒石は唾液中の一物質の沈澱物なるが故に、如何に刷子にて精潔に掃除する人と雖も齒石は必らず附着するものなり、而して其齒石の害たる啻に口內の汚臭に止まらずして、齒齦を充血せしめ、或は退縮せしめ自然に齒牙をして動搖せしむ、又齒の爲に一の誘發病あり、此病は齦緣より、膿を瀉し、或は次第に動搖せしめ、齒牙脫落の憂を速ならしむ、故に齒石除去は必らず一年二回以上齒科醫に就きて爲さゞるべからず、齒石除去は前述の害を豫防するのみならず、齒牙全體の檢査を受ると同くして、未だ自覺せざる疾患潜伏するも、醫師の注意を受れば初期に治療を爲す事を得るが故に、大事に及ばずして終生の幸福を得るに至る、依て齒石除去の事は何人も能く記臆して必らず實行すべきものなり。

△齒刷子と齒磨粉　　齒刷子は毛製と護謨製の二種あれど、毛製を用ゆべし、毛製中又た種々の品あるも、毛は軟硬の中間物を撰び、總て品質の善良なるを使用すべし、其使用法は少量の齒磨粉を附け、外側は總て齒の横に用ひ、齒の內側は横に用ゐ事能はざるが故縱に用ひ能く內外並に咀嚼面を注意して使用すべし、又齒磨粉は充分注意すべし、粗惡の品を用ゆる時は、齒牙を損すること甚だし、若し齒磨粉の撰定に困しまば齒科醫の教を乞ふべし、齒は老年に向へば脫落すると當然の如く思ふ者多し、此れ誤解の甚だしきものにして、人生百年の壽を保てば百年の齒を保つものにして齒牙の先んじて脫落するは保護の當を得ざる結果と知るべし。

女代診（其九）

糸左近

子宮病（下）

▲子宮周圍腹膜炎

〔原因〕子宮内膜炎子宮外膜炎から轉ずるのもあるし、或は月經の異常から來るもある、其他子宮の位置が變つたり、淋毒梅毒が之を誘つたり、又は出產後或は月經時の不養生から起るもある、月經時に不潔なる物を挿入するが如きは一方ならざる災を招くものである。

〔病狀〕病名は讀んで字の如く、子宮部の周圍なる腹膜に炎症を起し、爲に全身惡寒を催し、續いて發熱し、甚しきは攝氏四十度を超ゆることがある、此熱の爲に一方ならず咽が渇いて水を飲みたく、それで下腹は劇すが如くに痛み、即て草色の物を嘔吐し、便秘はする小水は通せず、非常なる困苦をするものである。併しながら斯の如く苦しむ割合に攝生及び療治さへ宜ければ治り易い病なれど、其の手當が遅くなつたり或は不適當なる處置をすると、腹膜炎が段々蔓こり或は膿をもち、遂に不歸の客となることもある。余の嘗て見たる該患者は例の草色物をガー／＼吐きながら「嗚呼痛い／＼早く下腹を斷ち割つて呉れ」と呻いてゐたが、左の如き攝生と專門醫師の治療とで、左しもの大患も三週間程で全治したのがある。

〔攝生法〕患者は悶へるものなれど、嚴重に身體を安靜にし、氷嚢を下腹に當て、氷を喫して渇と嘔吐とを鎭め、流動體の食物例へば牛乳肉羹汁等の如き外は必ず取らぬやうにするなど、萬事注意せねばならぬ。

〔療法〕本病は死ぬか活きるかの境なれば言ふまでも無く、專門名醫の指圖通りを堅く守つて更に我意を挾まぬといふことが何よりの療法である。返す／＼も賣藥

素人療治などに迷うてはなりませぬ。

▲子宮後血腫

〔原因〕卵巢の病或は喇叭管とて卵子を子宮に送る管の病などからも起るし、其他素人方に說明しても了解し難き原因からも來る、斯う申すと其の原因となる可き卵巢病喇叭管病の原因は如何と言はるゝかも知れぬから、一寸說明しておきませう、是等の病は其の原因色々あれど、多くは淋毒或は月經時の不養生が基である、是から考へても大切にす可きは月經時の攝生である。(女代診(其一)(其二)に述べてある)

〔病狀〕前病即ち子宮周圍腹膜炎と殆んど同じで、熱も出れば劇痛もある、便秘もすれば小水の通じも困難となる、唯前病と異なる點は下腹を摩つて見ると、拳程の腫瘍が有るやうに感ぜらるゝのと、今一つは前者の如く嘔吐の甚しからぬ事である。が併し是等の鑑定も醫師に非ずんば仲々容易に診分け難きものである。

〔攝生法療法〕攝生法は前者と同じことである、療法は灌腸をしたり、或は色々の吸收藥を內服したりするのであるが、之を記せば却つて醫療を受けぬ人が出來生兵法大疵の基となれば省く。

▲子宮纖維腫

〔原因〕本病を了り易く素人的に言へば、子宮が肥え太つて堅くなる病である、然れど何せに斯うなるかの原因は、醫學社會にも未だ本當に硏究が出來て居らぬ。

〔病狀〕下腹が壓迫せらるゝが如く、重苦しく且つ痛み小水は屢々洩したけれど、思ふやうに洩されず、下股は痲痺れ其上浮腫を發し、重くなれば腹水俗に云ふ腸滿を來す。若又右の如き病狀にならぬとすれば、白帶下を起し兼て出血を交へ殊に月經時には劇痛を覺ゆるに至る。又最も輕き症に在つては子宮は前屈或は後屈し、不姙症になる。凡て本病は其の初期恰も姙娠の如く思はるゝもので、名醫に非んば往々誤診することがある。

〔攝生法療法〕攝生法は前病と同じ、療法は外科的の手

術を以てし、其他内外の藥用は之を補ふのみである。

▲子宮肉腫

〔原因〕これも未だ詳かになつてをらぬ。

〔病狀〕初期は子宮より出血し、而して稀薄なる水樣の物を漏らすに過ぎねども、其液漸々量を增し、末期に至れば惡臭を放ち、多少の痛みを覺え身體甚だ衰弱するものである。

〔攝生法療法〕攝生法は矢張前病と同じきも療法は極めて早く外科手術を受くるより外に名法は無い一日遲るれば千秋の悔ありと知る可し。

▲子宮乳嘴腫

〔原因〕淋毒子宮內膜炎或は膣部の糜爛等より誘ふものである。

〔病狀〕子宮は下に垂れて花の如き狀態を呈し續いて白帶下を發し或は時として出血することもある、然れど痛みも起らす又惡臭を發することも無い。

〔攝生法療法〕攝生法は前病と敢て異ならず、治療法は唯單に外科術を受くるの一法あるのみ、其代り外科術さへ受ければ全快して何等の後害無きことだけは先々安心である。



▲子宮前屈及後屈

〔原因〕前屈は先天的もあるし、或は生れて後に發するもある、甲は處女及び未妊娠の婦人に多く、乙は一度出產或は流產したる婦人に多い、其の原因は產後の不養生便秘の習慣、過房、腫瘍又は他の腹膜炎より之を誘ふ。後屈は子宮周圍の病、膀胱の病、運動過度及び腹部を壓迫したるなどが主因となるものである。

〔病狀〕其の輕症に至つては何等の苦痛も感せず唯單に妊娠せぬといふまでのものもあるけれど、少し重いのになると、月經困難となり、月經時に疼痛を發したり、或は月經時外に出血することもある、又下腹に疼痛を覺えたり、小便近くなつたり、或は白帶下を起し、甚しきは覺えず小水を漏すなどの失態もある、而して何れも腰の痛むことだけは免れぬ。

〔療法〕早く專門の名醫に就き、ペツサリユームと云ふ器械で、其の復位を請へば格別の痛みも無く遂に全快し、爾來子無きを慨いてゐたる婦人も家庭圓滿の和樂を得らるゝ例少くも無い。

▲子宮脫出

〔原因〕劇しく腹部を壓したり、或は難產後或は老年の爲などである。

〔病狀〕これには全脫と不全脫との種類はあるが、兎に角子宮が垂れて出るのである。其の頓かに出るのは劇しき痛みを發し、それがために氣絕する者があるけれど、漸次出るものは下腹重く、腰痛み何と無く苦しいなアと思ひつゝ日を送る中、步行時に一物が股間に垂れて出るやうな感覺がし、續いて小便出難くなつたり便秘がしたり、起つたり座つたり甚だ困難してゐる揚句、遂に半脫或は全脫となるのである。初めの中に仰に臥てをれば自然と納るけれど、斯樣なことが屢々ある每に納まら無くなり、之を治療せざれば生涯脫出を以て終る人がある、嘸や此の世を果無しと思ふであらう。

〔療法〕これも初期の中に專門名醫の整腹術を乞へば必ず全治するものである。されど衰弱したる老婦や或は手術を好まぬ者は「マイエル氏軟護謨環といふ器械を挿み、勞働せぬやうにしてをれば、輕きはそれにて全

治し、重きは生涯之を挿んで、可成運動せぬやうに愼しむのである、この器械は幾個も求めおき、四五週間毎に取換へ大いに洗ひ淨めねばならぬ、さうせぬと臭氣が伴うて遂に腟炎といふ他病を發するものである。下等社會に子宮脫出の多いのは、產後日を經ずして勞働に取り掛る者が多いからである。故に何人も三週間



は床の中に平らかに臥てゐて、便通を調へ、精神を愉快にし、三週後尚七八十日の間は平時の生活に復せぬこそあらまほしけれ。

右にて子宮病の一斑を說いたが、兎に角十幾通りの種類有つて、各其の原因病狀及び療法の異なるものなれば、之を讀まれたる方は『私は子宮病ですが其の療法を敎へて下さい』などの極めて單簡なる質問は之から無いだらうと信じます、又子宮病といふ病は何れも其の初期に專門名醫の治療を受ければ、左程の苦痛も無くて全快するものなれど、躊躇緩漫時を經たり、或は素人療治又は賣藥などを服んでる中に、取返しの附かぬことになるか、或は一生涯不姙の嘆を招くものなれば『多少の白帶下は女の常である』などの伸氣な主義を以後懷かれぬことだらうと、是亦確信する所である、斯く信ずると共に、余は新に、賢明なる讀者諸君に望む——事が二つある、其一は

子宮病であるとの感覺が有つても無くても、妊娠せられぬ方は、一應婦人科專門醫の診察を受けられ、醫師より「子宮其他に何等の異常が有りませぬ。」との確答が有つたら、夫人の方は先づそれで目出度として、今度は其の良人に何か故障無きかと、亦一應內科醫の診察を受けられたい事である、古來我國では「子無れば其妻を去る可し」との、誰が定めたと無い自然の條規があつて、明治の今日でも實行せらるゝ人も中には有るやうだ、之を西洋心醉のハイカラ連に言はしむれば、絶體的に批難するけれど、一方又祖先崇拜の家族的生活を爲せる國風に於ては、強ち殘酷なり不道德なりと言はれぬ點もある、之に就いて余は倘一大議論が有るけれど、衞生の範圍外なれば爰に之を省き、兎に角子無きを女子一方の責に任ずるの甚だ不當なることを一言附記しておくのである。其二は出產してから乳授せぬと上來講じたる子宮諸病の一原因となることがある之を大いに說明しておかねばならぬ、抑も妊娠すれば月經閉止し、出產すれば乳汁の分泌するは自然の生理で有つて、病氣で無い限りは之を哺ませねばならぬ、然るに乳汁の分泌盛んなるにも拘らず、出產するや否やパッタリ之を止めれば、其の結果子宮に炎症を起し或は子宮內膜炎となつたり、或は子宮實質炎となつたり、其他前記諸症の原因となることも珍らしく無い、又乳汁の分泌を止めれば身體の未だ調はぬ中に早く妊娠するやうになり、從つて薄弱なる子を產むに至る、而して乳母或は牛乳で育つ兒は之を母乳の者に比ぶれば心身の發達何うしても惡く、一生涯の不幸となるものである。

之に就いて村上文學博士は倫理上より左記の如き意味を以て慨かれたことがある。「均しく花なり均しく樹なり、されば其の美を愛する點に至つては何れに植ゑてある花木たりとも、何人が培養したるものとても、何の差支もなき筈である、言葉を換へて言へば自然に野山にあつた花木を我が庭園に移し植ゑて眺むるも、植木屋が數年の間丹精して育て上げた物を買つて眺むるも、自ら種子を蒔き培養したる物を眺むるも、其の

美を愛して我が精神を樂ますといふ點に至つては、大いに階級あるは如何、即ち植木屋から買ひ求めたのは其愛最も少く、野山にあつたのを移し植ゑたるは其の愛これに勝り、自分が種より培養したるものは、其美前二者より劣るも愛情大いに増し、精神を樂ますといふ點に至つては、天地霄壤の差がある、これ言ふまでもなく植木屋より求めたる物は、少しも我の手數を加へて無いのに、其の野山から移したのは聊か自分が撰擇の勞を加へてある、第三者に至つては或は時に蟲害を除いたり、或は時に水を注いだり、或は時に枝振を直したり、或は時に肥料を施すなど、其の手數一通りで無い、されば自ら其の中に愛情が籠つて、其精神を樂しますこと一方で無いからである。嗚呼無情の花木我れ彼れを愛するも彼れ我れに何の愛無き物に於て斯く然り、況んや有情の母子に於てをや云々」と、實に其通りである



然るに世の富貴と稱する輩の中には天が賜うたる大切なる我が兒に充分なる乳汁あるにも拘はらず、乳母を雇ひ、或は牛乳を與へて、父母自身は恰も時鳥の生放の如くに、二六時中顔さへ見ずに遊山見物に貴重の時間を費してる無情者が往々ある、斯樣にして成長すれば其父母に於ても、其の子に於ても、其愛といふ點に至つては、唯實母である、唯實子であるといふ世の制

裁的上から、「、他人の樣で無いまでゝある、若し夫呱々の聲を上るや否や、即ち產蓐に在る時から、さア／＼お飲よと、時を計つて我垂乳根を哺ませ、或は時に襁褓の世話もなし、或は時に糞尿をかけられ、何の言葉も解せぬ中から、恰も大人に物言ふ如く、這よ立よと、我身に伴れる老を忘れて育つれば、子も亦少しの暇も母樣／＼と戀しくて堪らぬのである、親子の情は斯くあつてこそ、其慈其孝も全けれ。余は不幸十九歲にして母を失ひしが、其年になつてゐても、母の乳房を見ると、何と無く戀しくなり、乳嘴を一寸摘むと、母は『何だ親爺のやうな年して』と微笑みながら叱り玉うたが、其叱る中に、母も矢張嬉しかつたらしい、今之を思ひ出せば、頻りに風樹の感に堪へぬのである。

家毎に藏す可き救急箱

「季節衞生」を書く可き筈であるが、五月は一年中で最も良い氣候、言はゞ太平の時なれば、取り立てゝ書く可き事も無いから、其代り、治に居て亂を忘れぬ爲として、此期を利用し、救急箱を御覽に入れる。

救急箱の蓋を取れば何があるかと云ふに、左の品々である。

二十倍の石炭酸水　一磅
沃度仿謨　半丂　沃度仿謨は劇藥であるから、代りにデルマトールでも宜い、
昇汞ガーゼ　半反
獨逸絆創膏　一鑵　英吉利のもあれど落ち易い
亞麻仁油紙　十枚
繃帶　五卷　幅二寸の物二卷、幅五分の物一卷、幅一寸の物二卷
亞鉛華軟膏　二丂
芫菁軟膏　一丂
剪刀　一個
ピンセット　一個
膿盆　一個
スポイト　一個
氷嚢　二個
海綿　二個

安母尼亞水　一磅
芥子　三オンス
赤葡萄酒　上等舶來　三オンス
撒曹　一オンス
重曹　一オンス
體温器　一本

乃で是等の品が如何なる塲合に必要なるかを簡單明瞭に解き明しませう。

過つて二階から落ちたと同時に、下に何か危險物が有つて、身體の或る一部に創を受け出血淋漓迸るとすれば、如何に處置す可きか、先づ救急箱を開き、海綿を取り出して、其出血を壓迫しておいて、一方には二十倍の石炭酸水一合に水二合を加へて五十倍となし之を以て其の創を洗ひ、沃度仿謨を撒布し、昇汞ガーゼを石炭酸水に浸し、之を當て、亞麻仁油紙を被ひ、其創の大小に依り、相當の繃帯を取出し、繃帯をする。次に



出血はせぬけれど、強く打身をして其部が痛んで堪らぬ時は氷嚢に氷、氷無くば冷水を入れて之を當て、ドン〳〵冷却せしむる、斯うしておいて速かに醫療を受ける然らば

落ちて氣絶したら何うする、早速安母尼亞水を嗅がしめながら、オーイ〳〵と大聲に呼び、兎に角正氣に立

も返らしめねばならぬ。斯の如く安母尼亞水は實に要用なるもので、凡ての失神者に嗅入せしむれば、興奮刺戟の功あること甚だ大なるものである。

正氣に立ち返つたれど、大いに衰弱虚脱してる時には、如何。それには例の赤葡萄酒を十瓦乃至二十瓦小盃に一杯程に水を加へて稀薄にし、之を服ましむれば、血液大いに循環し、一方ならず勢力の附いて來るものだ。

掛洋燈が頭上に落ちて火は全身に蔓つたさア何うする醫者の來るまでには其虚火葬になつて了はねばならぬ乃で直ちに其人を倒し、呉座薄縁或は夜具の類を以て身體を包み、コロ〱轉がして火を揉み消し、消えたら、着物を脱ぎ、シャツの類は剪刀を以て切り取り火傷したる部は冷水を以て冷し、水ぶくれは針にて刺し、水を出してから亞鉛華軟膏を塗つておく。

毒蛇或は狂犬に嚙まれたら如何、矢張救急箱を開いて芫菁軟膏を塗け、其毒を吸ひ出さしめおき、一方には急使を醫家に走らすが宜い。

花は今を盛りと咲いてる下を「これは〱」と賞めながら、散歩してると、豈圖らんや小蟲が飛んで來てプーンと耳中へ入り込んだ、指を入れて取らうとすれば益々深く這入る、斯る時には何うする、即ち例のピンセットを取出し、「さア之で撮み出して下さい」と、家人に頼み、取れたら微温湯をスポイトに含ませ、膿盆を耳下に當て、シュー〱と洗つて貰へば速にサッパリとなる。ピンセットは斯の場合のみならず、手に刺の立つた時でも、咽に食物の閉塞したる折にも之にて撮み取れば、實に都合の好いものだ。

ウッカリ誤つて何か毒物を飲食し胸がムカ〱して堪らぬ、救急箱に何か宜い物が無いか知ら、有る〱——早速芥子を取り出して湯に溶かしグット服む、嘔氣頻りに催し、取つたる飲食物を悉く吐いて了ふ、ア、これで氣持が善い、すんでの事で一命に障るのであつた。其他芥子は痛む場處に塗つたり、或は小兒急癇の時などに芥子湯をして脚を温ため、血液を下部に導くなど、是非貯へておかねばならぬ。

夜は既に深け、雨はザンザと降り、風はヒュー〱

と吹く折に、忽ち身體は火の如く熱し、苦悶に堪へぬ所から、檢温器を取り出し、計つて見れば四十度に垂とす、けれども醫家へ走らす可き使者も無い、此時に當つて賴みとす可きは唯一つ救急箱あるのみ、取りも直さず開いて撒曹一瓦を一杯の水に溶かし、砂糖を入れて服み、夜の明くるを待ち、醫師の來診を乞ふ時分は、既に熱も下つて殆んど平熱、まづは一安心。

別に惡い物も食た覺えは無けれど、急に瀧なす嘔吐、然るに時は午後、何れの醫師も生憎留守、乃で用に立は重曹である、即ち重曹三瓦を水一合に溶かし、少し宛適宜に服みながら氷片を喫してゐると、軈て醫師の來診、『此分なれば、別に御心配な事もありませぬ』

次に救急と云ふ譯でも無いが、轉んで一寸擦り剝いたとか、ナイフで小さな創を附けたとかで、醫療を乞ふ程でも無いから、其儘放棄つておくと時には其創から毒物を吸收し、甚しきは破傷風になるやうな事がある、されど之が心配になるからとて、仰々しく繃帶する程の創でも無い場合には、獨逸絆創膏を弱き火に焙り又は石炭酸水で濕し、之を貼ておけば必ず大事にならぬ、煙草や袂糞を附るなどは眞平御免。

以上は一例宛を擧げたに過ぎぬければ、其の他種々の場合に此の救急箱を應用せらるゝことの大なるものである、悉く取揃へて價は僅か五圓に過ぎぬ、是非〱貯へおかれたいものである。



衞生顧問

雜の部　色々の有益なる問答がある

爾來、皮膚科・婦人科・產科・內科・耳鼻咽喉科・藥物といふやうに分けて記しましたが、今回は何科と定められぬものを取交せて答へませう。

（眼科專門醫に就いて）問妾は不幸にも斜視に候が手術を受くれば治るとの事、果して然らば何處の醫師に治療を乞うて宜しきや。（青山愛讀生泉子）

答色々の博士ドクトルは一々數へられぬ程あるけれど余は一々住所番地を記憶せざれば近々掲ぐることにしませう、兎に角醫科大學の眼科部に行かれたら如何です、斜視は手術を受くれば必ず普通眼になります。

（浴後の水浴）問二三年前より浴後に水をかぶることにしてゐますが衞生上如何なものでせうか。（小樽の乙女子）

答入浴後冬は水をかぶること宜けれども、夏は宜しく有りませぬ、何となれば、冬は外氣寒きが故に、冷水を被つておけば、其寒さを感ぜぬ所の利益あるけれど夏は其の反對の結果を來すからである。

（猫脊の矯正法）問私事俗に云ふ猫脊にて甚だ醜く候が如何して之を矯正致されませうか。（遠山霞女）

答毎日數回、一回五分時間程宛書物を頭上に戴せ、之を落さぬやう練習し、遂に小走しても落ちぬやうになれば直ります、けれども或る病氣の爲になつてるのとすれば其の原因療法を施さねばなりませぬ。

（脫腸に就いて）問私の子供は脫腸に相成り居り、手術を施さねば治らぬとの事幾歳までの中に手術を受くれば宜しきか。（臺灣の心配女）

答十四五歲頃に手術を受けられたら宜いでせう。それまではヘルニヤ帶を附けしめておくことが肝要である

（がんがさの療法）問足の外部痒く、其の揚句に妙な物がポツポツ出來て困り居り候、之は俗に申す「が

んかさ」に候や、何卒其の療法を御教授下され。（神奈川の憂女）

答妙な物が出來るとは又妙な問であつて何とも答へられませぬが、果して「がんがさ」ならば、醫道で言ふ所の濕疹である、濕疹の療法は毎日入浴して、浴後左の處法中の一を塗けるが宜い。

(1)ナフトール　五、〇　アルコール　一〇〇、〇

(2)レゾルチン　二、〇　黄色華攝林　一〇〇、〇

(3)撒里失爾酸　二、〇　黄色華攝林　一〇〇、〇

（いゝ皺の寄らぬ法）問顏に小皺が澤山出まして誠に見苦しう御座いますが之を直す良藥は有りますまいか。

答斯る良藥は存じませぬけれど、或人の説に（一）硼砂を溶かして塗けたり、洗つたりする事、（二）湯で顏を洗はぬ事、（三）冷熱の劇變を受けぬやうにする事、（四）「ローラ」といふ物で顏を撫でる事（化粧品店に賣つてある）（五）心配をせぬ事。この五ケ條を守れば六十歳までは皺を防がるゝものだと、併し皺の源は榮養不足或は老年の爲に、脂肪分の減じて皮膚の弛むのであるから、滋養食物をドン〳〵取つて適當なる運動をすれば大いに防がるゝものと信じてゐる。

（いゝ授乳を廢する藥）問滿三歳の小兒出もせぬ乳嘴を飲みたがつてなりませぬから、可愛さうなれど、何か塗けて懲りさせようと思ひますが、害にならぬ物を敎へ玉はりたし。（深川の雨筍母）

答鹽酸規尼涅甚だ僅かを水に溶かし之を少し塗つておかれよ、非常に苦いもので、何れかと云へば健胃劑にもなります。

▲（鳥取の廿三歳母）に答ふ——前法を施されたら如何です。

（いゝ巴布の製法及効能）問巴布は如何にして作るものに候や又其の効用を御教示下され（京都の江戸きん）

答鍋に湯を沸し、少許の糊粉を入れ、煮つゝ攪拌し、軈て又少量を入れ、前の如く攪拌し、斯の如く次第に入るゝときは軟かき糊の如くになる、これを布に移し廣げて局部に當て、輕く纏ひ置くのである。偖何の爲に之を用ゐるかと言ふに、濕氣と熱を與へるが目的で其の効用は局部の疼痛を減する事、化膿を防ぐ事、若し化膿したる後には早く膿を吸ひあげる事、炎症の廣

がらぬ事等の効能がある。

〔病人と梅干〕問 病人の梅干を求める時には與へても宜しうご座いませうか、宜しとすれば何か調理法の無きものに候や。（神戸の珠更女）

答 大抵の病人には與へた方が却つて可し、余は調理法を別に存じませぬが、成る可くは其儘ザット湯煮となし、皮を取つて肉のみを與ふる方が宜からうと信じます、又若し病人の欲するならば、砂糖を附けるも可からん。

〔喰合に就いて〕問 菌に氷、蕎麥に田螺、鷄肉に鰻、燒酎に熱湯、章魚に餅は喰合になつて死ぬと申しますが、本當で有りませうか、又此外にも恐ろしき喰合有りとすれば、衛生上大いに御列記有らんことを乞ふ（佐賀のヒタ〳〵女）

答 普通食物と普通食物との喰合は、古來言ひ傳ふるが如き恐れのあるものでは有りませぬ、然れど菌に氷、燒酎に熱湯、章魚に餅の如きは宜敷ありますまい、何となれば其一品宛を食しても感心せぬ品なるを、二品同時に取れば尚更害あるを免かれぬからである、次に鷄肉に鰻は一品宛とすれば、何れも滋養品なれど、二品同時に取れば、餘り脂肪に過るからでもあらう、兎に角同時に食す可き食品は種々異性の物を調理した方が食慾を增し、且つ滋養の功あるものと信ず。

〔鼠取藥に就いて〕問 猫を蓄へば不潔なり、蓄はざれば鼠の亂暴甚しく、又ペストの恐れも有之候へば何卒人間に害なくして、且つ醫師の證明書無くとも買へる鼠取藥を御敎へ下され度六かしい御注文申すやうなれど、くれ〳〵御願申上候（大坂の恐疫樓）

答 硫酸鐵一瓦白糖十五瓦の割合を以て混製し、芋或は飯の如き食物と混じておけば鼠之を食ひ、大抵往生するものなれど、ストリキニー子其他の毒藥の如く直ちに斃れませぬ。

〔絲瓜の水の効用〕問 絲瓜の水で顏を洗へば色美しくなるとか申しますが果して右樣の効能あるものでせうか。（栃木の好美郎）

答 想像せらるゝが如き効能あるものでは有りませぬけ

れど、兎に角清水なれば其の新らしきもので洗はれたら、幾分の効有りませう、其他腦病の人が毎日三四勺程宛其の新鮮なる物を服用してゐると、病勢次第に衰へて、爽快になるものだと、俗に申しますが、余は經驗も無く、又學理上よりも説明することは出來ませぬ。

〔母乳に就いて〕問長男五歳が生れた當時に、私は脚氣病で有りました所、御醫者は乳汁を與へてはならぬと申され、牛乳にて育て申候、然るに今又來月に出産するのでありますが、脚氣の外如何なる場合に母乳を禁じて宜しきか伺ひたし。（安藝の山縣母）

答其母にして、ヒステリー、肺病、精神病、梅毒、淋毒等の傳染病や遺傳病の有る場合、乳腺の發育不充分なる人、姙娠したる時、熱病に罹りたる折等は勿論禁せねばなりません。



〔腦の養生法〕問私は今年十七歳でありますが、前途尙専門の學科を修め度存じますが、それに就いて最も使用せざる可からざる腦の養生法は如何致したら宜しきものに候や、其大體を御聽かせ下されたし。（遠州の不轉校女）

答(1)髮は常に清く洗ひ、雲垢の溜らぬやうにする事、(2)早寢早起を實行する事、(3)便通及び月經を規則正し

くするやうに計る事、(4)炭火洋燈等の火氣に長く近づいてゐぬ事、(5)寧ろ運動に過ぎても勉學に過ぐ可からざる事、(6)何事も規律正しくす可き事、(7)興奮性の飲食物を避ける事、(8)徒に心配をせぬ事、(9)屢々光線に觸れねばならぬけれど、日光を頭部に直射せしめぬ事、(01)雨浴或は冷水摩擦を是非共實行したき事、右は其の一斑である。

〔午睡の可否〕問午睡を一時間の範圍内に於てなせば甚だ藥だと云ふことで、昨年の夏より始めましたが此頃又大いに有害なるものだと聽き及び候、何れを正しとすれば宜しきか伺ひ度候。(備中の二人子持女)

答身體强健にして且つ勞働する者に在ては、午睡却つて身の爲になる場合も有れど、大抵の人に在ては、頗る有害なものである、今其の弊害を云へば、寒冒に罹り易き身體になる事、勇氣に乏しき者になる事、腸胃の活動を妨ぐる事、不眠症になる事、腦を鈍くする事等である、早く其の習慣を矯められたい、若し睡魔の襲ふ事あらば直ちに戸外散歩を爲さる可し。

〔睡眠と年齡〕問私の宅では、舅六十七歲姑六十二歲、夫四十一歲、私三十五歲、長男十一歲、長女八歲二男五歲、二女一歲二ケ月でありますが、其の睡眠時間を各如何樣に致したら宜しいものでせうか、之に就き常に色々議論をして居るので有りますれば、何卒御沒書になさらぬやう偏に御願申します。(石川縣眠度婦)

答面白き質問である、凡て睡眠は年齡と逆比例をなすもので、年齡大なれば睡眠小といふ割合にせねばならぬことは前々述べたが、今其の標準を言へば、一歲乃至二歲の嬰兒は眠る程其の發達の宜きは誰も能く知る所、四五歲位から七八歲位までは夜中は十時間以上而して午睡も多少爲さしめた方が宜い、八歲から十二三歲までは九時間乃至十時間、十三四歲より二十歲までは八時間乃至九時間、二十歲以上三十歲位までは約八時間、三十歲以上四十四五歲までは約七時間、四十五六歲以上六十歲までは六時間乃至七時間、六十歲以上は大抵六時間にて可ならん、然れども腦及び筋骨使用の程度に依りても多少の相違ありと知る可し。

〈貝類の滋養價〉 問 私は牡蠣鮑蛤榮螺等の貝類を非常に好みますが、滋養になるもので御座いませうか、又七八歳の小兒に與へても宜しく候や伺ひ上げ候、（穴守の稲荷信女）



答 牡蠣は多量の蛋白質と水分とを含有し、消化も宜きものなれば、小兒老人何人にも宜けれど鮑蛤榮螺に至つては蛋白質の量多きにも拘らず其の消化宜しからざるのみならず、凡て貝類は不潔なる所に生息してるから、左の調理法に依らぬと往々中毒することがある故に小兒老人には可成與へぬ方が安全である。

貝類の調理法――貝類は其の肉を貝より出し、重曹水に暫時浸しておいて、それから又其の重曹水で能々洗ひ、然る後能く煮或は焙つて食せらる可し。

〈野菜物の滋養價〉 問 筍蕗蕨獨活大根牛蒡小松菜三葉の滋養價を御教へ下されたし（信州の海不知女）

答 左表の如しである

食品	水分	蛋白質	脂肪	含水炭素	礦物質	滋養分合計	灰分
筍	九〇・二二	二・二八	〇・一三	四・四七	一・〇一	七・八九	〇・九〇
路	九一・一八	二・八三	〇・一三	一・四二	一・一八	五・五五	二・二七
獨活	九五・二〇	一・〇六	〇・一〇	二・四七	〇・九七	四・〇〇	〇・七〇
大根	九三・四五	〇・八〇	〇・〇六	四・九三	〇・四〇	六・一九	〇・七〇
牛蒡	七三・八〇	三・五〇	〇・〇二	一九・七〇	〇・八〇	二四・〇二	二・一〇
小松菜	九二・六三	二・五〇	〇・五三	一・一八	一・三八	五・五八	一・七九

麥	三葉
九一・一八	九〇・八六
一六・八五	〇・八六
〇・一五	〇・一三
一・四二	三・四六
一・一八	一・三三
四・五五	四・九六
三・一五	一・二八

註＝＝滋養合計とは水分灰分を除きたる物、灰分とは人體に到底吸收せざる物。

之に依ると牛蒡が第一等で、次が筍、其次が大根、獨活が最下等の食品になるけれど、其の滋養分の吸收する多少にも依れば、一概に此表のみを當に出來ぬこともある、されば其の嫩弱な物を色々取り交せて、食するが肝要である。

（ヽ、ヽ、牛馬と米麥）

問　馬肉を牛肉に比し、米を麥に比すれば人體に及ぼす効果は如何なる差あるものに候か、御教示を乞ふ。（埼玉の姉のた借讀生）

答　表は略すけれども牛肉の水分等を除きたる滋養合計は二八・四五、馬肉は二六・三八、米は七八・九三、麥は八二・六〇である、然れど其の滋養分が吸收せずして、徒らに糞便となる結果を言へば、牛肉は二・六〇、米は二八〇といふ少量が徒費せらるゝに過ねども、馬肉は二一・二一麥は一五・一〇といふ大量が何の役にも立たず

唯好き肥料になるといふまでゝある。

右の外雜部には「指を細くする法」「丈を低くする法」「痘痕を除く法」「肩幅を狹くする法」などの如く到底不可能の事や或は藥價を尋れたり、或は卑猥なる問等夥多あれど、答へずにおきました、又外科手術の方法や藥物の分析法なども記した所で斯學專門の學生ならいざ知らず、一般讀者の爲には了らぬのみならず、左程の益も無ければこれ亦書かぬことにしました

婦人と肺病

ドクトル　和田芳橘

△罹病者と死亡數

肺病の恐るべく、又恐れざる可らざることは、誰しも承知して居ることとで、是れが豫防消毒の如きも、色々と研究されて、其筋でも夫々注意する所があるにも拘らず、現に其罹病者は、年々増加するばかりで、試に統計表を繙いて見ると、遉がに悚然たらざるを得ぬ。而して、其統計の示す所によると、従來は男子の罹病者が多數であつたのに、近來女子の罹病者が漸次増加

して、今や其比例に於ては男子よりも増加率が著しく多數となつて居る。所で其死亡數は、從來に於ても女子の方が比較的多數であつたので、現下の如く増加率が高くなつて來ては、死亡數も亦隨つて多くなる理由だ。

で、何故に、女子の罹病者に死亡數が多いかといふのに、誰でも肺病に罹ると恁ういふ考へを起す。肺病は難療不治の病で、一端之れに罹つては到底癒らぬ、夫故、醫師から肺病と診斷されたら、乃ち死の宣告を受けたも同然で、其以後の殘生は、夕を待たぬ朝顔の花に等しく、露の干ぬ間が命と思へ！　この考へは何の患者も持つて居るので、現に自分等も此の病に罹つた時、最初に右樣の感を抱いた。

併し、幾許も無く、必ずしも難療不治の病では無く其初期に攝生と治療とに力を盡したら、治らぬことはない、乾度癒る。癒して見せやう！　と、恁う確信して、夫れからは一心不亂、歐米諸大家の治療報告を根こそぎ讀むで、苟くも成績のよかつたといふことは、必ず實行して、何でも治る、癒して見せやうとの確信にすがり附いて、懸命で療養した。けれども兎角不安の念が起つて、ともすれば其確信を搖かさうとする、これには實に我ながら、情無くも思つた。

醫師たる自分ですら恁うである、況や門外漢の、而も男子よりは一倍思ひ過しをし勝の婦人で見れば、肺病との診斷を受けたが最後、最う此の身は亡いものゝやうに思ふのは無理ならぬことだ。――とはいへ、此の失望が治療上の大敵で、婦人の罹病者に死亡數の多いのも原因の大部はこれにある――

△取越苦勞と閉居

一體婦人には取越苦勞が多く、何事にも之が先に立つて、殆んど病的に見えるものである。夫故、一度肺病との診斷を受けると、はッとばかり取り上せて、最う前後の思慮も無く、只だ只だ死を待つて居る人のやう、今死んだら甚麼しやう、父母兄弟のこと、良人の事、愛兒のこと、夫等の將來のことのみが狹い小さな胸中を支配してしまつて、明けても暮れても此事ばか

り、徒らにクヨ〳〵思ひ過すので、治る病も癒らなくなるばかり、幾程藥を浴るほど呑むでも、滋養物を嫌といふほどやつても、夫れでは恢復の目途が無い、これが抑々婦人に死亡の多い理で、今一つは閉居である。元來婦人は、兎角に家の中にばかり閉籠つて居て、戸外の空氣に觸ることが少く、隨つて日光に浴する機會が太だ稀だ。

所が、何病に限らずさうではあるが、就中肺病には此の日光に浴するといふことが其治療上の最大必要條件で、平生に日光に浴することの多いものは、自から消毒もされて居るごとく、既に罹病してからも戸外の空氣に觸れ、日光に浴みすることは必然的に日課として行なはねばならぬ位のものだ。

△肺病の容態

多くの場合、肺病乃はち肺結核は最初肺尖に來るもので、既に肺尖加答兒を發した時は、先づ食慾が減つて、毎夜のやうに盗汗をかく、而して僅かの事にも疲勞を覺え、日晡潮熱といつて、夕暮になるとは發熱して、朝はけろりとよくなる。

これ等が最も注意すべき症候で、就中原因不明で幾日も〳〵發熱するやうな場合は、別て其疑ひを存し、直ちに醫師の診斷を受ける必要がある。

此れに次いでは、氣管支加答兒のやうな症候を呈し咳嗽や喀痰が出て、時とすると――極めて稀ではあるが、神經性の疼痛を胸部に感ずることもある。併しこれ等は、主なる症候とは言へぬ、つまりは前に述た、食慾不振、盗汗、日晡潮熱、この三つが眼目で、學理上の云々は扨て置き、素人の方は此等の症候に氣づいたら、それは肺病の初期と心得て、出來得る限り速かに醫師の診察治療を乞ひ、其指圖通りの養生をして、苦勞とか、氣兼とか、一切病氣の妨になるものは我から棄てゝしまうやうにして、適當の運動、日光浴、安心、慰藉等を求め、常に身體を清潔にして、皮膚の健康を保ち、風邪をひかぬやう心掛けて、滋養物を攝取ひ、手後れにならぬやう、初期の中に治療したら、必ず健康を恢復するものであるから、不幸にして肺病になつても、決して失望するにはあたらぬと思ふ。



滑稽の趣味

岩野泡鳴

婦人は優しくッて萬事に趣味があつてほしい。男女同權とか、政治的運動とか、かういふことに關係したいならしてもかまはないが、稀れにするべきことで、多くあれば困る。人心の激動して居る時代には隨分をんな豪傑が出て、男子にも劣らぬ力をあらはしたこともある。たとへば、佛國第一革命の際、ジロンヂストといふ穩和共和黨の首領ローラン夫人の如きは、その夫よりも勢力を振つた位で、つひに斷頭臺上の露と消えてしまつした、また、オルレアンの乙女と稱せられるジャンダークの如きは、政治上、宗教上におそろしい程の狂熱的仕事をして、燒き殺されてしまつた。然し、かういふことはやつて見ろと云はれても出來る筈でもないし、またやつて見たところで、左程よろこばれることでもなからう。婦人は、既婚者にせよ、未婚者にせよ、その社會の地位上、どうしても、男子の慰藉者、融和者、つれ添ひ、思はれ人である。生存競爭場裏に立つて、男子が熱烈な活動は、その陰にやはらかい心の手の抱くのがあつてこそ、不平もなく、怨恨もなく、失望落膽もしないで居られるのだ。優しい言葉、美しい眼、暖い胸、しとやかな衣、これがどれだけ男子の記憶に奥床しい力を與へるか、よく考へて貰ひたい。男子が無形の戰爭に於て、この力はダークやローラン夫人のそれに比べて、勝りこそすれ、決して劣らないのである。豪傑としてその名が歴史に殘るのも面白からうが、平時に於て、そんな婦人はえら過ぎて、細君に貰ひ手がなからう。

文藝的素養の缺乏

婦人のえらいといふのは、殆ど無趣味だといふのと同意義になる。だから、えらいと云はれるよりも、窃

かに貧民を助けてやつたり、人の後ろに附いて慈善會に奔走したりする方が、まだしもしほらしいところがある。然し、諸方の慈善會的集合も、今日の狀態ではまだ趣味を以つて集まるものが少いらしい。耶蘇教の婦人會なども隨分無風流なものだ。なぜそんな狀態かといふに、智識と見聞との多少廣くなつて居る婦人社會に、まだ一般の文藝的素養がないからである。嫁入り盛りの娘までが、何かといふと、男勝り、男らしいといふことを誇りたがる。まるで五六人の小供をひとりで敎育しなければならない、後家さんばかりが世間に渴望されて居るかの樣に思つて居るのだらう。男は男らしく、女は女らしくなつて貰ひたい、またならうと努めて貰ひたいものだ。

これは一般社會の發達して居ないせいでもあらう。眞面目腐る爲めに生れて來たかの樣な道學者、自分の野卑な育ちをフロックコートで隱さうとする俄紳士、境遇上高く止まらねばならぬが一向その道に慣れて居ない婦人、から云ふ人々の多い世の中だ。中庸とか禮儀とかいふことにばかり腐心して、まだ天心爛熳の活き〳〵した天地を現ずる餘裕がない。たとへば、高尙な滑稽趣味を解することが出來るのは、その社會の人々が進歩發達して居る一つの證據だが、わが國の現代では、それが廣く行き渡つて居るか、どうだか、疑はしい。二三人の談合では、隨分下手な駄洒落も云つて居ようが、社會の表面に出ると、急に澄まし込んでしまうものが多いので、浮か浮か物も云へなくなつて兎角話しが窮屈で、こと更めいて『左樣』、『然らば』の切り口上になり易い。その眞面目さ加減と云つたらまるで他國と今でも戰爭をおッ始めて居るかの樣子だ。

國民の趣味はポンチ

精神上の戰時費か通行税でも取られて居る樣に、言葉の儉約、笑ひの遠慮、その身の引つ込み思案、ありとあらゆる窮屈な思ひをして、表面ばかりは倫理、道德、博愛、慈善などの知つたか振りをする。從つて、

そんなことに關する書物ばかりが面白くなくつても尊い様に思つて居る。その實、僞善と虚榮とを努めて居るのである。こんな無趣味な狀態から、本統の女らしい女が出ないで、却つて近頃亡くなつた奥村五百子の様なえらい婦人が出るのはちつとも怪しむに足りない。成る程、愛國婦人會の發起は、日露戰争の時であつたから、國家の爲めまた人民の爲めに、随分利益になつたらうが、それはそれとして、實際を知らない滿洲に居た兵卒どもが、花の様な慰問使が來るといふので大喜びに待つて居ると、懲役囚徒の様な柿色の袖なし鎧を着て、西國巡禮の様な菅笠の兜を被り、如何にもえらさうな女武者であつた。



これには皆が興醒めてしまつたさうだ。そんな心掛けの婦人が、幸ひにお婆さんであつたから、娘入り騒ぎもなくつてよかつたが、それにしても、もう、お茶飲み友達にも頼み手はなかつただらう。

或米國人がわが國の婦人記者を帝國ホテルに招待したことがある。その席で、男女同權の奔走をしたらいいではないかといふ奬勵をした米人に向つて、或年上の婦人が應答した話は面白い。『日本では、男子に權力が歸して居ますので、婦人はどうしてもその影武者になるのが當然のことになつて居ます。とてものことに、次ぎの世には、自由なアメリカに生れて來たいもので御座いますがと。』からかうと、米人もさる者、『その時は私があなたを貰ひましよう。』――『いや、それはまたその時のことに。』とこの位の洒落は、無邪氣で、また一般にあつてほしいものだ。一國人民の趣味はポンチ畫を見ても直ぐ分ると云はれる。英國では政治的のが歡迎され、獨逸では社會的のが流行する。わが國では、かの『團珍』があつた外には、『東京パック』が新らしく出來たが、まだ〳〵滑稽趣味は正當に廣まつて居ないらしい。これは悲壯な方面にも深い趣味がない反證である。

英語のユーモア、乃ち、滑稽と云へば、詳しくは有情滑稽とも譯して、僕等の私談中に出る普通の洒落などゝ違つて、非常に高尚なものである。表面は淺薄な樣に見えても、その奥には深い〳〵意味の籠つて居るものだ。わが國では、一九の『膝栗毛』――これは、駄洒落または惡いたづらに落ちて居るところが多いが、かの伊勢參宮の途次で、梯子賣りに出逢ひ、梯子を値切つて見たところが負けられたので、已むを得ず持て餘しながら之を擔いで京都に出で、或茶店に休んで、忘れた振りをして梯子を置いて逃げると、彌次喜太八の風體の怪しいところから、かゝり合ひになつては困ると思つて、茶店の女が追つかけて來る件りなど、人間の煩惱のなか〳〵脱し難いのを書き現はした樣で、實に無限の味ひが感得されるのである。佛蘭西ではモリエル、英國ではヂッケンス、米國ではコナンドイル

かういふ文學者は、いづれもその國で有名な滑稽の大家だ。

わが國でも、これまで人情の弱點を有情的に書き現はした作物は、能樂の幕合に挿む狂言や、一九の小說や、蜀山人の和歌や、隨分なかつたのではないが、現代一般の人心が中庸と禮儀とに餘り拘泥し過ぎて居るので、新たにこの種の作物を歡迎しない。それかと云つて、最も深い悲劇的創作をも味ひ得んのである。第一、一個の人物が、その性格の上からどうしても外界の事情と一致することが出來ないで、つひに死なねばならぬハメに落ち入ると、餘り可愛相だと云つて、見ない樣にする。まして、その苦衷を忍んで、いつまでも死ぬよりつらい目に逢ふと同情の餘り、全くそんなことを作る者を呪ふのである。これは今のわが國人——殊にわが婦人——が情にもろ過ぎて、堅固な意志を有して居ないせいだ。



悲劇と喜劇

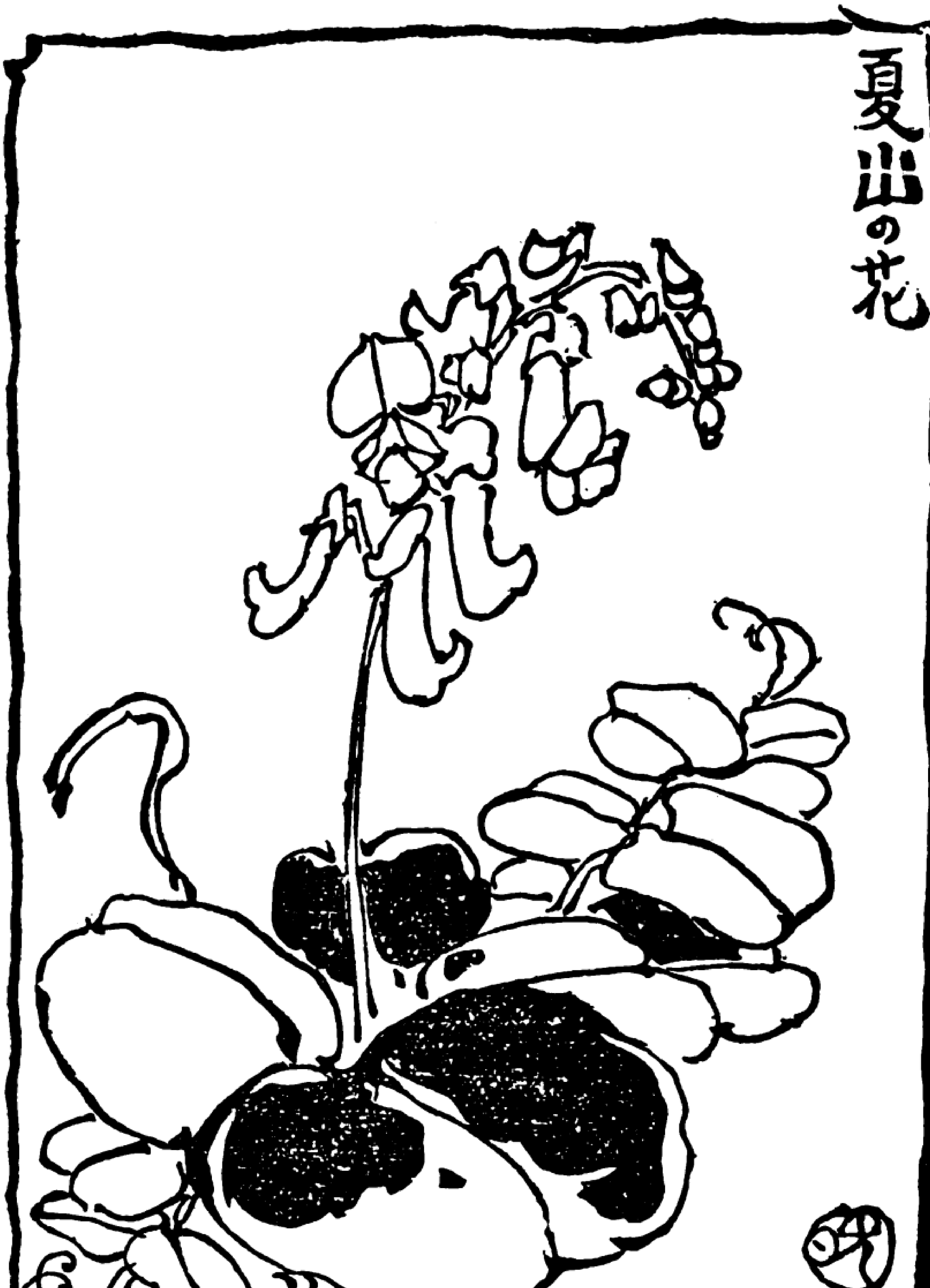
その癖、可怖いものは

見たさの諺に泥れないで、愁歎場がなければ、わが國の芝居は面白がられない。然し、それがまた事情を快復して、お伽話の樣に最後は目出たし〳〵と結ばれなければ、見物は滿足しないのである。政岡の苦忠も、朝顏の僞めくらも、澤市女房の心盡しも、みな、その結末は世間的成功の型に塡つて居る。かう云ふ劇を英語でトラジコメヂイ、乃ち、悲喜劇と云つて、最も正當に世間の實情を描寫した特と見爲して居るが、正當といふことが必らずしも最後の條件でないのは、中庸といふことが必らずしも人間行爲の實相でないのと同樣であつて——更らに高い、更らに深い心の要求を滿たすには、この劇風が分れて、トラジヂイ（悲劇）とコメヂイ（喜劇）とにならなければならない。

悲劇と喜劇と、その何れを好くかは、その人その國の情態に由るが、趣味の上から決して寸毫の差別、高下はないのである。前者はこの話の問題でないから別として、後者がどういふことを材料にするかを說明すれば、たとへば、年頃の一人娘が婿えらびをして、あれかこれかと迷ふたあげく、自分の低い理想に相應した低い理想の男を貰ふ樣になるとか、また或村夫子が眞面目に自分の形式的道德を說き、その平凡な行ひに相當した平凡な目的を遂するとか、また小成に安んじ安い性質の商人が、それに似つかはしい成功をして、俄紳士に成り澄ます有樣とか、すべてかう云ふ事件の裏面に、作者の同情的血涙を湛へて、讀者の笑ひを待ちまうけるのである。お多福な下女がお化粧をして澄まして行く樣を見ると、をかしくもあるが、またその心情を思ひやれば、涙の種ではないか？これが全く涙を缺いて、皮肉にまた冷刻にその欠點ばかりを指摘すると、スヰフトの『ガリヴーズトラエル』や一休和尚の無遠慮な行爲の樣に、サタイア、乃ち、諷刺となる餘り反省力のない、いゝ氣になつて居る社會には、それも亦必要であるが、僕の云ふ滑稽はなつかしい暖か味があると同時に、人をして泣き笑ひをさすものなのだ。

この心持ちを了得した人々には、戰爭も滑稽に見え

る、愛國〳〵と騷ぐのも滑稽だ。眞面目腐つた三々九度、鹿つめらしいお爺の意見、世間を知らない道學先生の後ろ影、いづれもなか〳〵をかしくなるだらう。幸田露伴氏は嘗て『大なる可笑は大なる悲痛の裏面に生ず。涙なきが鬼ならば、笑ひなきは人外なりと云はれた。』滑稽趣味のある人は却つてその境遇の制限範圍をよくわきまへることが出來るので、亂暴な自由、意はぬ落ち度などのあらう心配はない。粗野無頓着の人間に



限つて、自分の滑稽な思想や行爲をも眞面目に取り扱つて居るのだ。喰ふことばかりの外は何も知らなかつたブラジルのボトクードズ種類は、狩獵に成功して、良い獸肉を得、酒が甘く飲めるのを以つて、非常な大事件の樣に考へて居た。野蠻人ほど滑稽の趣味がないのである。社會に於て、婦人が最も早くこの狀態を脫しなければならない。それには、かういふ方面の研究と心懸けとがあつて貰ひたい。

或外人がわが國の現狀に接して、日本人は滑稽趣味のない人種だと冷笑したことがあるが、これは急に物質的生活にいそがしくなつて、精神に餘裕の少い現今の狀態を見たばかりの意見だ。わが國の歷史は隨分諷刺家と滑稽家とに富んで居る。『宗論』、『三人片輪』、『入間川』などの諸狂言を作つたものを初めとし、一休や、一九や、三馬や、平賀源內や、蜀山人や、明治の代では南新二、饗庭篁村、幸堂得知、最も大なる皮肉家勝海舟や、かういふ人々は諸君もよく知つて居るから云ふに及ぶまい。古事記の岩戸開きの段にさへ、既にその趣味は見えて居たし、萬葉集中の歌人大伴旅人は、

　妹としてふたり造りしわが宿は
　　樹高く繁くなりにけるかも

といふ悲哀は歌があると同時に、

　あな、見にく、さかしらを爲と、酒飲まぬ
　　人をよく見れば、猿にかも似る。

といふ痛切な諷刺詩を殘して居る。また、同時代の山上憶良は、『貧窮問答歌』の樣な世路難を歌ひながらも或宴會を立ち去らうとして、

　憶良らは今は罷らむ。子泣くらむ、
　　そのかの母も吾を待つらむぞ。

の如き、自然に韻が踏めて、口調も非常にいゝ、無邪氣な滑稽歌があつた。

民謠といふものは、また、誰れが作つたともなく、一種面白い調子を以つて、諸地方に廣まつた歌だが、わが國でも大抵はをかし味を含んで居る。殊に、そのうちの童謠などは、無邪氣の間に人の心を刺す樣なところがあるので、之を聽いて、昔の天皇や大名が、その苛酷な政事を改めたといふことも記錄に載つて居るではないか？然し、これは滑稽のうちに諷刺が籠つて居たのだ。僕が幼少の時から國で聽いて覺えて來た民謠に、左の如きがある。

　咸應堂の城は横なし機よ、
　　經こしらへて織りもせず。

經は建て、織りは居りにかゝつて居て、折角丹誠して拵らへた、その城が出來ると間もなく、何のことだ！

城主が國替へになつてしまつたといふのだ。多少、諷刺の意がある。また、

花の繪島が唐糸であらば、
　たぐり寄しよもの皆宿へ。

この美しい島は、明石の瀬戸の、淡路に近い海邊にあつて、西行法師も『繪島の磯』と詠じたところである。それを唐糸なら自分の宿までたぐり寄せようものをといふ、純滑稽の歌である。

すべてかういふ趣味が、これまで理想の低い、品性の卑しいものに依つて廣められた習慣もなきにあらずで、それが爲めに、高尚振る人々は却つて之を避ける傾きがあるのだらう。それに、また、明治現代の交際教育、生活などが、僕等の精神に餘り餘裕を存じて呉れないのが、非常な影響を及ぼして居るのだ。現代人の生活がもつと樂になり、男女の交際などがもつと開けて行き、社會に深い滑稽趣味が發達したなら、たゞくよ／＼して居るばかりでなく、また哀れつぽいことばかりを好むのみでなく、夫婦でない異性の間がきはどいところまで立ち至つても、尚且その身を守るだけの意志が強くなつて來るのだ。申し譯けの賢母良妻主義の教育も跡を絶つだらうし、薄志弱行の青年男女も少なるし、社會は清水の様に活き活きして來て、婦人は充分にその優しい天眞を發揮することが出來るだらう。

滑稽の品位

滑稽を云つた爲めに、その人の品格が落ちる様なものは、云はないでも野卑な人物であるに相違ない。この清い而も暖い流れは、實は、本當の眞摯誠實な人の胸底に滿ち／＼て居るのである。この流れを以つて居ない生眞面目、沒人情は、もう、人間ではない。露伴氏の所謂鬼か人外かである。學生時代からこの趣味を解し得なかつたと云はれた詩人テニスンでさへ、婦人問題を歌つた長篇の作『プリンシス』(姫君)には、自然の滑稽が所々に流れて居る。僕も、自分の詩集『悲戀悲歌』に於て、『田戸の海ぬし』といふ滑稽趣味の短篇を載せて置いた。だから、テニスンにしろ、僕にしろ、まあ、人間並みのことはしてあるので、兎に角、鬼でもなく、人外でもないから、讀者諸君は安心して僕等の意見を採用して呉れてもよからう。

母親の注意

夏は子供の消化力が衰へて居るから飲食物の注意が肝要ですが、若し不幸にして下痢を催したら直に飲食物の量を減じ（平生の半分か乃至三分一位に）成可く柔かいものを與へ、そうして腹部はフランネルの類をもつて巻きつけ、冷さないように仕なければなりません、下痢を仕たとき腰湯を使はせる事は少し考へものです、腰湯は腹を暖めるから効能のあるものと素人の方は考へるが、夫れは子供が熱のない時の塲合です、熱のあるとき腰湯を使はしたら直ぐ病氣に罹ります、殊が下痢をすると多くは發熱を伴ひますもの故、腰湯は醫師の指圖を受ける迄見合はせる方が安全です。

子供の下痢を起す媒介物は多くは水である、東京市内には水道が多く敷かれてあるので、幾分母親が水を飲むことを禁じ、瓶や手桶へは水を容れて置かず、容易に水を飲めぬ様にして置いても子供は自由に水道栓をひねつて飲む、自分の家で飲むことが出來ぬと他家へ往つて飲む、之は子供の下痢する媒介の一つですから、膓加答兒の流行する時は水道栓の注意を怠つてはならぬ。生の井戸水を飲むなどは勿論の事です、病後の恢復といふことは六ヶ敷い事で、膓加答兒を病んだ子供には能く大便の模様を見て夫れから飲食物を適宜に取らせる様にしなければなりません、一度下痢するとその當座は僅かの事にても胃膓に感じて又下痢を起すやうになります、兎に角飲食物は一寸も油斷がなりません。

子供が烈しく下痢をした時病後恢復の衛生は取分け母親の注意が大切です、飲食物に充分の注意を與へるのは勿論の事、下痢した後は病氣は快復しても胃膓が弱つて消化力の弱いもの故稍ともすると下痢を起したがる、夫れに第一身體が疲勞して居るから不完全な攝生法だと餘病を惹起し易いのです、故に下痢が止まつたからとて直ぐに安心は出來ません。

小兒の痙攣といふことは左程に驚く可きものではない、これは多く消化作用によるので同時に一種の毒を生じ其毒が吸收されて腦を冒し發熱などして遂に人事不省に陷るのです、故に晝食頃迄元氣の宜かつた小兒が晝食後に突然痙攣けて大騷ぎをすることがあるのも全く此理に基くのです。斯る塲合には先づ痙攣た小兒の頭を冷水か氷で冷し、静かに寢臥て置き、醫師を迎へるが宜いが、倉卒の治療法として直に灌腸してやれば忽ち恢復するものです、併し手馴れない方は狼狽せずに醫師に見せるのがよい。



お轉婆日記

小式部

(一) 少女の疑念

武さんの日記を讀んで私も日記を書いて見たい樣な氣になりました、武さんも丁度私の樣に人樣から邪魔者にされて居ます、人樣は私の事を御轉婆だ〳〵つて、日に何度言ふか分らない位です、そして武さんの事を「イタヅラッ子」と言ひますの、私武さんに味方しますわ。

私自分ぢや御轉婆ぢやないと思ひます、でも私色々の事が知りたくて聽くことが好きですもの、分らぬ事を聽かないで置くと、大人に成て何うしても賢こくなれぬと思ひますわ。

私の事を少女だと言ふて、何人も日記帳を下さらないから、私一冊もありません、だから兄さんが昨日御買ひに成た小遣帳をコッソリ借りました、未だ一枚しか書いてないから澤山書けますわ、私、一枚書いてある處を讀んで魂消て了ひましたの、一圓五十錢の葉巻十本、六圓が露西亞革の半靴、五十錢がカスメチックよ、兄さんは御洒落だから贅澤な物計お買ひなさる、それから二十四錢が汁粉の代、まア六杯も召上つたのよ、それから横町の花ちやんに棒薄荷を二十錢も與るなんて、私なら壹錢もあれば澤山だのに、兄さんは屹度アノ花坊に欺騙されたのよ、呀、まア這麼美しい娘の寫眞が帳面の間に挿んであるわ、誰だらう、昨日學校で御目に懸つた人に違ひないわ、兄さんに質いて見ようか知ら、だけれど質いて小遣帳をお借り申した事が分ると困るから、私、默つて居ませう。

私の文庫の鍵と兄さんの革鞄の鍵と恰度合ふもんだ

から、兄さん大變困つて被居るのよ、兄さんが金谷の孃さんの處へ遊びに被往つた不在に、私、何が這入つてるのだらうかと思つて開けて見て遣つたの、そうしたら、面白い手紙が澤山あつたのです、私、面白がつて見居てツイ御夜食の時も忘れて居ましたの、すると知らぬ間に兄さんが御歸りに成つて、直ぐに取上て了つたの、而して私大變叱られました、最う少し遲く御歸りだと悉皆見てやつたのに、惜しいことをしました、何でも彼は金谷の御孃さんから來たのに違ひないのよ、兄さんが先刻遊びに被往つた許の人なの、何故金谷さんは「親愛なる英雄の君よ」なんて書き始めたのでせう、私、此の事を兄さんにお聞き申して大變怒られましたの、其時恰度夜食に迎ひに來ましたから、私人形と一緒に御膳に向ひました、皆な食事が濟んだ時に私兄さんの袖を引いて「兄さん、兄さん、金谷さんは何と思つて手紙なんかお寄越なすつたんでせう」と御訊き申したら、兄さんは眞赤に成つて態と阿父樣と大きな聲で話して被居るの、すると姉さんは兄さんに代つて「金谷さんは大層な御褒美を兄さんから貰ふんですとさ」と笑ひながら仰有るのです、私には何うした譯だか些度も解らないのよ。

私何うしても御轉婆か知ら、皆なが言ふのよ御轉婆だつて、兄さんなんか猶甚いわ、お前の樣な可厭な御轉婆は何處の家にもありやしない、お前は出產當初から御轉婆だつたなんて言ふんですもの、私、眞個にいやに成つて了ふわ。

私の年齡は八歲で名は吉子といふのです、私の名が吉だから狂女であつたかも知れません、私氣が短くて癇など氣に入らぬと直きに拗つて了ひます、阿父樣は私を馬鹿にして仰有るの「あゝ此子にも困つて了ふ、外に最う一人善い子が欲しいものだ」と、阿父樣は男の子が欲しいのか知ら、女の子が欲しいのか知ら、其とも亦双子か知ら、家には澤山子供があるのに慾の深い方だと思ひますわ、其から皆なは私の厭がるのも構はず、大勢私の身邊に群つて來て、誰に似て居るの、彼に似て居るのなんて言ふんですもの、婆やなんか私

を見て御孃樣は阿父樣に生寫しだなんて言ふのよ、厭な事、私あんな阿父樣の樣な大きな鼻だらう乎、頭が禿げて居るだらう乎、白毛交りの髯があるか知ら、而して左の頰に墨子があるだらう乎。

（二）油繪具



私、油繪書く事が面白相だから何うして描くのと御聞き申したら、姉さんは怒つたのよ、姉さんは種々の道具や繪具を御持になるけれども、私は其に觸つても不可ないんですと、だが今日の午後は姉さんが階下へ行つて唱歌を歌つてお在ですから、好い機會だと思ふて、姉さんの御部屋に往つて種々の繪具を畫板に塗つて見ましたの、處が戸の明く音がしましたから、慌てゝ階子段を駈降りて、誰か知らんと振返つて見ると、柏木さんよ。

柏木さんの衣裳は何時になく立派で、上衣は短く、袴は玉羅紗の長いのよ、而して姉さんに向ひ叮嚀に御辭儀して被居るの私放念して畫板を持つた儘來たものですから、姉さんに叱られると困ると思つて、畫板を竊と柏木さんの後方の椅子の上に置

きましたが、何人も知りませんでした、私は電光の樣に直ぐと窓幕の陰に隱れて了ひました、二人は少時の間種々話して居ましたが、其内に柏木さんは姉さんに、今歌ふて居た歌を最う一度歌ふて呉れと強請て居ました、すると姉さんは、貴方が次に歌へば私も歌ひますわと言つて、二人共ピアノの側へ行きました、姉さんが腰を掛けると柏木さんは側に立つて二人で一生懸命に歌つて居ました、私詰らないから何うかして巧く此室を出てお庭で武ちやんと遊ばうと思つて居ますと、其内に乳母が二人の若い婦人を案内して連れて來ましたけれど、姉さん達は少しも知らずに歌つて居りました、此の二人の婦人は私が幕の陰に居るとも知らずにクス〳〵笑つて居るのでした、兄さんも二婦人が來られた事を聞いて入つて來ましたが是も矢張笑つて、手巾で口を抑へて邪魔せぬ樣にして居ましたが、堪へ切れなく成つて大笑ひに笑ひますと、柏木さんは不思議相に眼を睜つて「何が可笑しいんです、僕の歌が面白いのですか」と訊ねました、すると兄さんは「イヤ、君の歌を笑つたのぢやない、君の歌は何うして仲々巧いのだから、決して笑ひなんかせんが、併し君の袴は新流行の珍柄ですな」と、笑ひこけて物も言へぬ程でした、而して氣息迫き言ふには「許して呉れ玉へ、僕は可笑しくて假令死んでも笑はずには居られんですもの、全體君の袴は何うしたんです、後から見ると繪が書いてありますぜ」兄さんは斯う言つて可笑がつて口も利けないで安樂椅子の上に横臥んでお腹を抱へて笑つて居ました、姉さんは其時椅子の上に在る畫板に目が着いて、其から柏木さんの袴に目を着けましたが、急に靑く成つたり赤く成つたりして叫び出しました、「オホー、柏木さん、まあ飛だ事を致しました、眞個に濟みません、私些度も知りませんものでしたから、私乾度彼女を……彼女を罰して遣ります」と、斯う言ふ内に姉さんはヒステリーを起して泣いたり笑つたりして居ましたが、漸く椅子に正しく腰を卸して物を言はうとしては嘔上げて口が利けないのでした、柏木さんは怒つて鏡の方へ向き乍ら「何か君僕の着物に就い

て可笑しな事があるんですか」と言ひました、而して挨拶もせずに出て行きましたが、兄さんは跡を追駈けて行つて「僕の外套を家に着くまで着て行き玉へ」と言ふて貸して遣りました、姉さんは私の不注意の事を恐ろしく怒つて居りました、何しろ柏木貴族院議員の御子息様に非常の失禮を致したのですから怒るも無理はありませんが、兄さんはうまく行つたと仰有つて、私に拾錢下さいました。

晩方金谷の孃さんが被來つたから、私小遣帳の中に挿んで在つた寫眞を見せて上げたの、金谷さんは其の寫眞を一目見てからは兄さんに御話しないのよ、兄さんが「其の寫眞は北村さんのです」と言ふと、金谷さんは「虚僞、虚僞、大違ひ、北村さんなら私御目に懸つて知つてるわ」と仰有つたの、兄さんは又た「それでは熊野の奥さんかも知れません」と、けれども金谷さんは寫眞の裏を見て聲高に「四十年一月吉村の君に呈す」と讀み上げて、何も仰有らずにぷいと御歸りに成つて了ひました、兄さんは金谷さんが御歸りになつた後で、私を大變叱りましたの「お前は困つた事をして吳れた、一體何處から寫眞を持つて來たんだ」と言つて劇く怒つて了つたの。



私最う手が痛く成つて書けない、部屋に寢かして置いた人形が一人坊ちで蚊に食はれて居るだらうから、行つて見てやりませう、而して私も寢ませう。

（三）見よ、言ふ勿れ

兄さんは今朝は大層御機嫌が好いのです、而して私とも仲が好いのです、そして私の事を「お前は大變に美しい子だが大きく成て饒舌になるかも知れん、困つたものだ」と言ひました、其から私に「物を見るは可いが、口から言葉を出してはならぬぞ」と注意して呉ましたから、私承知しましたと言ふて堅く約束しました、すると直きに兄さんは私をお庭へ連れて行つて古い林檎の木の枝に乘つけて呉ました、兄さんは搖床に乘つて彼方此方動搖つて居ましたが、折しも裏の木戸が開いて居たものですから、隣家の醜穢しい喧嘩好きの山羊がノコ〳〵這入つて來ました、私は其を見たのですけれど態と默つて居ました、すると山羊は兄さんが自己に喧嘩を仕掛て居るのだと思つて後に廻り、兄さんの知らぬ間に兄さんを劇く打ちましたから、兄さんは魂消て墜落ましたの、而して額を負傷したのです。

兄さんの仰有るには「お前は山羊奴が進て來たのを見たゞらう、何故其時注意して呉ぬのだ、這麼に額に瘤が出來て、今晩金谷さんと音樂會に行くに困るではないか、眞個にお前は仕樣の無い子だね」と、私左樣ですと言ふ代りに只だ腮で肯きましたの、兄さんは「困つたな、玉子よりも大きな瘤が出來て何うしたら可からう、而して臂の關節も外れた樣だ、よし今度はお前を山羊に打たせてやらう」と言ひますから、私兄さんの來られぬ樣な處へ登つて、而して言ひましたの「私、山羊の來たのは見たのよ、だけれど物を言ふては不可ぬとの仰有付ですから、私只見て許居ましたの。」

すると兄さんは私を睨んで行つて了ひました、私午飯の時兄さんと一緒に成りましたが、瘤もよくならんし、臂も未だ痛さうでした、だが兄さんとの約束は堅く守らうと決心しました、私猫が御馳走を喰べて居るのを見ましたが、只見た許りで追ひませんでした、で

も私は見る許りで言はぬと定めて了つたのですもの。

間も無く母さんが美しく着飾つて私の部屋へ被來て仰有るには「母さんと姉さんは是から出掛るが、人様が被來たら玄關に出る樣に乳母にお言ひなさい」と、私乳母に此事を言はうと思ひましたが、私話す事がいやですから、何も言はずに乳母の部屋で遊んで居ました、乳母やは種々の寫眞を見せて與ましたの、其から髮を解梳し始めましたの、其時恰度玄關の方で來客の聲がしたのです、乳母は平常衣を着て居たものですから「吉ちやん行つて頂戴」と頼みましたの、で、私玄關に出て見ますと美麗な品の良い奥樣が「母さん御宅ですか」と仰有るのです、私言ふては約束が破れると思ひましたから、手眞似で母樣のお不在の事を知らせると、此の奥様は劇く氣の毒相な顔付をなされて名刺を渡してお歸りになりました、而して「可哀相に、あんなに美しいのに口が利けぬとは、まあ氣の毒の事だ」と呟き乍ら行きました、名刺を見たら今度此町へ引越して來られた裁判官の奥樣でした。



私姉さんの部屋に行つて紙片に「私は唖で聾です」と

書いて自分の頸に結ひ付けました、次に來た人は紙屑買でしたから、私只だ首を振つて居ましたら、直ぐに歸つて了つたから面倒でもありませんでした。

次に人が見えた時は乳母が行きましたが、私の御友達の君子さんでした、私君子さんに紙に書いて見せました「私は見るのみで言ふてはならぬと吩付けられましたから、短くも一週間位は斯うやつて居ります」と、さうすると君子さんも又た筆を執つて「大人が子供にそんな事を吩付るなんて無理ですわ」と書きましたの、所へ乳母が菓子を持て來ましたから、二人で御茶を呑んで樂しく遊びましたが、一々言ふ事を書くのが隨分面倒でした、其内に君子さんが庭の壺を洋傘で突いて居ましたから、私「破壞しては不可ません」と書かうと思つてる内に、滅茶々々に碎して了ひました、君子さんは母さんに叱られると恐いと言ふて逃げる樣にして歸つて了つたの、乳母は仕樣のない御轉婆共だつて言ひましたから、私も慌てゝ姉さんの部屋に行つて了ひました。

私夕飯に行つた時、母さんは私を睨んで仰有つたの、「先刻黑田の奧樣が被來つた時にお前は何故聾や啞の眞似をして居たのですか、私友人の宅で黑田さんに御逢ひしたら、黑田さんは大變氣の毒がつて、私に話すぢやないか」私御返辭が出來ませんから、兄さんが何とか辯解して下さるだらうと思つて、兄さんの方を見ましたのだが、兄さんは何とも仰有らずに笑つて許被居るんです、母さんは怒つて了つて私に「夕飯は喫れぬ、彼方へ往つてお了ひ」と言ひました、父樣は又た私の顏を見て「漸々不善くなる樣だが、困つたものだ」と仰有つてました、併し何人も未だ壺の事は知らないやうでしたが、乳母が兄さんに言付けたと見えて、兄さんが私の處へ來て「吉ちやん、最う口を利いても宜いから、惡戯はお止しよ」と言ひました。

日が暮れてから私は祖母さんの室で色々面白いお話をして遊びましたの、祖母さんは私好きよ、でも母さんが叱る時に私に何時も御菓子を下さるんですもの、私お話が面白くつて寢るのも忘れて遊んで居ましたの

其内に姉さんが「御芋が燒けたから來らッしやい」と呼びますから、私跣足で戶口まで出て行きますと、祖母さんが「御氣をお付け、暗いから危險いよ」と仰有つたの、私靜かに降りかけると、祖母さんは甚く叫ぶのです、私吃驚して顧向く間も無く二人で階下まで墜落ちて了つたんです、祖母さんは助けませんの、私も大層痛い目に逢ひました、兄さんは二人が這麼に痛い目に逢つたのに、此方を見て冷笑つて許り被居るの、祖母さんは腰が痛むと仰有つて早くお休みに成て了ひました。



(四)　左官とぺんき屋

私今朝は遲くまで床の中に居ましたの、私熟く考へると眞個にいやに成つて了ひましたの、煩いから人が彼此言はぬ處へ飛んで行かうか知ら、ナニ私だつて其位の事出來ると思ひますわ、でも阿父さんは私を打つし、母さんは惡戯子で仕方がないと言ふし、兄さんは更に同情して吳れませんし、誰一人として私を可愛がつて下さる人はないのですもの、私二時間程泣いて居

ましたの、而して想ひましたの、世の中は樂しい事があると思ふと悲しい事もあつて、始終樂しい事ばかりではないと思ひましたの。

武ちやんは私よりも一倍可哀想ですわ、武ちやんの阿父さんは嚴しい人ですから、私よりもたんと叱られると思ひますの。

私今朝は學校には行きませんでした、皆樣は學校に行つたと思ふて居るでせうが、私一日中武ちやんと遊びましたの、今朝姉さんが夏で暑いからつて絹の單物を着せて下さつた時に、私木の削屑やペンキの中で遊ぶと汚すかと思ふて却て難有迷惑に感じました、武ちやんの阿父さんが貸屋を建てるとつて、今工事中の裏通りの普請場へ行つて、武ちやんと二人で遊ばうと思つて居つたのですもの、今日は大工も左官も休んで居ますから遊ぶには都合が好いのです、武ちやんは鍵を持て來て二人で直ぐに工事中の家屋に這入つて二階に上つて見ますと、未だ窓帷なんか無いものですから、窓から光線が射して遊ぶには好い處でした、而して色

色の削屑なんぞ弄つて午飯に行くのも忘れて居ましたが、私は餘り着物が汚れて了つたから、歸ると叱られると思つて歸らないで居ましたの、武ちやんも白の新しい夏服が汚れたものですから恐がつて歸りませんでした。

太陽が西の山の中に隱れて了つた時に私お腹が減つて來ましたが、眞暗になるまで歸るまいと定めました、暗く成つたら二人で着物を融通して寢ようと思ふて居ました時に、下の方で人聲が聞えました、間も無く私共の阿父樣達が恐い顏して這入つて來られました、私の阿父さんが、「ヤ、此處に居つた」と言ひ乍ら腕まくりをして立止りました、武ちやんの阿父樣も止りました、だが阿父樣達が餘り早く來られたものですから、私達の仕事は未だ終へなかつたのです、私達の仕事は武ちやんは左官で私ペンキ屋ですの、武ちやんは種々の漆喰を混ぜて種々の道具を使つて、客間に成る處を塗つたのです、而して武ちやんは斯うすれば阿父樣が左官に拂ふ金が少くなると言ふて一生懸命に戸や床の

間などを塗つたの、私はペンキ屋が屋根を赤く塗つて居つたペンキが澤山殘つてありましたから、大きな刷毛で手當り次第に塗つて塗つて一日中休まずに働きました、而して大部分塗つて了ひましたの。

阿父樣が私を家に連れ歸つた時に母さんは私を一目見て「まあ、何んてい風態だらう」と仰有つたの、父樣は私を打たうとしましたが、遂に私を打つて了つたの、兄さんは私を見て笑藥でも飮んだ樣に齒を露して笑ひこけて居ました、而して「塗つたよ、塗つたよ、辨天樣のやうに」なんて歌ひ乍ら行つて了ひましたが、乾度私の顏や頸に繪具が澤山着いて居るのを冷笑して歌つたのだと思ひましたの、武ちやんの阿父樣は武ちやんが漆喰を混ぜたのは未だ難が輕いが、黑胡桃の戶や煙突の大切な蓋をペンキで塗られたのには閉口したと仰有つたさうです、私共は武ちやんの阿父樣の御手助になるかと思ふて一生懸命に働いた事が却つて惡かつたのだと氣が付きました、兄さんは私を明日町へ連れて行つて香具師に印度人の子だと言つて賣つて御金にすると言ひました。



北海奇譚 アイヌの戀

倉田櫻芳

北海道膽振國長萬部の舊棧橋附近にアイヌが澤山住んで居る、中に一人慨然な女が居る、顔はさして醜くないがアイヌ獨得の青黒き顔に白粉を斑に塗り、蓬のやうに亂れた髪に、赤い巾やら、青い巾やら手當り次第に結び付け、さめ〴〵と泣くかと見れば莞爾と笑つたり、チヤンと坐るかと見れば急に立上つて自分の姿を見る、そして懐から小さな鏡を出して、絶えず其顔を直すのである、年は三十前後、云ふまでもなく氣が狂つて居るのだ。

名はハンナといふ、娘盛りには頗る美人であつた相だ、秘密の裏には女があるやうに、女の秘密の中には必ず男がある、ハンナの狂氣になつたのに就ては、それは〳〵慘ましい一場の戀物語がある。

自分は之を記す前に當つて實に世の輕薄な男子を憎くまねばならぬ、異性相近くのは天賦の妙用であるから仕方がないが、これを宜い事にして婦人を玩び、口から出任せの嘘八百を並べ立て、さんざ嬉しがらせを言つて置て跡足で砂を蹴るのは何たる罪惡であらう、これが爲めにその胸中に負はされた婦人の瘡痍は仲々癒へるものでない、殊に幸か、不幸か、愛の塊りなる可愛い小供が出來でもしたら、男が捨てゝも女は捨てられるものでない、かくして其婦人の一生は暗黒の中に葬られて仕舞ふのである、ハンナの發狂も男に翫弄れたそれからなので、而も其の男が內地の人で、ハンナがアイヌであるから一層慘ましいのだ。

ハンナが十七歳の娘盛りであつた、或日長萬部の山中に薪を取りに行つたのである、頃しも春の花盛りで山櫻や、梅や、桃や、李や、寒國のとて所謂梅櫻桃李花一時に開き、見下ろせば、噴火灣の波白く、得もいはれぬ絶景である、ハンナは娘心に花に見惚れて我を忘れ、夕日があか〴〵と山を射る頃、驚いて切取りたる薪を背負ひ、何心なく山を下りて來ると山下の崖の側で、ウン〳〵と呻る音がする、ハツと思つたが怖い

もの見たさで恐る〳〵覗いて見ると、旅人であらう、一人の若い男が腹を抱へて七顛八倒して居る、急病でも起つたのかとそこは優しい女だ、我を忘れて其側に行き、もし〳〵と呼ひつゝ介抱すると、男はホッと苦しい息を吐き、俄に腹痛がするので水を飲もうとして茲へ來たのだが、もう一歩も歩けないのでかうして苦しんで居る、どうか人家のある所へ連れて行つて呉れと手眞似で拜むやうにして賴むのだ、當時の長萬部は今日のやうに開けて居ない、人家とても稀れなので、ハンナは親切にも其旅人を自分の家へ連れ歸つたのである。

ハンナの家はアイヌ中の金持であつたので、小奇麗な座敷にその旅人を寢かせ、ハンナは元よりハンナの父も母も一家擧つて大切に介抱するのであつた、迷信ではあるがアイヌ仲間でよく流行る祈禱も特にこの旅人の爲にした、それかあらぬか、旅人の病氣も一枚紙を剝ぐやうによくなつて、一ケ月と經たぬ內、床の上に起るやうになつた。

この旅人は色白く鼻高く好男子で、立派な家の一人息子であるが、內地で種々の事業に手を出して失敗したので、親人に合する顏もなく、何か北海道で一儲けしやうと、よくある雲を攫むやうな希望を抱いて來たのであつたさうだ。

春が來れば花が咲くやうに年頃になれば乙女の戀を覺へるのである、今まで髯ムシャの、鬼とも組まんづアイヌの男を見て居るハンナの眼に、この旅人は光源氏の君とも見へたのであらう、ハンナは人知れず胸を焦がして戀の奴となつて居た、その內旅人の病氣は全快したのであるが、旅人も何を當てといふこともないから、留めらるゝを幸ひそのまゝハンナの家に逗留し、日出でゝ海に入り、日入りて燈下にハンナの家族と團欒して內地の話を面白可笑しく語り聞かせるのが自分の勤めのやうにして居たが、ツイ遠くて近きは男女の中の本文通り、いつかこの旅人とハンナの戀は成就したのである、それからといふものはハンナの嬉しさうな様子つたらない、更に己れの父母に訴へて花々しき

婚禮を擧ぐることになつた。

アイヌは冠婚葬祭を大事にする習慣があるので、ハンナとこの旅人の婚禮の盛んであつたことは云ふまでもない、それに當時のアイヌは娘に夫を持たせ、悴に嫁を取ると必らず別居したものだ、ハンナとこの旅人も婚禮して間もなく海岸に別居して水入らずの若夫婦餘所の見る目も睦まじく、夢の如く二三年を送る内、ハンナは男の種を宿して男の兒を產んだのである。

それでなくとも離れ難なく見へるのに、夫婦の仲の鎹ともいふ小供が出來たのだもの、ハンナ夫婦はいよ〳〵睦じくならねばならぬのだが、男はこの時分から俄に鬱ぎ出した、恐らく燃ゆるが如き功名心が一時ハンナの愛の雫に打消されて、面白可笑しく月日を送つて居たが、海と山との單純な生活に飽きて來ると同時に、下火になつて居る功名心は更に層一層の反動力を增して猛然と起つて來たのであろう、それともハンナが鼻について、美しい内地の女を夢に見るやうになつたのか、ハンナの顏を見ては吐息を吐き、小供の顏を見ては、吐息を吐き、海を見ても、山を見ても、心配相な顏をするので、ハンナは、非常に氣を揉んで何呉となく氣を付けるけれど、男は却つてこれを五月蠅さうに夜着引冠つて寢る日の度重なるものからハンナは、氣が氣でなく屢々その無情を訴ふれど、男は只氣持惡しとのみで、初めの内は何も言はなかつたが、遂に或日ハンナに向つてこんな事を言出した。

自分は少し思ひ立つたとがあるので、一先内地に歸らねばならぬ、それにしては直ぐお前を連つて行くといふ譯に行かないのだから、暫らく別れて居て貰ひ度いと、話の中からハンナはオイ〳〵泣出した、アイヌは嫉妬心の强いものだ、殊にハンナは己れの命をかけて戀慕つて居る男のとだ、もう男は自分が嫌になつたと覺つたので、泣て〳〵泣伏すのである、其後は夫婦の中に何となく他人らしい隔てが出來て、どうも今迄のやうでなくなつた、ハンナも餘程考へたと見へて今度は自分の方からこんな事を言出した。

あの妾別れるなら別れもしませう、と口も切つたの

で男は大喜びで、ウム別れて呉れるかと乘出すと、ハンナは冷やかに男を見て、しかし只別れては妾が朋輩に合はす顏がないから何かお土產を下さいといふ、よし〳〵何でもやる、さて其土產はと聞くと、ハンナは乾と顏を擧げて『貴郞の首を……』と詰寄するので首をやつては別れるも、別れないもないぢやないか、と其の場は笑つて濟ましたが、さて濟まぬは男の胸である。

或日函館に用事があると云て出た切り歸つて來ない半年計り經つてから、流石に寢覺が惡いと見へ自分は迚もお前と夫婦になつて居られぬ、これ迄のとは夢と諦らめて呉れろといふ手紙が一通、國處も町名も書かないのが舞込んだのであつた、ハンナの悲嘆は實に目も當てられない、アイヌが唯一の神占として信賴して居る巫女に占を立てゝ貰ふと、この男は二度と歸つて來ない、もう內地で美しい女と婚禮して居る、と見て來たやうに云はれたので、三度の食事も碌々しなかつたハンナは其後半狂亂の有樣で月日を送つて居た、すると其の年も暮れて翌年の正月、夫婦の仲に出來た男の兒は假初の病氣が素となつて死んで仕舞つた、ハンナは積りに積る悲嘆に心亂れて到頭發狂したのである。

發狂しても戀しい男の面影は忘れぬと見へ、渠れが懷を離さず持つて居る、小さな鏡は、男がハンナに與へたのであるさうだ、自分を助けてくれ、自分に滿身の愛を献ぐるハンナを捨てる程の男だから、寢物語りにハンナに知らして置いたその名前も、その故國も皆僞であつたと見へ、幾度ハンナの方から手紙を出しても、澤山の附箋が附いて、戾つて來たといふ。

アヽ戀なくて何んの己れが浮世かな、婦人の生命である戀を散々に蹂まれ躪られ、あらゆる悲しいといふ悲しい目に逢ふて發狂したハンナは、實に可憐なものではないかよ、ハンナが或は泣き、或は叫びて煩悶する一夜、知らずハンナを捨てた夫の男は果して如何なる夢を結ぶてあらうか。

（完）

生理入門

消化器を安全に擁護して疾病を未發に防ぐの法これについて先づ第一に注意すべきは齒なり、齒は清淨に保護し食餌を細く咀嚼して消化を助けざるべからず、舌は咀嚼と談話の際齒冠或は齒角に觸るゝこと頻繁なるゆへ動もすれば齒の摩擦を受けて損傷すること尠からざるものなれば注意せざるべからず世人動もすれば鍼、細楊子若くは菓核等を啣みて之を口腔内に轉し玩ぶもの少なからず、是れ甚だ危むべき事にして呼吸の際誤りて咽頭抔に吸入するが如きことあるものなれば注意すべきことなり、偖て胃は嚥下せし食物の進入するや直ちに其位置を變じ且つ蠕動するが爲に適當なる腔隙を要するものなり、故に食事の際には上腹部を括約する所の衣服例へば帶、褌、袴洋服の下部等の類は之れを寛めざるべからず、倘し然からずして坐に就き軀幹を曲めて飲食するが如きことあらば消化器能を害すること少なからざるなり。不消化物或は刺戟性の食物を貪食するときは胃を害ふものなり、倘し誤りて胃を害なふたるときは數日の間餘り寒冷に過ぎざる滋養液例へば米粥に自煎汁或は乳汁と少量の食鹽とを加へたるものを少量づゝ食用して飢を忍び以て療養を勉むるを良しとす、又胃をして恒に健全ならしむべき方法あり、即ちフランネル或は綿布を以て寛く上腹部を纏ひ之れを溫和に保護する是なり、若し誤つて有毒物を食しなば成べく速に指頭或は鳥の羽を以て咽頭をいぢるか又は穩和なる吐劑を服して其毒物を嘔吐せざるべからず

腸は腹部の寒冒によりて最も疾を受け易きものにて、是れが爲に下痢を發し兼て腹痛を催すが常なり、或はこれを罹れざることあり、偖て疾病を防がんには腹部を纏ふにフランネル或は綿布を以て、腹部を溫和に保護すべし、又た腹痛の劇しきときは芥子泥即ち芥子の粉末を醋にて捏りたるものを布に塗抹して之を臍部の下邊に貼用するを良しとす、さて便秘は大腸内に糞の充實したるものにて此場合には灌腸によつて排泄すを良しとす、但し下劑を服用せばために胃及び小腸を害するの恐れあるなり、左れども倘し灌腸を施して其効なからむには蓖麻子油を適度に服用すべし、但し便秘して腹部に疼痛を覺ゆるものを以て一般に之れを腹部の寒冒に因つて起れる所の腸の疾病と見做すべからず、如何となれば腸脫出病も亦た是れ便秘及び腹痛を併發するものなればなり。

胃及び腸の外、肝臟、膵臟、血管、淋巴管等は食物の消化を助くる機關にして之れを保護するの法は適宜の運動を營み且血液及び淋巴液の循環を催進せしむるにあり、元來消化機能は門脈血循環の功用に據ること少なしとせず腹部の健全なるも亦然り、左れば腹部の疾病は多く門脈血の循環に故障を生ずるがために發るものなり、殊に老弱の人に於て然り、又胃及び腸の蠕動機寛慢なるときは消化器に障害を發すること多く取り分け便秘を起し風氣を發すものなり而して此等の疾患を豫防するに最も適當なる方法は、則ち腹部を收縮すべき身體の運動例へば體操、球突、球投、蹴鞠、或は鞦韆抔を爲し兼て水を多量飲用し且つ淸鮮の空氣中に逍遙して強く呼吸するを善しとするなり。

觀　察

婦人博覽會のぞ記

天保爺

芝公園内の一異彩

嫁が荐りに婦人博覽會へ行きたがる。『婦人博覽會と云ふのは女を見せる博覽會だらう、其處へ女が行つたところでつまるまい』と云ふと、嫁は廂髮の間から今にも雀でも飛出しさうな氣色になつて、『お舅さん、それだから、貴郎にも困つてしまふ、婦人博覽會と云ふのは女の見て益になるものばかり飾つてあるので、始めは東京の婦人雜誌が二三寄合つて目論んだものですけれど、今では板垣伯爵夫人、千家男爵夫人を始めとして、三輪田眞佐子女史、矢島揖子女史、棚橋絢子女史、鳩山春子女史、山脇房子女史、井口あぐり子女史なんどと云ふ方々の御盡力で、大層見事なものが出來たのださうです、是非連れてつて下さい』と强請む。女史と云ふからは先生の事に違ひない、それだけの先生が盡力した會なら、一遍は見に行つても好い、と云ふたら、嫁は急にやさしくなつて、『今日連れてつて下さい！

いつでも嫁の云ふ事は短兵急で困る。『そして其博覽會は開けたのか』と云へば、赤い頬邊を膨らして、大きな眼を睜きながら、『えゝ、開けましたとも、四月十四日に開會の式を擧げて會長板垣伯夫人の祝詞、佐竹出品人總代の答辭があつて、式を終ると盛んな園遊會があつたと云ふ事が新聞に書いてございました。

さて〳〵記臆の好え事ぢや、して見りや今日で三日目、とても出揃ふまい。と云ふと、『三日目と云ふのは一番可い日なんですわ、演劇でも三日目と云ふ事かありませう』と一本喰はす、演劇と博覽會とでは、ちと相場が違ふやうに思つたが、またこゝで連れて行かんと忰に種々な事を告げよるから、行く事にした。

第一女と云ふものは、何故あゝ粉裝さんけりや　戸

外へ出られんものか知らん、悠々と讀かけの三國誌を見る、便所へ這入つて、煙草を二三吹やつて、それから衣服を着改へて、「仕度は什麼ぢやな」納戸を覗いて見ると、嫁は裸體でうろ〳〵して居る、何と云ふ不態な格好だろうと思つた。『早く仕度をせんかえ』と云ふと、『だつて他所行きの襦袢が見えないんですもの。』

他所行きのが無ければ、平常のでよさそうなものを、さうも行かんものと見える、がちや〳〵簞司をやつて居たが、中々手間がとれさうなので、また自分は座敷の方へ來て、庭を眺める。

三つ目の欠伸で嫁のお仕度は出來た。けれども未だ完全とは云へぬらしい、それからがまた一騒動だ、それ手巾がないの、やれ蝙蝠傘のとやつさもつさの揚句、漸くの事でお神輿が動く！

老人は電車へ昇降に氣を注けるものぢや、と平常云ひ居るが、さあ電車へ乘る時となると、嫁の方が一先きぢや、老人は什麼ならうとそんな事は關はぬらしい。

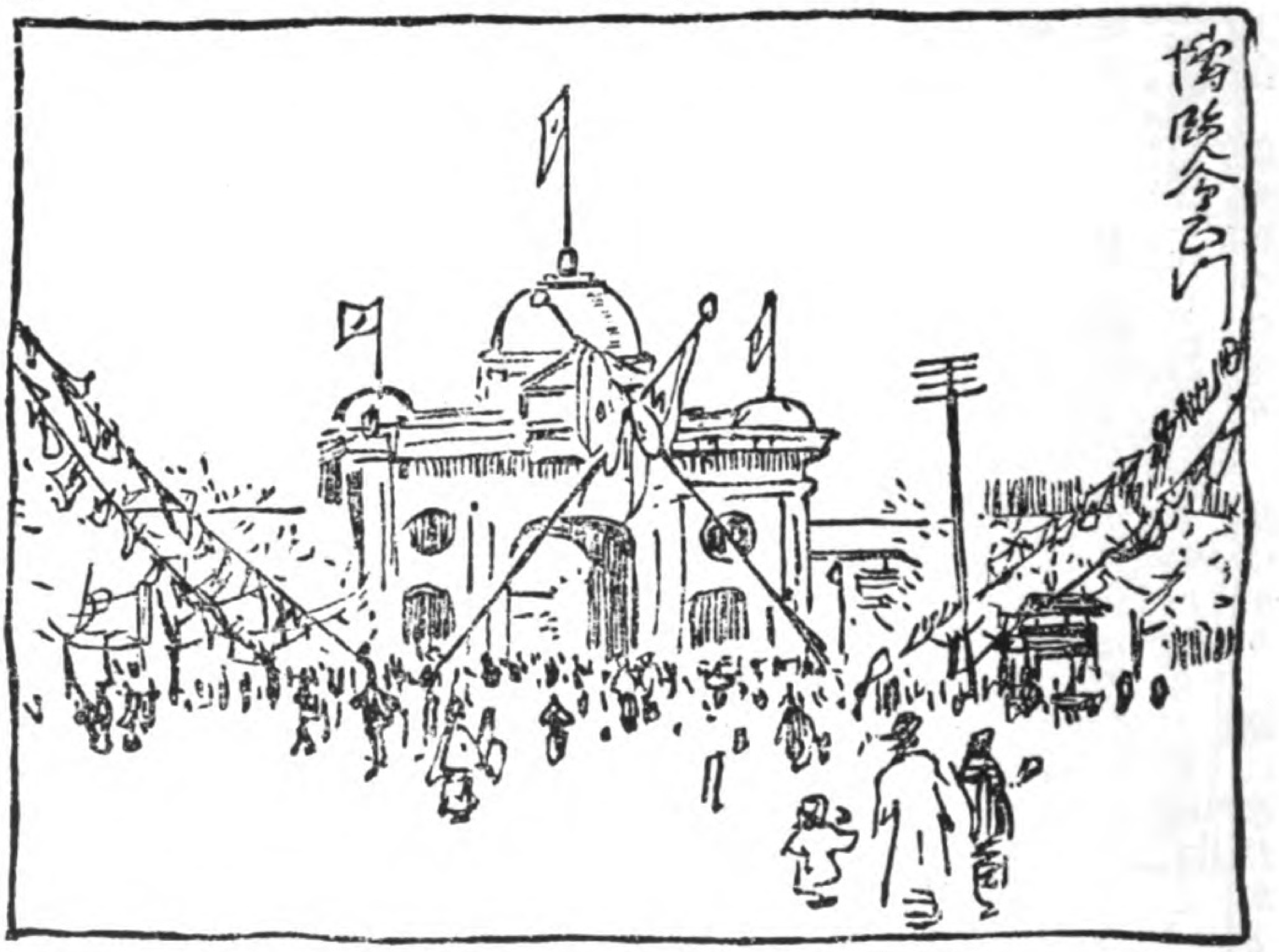
自分が入口へ立つた時には、もう中央へ腰を下して濟して居る。未だ能く〳〵子供らしいところがあるはい。

芝山内で電車を降りて、黑本尊の開帳と云ふので、澤山見世物の列んで居る間を拔けて紅白の幕が張亘してある土塀へついて行くと、婦人博覽會と筆太に記した立札、誰が書いたか知らんが、餘り名筆ではないやうだ。

切符賣場で切符を買ふと、窓口から恐しく赤い――膨んだ手が出た。多分賣つて居るのは女だろうと思ふが、其入場料を引掴んで引込む手つきが、宛然動物園の熊が鹽煎餅を貪ぼるのに能く似て居た。下足をあづけて、玄關を入らうとすると、胸紐のついた小豆色の筒袖の女が「もし〳〵切符を」と云ふ。『ホイ』と出すと、其處でも亦可笑しな切符を出して、何か小さな聲で囁いたが、自分は耳が遠いので嫁に聞いて貰つた。その切符には「特別入場券」と記してある。これを什麼するのかと聞くと、嫁は妙に赤くなつて、これも聽えぬ程小さな聲、蚊の啼く程に自分の耳に響いたのは

『品物が出揃はんから、この切符でもう一度來てくれ』と云ふのぢやさうな。成程嫁が赤うなつたのも無理はない、『博覧會と演劇とでは同じ三日目でも、大分に樣子が異うの』と一本極めると、『そりやあ當然ですは。』いやはや前言を食むのは甚だしいものぢや。

會塲内を見渡したところ、飾棚はがら〳〵ぢや。これでは棚を見に來たやうなものぢやと笑ひながら、見て廻ると、それでも、女子裁縫高等學院とやら、恐ろしく長い名の學校から出品したと云ふ、布衣眞、素絹、法裳、四ッ紐大五條袈裟の法衣や、狩衣、奴袴、



直衣、女官裝束、束帶、古代服裝、打掛等がある。成程見事なものぢやが、坊主の法衣や、直衣や、奴袴などを女が見て什麼するのか知らん、と獨言を云ふた積りだつたが、聲が高いから嫁は直ぐに聞つけて『あれ、他人が聽いてるぢやありませんか、此處は參考品なんです、それでなくつても、縫法や、摸樣を見ても爲になりますは！』また一本食つてしまつた。

二階へ上ると、七八枚の繪は淋しく飾られて居たが、目につくやうなものはなかつた、惜しい事だ。大丸呉服店出品の松竹梅や匹田の打掛な

ど、有鬚に昔の大奥を偲ばしめる。

降りて二號館へ這入ると、美術部とあつて婦人の畫いた繪が澤山ある。自分は婦人の描いた畫が什麼も生氣に乏しいやうに思はれて、これまで餘り珍重せなんだが、成程進んだものぢや、矢吹鶴子女史とやらの畫いた春などは、顏と云ひ、身のこなしと云ひ、好う出來て居る、但し洋畫には餘り感心したものはなさゝうぢや、京都と大阪との出品場、こゝもまだ出揃はぬらしい。

入口で見たとはまた異つた、鶸茶色の筒袖を着た女が、其處此處で何かやつて居る。嫁がこの人達の服を見て天平式だと云つた、天平式も好えが、束髪は可笑しい。

成程好え思ひつきぢや。一々手藝を見せながら、其手に出來たものを陳列する、裁縫、經木細工、造花、シンガーミシン、果實模造、綿細工など、見て居ても根氣仕事だ。果實模造教授所の上が葡萄棚に作られて、これに模造の葡萄が釣つてある工合、鳥渡異つた意匠だ。

綿細工！これは犬や、鶴や、鹿や、龜やいろ〳〵な動物が出來て居る。「これは日にどの位出來るものです」と聞いたら、先生らしい人が、突然其處にあつた小捻を採つて、指の先きで忽ち犬の形ちを拵へたが「これでもう骨が出上たので、仕上げまで先づ大體の動物が一時間、いや馴れさへしたら極容易い仕事です」この馴れると云ふ事が容易でないが、見て居ても心持ちが好い程巧みなものだ。休憩所はあつたが、未ださう草臥れもせんので、紀念品なぞを覗いたが、嫁が欲がりさうなものばかりぢやから、足早に其處を出て、三號館へ這入ると、こゝは勸業場同様の賣店で、婦人の物ばかりぢやない、老人のものも、小供のものもある、成程さう云へば、天下の人間は皆婦人の腹から產れるのぢやから、何でもなければ不可ない、其中に嫁の姿が見えなくなつた。さう入場者もないに何處へ行つたものか知らと見廻すと、唐物店でもう何か買物だ、二歩ばかり一緒に來たかと思ふと、貴郎少しお待ち遊ば

して。』今度は小間物か、何だか誤魔化されて高價いものを買つたやうだ。見ぬ振をして居ると、餘程面白い、凡そ拾圓は買つたらう、皆倅の身の膏だ、勿體ないものだ。漸くの事で出口へ來て買物の包を受取ると、中々大きなものだ。

これをまた歸りには持たされるのだ。人生舅になる勿れ！それも此包の中に自分のものが一つでもあれば張合もあるが、悉く嫁の身につくものばかりとあつては、持重りがしさうに思へる。人前では嫁は其包みを手にして出たが、六足も歩行いたかと思ふと、鳥渡これを持つてゝ下さいまし、



外れもせぬ足袋の牙籤を箝めて見て、難有う、と追つきはしたが、包は其儘自分の手に預けたばかり、、、サッ、さと先きへ立つて行く、舅たる者は宜しく停車場の赤帽になるべしだ、癪に觸るから少し搖ぶつてやる、嫁は振返つて『あら、そんなに搖ぶると櫛やなんか折れてしまひますは！』搖ぶつて折れる位のやくざな櫛なら買はないが好いと思つた、ちと可厭味を列べてやらうと『これは婦人博覧會と云ふよりも、婦人博買會ちやらう』と云ふと、『そんな事を云つてないで少し慫

ぎませう！』勝手なものさ、散々場内では人を待たせて買物をした揚句、さア外へ出ると急ぎませうだ、倅も嘸持餘すだらうと思つた。出口と云ふ門はあるが、右を見ると何か立派なものがあるやうだから行つて見る、一面に砂を敷つめて、鳥渡した舞臺が架けてある、さうさあれでも二百人や、三百人は入るだらう、舞臺には金屏風が二隻立てられて居た。何の爲めだらう嫁に訊いたが、有繫高襟の嫁もこれには首を傾げた。餘程要領を得ぬものに違ない、引返して門を出ると、嫁はこれから丸山の櫻を觀に行かうと云ふ。櫻は好いが、此包は什麽する積だらう、瓢簞の代りに大きな包を抱へた觀花、風流も何もあつたものぢやない、『もう歸らうぢやないか。』と云へば『儂好いものを御馳走しますは！』御馳走も好からう、けれども其處でまた折詰の荷物が增へたら大變だ、老いては子に從へと云ふ諺もあるが、さう〳〵子に從ふて居たら、此末甚麽目に遭ふか知んと思つた、情けない觀花だ。

▲金玉糖の製法

原料　寒天壹本、清水壹合、粗目糖百拾匁。

寒天を半日程清水に漬け置き、後其含み居る水分を絞り去り、細かに切りて鍋に入れ、清水を加へて火の上に載せ、沸騰して解溶し、寒天の固形物が無くなりたれば、粗目糖を入れ、杓子にて攪きまぜつゝ又沸騰し溶解し、稍々煮詰めて火上を去り、後内部を漆にて塗りたる重箱か錻力箱の内部を濡布巾にて濕したる器内に毛篩を宛てゝ漉し込み、塵芥を除き去り、其儘靜かに置きて冷やし凝結めるべし。

▲葛餅の製法

原料　上等葛五拾匁、清水六合弱、白砂糖五拾匁。

鉢に葛を入れ、清水は少々づゝ加へて葛を溶き、後白砂糖を入れ、能く攪き混ぜて、其溶液を一度毛篩にて漉し塵芥を除き去り、鍋に移し入れ、火上に載せて杓子にて鍋底を能く混ぜつゝ煉り、葛の白液が水色の如く透明體と變化したらば、火上を去り、清水にて濕したる盃又は小さき茶碗の中に煉葛を杓子にて詰め入れ濕布巾の上に移し、其儘冷まし固めるなり。

新規流行洋傘と雨傘

觀風子

御散歩には無くて適はぬお日傘、其の洋傘と又降り降らずみの五月雨時で、雨傘の必要もありますから、洋傘雨傘兩種の流行形をお話し致しませう。

◎如何な洋傘が流行するや

婦人用の洋傘は相變らず二十吋と云ふので男子と違つて晴雨兼用の照降傘は少なく、孰れも日傘專門となつて居るが、其の流行は年々歳々相同じからず、昨年迄は極く淺い平張でしたのが、當年は平張時代も何時か過ぎ、四五年前の流行品に遡つて婦人間に、再び深張が歡迎される傾向となつて來ました、元來深張は目下巴里の流行品で、之が導火線となり本邦へ傳播し、新流行の兆となたつのである。

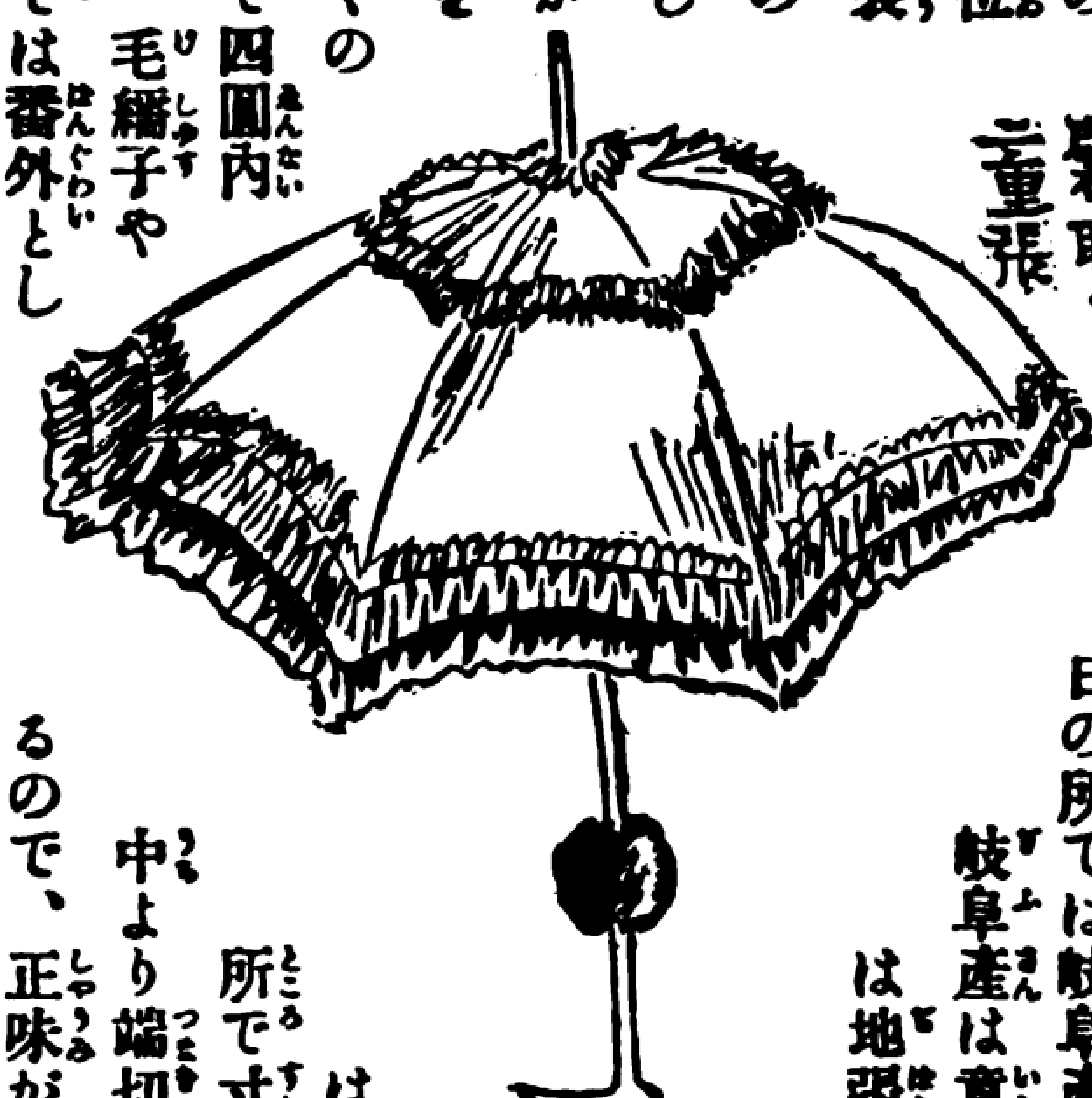


縞甲斐絹張

△地質＝染色＝摸様　洋傘の地質はメートル絹、護謨綾、綾甲斐絹、琥珀地、平民的には艶毛繻子、毛繻子等で、其の色合は一時非常に隆盛を極めた、オリーブ色も流行遅れとなり、新流行の染色は矢張り藍氣の勝つた、お納戸、藍鼠、ネベブリユー、空色などで、併しハイカラの令嬢向には、桃色、玉子色等の華美向きもありますが、一斑に藍氣物で淡泊としたのを好む、又柄行きの新流行であるが、地紋の織出しは全く地に落ち、縁摸様乃至縞物の嗜好時代となり、三越呉服店では絞り摸様の洋傘を、意匠登録出願中であるさうですが、昨年迄流行した元祿摸様は下火となつて、襞取り二重張が流行して來ました。

△傘骨＝握り＝飾り　傘骨は細卷の流行時代だから八間の傘骨に限られ舶來品は、ホックス會社製を優等品としてある、夫から握りであるが、此握りも上等品には青貝磨や象牙で細工した物、次で鐵刀木や黒柿類

であるが、之とても從前のやうに彫刻物は好まず、總て淡泊とした握りが流行で、殊に流行中の流行は樺の自然木と棕梠竹で、棕梠竹には銀金具で一寸裝飾してある、此棕梠竹は華奢で手輕だから、婦人の携帶には尤とも適して居ます、其の握りの寸法も長い方で、一尺より七寸位までを可とする、夫から洋傘の裝飾なる握りの飾りですが、總附の組紐は安物のみで、絹張物は同じ裂地の圓形、或ひは蝶形の裝飾が大流行、所で價格は握りや傘骨を吟味したら、七八圓より廿圓近くの相場ですが、普通の絹張上等物で四圓內外、夫より二圓內外迄あります、毛繻子や艶毛繻子の價格は、上等洋傘店では番外としてある。

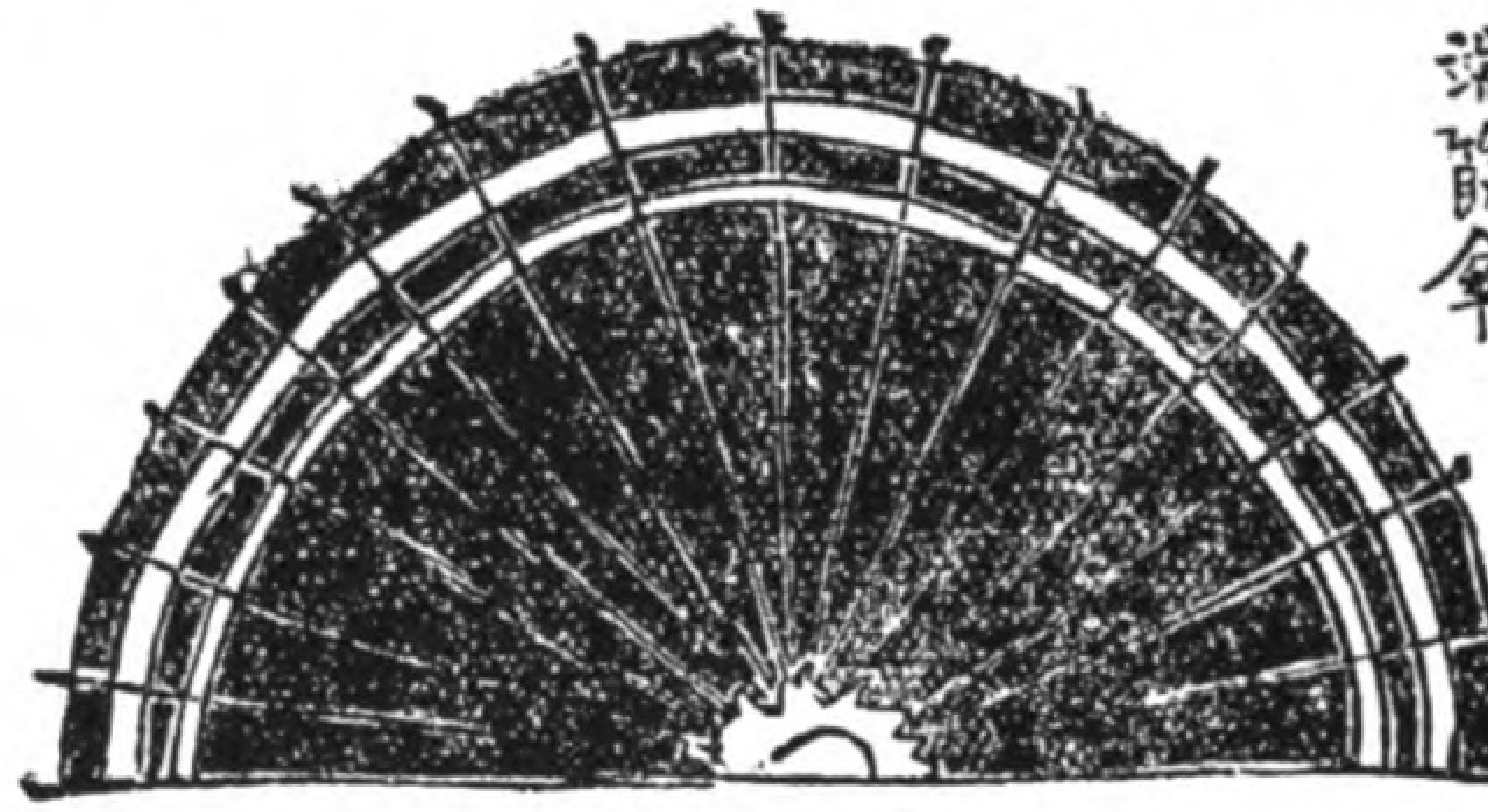


◎如何なる雨傘が流行するか

女持の雨傘と云つたら蛇の目に限られ、頗る單純なものゝやうに思召さうが、流行は斯んな單純なものではなく、日々と複雜を極めて行くのですが、殊に岐阜產の雨傘が輸入となつてから、從來の地張傘も製造が一變し、新意匠を鼓吹するやうになつて來ました、今日の所では岐阜產と地張傘とが競爭と云ふ形勢ですが岐阜產は意匠に富んで體裁は克いが、實用向きは地張傘の方にあると云ふ話し。

△寸法＝骨組　女持の雨傘の定法は俗に一寸と云つて、轆轤入と稱す。轆轤の穴から、傘の骨の先の所迄鯨尺で二尺一寸、之を略して仲間では一寸と云つて居る、なれど、昨今の所で寸法が縮り二尺と立てある、其の尺の中より端切りと云つて、骨の端を五歩宛切り取るので、正味が一尺九寸五分に減じて來た、夫から傘の骨組ですが、一時は極細の重骨を嗜好したのですが、風雨に耐られぬ所から一般に五十間となつた、併し骨太でも携帶に便なるやうに極く輕く製造するの

です、夫に傘の丸身も洋傘の細卷と同じやう、細い方が流行になつて來て、從來一寸三分の轆轤が二分となり、傘の丸さを迫る事を努めて居る、此傘の骨組の中にも松葉骨と云つて、骨を松葉形に組だのもあつたが、昨今では衰頽氣味となり、出來合の傘には無くなりました。


湍筋傘

△塗＝カヾリ＝籐卷き

傘の塗にも流行があつて、黑漆へ朱漆の彩色などでは、目下の嗜好に適さず體裁の克いやう、ウルミ、青漆、オリブ漆、黃漆等の色を配合し、其の體裁も優美高尙となつて來ました、夫から傘の骨へ裝飾する縢りですが、在來の上等品はベタ縢りと云つて、絹の細糸で一圓に縢つた物ですが、今日では厚濃した物より、淡泊した方を好むと云ふ傾向で、骨縢りは絹の太糸の一段編が流行して居る、又傘の柄の籐卷きですが、恁んな物に迄流行があるから可笑い、其の流行と云ふのは市松卷と云つて、籐を一本拔きに卷くのである。

△半蛇の目＝深蛇の目

半蛇の目とは傘屋仲間では二ツ切と稱し紺土佐二ツ切で、白紙の所が多いから此稱ありで、深蛇の目は紺土佐一枚で張か*


天變り傘

*ら、勢ひ白紙が少なくなつて、蛇の目が深くなる、此蛇の目類は昔しと變らず何時も流行して居るのであるが最近流行の傘には蛇の目以外に種々ある。

△天變り＝中變り

天變りとは傘の頂天へ白で摸樣を現はし、中變りは蛇の目の所へ同じく摸樣を置くのである、要するに之は變り蛇の目と云ふ略稱に過ぬ、其の摸樣も傘紙を透して顯す

のだから、花菱……松川菱のやうな簡單な摸樣に限ります、夫に云ひ殘したが傘の上部の白いのを、俗に白天と稱して居ます、其他に端線、端摸樣、更紗なぞがある、端線は傘の周圍へ子持筋を出し、端摸樣は唐草や藤の摸樣が配置してある、乃で更紗は傘一面の總摸樣、併し此摸樣物は孰れも印刷した物で、岐阜産の傘に多いのである。

△染紙の流行色＝價格　傘の原料染紙であるが、澁……紺土佐は相變らず意氣向きに需用され、嶄新の流行色は紺勝のオリブと菖蒲色で、兩樣倶に高尚な色合であるから、若細君や令孃向きには尤とも妙です、所で雨傘の價格は普通賣行きの宛いのは、一圓内外……誂ひ向は三四圓迄あります。

三越好み流行四季衣裳

婦人博覽會出品の内

一月「松の内」

△地質　横立縮緬變り裾二枚重れ

△地色　御召納戸

△模樣　上着上前入船下前歌がるた雪月花の繡取り、下着同上胴は金糸入羽二重日の出に松の模樣

△裾廻　松葉色横立縮緬に數松葉の模樣

二月「梅が香」

△地質　鍋綴縮緬無垢二枚重れ

△地色　栗梅

△模樣　上着上前繡入にて香包み及び香札入れ上前水におもひ羽下着同上胴は白羽二重の箙梅模樣

三月「雛遊」

△地質　山繭入吉野縮緬無垢二枚重れ

△地色　鄙鼠

△模樣　上着上前は繡入の桃と彼岸櫻下着上前は檜扇に筍の繡取り下　褄は上着下着とも高麗縁の紙模樣地質總用胴は五節句模樣の友禪羽二重

四月「花の影」

△地質　鍋縮緬無垢二枚重れ

△地色　大和がき

△模樣　上着　干網に白魚下前春蒐ぎの繡取り下着同　模樣胴は櫻に蝶模樣の紋羽二重　但し背に天鵞絨縫にて蝶二羽を配らふ

五月「藤なみ」
△地質　金糸入透羽二重無地二枚袷
△地色　薄納戸
△模様　上着上前天神橋に藤下前蝶　下着水中の鯉胴は萌黄地に藤模様の友禅　紋綸子

六月「さみだれ」
△地質　山崩入鶉縮緬単衣襲付き
△地色　御召鼠
△模様　傘に燕、燕は描き更紗の縞、雨は地質の山崩縞を利かせたるもの襲は傘の裏を見せたるもの

七月「霄月」
△地質　漣み羽二重単衣襲付
△地色　水色
△模様　上前夜會草下前樂器に樂符（青貝入の螺をあしらふ）
△襲　白の漣み羽二重へ一面に夏の花園
△紋は「ライル」に白百合

八月「夕すゞみ」
△地質　壁絽襲付
△地色　美女鼠
△模様　月見草に洲濱（貝と蟹は縫取り）
△襲　白の壁絽へ銀の小波を一面に箔押したるもの

九月「虫の音」
△地質　山崩入段縮緬襲付
△地色　銀鼠
△模様　流れに秋草

十月「千代見草」
△地質　段縮緬無地二枚袷
△地色　鍋島柿
△模様　上着白揚げの菊、障子薄彩色入下着同模様、胴は金糸入羽二重菊に蝶の絞り模様

十一月「紅葉狩」
△地質　立しぼ御召二枚重ね
△地色　鐵納戸
△模様　上着上前は笹に木兎細工の縫模様下着上前紅葉の芥子縫ひ模様裾と下褄は上下とも散り紅葉を縫い入れたる瀧縞の縞染羽二重を斜に懸けはぎしたるもの胴は渦巻模様の八橋紋は吹寄せの縫取り

十二月「雪けしき」
△地質　黒の飾綾
△模様　上着上前六つの花下前雪持破れ蕗の繍模様下着八掛及び下着の廻りとも茶地芳野廣東へ雪輪を黄と紫鼠色とにてわた糸縫を施したるもの胸は表地を鳥と見立て肩に白鷺一羽をあしらふ胴は白の八ツ橋

飲食方に就ての心得

一時を定め量を定めて食ふべし、食へば必ず美味く食ふべし、間食は嚴禁なり、間食と云ふ中には茶も含む、

一よく嚙碎きて靜かに食ふべし、唾液の充分に交らざる前に呑み込むべからず、

一食ひながら物を考へ、若くは本を讀むべからず、血液をして胃腸に十分の力を注がしむべし、

一饐えかゝれりと思はるゝ飯、ピリヽと來る肉、其他凡て變りたる嫌あるものを食すべからず、五合の饐飯を百年の壽命にて買ふは少しく損なり、

一食事中浮世の雜談をなすは至極宜しき事なり、これは西洋より我に取るべき良習慣なり、

一湯茶をかけて掻込むことは禁ずべし、齒と唾液を無視するのみならず、消化液を薄め、其職分を妨害することゝなる、汁かけ飯も亦同じ、

一生水、生物は果物の外禁制たるべし、支那人のコレラ、赤痢などの傳染病に罹り難きは一に之に因るといふ、尤十分信用すべき自宅の井水の如きは此限りにあらず、

一食事は腹八分目なるべし、但時々は動けぬ程に食ふとも宜しかるべし、否必要なるべし、

一食後三十分乃至一時間は談笑に時を移すべし、而して後方付に從ふべし、殊に夜食の後に於て、此時間を利用して一家團欒の樂みを盡すこと、妻君の最も心懸くべき大切の務ならざらんや、

一食後眠くなるは、血液多く胃腸に集り、頭腦に乏しきが爲なり、小兒、犬、猫などに見るも、食後睡眠は自然なるを曉るべし、道理も考へずして「食べて寢れば牛になる」など恐嚇して、人工的反自然の境遇に立たしむるは愚の至りなり、但し習既に性となれる大人にありては、自ら理の異なるものありと知るべし、

一小兒は大人よりは、多く水を要するものなり、之が請求を拒絶するは宜しからず、

保險食料の一例

身體の大小性質職業等によりて其量に差異ありて一定ならず、小兒期には比較的大量を要し、老年期には食料減ずるものなり、平均大人一日の食料は大約蛋白質廿五匁、含水炭素百廿匁、脂肪五匁及び適宜の水と鹽類とを要すと雖も、普通の食物は所含成分の量一定ならず、隨て無用不消化の物質を混ずるを以て其食品の量を定むることは難し、

第一例

牛　乳　　一　合

味　噌　　五　匁

一、葱、胡蘿蔔、蓮根、土當歸、蘿蔔、筍の類廿匁野菜二、甘藷、里芋、慈姑、長芋、佛手芋の類廿匁三、胡瓜、白瓜の類一五匁

牛肉又は鷄、羊、豚の類六〇匁

白　米　　四　合

右合計營養原質　蛋白質二十五匁四分、脂肪七匁五分、含水炭素百二十匁餘

第二例

卵　　二　個

味　噌　　五　匁

野菜一、ほうれん草、芹、三ツ葉、鶯菜、小松菜の類　二〇匁

二、土當歸、胡蘿蔔、蕪菁、蓮根、筍の類　一〇匁

三、百合、慈姑、長芋の類　二〇匁

魚一、鯛、鰡、鰤、鯰、馬鮫魚　三〇匁

二、竹麥魚、鱸、ムツ、鯖、鮪、鰌　三五匁

白米　四合

右合計營養原質　蛋白質二十六匁八分、脂肪五匁一分、含水炭素百十八匁八分



箏曲の妙趣

女子大學箏曲指南　佐藤左久翁談

佐藤氏は、山勢松韻子と同じく廣瀬撿挍の門より出で、箏曲界に聲名ある人。今女子大學にて琴の指南されつゝあり。

△組四十七曲と允下七曲

箏曲と言つても、今日は雜曲が重になつてゐますが、本來、箏には箏固有の曲があります。箏のみに限られた曲即ち箏の本曲と云ふものがある。其の曲は孰れの組も多くは源氏物語、伊勢物語、古今和歌集など云ふ優美なものを基礎として作つたもので、其の數は、表が六曲、裏が八曲、中が十曲、奧が十一曲、段ものが八曲、四季の曲が四曲と都合四十七曲です。併し此等の本曲を彈いても聽人が無いから自然雜曲を彈くやうなとに爲つてゐます、併かし箏曲の眞の妙趣は此の本曲を外にしては之を玩味ふとは出來ませぬ、で此れ丈のものが難なく彈ければ之を一部彈と言つて箏曲の方では先づ一人前となるわけです。此邊迄に至られば箏曲の妙は到底解するとは出來まいと思ひます。所が今日は箏曲の專門家と謂はれても曲の數さへ知らぬ人がある。情無いではありませんか。尙ほ進んでは右の外に允下七曲と云ふものがあります。山田流には無いけれど、生田流や八橋流にはある。之れは昔時非常にやかましく言つて、容易に相傳爲なかつたもので、之を彈く者は滅多に無い。で世間に幾多の彈箏家があつても、此の七曲を學んで、段々に之を傳へて行く者で無ければ、所謂流をひくとは言へないのでムいます。

△古來の曲と新曲

右は在來の曲に就ての話ですが、其他に箏の曲として時々新曲が出て來ます。併し此の新曲と云ふのは甚だ不覺束いもので、長く傳はるものは容易に出來ませぬ。それも其の筈で、作曲者に未だ其れを遣る程の技量が無くて、曲に神髓を保たせるとが出來ぬからです。例へば今「鶯の曲」を作ると致せば、之を作るには、其の朗らかな啼聲、其の啼く時の四邊の風物をちやんと頭に置いて、箏の音調を考へて、其の曲をさも啼く鶯を聽くやうな感を起させるものと爲なければならぬのですが、多くの作曲者は其樣は爲ないで、春は賑やかなものだからと言つて、「櫻狩」の一部を採り或は「千里の梅」の一部を採ると云ふやうに、彼れや此れやの賑やかな所を寄せ集めて拵へると云ふ風の遣り方ですから、さて那點が鶯だか一向譯の分らぬものが出來

る。だから一時は珍らしい爲にぱッと流行りはするものゝ、曲に神髄と云ふものが無いから、迚も長くは堪えませぬ。京阪地方では是れ迄六千幾百の曲が出來たと云ひますが、其中で今日行はれてゐるのは僅かに百位に過ぎませぬ。之れを見ても新曲なるものゝ價値は略お判りにならうと思ひます。そこへ參ると何うしても古來の曲ですな、何程聽いても飽が來ませぬ。



△箏曲改良に就て

世間には、我が箏曲は此の儘では不可から、之を改良して西洋樂に負けぬやうに音を大きく爲やうとか、或は之れに西洋樂を折衷して面白く聞かせやうとかと言つてゐる人もあるやうですが、私は何うも感服することが出來ぬ。改良と云ふことは素より好いことに違い無い、又自分も大に改良したいと思ふてゐるが、たゞ其の改良の的を違へて貰ふと困るのです。御覧なさい、樂器が此の儘では音を大きくすることも折衷することも出來ぬでせう。去ればと言つて樂器を作り更へては箏の音と在來の曲との調和を失するやうになる。で止むを得ず樂器も曲も更めなければならぬことになるが、其れでは箏曲の改良で無くて、新規卷直しに一種特別の音樂を作り出すものと言はなければならぬですから、矢張り箏は箏三味線は三味線と樂器を其儘にして置いて、在來の曲なり彈法なりの面白からぬ點に種々工夫を凝らして行くのが眞の改良かと思ひます。

△箏曲の特色

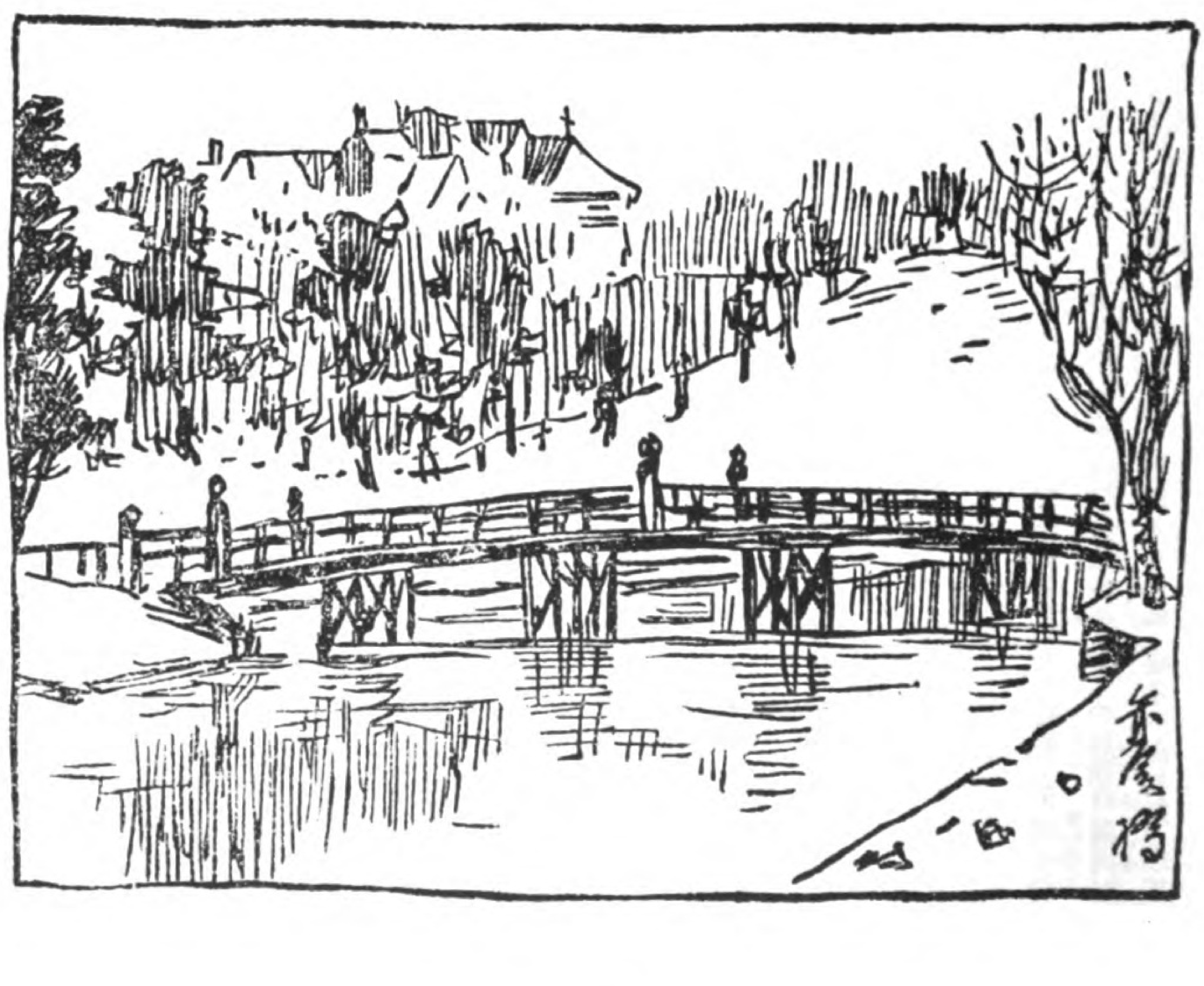
成程、箏曲は音が低くつて、幾百千人の集會の席には不向かも知れない。又多くの人が之を面白く聽かぬと云ふことも實際でせう。けれども、箏曲は音が低いと云ふことは有つて生れた性質で如何ともすることが出來ない。又多くの人が面白がらぬと云ふことも固に致方が無いと思ひます。箏曲は全く解り難いものです、常盤津、清元、長唄、義太夫のやうなものなら誰れが聞いても解りませうが、箏曲となると其樣はまいらぬ。と言ふものは、箏曲は一體に男女の別或は泣くとか笑ふとかと云ふことを聲や音の上に明かに現はして居らぬからです。彼の「松竹梅」の間の手などは男女間の情合を含ませたものですけれ共、之を明かに示して無いから、一寸聞いた位では却て其れが解らない。又「鶴の巣籠」は餘程意味深長な曲ですが、扨て那邊が巣籠に叶つてゐるかと言ふと、矢張り解らない。之れが尺八であつて見ると、コロン、コロ〳〵ーツ、と云ふやうに、竹の音を以つて幾分か平和な鶴の鳴聲を眞似ることが出來るが、箏曲では其樣はいかぬから、たゞ調の趣を以つて之を現はしてゐる。又「熊野」に就て言つて見るに、其の中に「妾お酌に參りさぶらふ」と云ふ句と「いかに熊野一差舞ひさふらへ」と云ふ句とがある。一は熊野御前の言葉で、一は宗盛の言葉と云ふことは文句の上には現はれてゐますが、其れを唄ふ聲や彈く音の上には男女の區別がありません。然れ共其れを彈く時は矢張り彈者の氣持、彈き具合等に依つて熊野は何處迄も女らしく宗盛は何處迄も男らしく調の上に現はして行く。其れ故箏曲を聽いて眞に面白く味はうと云ふには矢張り聽者自身でも之を學んで居なければならぬ。左も無ければ之を聽いても單だ箏の音は好いものだ位に感ずるに過ぎなからうと思ひます。態う述べて見ると箏曲も隨分難かしいものですが其處に箏曲の美點もあり又特色があらうと思ひます。

△箏曲彈奏の心得

態んな譯ですから、箏曲は之を彈く者の氣持が最も大切で、彈いてゐることが何となく頭へしみ込む程にならなければ、到底面白く彈くことは出來ませぬ。私は毎度師匠から「花の晨、月の夕、濱の音、軒端の風などには深く注意をして居ろ」と言はれました。之れは實に肝要な事です。此等のものに平生から能く注意をして居て、いざ彈くと云ふ時には、自ら自然に合し、曲と同化するやうに成らなければならぬ。今「熊野」なり「小督」なりを彈き初めるとすれば、其の熊野なり小督なりの事跡を直ぐと頭へ浮べ、專心之れに趣味同情を持つて、自らも一幅畫中の人となつて掛られば、曲の妙趣を十分に發揮することは出來ませぬ。私は盲目ですけれ共、それでも花の咲いた處へ伴れて行かれたり月の冴えた晩に外へ出たり致すと妙に氣持が變つて參ります。箏を彈く者も指先が絲に觸れたら何うか態う云ふ風に自然と氣持の變はるやうに爲つて欲しいものです。

△安永撿挍と大雅堂

要するに、專門の人にせよ、慰にお遣りになる方にせよ、箏曲とは一體如何云ふものであるかを能く考へ今少しく自信を强めて、しんみりと研究をして頂きたいです。こゝに安永撿挍と大雅堂に就ての一の逸話があります。撿挍は三味線の名人ですが、此の人が左京に家を構へて居た頃、大雅堂は未だ勉學中の身分で貧乏をし乍ら其の隣家に住んで居ました。或時大雅堂が撿挍の家へ遊びに行つて「先生何卒三味線の本曲を一つ聽かせて下さい」と賴んだので、撿挍は快く側に在つた三味線を取り上げて、絲の音美しく「ほそり」の一曲を彈いて聽かせました。大雅堂は感歎の體で耳を澄せて聽いて居ましたが、其れが終ると「先生何卒今一曲を」と所望した。すると撿挍は「それは宜いが只今の曲は如何でした」と聞くと、「ハイ誠に結構でしたが今一回其處にある立派な三味線で彈いて聽かせて下さるならば尙々結構でせう……」と言ひました。すると、撿挍は怒り出して、「三味線と云ふものは其樣云ふものでは無い、最うお前には聽かせるとは出來ぬ」と言つて、斷然彈くとを止めました。そこで、大雅堂も大に感ずる所があつて、粉骨碎身修業に修業を積んで、遂に彼のやうな畵の大家になつたと云ふお話。何うか箏曲を遣る人も此の撿挍のやうな意氣地があつて欲しいものです。つまり聽者に阿らぬと云ふ點は、大に箏曲家の學ぶべき所であらうと思ひます。



飯の腐敗を防ぐ法

おい〳〵夏向きになるにつれて御飯が腐つて困るといふ苦情がいづれの臺所でも起る、飯の腐敗を豫防する方法があれば衞生上、經濟上有益な事である。某博士の學理上より推論した實例を述ん、昔から白米は充分磨ぐほど飯に炊いて腐らぬと云が、然しあまり磨ぎすぐると實際滋養分を洗ひ落して仕舞ふから白米を磨ぐには餘り念を入れ過ぎてはならぬといふ說もある、爲めに世人はあまり白米を磨がずに炊くものもあるが、この說に就て實際の價値如何を見ると成程米は磨げば磨ぐほど滋養分を減じてしまふ、けれどこれは實際には感心されぬ話で、單に滋養分を減ずる點からいへば米は玄米を炊いた方が一番よいのである、旣に玄米を精げ、滋養分を減じた以上は、味と消化の點が眼目である、故によく精げ、よく磨いて炊き、其の爲めに減らした滋養分は之を副食物から吸收せしむることゝしたならば差支はないのである、是れ夏季飯の腐敗を防ぐ方法の一つである。

次の方法は水である、飯はよい水を使つてよく磨いて程よく炊いたならばそんなに腐敗するものではないさて其の水は如何なる水がよいかといふのに、これは水道の水が一番よい、何故かといふに白米の上皮には枯草菌といふものが澤山附着して居る、この菌は高熱の爲めにも生活力を失はぬもので飯の腐敗を誘ふものであるが、井戸の水では水道水ほどに十分にこの枯草菌が洗ひ落されないからである。

在米勞働者の生活

（加州事件の影響を被れる實話）

勞働者の妻　松下かよ

△勞働者の生活

妾は去る卅一年に、良人と共に渡米致しました。最初は外國へさへ行けば金が儲かる、亞米利加へ行つて働けば、一日が二圓にも三圓にもなつて、二三年も居れば、金持になれる、同じ働くなら日本になぞ燻ぶつて居ないで、思ひ切つて出掛るに限ると勸める方がありまして、夫婦とも其氣になり、遙々參つたものですが、扨て參つて見ると、成るほど賃銀は日本よりズツと上等で、一弗廿五仙から一弗五十仙にもなりますから、恁んな結構なことは御座いませんが、倘且取れゝば取れるだけに、他の物價も高く、出るお金も少う厶いませんから、談話を聞いて想像したやうなわけにはまゐりませぬ。日本から參つた勞働者の生活を見ますと、一升は倘且一升で、誰一人有福らしいのは見もつかぬことで御座います。

夫れに何所でも賭博熱が盛んで、金さへ取れゝば皆なこの賭博に投げてしまひますので、中には仕事衣すら碌には持たず、困つて居るものが澤山御座います。

恁んな風ですから、他に構はず、獨り儉約に儉約してお金を貯めても、持つて居ると見られますと、四方八方から借りにまゐります、夫れを貸さなければ妨害をしたり、喧嘩を賣りつけたりして、おまけに、恁うした勞働者の上には、ボツスと申して、雇主と勞働者の間に日本でいふ親方が居て、賃銀の上米をはねたり、中々甘い汁を吸つて居て時々は心附けを致しませんと、あげて呉れる賃銀もあげませんから、餘程臍を締めて居りませんと、日に二弗乃至三弗のお金を儲けましても、鐚一文殘る氣づかひは御座いません。

そこで、良人は最初、サンノゼと申す所の大百姓に使れまして、農事――麥つくりや、果實の栽培を致して居りましたが、右の通りで金は充分に殘すとも出來す、然ればとて何一つ覺えるといふでも御座いません

から、夫婦して桑港へまゐり、良人は其地の樂器製造所へ入りました。

△夫婦共稼ぎ

此の樂器製造所へ入りましたのは、職を覺えるのが第一の目的ですから、最初は到底充分の收入は御座いません。サンノゼに居れば、賃銀も餘計に取れた上に、物價も桑港などから見ると、ズツと安値う御座いますから、金は貯らないまでも、先づ生活に困窮といふことも無く、左に右やつてまゐれましたが、桑港へまゐつてからは、其生活にも困窮位で、浮か〳〵はして居られません。

其所で妾は、日本人協會へ出入り致しし、皆樣の洗濯ものや、繕ひものをしたり、身に出來ることなら何でもしやうといふ決心で、外見も外聞もかまはず、一生懸命共稼を致しました。併し良人は三年と五年辛抱すれば、一藝を覺えることが出來ますから、夫婦とも少しも苦痛には存じませぬ。前途の事を樂みに、稍々と働いて、細々ながらも生活を立て、其の中には追々良人の收入も多くなつて來ましたので、少しは貯蓄も出來ました。

是で前途の光明も見えて來たやうな氣が致しまして、二三年辛抱すれば、仕事も充分腹へ入つて、日本へ歸れる事と喜んで居ますと、彼の地震引續いて起つたのが日本人排斥問題で御座いました。

この日本人排斥の聲が高くなつた折東京の松本といふ方が月島に大きな工場をこしらえて、ピアノオルガンを製造するといふことが、或る雜誌に出ましたので、何か事あれかしと思つて居た白人の勞働者たちは、これをよい口實にして、日本人を雇入れるのは、製造上の秘密を教えるやうなものだ、盗人に鍵を與へるやうな危險なことだといつて日本人の勞働者は一人殘らず追れました。

良人も此時、此の理由の下に解雇されまして、夫れから他の工場へもまゐつて見ましたが、何所も此所も、恁うした口實で白人の勞働者が邪魔を致しますので、雇主が御座いません。其實此の理由は、畢竟白人の勞働

者が、安い賃銀で日本の勞働者に仕事を取られては、自家の收入に影響くものですから、偖んなことを言ひふらして日本人を雇はせまいとするので、遂には新聞や雜誌までが其樣なことを書き立てたのです、そこで桑港に居ても駄目だとおもひ市俄古へまゐることに致しました。

けれども、未だ口があつたのでも御座いませんから、妾だけは後からまゐることに致して、身一つは洗濯や使ひをしてゝも其日を送り、良人が何方へか住込むまではと決心致しまして、良人一人を出發せました。

夫れから一週間餘りも經ちまして、良人から二回の音信を受けましたが、最初のは無事安着との報知で、二度目のは當地でも六ケ敷さうだとの事、それでも萬一を希望まして、萬望うまく入れゝばよいがと思つて居りますと、今度は手紙で無く、良人が悄然と歸つてまゐりました。聞けば例の日本人排斥の餘波がこゝへも及むで、甚麼も雇つて吳れ人が無いとのこと――不運の時には不運なもので、良人は用心の爲めにと持つて參りました無けなしのお金を竊れてしまゐました。

△最後の決心

偖うなつては致し方が御座いませんから、良人も妾も最後の決心を致しました。

それは、一先づ夫婦が別れ／＼になつて、稼げるだけ稼がうと相談を致しましたので、良人は早速某會社の役人の中にコックの下働に雇はれまして、妾は相變らず洗濯やら使步きやら、骨身を吝まず一生懸命に働きました。

夫れで甚麼にか偖樣にか其日を送つて居ましたが、良人はこれが本心でありませんから、內々口を搜して居りますと、其主人の懇意な家で、良人をコックに欲いと所望されまして、其時には最う料理の事も大方は覺えましたので、早速雇はれてまゐりますと、其主人といふ方は、蓄音器を製造する會社の役員で、間も無く良人の希望を聽いて、その會社の工場へ入れて下さいましたので、今日では再び希望の仕事を致して居りますが、一時は中々苦心を致しました。

兎に角、妾は是等の辛い思ひを致しまして、よい經驗を得ましたから、私に喜むで居ります。

滋味と健康

食物を改良して體格をよくせよといつても、これまで日本人の習慣として大部分の人が茶漬に香の物で濟ましてゐたものを、悉に脂濃い西洋料理は勿論、牛肉、鷄卵、魚類を二度三度食へといつた處で、迚も實行が出來るものではないからこれは、順序を以て變へて行かなければならぬ、殊に本人がそれを希望するとした處で、經濟狀態や、社會の狀態がそれを許すものではない、然らば如何にして順序を追ふべきかといふに、まづ食品の分量を定める事である、即ち動物性食品肉類四分の一、植物性食品米、麥、豆、菜四分の三とするのがよからう。斯ふいふて肉類を好む人はあまりに肉が少いといふかも知れぬが事實幾分肉類を好む人でも中々そう肉類を食つて居れるものではない。

又世間の人が常にいふ處ろを聞くと、どうも家ではヒジキに油揚お茶漬に香物で、甘かない、瘠る樣だから時々は料理屋へ上つて甘いものを澤山食はればならぬなどゝいふが、これは大なる誤りである、人間の衞生は不斷が肝腎、不斷衞生を守つてさい居れば時として偶々不衞生をやつても左程に疲勞はしないものである、故に家の飯が不味といつて偶さか八珍の滋味を食つた處ろが其人の健康を改良すると云いふ事はむづかしいであるから前述の割合で調理した食物を不斷食ふて行けば漸次に健康は良くなつて來るに相違ない論より證據を示せば彼の兵營の如き、一方では動植兩性の分量を定めて調理して、一方では兵士の身長、胸圍、體重等を調べて統計に示すとチヤンと効能が顯はれてゐる、故に斯る團體では食物の改良は直ちに其の成蹟を表はす事が出來るのである、故に家庭に於ても大に此の方針に依つて改良して行かればならぬ事は衞生上緊要なる事柄である。



跡見玉枝女史 昔日譚

一記者

花蹊女史と玉枝女史とは御姉妹と速斷する者もある位な深密の從姉妹同士ですが其昔義姉妹の契りを結び相愛し相敬ひて生ひ立たれたそうで、特に玉枝女史は兄君より托されし三尺の遺孤の爲に、斷然婚嫁を辭し、百難を犯して之れを養育されました、女史の名聲が年と共に加はるものも拔群の才藝が妙境に達せられたばかりでなく、鬼神を泣かしむる至誠あるに由ると存じます、記者一日今川小路の閑雅な御住居に女史を訪問致しました。

▲祖父母は極端の慈善家

私の實家は大阪近在木津村の豪農で御座いましたが、祖父母が揃つて慈善家であつた爲に身代が傾いたので御座います。尤も祖先は聖德太子より臣と云ふ姓を賜はつた位でしたから、祖父母も佛教信仰の結果喜捨を事と致す樣になつたのです、祖母が宮寺などへ參つた時、憐れな者を見ますと、直に着て居る羽織まで脱いで與へると云ふ風でしたから、獨りでは出されぬと家族が用心した位でした。

花蹊の父は私の父の兄で兄弟共田舍で朽果てるのを殘念に思ひ、江戸へ遊學に出掛けたのです。其頃遊學に出やうと云ふのは、餘程變つて居たに違ひはありません。それで伯父は專ら漢學を修め、父は武藝ばかり修めましたので、伯父は成業の後實家に歸り、父は江戸に止つて紀州侯に仕へ、劍術の御指南番を勤めて居りました、私の母は江戸の者で、私は安政六年に市ケ谷で生れ、八幡樣が產神なので御座います。

▲同胞の震災

父母は安政二年の大地震の際、深川に住つて居りましたが、震害の甚い場所でしたので、家は丸潰れと爲り、長兄も長姊も此時無慘の最後を遂げたので御座います。當年は其五十年忌で鄕里へ參り、追善を致して參つたのです。兩親は地震の多い江戸が熟々厭になりまして、私の生れた年に大阪へ立退きました。其時

は中仙道を旅行致し木曾路を通りましたさうで、山道の險惡、旅行の困難など、後々までも一つ話しに致して居りました。それで私も此山路を旅いたし、風景の寫生して戻りましたが、誠に好い紀念であると存じます。

▲生死不明となりし父

御維新の際、父は宮樣の御供を致して東京へ參り、無事に戰爭を終つて、穗波伯爵に從ひ鄕里へ戻ります途中、伯爵御病氣の爲め府中(靜岡)に滯在する事となりましたので、從僕に委細の事情を申し含め、自分の陣笠、陣羽織等を持たせ、先へ歸らせました處、其從僕が旅路で病死して了ひました。家の方では暫く父よりの音信が御座いませんから、戰死致したのでは無いかと心配致し、京へ戻られる御方に尋ねて見ても一向樣子が判りません、易を見て貰へば戰死と申され、如何しても無事では居らぬ事と諦らめまして一家の善後策を講じ、十歲の私は伯父の許へ養はれる事となりました。それより一年半程經ちましてから、病死した從僕の所持品が人手から人手に傳はり、不思議にも私の家へ屆きましたので、戰死の形見と思ひ定め、萬一の賴みの綱も切れて一家は今更のやうに悲歎に沈んだのです、私は幼少より畫が好きで、寺子屋へ參つても雙紙に徒ら書ばかり致し、樂しみは畫ばかりと云ふ風でしたので、伯父は自分の子供が少いから、汝のお父さんが此世に居ないと定れば汝を娘に貰ひ受けて花蹊と姉妹にしたいと申して、畫は勿論總ての敎育を花蹊から受けて居りました。

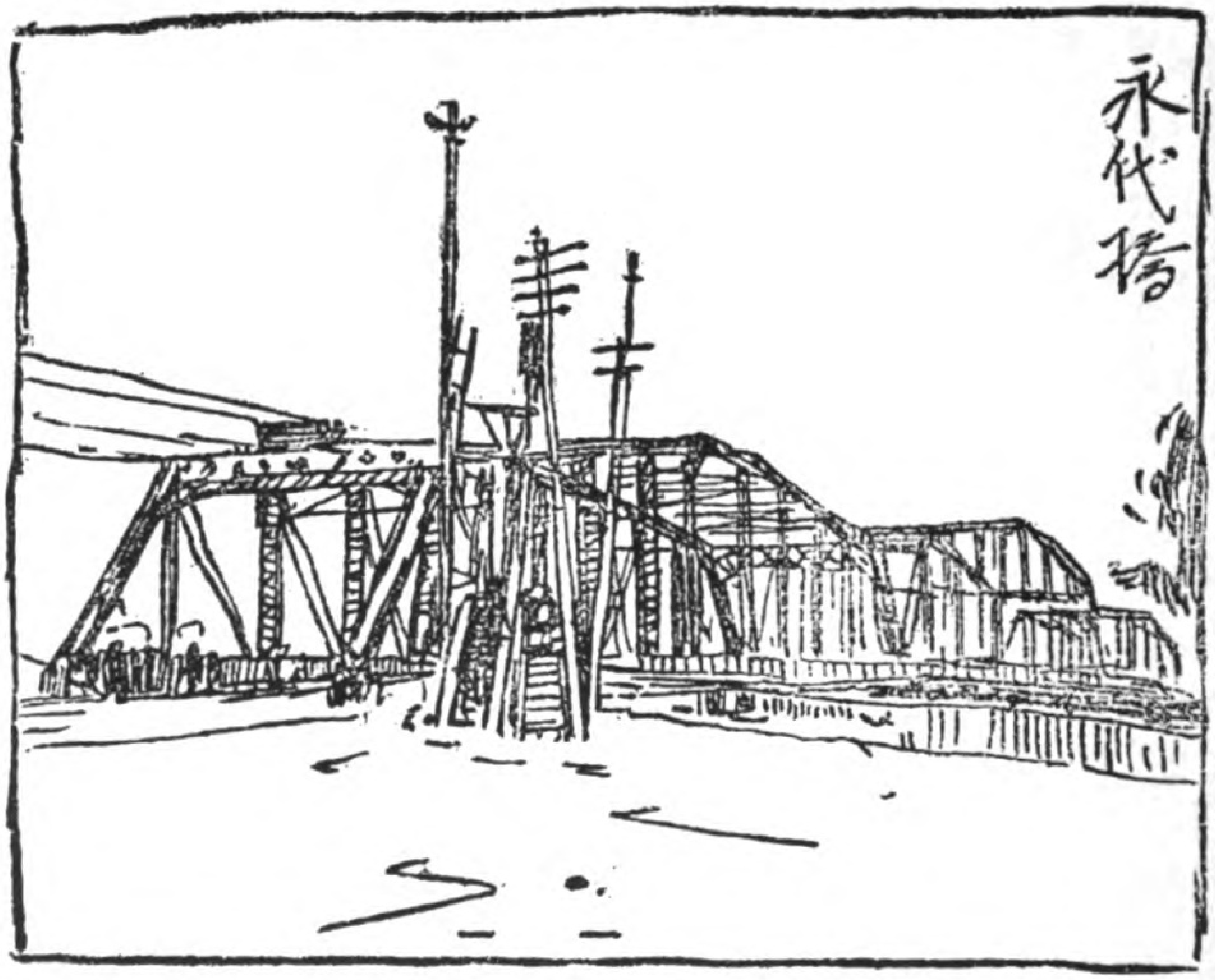
▲嬉しき父の歸宅

唯今考へますと嘘のやうな交通機關の不自由さ、笑止の至りで御座いました。父は性質豪放で手紙嫌らひでしたから、三年の永い間に一度も故鄕へ音信を致さず從僕が傳言したから宜いと安心して呑氣に諸方を遊歷して居つた間は、未だ年のゆかぬ子供ばかりを抱へた母は的もなき父の行衞を探し步く譯にも參らず、相擁して思ひ焦れ歎きに沈んで居つたのです。所が家を出ましてから三年目に優曇華の花は咲くとも再び歸る

まじと斷念めて居た父が、飄然と戻つて參つて、澤山の土產物を取り廣げて元氣よき手柄話し、留守中の悲歎を察して、居らぬ樣子に、一同は嬉しい感じよりも父が何故早く留守中の心配を慰めて吳れぬかと、聊か拍子拔がして只だ夢心地で御座いました。それから父は一番秘藏子であつた私を伯父に遣つたと聞いて大層殘念がり、如何しても戻して吳れと申し出で、却々談判が難かしう御座いましたが、遂に私は再び父の家へ歸る事となつたのです。

▲兄の遺孤

私の長兄は地震で不幸の死を遂げ、家を嗣いだ兄も明治十四年に二十八歲で病死致しました。私は其頃京都の高等女學校へ出勤致して居りましたが、東京の博覽會視察を托されて出京致しました、所が兄の大病と云ふので歸省致しました。兄は臨終の枕邊で二人の子供の行末を私にくれ〲托したのです。私の家產は前申した祖父母の慈善道樂で餘程傾きました上に、父も家事に無頓着で追々下向になつて參つた處へ、御維新の變に遇ひ、兄は袋物店を開きましたが之れも失敗に終つたと云ふ具合で、三歲の男兒と一歲の女兒と其母親の身を案じたので御座います、私も其頃は未だ僅かの俸給で自分を



過して居る位の境遇でしたから、多勢を引受けた前途を心細くも感じましたが、身を粉にしても兄の遺言を全うしたいと存じ、此時より獨身生活の決心を致したのです。

▲緣談謝絕

亡兄の妻子を引受け、嫂は良緣を求めて再嫁致させ、幼い二人の兒は私の母親が世話する事と致し、私は俸給を以て微ながら此人々の糊口を計ると云ふ計畫に定めたのですが、兎に角定りを付けるまでに種々と蟠まる事情を獨りで心配致さねばならず、隨分骨が折れました。學校の俸給ばかりでは如何に儉約しても多勢の糊口に足りませず。未だ其頃は腕も未熟で依賴者も滅多にないので、耻を忍んで此方から腰を屈め書かせて貰ふと云ふ切ない思ひも致しました。素より絹着物を纏ふ事は出來ませんから、畫の會などには顏出しも致さず。學校通ひも粗服で通して居りました。知己の方は私の窮狀を氣の毒がり、良緣の世話を致す者も多く中には矢を射るやうに申込んで下さる方も御座いましたが、如何に良き家へ嫁つたとて二人の幼兒を食ふ事は氣兼であり、且つ長男は官立學校を卒業させて呉れよ、と切に賴まれた兄の言葉を、嫁入先で實行する事は至難で御座いますから、獨身で通すに如くはなしと存じ、一切緣談を謝絕して了いました。何でも明治十四年から十九年までの間が尤も苦い境遇でしたらう。併し私は少し勝氣な性で親戚や知己から一文の借錢を致さずに押通し、孤兒も漸く人並に育て上げたのですが、全く神の佑助であつたと思ひます。而して東京へ出ましてから年一年と好都合に成つて參りましたのも

私の赤誠を神が憐れみ玉ふのであるから感謝に堪へません、長男は中學卒業後、本人の望に依つて美術學校を卒業致させ、志願兵役も滯りなく濟んで、此程岡山の高等女學校へ敎師に赴任致しました。女子の方は最早緣付けましたのです。

▲女史未來の配偶は戰死

父が行々は私の配偶にもと考へて愛育致した跡見數男と申す壯丁は彥根藩の醫師の息子で、幼少から學を

好み、安土の觀音寺へ入つて深く漢籍を修め、壯年、及んでから京都へ參つて父に武術を習ひました、父は大ひに此者に望を屬して養子に貰ひ受けたのですが、上野の戰爭の際戰死を遂げて了ひましたのは、私が十歳の時で御座いました、唯今でも虫干を致すと、其人の書いた物が出るので御座います。

金鑄飼育法

春塘生

盆栽…盆石…萬年青など〻云ふ高尙の娛樂は許多あれど、御婦人方に尤も適したお慰みは、金鑄の飼育法であるから、斯界の專門家を訪ひ聞得た所の、金鑄飼育法をお話し申さう。

△金鑄は所謂丸ッ子

金魚の種類は和金…流金…金鑄とあるが、金鑄は今日でも貴顯紳士に愛され流行しつ〻あるのだが、當時は之を俗に丸ッ子と稱して大名道具のやうに思はれ、町家では餘り飼育しなかつたのであるから、金鑄は貴重品と同樣に扱はれて居たに違ひないが、昨今でも數百金を投じて、其魚を購求のは孰れも中流以上の家庭である。

●季節は秋季

金魚の季節は一般に夏季のやうに思はれるが、其の實に秋な季節としてあるのだから此の金鑄の品評會も、十月上旬に開催する事になつて居る、金鑄にも新舊の兩派があつて新派は山谷の重箱「鯖儀」、舊派は千束町の石川「金魚屋」で開催するのです、此品評會が秋季に限られるのは當歳の魚が黑色より紅色に變じ、金鑄が横綱として金鑄の姿勢の定る時が、則ち秋季にあるのだ相ですから其の期を應用して品評會を開くので御座います。

△品評會の光景

十月上旬に開催する品評會の光景と云つたら、愛魚家は自慢の金鑄を出品するのですが、此出品した魚を白燒の陶器の中へ收容して、審査員が金鑄の品評を致します容器の中に遊泳する魚の金鱗が水に映じ、其の美麗なる事は赤地金襴のやうに感じられます、乃で優等の魚は審査員が會評の上で横綱、三役、行司、勸進元などの名稱を附し、之が愛魚家の名譽となり金鑄に官祿が附のですから、舊派の愛魚家中には觀魚會と云ふ機關を組織されてわります。

△幼魚の飼育は富籤

如上は金鑄品評會の側面觀に過ないですが、素人が金鑄へ手を染るには姿勢の略整つた當歳の魚を買入れ、之を飼育して娛樂のがよいのです理想に適つた好頁の金鑄とあつては、勸業銀行の債券で五百圓を得たと同じやうなものです、實に金鑄の當歳は富籤と同樣で幼魚の中から優等品が出たらば二百圓、三百圓の相場だそうですが、慰みには金鑄の

孵化する時季が楽みです。

△趣味は孵化にあり

當歳の金鱗を求め冬圍ひして置くと、翌年の八十八夜に至り交尾期となる、交尾期となつたら水槽の中へ松藻を放ち、親魚が産卵したらば他の器物へ親魚を收容して、暫時は餌も與えないのが愛魚家の秘傳だ相です、それから卵は好天氣ならば、九日目程經て孵化するものです、孵化したら五日間位經て松藻を去り、其の餌は茹鷄卵の黄味ばかりを碎き、容器の隅の方から靜に水の中へ流し込んで置くのです、乃で餌付て來たら生餌の微塵子を與へ、六月中旬から糸蚯蚓や孑孑を餌とするのですが金鱗の食物とする糸蚯蚓や孑孑は、衛生の發達した爲めに泥溝浚が頻繁なので、終に發生しないやうになつたから、愛魚家は專ら人造餌を製造する事になりました。

△孑孑代用の人造餌

金鱗の兵糧攻に會たので、巳なく衛生試驗所に就て孑孑の分析して貰ひ、孑孑に代用する人造餌を得たのだが、其の製造法は左の通りです

一メリケン粉　五合　一大鷄卵一顆
一砂糖　四分　一脂肪無き豚の赤肉

右の中でメリケン粉は宜い加減に煮揚け、豚の赤肉はメリケン粉の分量十分一で、之を克く湯煮をして擂鉢で磨り、其の四種を煉り合せ乾燥させて用ゆるのであります

△日常與へる餌の分量

金鱗も小見衆と同じやうに制限なく、無規律に餌を與へたら忽ち病氣を惹き起すから、分量を一定せねばなりませぬ、其の分量は當歳魚の頭程を與へ、二歳以上の親魚は頭の半分程でよいのです、餌の分量はそれとして、此餌を與へるに時間があると云ふ事で、先づ餌を與へるのは朝七時より九時迄の間に限る、それから親魚と當歳とは餌を食ふ時間が異なり、親魚は午後三時、當歳は五時迄に限り、其の時間以上餌を與へてはなりませぬ、水槽の中に餌が殘つて居たら取棄るに限ります、金鱗の飼育は餌と水との取扱ひの手當が肝要です、

△水槽の位置と寸法

金鱗を收容する水槽は、セメント叮きか木造に限るのですが、庭園の狹い所ではセメント叮きより木造が宜い、其の水槽も餘り深らず丈六尺巾三尺に對し、深さは五寸に限られて居ますから、容器の伸縮に從つて深さも之に準じればなりませぬ、それに水槽を新調した場合には灰汁を出し、鮒や和金で試驗するが宜い、鮒や和金を放養し、異狀が無ければ、金鱗を收容しても可しい、それから水槽の位置だが、空氣が流通し、日光の射所が宜いのですから慈じの庭より物干の方が宜い、併し日光が水へ反射するのは不可ないから、水槽は南に面した方を開けて、他は葭簀よこで屋根は葦に限ります。

(つゞく)



塚越停春選

（天）山櫻の花を見て　播磨　鏡子

とつ國の人に見せばや日の本の
はるの光のやまさくらはな

評、古歌翻し得て、意必ずしも陳ならず。

又家の内外に櫻花のちるをみてと題して、同人

さくら花庭のうちとにちりかひて春のすぎゆくあともみえけり

（地）手紙のはしに　佐賀市　吉岡小芳

待たるゝも待つもかたみにつらければ
ともに樂しくへなんとぞ思ふ

評、平凡に似て平凡ならず。

（人）春雨　德島市　ゆかり子

まきあげしをすの緋房に煙ゆれて
春雨ほそし奥殿のひる

評、眞に是れ春雨の光景。

秀逸

〇〇〇逸題　牛込　平塚白百合

たみごゑのことほきうたもきこゆなり梅さく村の春の朧夜

洋々として太平の氣象あり。たみ聲の語殊に面白し。

〇〇〇逸題　三重　佐々木らく子

長き袖に頬をおほひてのがれ出でぬ舞しひられし春のおぼろ夜

活狀見るが如し。

〇〇〇山吹　上毛　增田たみ

うつくしきおのが姿を口なしのいはでの里の山吹のはな

謙德を見る。

〇〇〇題しらず　三河　近藤しな

天つ姬戀の女神のみ姿をゑります宵か今朝の白雪

着想奇警甚し。

△〇〇春の月　神戸　足立ゑい子

入りぬべき山は霞にとざゝれて花に宿かる春の夜の月

下句殊に面白し。

、〇〇逸題　大阪　公文榮子

人は皆われにつれなき世なれども我に友あり花と云へる友

遒勁。

〇〇黒髮　伊勢　山路鳩兒子

聞えつゝ經し廿年の思出にみだれし髮の長くもあるかな

長くの語力あり。

〇〇〇新潟　越後　坪井わか子

潟多き船江の里の近遙や柳やなぎを春の風吹く

好竹枝。

△〇〇逝く春　京都　岡松光子

散る花はくだす袂にまかせおきて楢に春の名殘惜しまむ

楢に春の名殘を惜まむとする所に才氣を見る。

、〇〇失題　横濱　吉川香都子

ゆきすりの人よびとめて道とへば聲音やさしき春のおぼろ夜

聲音やさしきの語あつて、光景活動す。

△〇〇春歎　麴町　羽田瑩

姫君のふりのたもとに日は斜櫻ちりしく高殿の庭

春景。

△〇〇逸題　伊賀　服部春江子

窓の内にはた織る乙女ものや思ふみだれがちなる筬の音して

筬の音の亂れがちなるより乙女の物思ふに想到せしなるべし。

〇〇失題　神戸　船戸ゆき子

泣く母の膝抱かれて香を焚く幼き喪主に花ちりかゝる

見る人をして腸を斷たしむ。

、〇〇題知らず　滋賀　ひさ子

おぼろ夜にあくがれ出て思はずも花の嵯峨野に友を訪ひけり

△〇〇題知らず　福井　島萬壽子

湯上りや雨の音ほそき化粧室にぬれ髮とくと小櫛とる人

人をして巫山の春を聯想せしむ。

〇〇春雨しづけきあした旅宿の窓によりて　肥前　婦野登子

しづ〳〵とそゝぐもうしや春雨のふるさと遠き旅のやかたに

〇〇逸題　前橋　金子秀子

白妙の羽衣かろく胡蝶まふよあけの牡丹花いまさかりにて

〇〇曉春月　三重　春田のぶ子

しらみ行く光を花にゆづりおきて霞にしつむ山の端の月

上句最も妙。

〇〇蝶　熊本　安田文子

手折りつる花をしたひて去りあへぬ蝶の心のむつまじきかな

〇〇逸題　備後　立神峯子

琴の手をしばし止めて片頰笑み何をかしのぶ春の夜の人

佳調

春雨　北海道　福島いよ

そよとだに音をし立てねば春雨の降るとも知らぬ有明の頃

〇　下野　新井琴子

愛の衣黃金の衛と取換へて安息を云ふ君ならなざりし

逸題　四坂島　渡邊梅子

その春の前髮姿今こゝに君にとはれてうら耻しき

河春月　大分　加納豐子

天の河棹さし下る月姫の小舟もる影のおぼろけにして
題しらず　京都　小西多津子
うちむれて野邊にあそべるをとめ子のたれ髪にふく春柳の風
○　姫路　柳田白百合子
椿ちるなの花畑蝶むつるまひるを寺の鐘ゆるふなる
五月雨　岡山　田上濱子
晴れかしと祈るかひなく紙雛のむなしくぬれて五月雨のふる
○　高崎　池野たま子
夕月夜手つなゆるめてうたなから京へ越えたる春の夕暮
○　神田　田中常子
父もまさす母もゐまさぬ故郷や着たる錦は誰にかみせむ
○　札幌　杉山清子
五月雨の音なく降れる御陵の池の濁りに花菖蒲咲く
牡丹　神戸　しづ枝
哀れさは廿日と限る花よ香よ春を驕りの色ふかみ草
○　牛込　平塚白百合
信濃ぢや木曾のかけはし朧にて夢と淡げの夕月かゝる
○　相模　文子
摘草や花より花にあこがれてかへる村路の夕月の影
折にふれて　青森　相田まち子
田子の浦かすむあたりはあけかれて朝日に匂ふふしのしら雪
○　三重　春田のぶ子
女づれ嵯峨へといそぐ春の夜や駕籠の戸をうつ山さくら花
○　岩代　菅野孝子
胡蝶追ふ少女の姿かきくれぬ藤むらさきの霞ひく野に

○　伊賀　服部うた子
客はみなかしまし立ちしてはたごやのまひる淋しく春雨のふる
早蕨　新居濱　山崎玉子
うれしきに折りつくしけりさわらひを遅れし友を待つとせしまに
春雨　豊後　菅原よし子
春雨に黒の小桜を行く君のおん衣に傘に花ふゞきする
○　姫路　伊田とし子
なつかしき様はいづこと夕暮の花ちる窓に袂ぬらしぬ
花下述志　岐阜　度會よし子
櫻花見るにつけても外國にうまれさりしぞ嬉しかりける
○　備中　高草てい子
我妹子が赤き衣裁つ朝の縁に銀の箔して梅の花散る
折にふれて　幽子
小町かきし繪筆あらひしその水に無意か有情か櫻花ちる
春の歌の中に　尾張　宮田愛子
淡紅色の襷あやどり乙女子が菜の花つむよ山本の里
○　芝　高木きん子
ふであらばうつさまほしきながめかなのどかにかすむ春の遠山
○　千葉　木内貞子
汽車なれや今朝松島を後にして夕隅田に月を見るとは
菫　前橋　宮内りき子
すみれさく故郷戀し春の日に來よといひこし友の玉章
春風　青森　青柳駒生子
春の風花のやうにも頬を染むる人より吹きぬときめく胸に
春曉　鳥取　橋本鈴子

鐘の音は霞にのこる山寺の花よりしらむ春のあけぼの　上毛　栗原庫子

生品村の友と別れに

願はくば蝶ともなりて今一度君と遊ばむ生品の野に　河内　陰山蓮子

○

はらからの皆學び舎に出しあと小窓に一人袖ぬらすかな　大阪　落合花

○

思ひ出のおぼろ月夜はまた廻りぬ去年の柳の蔭もそのまゝ　信濃　島地やすこ

春

白き馬金覆輪の鞍置けり主や何處ぞ花の下蔭　岐阜　度會清子

送別

いさぎよく行けと言へど今更に止め難きは我涙なり　神戸　今西操子

○

言の葉の花美わしく咲きながら實らぬ情のおほくある哉　岐阜　井川まつえ

○

涙をほき四つのたもとを分てより雲のはた手に君もしのばむ　京都　藤田靜枝

吉野の花

芳野山花見るたびに思ふかな皇御國の靜かなる世を　安房　和田きん子

海上霞

伊豆の海の八重の汐路を見渡せば七島かけて霞む春かな　四谷　白椿

○

賤が家に花さき亂れ蝶舞ひてをのつからなる春の長閑さ　上總　平井靜子

淋しき夜

いとし子にそへ乳の夢のはかなくもいとゞ身にしむ曉きの鐘　大阪　磯まさ

深山幽居

花さけど春風吹けど山の奥は更に浮世の埃りとてなし　淺草　春江

山櫻

春山に咲く一と木の山櫻誰か殘せし情なるらん　栃木　松村鶴子

春のうちに

姫ぎみの櫻かざしてはなのもとうとふなめぐる蝶のひとむれ　滋賀　木村藤枝

落花如雪

吹たびに雪のふるかと見るまでにちるやあらしの山さくら花　北海道　福島いよ

折にふれて

語らはん友もなき身は春秋の雁の便りぞいや待たれぬる　伊勢　和歌子

さくら

七村に夕告げむと鐘撞が撞木ひく手に櫻ちるなり　神戸　水野輝代

○

共に見し君はいまさで故郷は月影ばかり朧なりけり　吳市　牧あい子

蛙

ふるさとの森も小川も忍ばれて旅宿の夕蛙なくなり　京都　砂川澄子

○

紫のいろも床しゝ白もよしいづれをひかん花あやめ草　芝　新野壽枝

○

うらぶれし我身かなしとかこつとき花のたよりを友知らせ來ぬ　宮城　遠谷さだ子

○

花や星や夢とすきては仰ぎ見し今宵青葉に月の影とる　新潟　小島こと子

月前の梅

たとならぬ香こそ匂へと窓おせば梅の梢に月朧ろなり　香川　村田幸子

春雨

おやみなくふれる春雨心せよ今朝さきそめし花にさはれば　北海道　中村賤子

○

いさり舟三つ四つ五つ影見えて眞砂路千鳥月沱み渡る

學校卒業生に　播磨　琴　子

いつろとも思ひかへせよ朝夕に教をうけし學ひやのまと

野遊　韓國　小谷治子

菅の根の永きひと日もけふのみはみぢかくおもふ野邊の遊びに

詠史　越中　柚木民子

朽ぬ名を世々にのこしてちりにけりふかき匂ひの櫻井の里

別れし友を思ひて　日本橋　村　子

おぼろ夜の月にわかれし人やいかに去年の今宵の花の下蔭

○　遠江　宮城繁々子

白鳥の背に潮のうすあかり藻の香たゞよう濱の朧夜

櫻　陸前　赤井かめよ

うつむきて咲ける櫻や武士のいさをほこらぬ心なるらむ

春遊園　京都　小西たつ子

梅櫻うちかざす間にうつりゆくわが面かげをいかにせましや

○　越前　新保靜子

夕鐘はまろき山こえ菜の花に月ほのめける小野をわたりぬ

○　下谷　石井謙子

敷しまの大和島根の朝ぼらけ櫻に笑まぬ人なかりける

逸題　四坂島　渡邊榛子

八千草の花さく中に家見えて夕日靜かに羊なくなり

○　麻布　撫　草

友はみないゝきの春を憧憬し其花かげに我のみ泣きぬ

○　本郷　三宅　文

あめやみてことの音もるゝ襖がきに櫻はなちる春のおぼろ夜

○　大阪　後閑入鹿子

春の雨優しき人のさゝやきを聞く心地しぬ花の假やど

泡雪　越後　まつみ

春立てど東路はなほ朝寒みふると見るまに消ゆる泡雪

○　下總　岩瀬不二野子

糸柳萌びて泣きぬ別れにし北はよき國君ゐます國

水邊藤　下谷　藤波眞佐子

池水のみきはの松のわかぬまでさきかゝりたるふち浪の花

○　大阪　沖ふく子

母とじの柩を守るこの夕べさびしきまどに春の雨ふる

春雨　山口　酒向とし子

みどりなる小草のいろやふかむらんしめやかにふる夜半の春雨

○　大阪　山崎京子

オレゲの雲に事告け眺め居れば戀しき君か里にて消えぬ

○　美濃　飯島敏子

葦芽のまばらにもゆる淺沼の水もぬるみて春のかぜふく

○　豐前　岩根つる波

ちるさき傘二つならびて消えゆけり霧の奥にうたふこゑして

○　神戸　三日月堂なみ子

亡きひとのみ魂を祭る此夕孤兒泣き止ます桃亂れ散る

○　品川　鈴木うた子

目黑みしむれも露らわに生魚とり四五人踊る初夏の雲

亡き君を想うて　大阪　木村冬子

人はみな櫻に醉へる春の夜や君はかへらず文だにも來ず

感心なる女學生

情操正しき女學生の善行を募る

父兄より一定の學資を仰いで修業するものと、自活的に苦學するものとを問はず、何事にても勝れて感心すべき志操ありて他の模範となるべき奇特の行あらば其の事柄を詳細に記述して送られたし、是れ他山の石以て我が玉を攻くの料となし、一般女生の奮發立志に裨益あらしめん爲なり。

多くの女學生の中には或は一家の生計を助けつゝ學ぶ人もあらん他家に雇れつゝ學ぶ人もあらん、或は繁忙なる職業に從事しつゝ學ぶ人もあるべく、若しくは家計の困難に堪へつゝ猶志を失はざる人もあるべく、逆境に處しつゝ初志を貫かんと焦心する人もあるべし、其他額に汗しつゝ、生計に苦みつゝ、手足を勞しつゝ學ぶものもあらん、その學ばんと欲するの志は一なるべきも其の奇特なる志操と行爲とは千差萬別なるべし、要するに志ありて確實に、行ありて立派なる、女學生の模範的行爲を求む、吾人は斯る人々の敎員より、友人より、親戚、知己乃至一面識ある人によりて是等感心すべき善行美事の世に顯はれん事を切望しそれに就て本誌は多大の誌面を供するに吝ならざるべし、揭載したる事項に就ては三圓以上拾圓以下の謝儀を呈す。

短　文

◎印は入賞

◎家庭の平和

京都　藤田静枝

總領は去年學齡で、此の四月には二年生になるとて、其日の來るのを日日指折り數へて樂しんで居る、次はまだ手毬もロクに突き得ぬ、ようよう五歲の女の子、其又次が、丙午とて、世間からは兎角の噂せらるゝ、去年は五月生れの、栗蟲のように肥え太つた、やがて這ひ出そうかといふ男の兒で、兄が學校で習ひ覺えた、唱歌や軍歌を高らかに歌へば、妹が片言交りに之に和し、手を拍ち足を跳れ、座敷中を遊び戯るゝた、籃の中なる幼き弟は、不思議そうにクル／＼見廻しては、時々何か言わんとてか、譯の分らぬ聲を發しつゝ、手を振り足を踏ん張り、盈れんばかりの笑靨を双の頰に浮めつゝ、嬉々として笑へば、兄も妹も亦共に笑ひくづるゝので、そうして主人が何も仰せられず、只如何にも幸福に充ちた面ざしにて、此の有樣を眺められる、夫れは丁度、梅と桃と櫻が一時に咲いて、絕えず春風が吹き渡るようで、其の時の妾は、其れが如何に嬉しく、如何に樂しく、所謂天國とやら、樂國とやらに遊ぶ思ひは、こうもあろうかと、每々想像するので、それが一昨日も、昨日も、今日もである、恐らく明日も、明後日もであろう、實に小兒は、家庭の平和を齎す天使である。

◎古　里

石狩　小川初子

妾はなぜかくも古里が戀はしいのでせう、古里と申しましても父母の在し給ふのでも御座いませぬ、人里遠い信州の山奥で、さやかな草の庵に年老ふた祖母ひとりと兄上とのみ侘び住ひの村里で御座います、あゝ歸りませう／＼懐しい古郷に。花の世東の都の榮華の夢は露ほども羨みませぬ。妾は古里を此の世の樂園と思ひます。

◎人だまし

岐阜　度會よし子

鎭守祭りの日であつた、日頃稀なる好天氣、其上日曜だつたので、非常ににぎはひで社內は、雜閙をきはめ、のぼりは幾流れも立ち、物賣りは軒を並べて居た。その折燈籠のわきに、身につゝれをまとひ、筵の上に座り群集に物を乞ふいざりと盲の二人の乞食があつた、どーしたものか社後で、誰れかゞ「人殺し／＼」と叫んだので、彌次馬連が忽ちわい／＼喚ぎ立てた、さあいざりが起つて馳け出した、盲がパツト目をあいた。

◎さも嬉しさうに

愛知　小栗幸子

雪のふる夕方障子をあけて白い景色を眺めて居ると、ふと一羽の小雀が身ぶるいしつゝ家の中へ飛込んで來た、塒に迷ふてか此寒いのにまあ、あはれな雀よと、芳坊の箒持て追廻るのを制して一夜の宿を貸てやりました。翌る朝お禮は言はなかつたが、さも嬉しさうにチユ／＼啼て飛び去りました。

平　和

岡　はな子

濃いあい色のみ空を雲雀がまひのぼつてゆく。みわたす菜の花のまつさかり、その美しい影を小川にうつして、流れを彩つてる、その水上を黃色い蝶がそと口づけしてまたむかへ。實にほんのりと美しい春日和、風はふいても花は散つても平和の春よ。

夜嵐

金澤　岡崎とら子

酒の機嫌で云ひ出し玉へる父の言葉に、一年一度の花見時、さらば明日は公園の櫻見んと、ちかひしあした、夙く起き出でゝ雨戸を繰るに、惜くや昨夜たまの嵐のために、庭の一本散々に打ち悩まされたるその風情、げに武士の心にも似たらん如き櫻花、その散りぎはのあまりに潔よかりしことこそかへすかへすも怨みなれ。

花日和

福岡　是松英子

ふうわりとあたゝかい春風に、何ともいへぬ香を送る桑の花道、今し二輛の車前には洋服の紳士、後には瑠璃色の傘をさした婦人をのせつゝ走り行く、このかげを鍬の手止めてうらやましそうに見送つたのは、村の若寡婦つれ女である、彼はきつと先年討死した夫を懐ひ出したのであらう。

亡き子

丹羽　岡島とし

吹くかあらぬかと計りの春の嵐楢を誘ひぬ、あなむなの慎めしの風よと眺むるにまても無雙。散にし中にまぢる蕾ながらの一枝。亡き晶雄の面影とも見やられて一を拾ひとりて新しき佛に供へつ。母ちやん花々と肩にてせがまれしはきのふなるに。あの愛らしの聲はまだ耳に殘れるを。

彼岸の翌日

尾張　けい子

私の近所の彼岸櫻、いつも花が咲くといたづら小僧が手折るので衰へて昨年は一向に咲きませんでした、けれども今年は孫枝が立派に榮えて其名にもれず前日より二ツ三ツと、今日では大笑、微笑、眞面目など程よく交へて丁度見頃になりました。枯れかゝつて居る親枝にさからはず枝をさして そして目出たき御代の光りに浴びつゝ樂しさうに咲いて居る風情は和氣靄々たるホームのそれのごと何となう嬉しうございます。

雪

北海道　福島いよ

オゝ寒いと障子細めに打ち見やれば夜の間に降た雪の四寸庭の若松は重げな首傾むけて綿帽子の様にチンマリと頂いて居る。降て間のない露ばかりも塵に汚れぬ潔い雪と操かわらぬ松との取り合せ實に繪にもして見まほしき美くしさ。此のまゝ消ゆるは惜いものと大急ぎに硯と筆に紙も添へて障子からりと明け放てばパッと飛び立つ羽ばたきの音。と見れば……アッ。崩して了つたヮ、アノ烏奴が

▲

東京　廣守千能子

運動場の片すみに一心に舞姫を讀んで居た時、先生お噺を！四五人の生徒は、妾を取かこんでしきりに、望む愛らしさに、本を伏せ手みじかに舞女白菊の噺をしてきかせると、皆おとなしくきいて居る、其の中、十歳になる女の子小供に似合ぬ、溜息して。「あたいも大きくなつたら舞行しやう」と！

わかれし友

衣ヶ浦　殘星子

夕空はれて秋風吹き、月かげおちて餘蟲なく思へば遠し故郷の空、あゝ

わが父母いかにおはす、私は靜かな夕暮の窓によつてバイチリン肩に此一曲を奏したのである、あゝ考へて見ると丁度一年前のこと、あのおわかれの夜に英子樣はオルガン、私はバイオリンを合奏したのは二人の好きな故郷の空、あゝ英子樣は今頃あの美しい寄宿舍の窓によつてきつと此歌をうたつて故郷を偲んで入らつしやるだろう

故鄉

丹波　ゆたか

花が咲いた懷しい故鄉の人々の上が忍ばれる今年はどんなに變つたら う美しいお富さんはもう二人の母樣また萬年新造と　いはれたお雪さんも此春は丸髷だと。留爺は去年倅をなくして弱つて居たが此頃は曾孫の守で忙しいと、自分と仲好だつた隣の孝さんなぜかいつまでも一人と聞いたが其れさへ四五日前お作さんがいつたとうその樣な。そして自分はどうかまた此の窓でノートいぢりと　思はず洩らす息と共にはらく と花びら二三輪机にこぼれた。あゝ

漁夫の子

島根　道子

喧しかつた漁夫の聲も、いつしかきこえずなつて、平和な漁村の夕は、今靜かにくれかゝつてるのであります。そして、あの白い鷗が眞黑な岩から二三羽けたゝましく立つたのが、次第に暗にきえていきました。その行末をぢいと見入つてゐる花ちやん――私は何氣なく「何してゐるの」といへば、「エヽ妾お父さんまつてゐてよ」と。あゝいぢらしい花ちやんのお父さんは、花ちやんがいくらまつてゐても、再び歸つてくる時はないのでございます。

▲

姬路市　中川しほ子

僅かのお金を貯金しやうと郵便局の窓口で待つて居た　すると六十餘りの爺さんが手に赤と青との通帳を持つて　うれしさうに歸りかけたが忽ち自分の前の奥樣風の人を見かけて「やあ奥さん倅もお蔭で二百圓貰ふてな今通ひが下つただす早う婆にも見せてやりましよ」と云ひすてゝ急ぎ足に去つた嘸嬉しい事であろう

春の夕暮

靜岡　園江

隣家にての機杼なる音のいと忙はし私はあゆむともなく、おのづと音する方へと參りました、今しも此家の小娘花子と云ふ田舍には珍らしき程の顏、形、一生懸命に、わきみもせず餘念なく機杼を機つてなりました花さんよく、おかせぎだねー、大層いゝ縞柄だ事、花子は嬉しき樣子にて、あたしのですと、いひつゝ又もや、手を動かせなりぬ、私は其側にて、あゝ一枚の、着物を機るには手數のかゝる者ぢや、それにつけても、衣服を粗末には出來ぬ世の贅澤な、人々にかゝる處を見せたしと、しばし感にうたれつゝ物いゝぬ、花子はねー、奥さんほんとうに、そうですねーと、

櫻を封じて

京都　村上花子

南殿の櫻は月の宮居の桂の枝に等しく賤しき妾には花一輪だも袖にするを許されぬはかなさに、せめては同じ雲井の車返しの櫻を眺めむものと雨傘に粘する紅褄まじき朝訪づれ侍りしに、紅梅絹の小舍人が御車のだんだら綱曳き返しつる古への春は土佐の繪卷物にのみ殘りて、朽木乍らに咲き匂へる花は雨に亂れて小町が末路もかくやらん　餘りの傷ましさに一片袖にして歸りしがこの花にては、君よ笛譜の卷に挿み給はんはいかに。

白椿

新潟　小島琴子

東京へ行きなすた、姉様が植えなされた、庭の紅梅も散つてしまつて、今度は妾の大好な、白椿が澤山可愛いつぼみを持つた。兄様は今度の日曜還りには、咲くであらうと云ひなすた。咲いたら花片を姉様へ御手紙に封じて上げ様かしら、そしたらどんなに御歡びなさるであらう。きつと此間の様に御褒賞にと美しいリボン送つて下さるだらうか、あゝ早く日曜になればよい、妾は、美しい花澤山咲く様にと)椿の女神様に御いのりしました、

ふるさと

日本橋　村　子

八千草にそよぐ風白つゆに宿る月我袖もたゞならぬ夕かな　戀し父母年ふる里なつかしての彼方の有様月ようつせかし風よ語れかし　おゝ此唱歌を教へていたゞいたのももう四年前、先生はあの頃船に汽車に便利はあるけれど何百里とはなれた土地へはる〳〵としかも女のたゞお一人、此唱歌がつく〳〵お身にしみてかオルガンの影で　あの凉しいお目からほろりと一滴、

故郷を離れて右も左も知らぬ中に暮す昨日今日始めて　當時の先生のお心もお察申されて私もほろりと、

夫のかへり

牛込　小川きみ子

いつも五時には必ず歸らるゝ夫君の、今日は六時も、とうに過たのに、まだ其らしい靴の音もせぬ。待遠しさに女學世界を見て居つたら、チリン〳〵と門の音大急ぎほゝ笑んで玄關にかけつければ、マアー御隣りの大きな赤犬が

寵兒

千葉　和田みつぎ子

誰から貰つて來たか妹の縁ちやんが藤の蔓を細く拵つた様な寵兒を十許りお止しと母に言はれても、いつかは肯かず三寸の箱を世界、それに敷き詰めたは燃ゆるが如き牡丹樗、幸か可幸か餘念無く此の上に葉を食みつゝある

くれない

岩代　菅野廣子

南縁のほから〳〵なる春の日に、紅椿の一輪咲き初めたる美しき人の被ろ様も一入榮えて。吉野山、雪と見しは遠目、花は薫らひの色に笑めるを。うら若き村の乙女の笠かむれるが、紅の紐、頰ににじみたる、風情あり。木立打蔭りて、神寂し社の赤き鳥居、賑しけれど、淋し。見るからに淸らげなる白衣の看護婦の額に、一點、赤き十字の章、いと神々し。暁の空、夕榮の雲、美しき中に、燦爛の光を帯びたる、失意の人も、希望に滿てる人も、そゞろ仰がるゝ。

私

神奈川　長島マツ子

先生は私を長島さんとお呼びになり升　お友だちは私をまつ子さんといはれ升母は私をまつやとよび升　妹は私をねーちやんといひ升昨日學校の歸りに後から君!!!君!!!と　私をお呼びになつた方が有ましたから振向ひて見たら道に迷ふた學生さんが三人

鸚鵡鳥

神戸　水野輝代

お座敷で編物していると輝や〳〵と誰かしきりによばつて居る「何か御用」と御母樣へうかゞへば「よびやしない」と室へかえつてすわるいなや又輝や〳〵とつゞけさまに五六度……じつと耳をすまして聞いて居ればマア鹿らしい隣の室の鸚鵡鳥がよんでいるのであつた

▲

丹波　なみ子

電報……受取て開き見れば、チチキトクスグカエレ、ハハチヤ父樣がと驚きあはてゝ仕度し五時の汽車で出發、今日に限り速力が遲い氣がして隣人の話も耳に入らず少時すると汽車が停車場でもなき處に停た、不思議人聲がガヤ〳〵して、ふと聞ゆる轢死者あり、妾は思はずぞつと振ひあがりぬ　其間に汽車は進行し始めやがて火は燈されぬ窓外は早薄暗く成て鳥が二三羽カア〳〵と鳴きつゝいと暗き森の影に入りぬ嗚呼心にかゝる父樣の御樣子。

兩手に花

靜岡　藤江

私の親友は、古川子の君に、靜子の君、いずれも、ワイフで、あります、そして、どちらも、賑やかな、都に、お暮しなさるのです、私の良人は任命によりまして、今年の秋緣き頃はい渡清致しました、ものですが良人の父なる在所へ參りてなります、そしてしたすら良人との、再會を待ちわびつゝ青葉繁れるいわと山川の眺めよき田舍にて安らけく先々無事で、父と共に月日を送つてなります。そして戀しき方、なつかしき、御親友よりの消息を唯一の樂しと致しております、折しも郵便との一聲、いづくよりの消息にやと、まろび出でつゝそを受取り見れば、あな〳〵嬉しや、今も〳〵とおもひに〳〵なりし、あゝなつかしの無二の親友のとも〳〵古川子の君、靜子の君より同時に、あゝ夢の樣だと獨りほゝえみぬ、嗚呼兩手に花ならぬ、兩手に花の如き、うるはしの、なつかしきお文よ

出産の報

和歌山　山口文枝

電報との聲に驚き、取る手遲しと開封すれば、姉上出産の報でありました、妹等は女兒と聞ひて、手を打つて、よろこび、弟は男兒なら、好いのにと、不平を云ふ、側から御祖母樣は、どちらでも、結構二人供達者で、芽出度ことじや

春の川

京都　武部すみ子

暖き春の日をうけて、淸らかに、流るゝ小川の岸には、とり〳〵の花の色が、水にうつて、其の向の緣わかい柳の蔭に、衣を洗つて居る小女のかみにさした白ばら一枝、ふく風に二ひら三ひらちゝて瀬に、うかんだのが、衣を宿に流れよつて去りません。あゝその衣には、花の香がしみ〳〵と、しむでありませう。

祈禱

陸前　西巻利子

嗚呼今日も一日働きどうし、疲れに、疲れた、けれども神樣が私を慰めて下さる樂しい夜が來た、さあ例のやうにおいのりをしやう、貧しい家に幸福を、妻のない父に慰めを、母のない子にあはれみを、弱い我が身にみちからを、どうぞ豐かに授けて戴くやうに

叱れぬ

下野　野尻よし子

こんなに眞暗になるまで、秀ちやん(妾の妹、今年九歳)はどこに遊んでゐなすつたの、お母さん始めどれ程心配したか……妹は暫くあつて、どうぞ勘辨して頂戴、あの打出の高ちやんと入舟樓の處で別れて歸つて來やうとする處へ松原の按摩さんが、あの道の悪いお豆腐屋の處にまごまごしてゐたので、私は可愛さうになりましたから松原まで送つてまゐりました、この言葉を聞いた母上も叱る事が出來ない許りか……

蛭子の傳

信州　春野みつ子

蛭子は天國の產なり。擧世の汚濁を患ひ警世の至調を奏す。遂に納れられず、即源降下田野の間に歸化す。彼外姿頗る醜、曰く、其美なるは身を誤るの基なりと。性朴素にして亦飾らず、田夫野人を友とし、又敢て名誉を貪らず、故に王公貴人或は之を知らず、彼亦之に晏如たり。小史子曰く、蛭子の子孫は皆秀才あり。然れ共未だ曾て朝に用ゐられず嗚呼痛ましき哉

風

東京　近藤撫子

公園の花その前にたち、泣きゐる七八つの子供あり、我れ走り行きて問ひしに、風さつと吹き來りて、帽子を飛ばされ、其行く方に走りしに、遂に此花園の内に飛ばされ、取る事を得ずと答へければ、我れステツキにて、取りあたへしかば、子供は、禮をのべいそぎ、家に歸れり。

あすにならないもの

鈴木みね子

私詔護云ふのは大嫌いだから露骨に申上げますよ、先第一に、月々の記事彙告、四月號だつてそうでしよう、最大好きの／＼の元祿姉樣の、哲學者の妻、商人の妻、御轉婆日記、揃んでいましたのに雜誌開いた時の失望落膽……。第二、投稿規程の住所姓名を明記せざるものは、賞品を送らずとして、何某の住所姓名至急御報知あれ、第三、次の號より必掲載しますか讀者通信。まあ此度迄では、右三ケ條でゆるしてあげましよれ、御可愛相だから、ホヽ失禮、記者樣御立腹なさつて、御答へは如何にて?。

春の樂

徳島　堤菊惠

しめやかにふる春雨は色もなきを、野邊を緑に染めかへしつゝいつしか燒野の小草わかやかに萌え出るに、目はいとうらゝかにて、長閑に渡る春風もいと心地よく紫匂ふ菫の床離れて雲井高く上る雲雀には、見る人の心さへ大空にとぶめり。

やう／＼白くなりゆくあけぼのゝ空紫だちたる雲のたなびきたると納言のめでけんは、さることにて横雲のたち別るゝ外山の霞にかけ消え行く春のかりがねの三行ふたつら鳴き渡る聲のみなるも亦をかし照りもせずくもりもはてぬ春の夜の月こそげにしくものはなけれ、おぼろかすむ月影は、佐保姫の衣につゝむる珠にやとこそ疑はるれ、もろこし人は春宵一刻千金と詠じ、ともしびとりて夜の遊びをばしたりけん、春もやう／＼深うなれば野邊に山邊に櫻のさき出づるこそ樂しけれ、貴賤老少心ひとつにあくがれて、今日はこゝに明日は彼處にと心のどけからぬ人もあらじ、只匂へる雲の中に終日さまよひて、しばし憂世をはなれて住む心地ぞすめる、夕の風にはら／＼とちるは雪とも見えて、我も共に消えぬべきかとぞおぼゆる、やよひの樂は只櫻にこそ、山吹のちりて流るゝ里川の面に蛙のくれゆく春を惜しみて鳴き出たる、藤のおぼつかなげに春の名殘をとどめたる、くれ行く春もあはれに樂しかりけり。

藤

伊勢　神田清子

池の汀の藤ひとり春のかたみを色めきて 波をよするやうもいとゞなかしうあるは池の鏡にかげうつすもいとうつくし

高き所にありて

人に仰がるゝなもほこらずして頭をたるゝ 様いと奥床しうて女子の鏡とこそあふぐなれ誠に女子は此の花の如く心をつゝしみなば 後には匂ひゆかしき姫百合よと世の人に敬ひたふとまるべし。

花の吹雪

すゝな子

ある宵はらから三人手をとりて今や、滿開と咲きにほふ夜櫻を見んと某の鎭守が森に行きぬ月に色添ふ其美はしさまた神々しさあゝ 樂園とはこゝなるよとしばし唱歌の聲高く彼方此なたとさまよひぬ 折しも一陣の微風に花のはら〳〵と散ければ 雪よ積れ一杯つもれと無邪氣なる妹がもみじのごと手きをかざして歌ひ出しぬあゝ 可憐の妹よ汝は落花を吹雪と思ひてか。

櫻と兄

兵庫　清子

思出多き此櫻去年の今日は兄樣と共に花の下でたのしき 物語などして病になやめる兄をなぐさめておりました 兄樣は淸やもう此花を共に見るも今年で終りだよと空をながめて居られました 私しは何とも返す言葉もなく兄樣と云つたきりつゞく言もありませんでした あゝ兄樣の申されたのも誠でありました 今年の此花をまたづして不歸の客となられました花は咲ても兄は歸りません。

博覽會

伊勢　丸玉貞子

私も博覽會へ連伴て頂戴え姉樣」と泣かんばかりに賴む妹私はホロ〳〵と不覺の涙をこぼして犇と妹の手を握りました オヽ可憐の妹父母も無い身の少さい時分から邪慳な伯父に養はれ世は春ながら 秋風吹きすさむ二人の心他の小供が綺羅を飾つて行く 博覽會さへまだ見に行く事も出來ず毎日同じ事を繰り返しては私を泣かすのでした。

紹介

文學藝話　上田敏氏が文藝に對する自家の感想を、新聞に雜誌に又は各地の講演に於て、評論せられたるものを集めて、一卷となし、外國文學の研究近時の音樂論、國立劇場の法、藝術家に向ふ、其他フランチエスカ、マアテルリンク等文學藝術の内容を知るに於て、必要の書易なり(定價壹圓金尾文淵堂)

婦人と小兒　理學博士坪井正五郞著此の書は、坪井博士が人類學上より見て、各國婦人の習慣や、小兒の遊び方までを平易に說いて、卷中に十數葉の面白き小兒の繪や、婦人の仕事をして居る處を挿入してありますから、婦人に取つては面白く且つ有益の書であります(定價八拾錢京橋尾張町隆文館)



謎々

◎印は入賞

▲博覽會、流行の衣裳、養蠶、とかけて、

▲博覽……灘草の橋圖と解く、心は繼々（館々）を見まはる　越後　坪井わか子

◎博覽……親の許した戀事と解く、心は不忍で見られる　駿河　大村菊子

▲養蠶……孝行の息子と解く、心は食はで（桑はで）養ふ　橫濱　齋藤いと子

▲流行……鎌倉權五郎のうけた矢と解く、心は眼に立つ　周防　滿井菊子

▲博覽會……方角二ッと解く、心は皆見に來た（南に北）　丹波　赤見　阪

▲養蠶……居眠りと解く、心はコクリ〳〵（國利、國利）　麴町　島田美輪子

▲養蠶……貧づしき親と解く、心はくは（桑）で見（蠶）を育てる　千葉　倉知芳枝

◎流行……七面鳥の顏と解く、心は見るまにかはつて行く　京都　砂川澄子

▲流行……目藥と解く、心は人に付く　周防　星出秀子

▲養蠶……空腹に仕事と解く、心は（桑）はなければ出來ぬ　岐阜　鹿倉肯子

▲流行……懸賞廣告と解く、心は人目を引く　備後　小山昭子

▲博覽……恥かしい人に逢ふた時と解く、心は眼のやりばに困る　河內　陸山れい子

▲流行……急病人と解く、心は長くはもたぬ　佐賀　腹卷　とも

▲流行……淺草十二階と解く、心は非常に高い　橫濱　齋藤　いと

▲養蠶……百姓の田五作と解く、心は鍬で育つ　岡山　村上國子

▲流行……河と解く、心は上流から下流にだんだんひろがる　近江　須川常子

▲博覽……戰家が戰時の兵法と解く、心は見るものばかり（雁）　香川　十歡あや子

▲博覽……國會議員と解く、心は各縣から選出する　尾張　水野まさ子

▲流行……汽車の旅に窓外を眺めると解く、心は其れから其へと遷り變つて行く　岐阜　酒井とみ子

▲流行……夏のうちはと解く、心はだれもほしがる　下谷　井上幸蕙

▲博覽……栄野大佛寺と解く、心は職工（燒香）の競爭　出雲　和田一秋

▲博覽……嫁入まへの娘と解く、心は飾つて出す　京都　濱部郭公

▲流行……花嫁の行列と解く、心は誰でも來て（着て）見たがる　韓國　中尾ゑい子

來月の課題

△小姑とかけて

△諸國名產とかけて

△活動寫眞とかけて

ものはづくし

氣の利かぬもの

▲新發の商家の小僧　大阪　鶴代

▲ぼんやりしたおさん　周防　松谷武

▲だまされた靜子樣　栃木　長澤こう子

▲煙草盆の火なきに知らぬ顏して居る人　京都　郭公

▲田舍の娘　京都　田中豐子

▲男の臺所働き　東京　石田孝子

▲盲目に提燈　周防　富田芳子

▲汽車の乘り越し　千葉　倉知芳枝

▲田舍物の都見物に方言をつかひたる　伊豆　諏訪清子

▲上戸の人に下戸の進物　仁川　鍋島　綾子
▲米國婦人の求婚運動　長岡　河内　米子
▲お月見にランプ　山口　寄田　安水
◎多忙と知りつゝ訪問して長座するもの　仁川　掛橋　郁子
▲芝居の馬の足　東京　平岩　外江
▲夕方に來る客　麻布　池田百合子
▲出たての下女のする仕事　横濱　宇田　忠子
▲ゆる〳〵結びし帶　河内　影山れい子

身にしみるもの

▲借金を催促されし時　京都　石谷まき子
▲姑のお小言　逗子　宇野　菊野
◎秋風と親の意見　陸奥　佐藤　てつ
▲宗教に歸依せし老婦人の實話　韓國　日本きちへ
▲月夜にふくろの啼聲　阿波　阪本　近子
▲火事の半鐘　岐阜　度會よし子
▲蟲齒に冷きもの　横濱　む　め　女
◎死に臨める母親の諫言　奈良　吉村八重子
▲はだしの雪道　岡山　村上　國子
◎人事活斷に出た自分の卦　遠江　増井　靜
▲夫婦間のモンロー主義　栃木　松村　隆子
▲手術室で刄物の音　米澤　江部よつ子
▲眞心込めた友の介抱　仁川　鍋島　綾子
▲乳姉妹の話　愛媛　松田　ため
▲新生命多喜子の運命　伯州　長田ふみ子
▲裁判官の死刑云ひ渡しするを聞く時　北海道　黑澤すみ子
▲先生の教訓　東京　平岩　外江
▲お通夜の晩　四谷　伽　輝　子
▲夜中の電報　佐賀　橋木よしゑ
◎お情け深き師の君のさとし　東京　松平ひな子

二度見られぬもの

▲親の金婚式　新潟　並木　舜子
▲汽車にてすり違ひの時　備中　浅見すみ子
▲今日の太陽　神戸　稗田　ゑい
▲學生時代のたのしみ　奈良　毛利きよの
▲昨夜の夢　伊豆　諏訪　清子
▲親の死に顔　遠江　宮城蝶々子
▲初婚者新婚旅行の親しみ　仁川　掛橋　郁子
▲死んで行く處と生れぬ先の腹の中　北海道　黑澤すみ子
△今日の太陽、親の死に顔等解答者數人あり

來月の課題

△奥ゆかしいもの
△花々しきもの
△聞いて快からぬもの

一口噺

▲　大阪　磯　まさ子

郵便配夫が廣告郵便を配達してゐると、下女「アノ引札屋さんは郵便屋の風をしてゐる。

▲　日本橋　吉川　秀子

甲の妻「昨晩は主人が大變御馳走樣になりました相で。乙の妻「アライヤで御座いますよ、私の方こそ屢く宅お宅で御酒を頂きました相で………。

◎　京都　藤田　靜枝

兄「美イちやん一口噺をして上げようか、妹「ハーどうぞ、兄「それでは死が子、妹「アラれえさん兄は三ツ口ですわ。

▲なかみさん　小倉　岡村　澄子

小供「お父さん、内のおかーさんをなぜ神棚にまつらないの」父「なぜそんな事を問ふのか」小供「でもいつも人がお神さんと云ふから。

▲　丹波　房　子

甲「君村田君が此頃非常に遊ぶんだ、で僕が少し諫言した、其後一寸も顔を見せんよ、所謂良藥口に苦しさ。乙「フムそんな者には淺田飴がよいのだ」甲「なぜ」乙「廣告を見給へ良藥にして口に甘し。

懸賞小說募集

本誌は左の規程により毎回懸賞を以て普く小說を募る

一 枚數二十枚乃至三十枚(二十行二十字を以て一枚とす)

一 原稿總傍ヵナ付の事

一 賞金は掲載せるものに限り左の等級に應じて呈す

一等　貳拾圓

二等　拾　圓

原稿は博文館女學世界編輯局宛の事

一 〆切五月三十日限り

選外原稿は著者の希望により返却の求に應ず

但し郵稅は自辨の事

二等　有明女史

等外　秋津子

今回は一等に上るべき作品なかりしに付き遺憾ながら二等より順に採る事にせり

懸賞美文募集

本誌は左の規程により毎回懸賞を以て普く美文を募る

一 美文の種類は廣く天然、人事の各方面に亘り、紀行文、寫生文、日記文、小品文、其他其種類の何たるを問はず文章優美にして觀察の奇警なるものを採る

一 枚數は十枚以上二十枚まで(二十行二十字詰)

一 原稿はヵナ付の事

一 賞金は掲載せる者に限り左の等級に應じて呈す

一等　拾　圓

二等　五　圓

一 原稿は博文館女學世界宛の事

一 〆切五月二十日限り

結婚道しるべ

▲本欄は便宜的に結婚の紹介をなす▲申込者は求婚の希望を詳記して博文館女學世界交信部宛送らるべし▲申込者は成るべく最近撮影の寫眞を添付するを便とす▲住所姓名番地職業を確實に記さゞるものは取扱はず▲照會者は通信料として三錢切手三枚を送らるべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送らるべし

(1)友人年廿四血正地方豪農の三男、將來商業の志望なり、慶應義塾大學部卒業期迄學資給與の家に養子を望む、但し不動産擔保にて學資を貸與せらるゝもよし、(西京の友)

(2)年卅二高等官月給百圓、無係累、無財產、目下下宿生活中なり高等女學校卒業以上體格壯健血統正しき二十歳以上二十五歳迄の淑女を求む、支度望まず結婚後儉約して「ドレス」を作るべし、(T.T.生)

(3)年十九高等女學校卒業血正體健官吏の女なり、學位ある人、若くは渡歐實業界に活動して成功せし人にて酒嫁ひの深切なる人に嫁したし、但し或る期間中交際の上、(在東京女)

(4)年廿九血統正某女學校卒業後家庭にあり茶の湯、生花、琴を學ぶ、裁縫には最も熟達す、京濱間にて有望なる醫師へ嫁したし、(芝の求婚生)

(5)年廿一縣立高等女學校を優等にて卒業す、家は米穀商にて家計中等、一人娘なり、高等學校卒業若くは相當の學力を有する養子を迎へたし、可成四國住のものをよしとす、(紅櫻)

(6)知人年十七地方門閥家の娘、體健、容姿秀麗相當の仕度あり、東京某女學校在學中、資產ある大尉以上の軍人か紳士に嫁せたし、(若草)

(7)某技術學校卒業豫備海軍下士金鵄勳章年金百圓、年廿七、親より分配されたる資產貳萬餘圓あれども、某事業に資金不足す、依て資本を出しくるゝ方の養子となりたし、婦人は血正なれば醜美を論ぜす、(富國兒)

(8)年十八士族の末女、敎育中等性温順、體格健全、茶道生花の奥義を極め容貌普通なり、三十二歳頃までの人にて最も常識に富める陸軍武官に嫁きたし、(芝の櫻子)

(9)相當資產家の一人娘にして普通敎育あり今は家事實習中年三十歳までの人を養子に貰ひたし、但し京都工藝學校又東京早稻田大學の卒業生なればよし、(一人娘)

(10)友人年廿七歳、門地あるも故あつて終生獨身にて暮さんと云ふ薄倖見あり、彼のために獻身的に慰籍を與へんとの優さしき方あらば、余は眞面目に紹介の勞を執るべし、(山口、櫻木生)

(11)年十七府立高等女學校二年修業、品行方正學術優等性快活なり、今は裁縫、炊事の心得も充分ありて家計中等家業は農、父は名譽職たり、手堅き大坂市内の家へ養女にやりたし、(せんだん)

(12)年廿八、中學を卒りて目下敎職にあり、將來中等敎員たらんとす、遊學資金月七圓を貸給し得る淑女と婚を求む、(山口縣の男)

(13)年二十四血正、初婚、容姿普通、身體健、品行方正なる士族の娘、高等女學校幷びに補習科卒業、尙家庭にあつて女藝を修む、高等敎育ある手堅き人に嫁きたし、(千年の女)

(14)友人呼年卅一、血正、篤學の好男子、目下某病院に勤務中の得業士なり、引き續き勉學せんが爲め資金壹萬圓を補助しくるゝ淑女と結婚したし、(M、S、生)

(15)年廿八、土木技術家、目下市内某大會社員月俸四〇、外收入四〇以上將來有望の士、身體壯健、血正、內助大成を期するの覺悟ある淑女を求む、但し養子に行くもよし、(發電技師)

(16)二十六才の男子、累代の醫家、目下官途に奉職中、家族の係累なし、配偶の有無を論ぜず相當の資產を有する養家を求む、廣島縣內ならば尤も妙、(希婚生)

人事活斷

△あや子へ——貴女の好運は意外なる所に在り、故に自ら是とする事は凡て非となるを免れず、されば何事も人に依賴して自己は之に關せざるを可とす。

△山城の白菊女へ——猛獸に追はれて、樹上に登れるの卦なり、時來つて猛獸の遠く去るより外に致方なし、故に貴女も現在の良人が時至つて改心せらるゝを待、決して自ら燥る可からず。

△群馬縣の桂木千代子へ——從兄との結婚は面白からず、今一二年後に他の人を向へらるゝ方宜し、母上は五十前後にて危きも、此際身を大切になされば、五十七八歲乃至六十四五歲までは安全なり。

△綠葉女へ——遠きを捨てゝ近きを撰ばる可し、即ち上京を見合せ義務年限內は縣廳の指揮に從ひ、着々獨學せられ、年限後思の儘に活動せられよ、好運從つて來る。

△梅花女へ——靈鳥を籠に養へるが如き卦なり、是を以て考ふるに、貴女は靈鳥なり、故に一旦家を出で都會の地にて一辛抱なさらば二三年後幸福次第に廻り來るの瑞兆見ゆ。

△本島端の菫女へ——高山の絕頂に水を求むるが如し、如何に渴しても容易に得られず、自然の雨を待つか、然らずんば降つて溪水を探すより外に仕方無からん、故に貴女も自然の時を待つか、或は自家より以下の者と結婚せらるれば幸運來る可し。

△名古屋市無名女へ——異鄕に至り道に迷へるの卦にて、自ら其の方向を考へんよりも、他人に就て尋ぬるを可とす、故に何事も母上の言葉に從はるゝを望む。

△かすみ女へ——猛虎天空に叫ぶの象あれば、生るゝ子は男兒なり、御身は萬事制せらるゝ位置は可なれども、制せんとすれば災頻りに至るや必せり。

△大阪の待遠女へ——剛に從ひて弱を避けらる可し、即ち軍人へ行かれんことを勸む。

△臺灣一婦人へ——一旦別居せられたる後に受胎の兆

あり、されど一時良人と所を異にし、然る後同居せらるゝ方萬事宜し。

△韓國不幸女へ━不幸を不幸と思はず、其分に安んじて益々勇氣奮闘せらる可し、三年の後に幸運向ふ。

△西海のすみれ女へ━弱を示せば敵益々襲ひ來るの兆あれば、斷然茲に強硬なる態度を取つて其家を去るの決心然る可し、決心すれば必ず良人の心弱くなるや必せり、若し弱點あるを發見せば亦直ちに柔以て從ふを可とす。

△京都の愛讀者へ━良材を山に求むるが如し、高き頂よりも低き麓に繁茂す、御身は此の卦に依り父上の言はるゝことよりも母上に從はるゝ方必ず吉なり。

△田舎の迷ひ娘女へ━人言を斥け自己の意志を通す方吉なり、縦ひ父母の御言葉たりとも正道に非ざる事には決して從ふ可からず。

△越後雪子女へ━求むれば來らず求めざれば來るの姿なり、故に悠々時を待つて居らるれば瑞相從うて來る。

△備中さよ子へ━進んで取るは凶にして退いて守るは吉なり、されば家に居りて良縁を待たるれば明年春頃に良媒あり、福縁日を追うて至る。

△兵庫縣の一女子へ━漁夫の魚を求むるが如き卦なり、小魚を得んとせば近きを可とし、大魚を得んとせば遙かの沖へ出でざる可からず、されば貴女若し目的通りの良人を得んとせば須らく今三四年を待たる可し。

△本郷弓町女へ━貴女は末に至れば至る程吉なれば現今の破談更に憂ふるに足らず、今二年を待たる可し。

△都の煩悶女へ━今や舟の順風に向へるが如き象あり、早速に進めば可なれども、後るれば悔ゆとも詮なし、されば二三年の後を待たるゝよりも早く身の處置をつけらるゝ方幸福なり。

△澁谷村の櫻女へ━貴女は谷間の梅なり、必ず他花に後れて開き後れて實を結ぶは致方なし、今三年を待たるれば良縁幸福一時に來る可し。

△棋の葉へ――後者即ち商船學校の方宜し、獨立上京は凶なり。

△中國の煩悶女へ――貴女の理想は水中に映れる明月の如し、取らんと欲するも豈得可けんや、故に實業家の人に嫁して忠實に家政を掌どらる可し、幸福漸次に來る。

△佐賀の里人へ――御身と御身の良人とは水魚離る可からざるの良縁なり、御身も良人を憎しと思はれざる可し、良人も亦御身より外に増す花無しと思ひ居らるるなり、故に徐々に良人を諫められなば幸福一歩〳〵に進むなり。

△東北の悲觀女へ――健康なる時に急いで縁づかれなば病も亦起らざる可し、今を盛りと咲ける花の如く一刻遲るれば一刻の悔有り。

△安藝浪子へ――今年十月頃、教育に從事する人と結婚せらる可し。

△阿波鳴門女へ――獨立獨行、意志を強くして開業せらるれば必ず人の信用を得、從つて良縁も亦來る、即ち良縁を求めて來らず、求めざれば來るの卦見ゆ。

△未來の女醫へ――御身の理想は鑛山を掘りて金を得んとするが如し、屈せず撓まず績けば必ず目的を達せらるには相違無きも、種々なる妨害の來る象あれば、寧ろ醫師の養子を迎へらるゝ方宜し、二年の中に良縁あり。

△深山の櫻花女へ――故郷に在りてスヰトホームを作らるゝ方吉なり、養子は御身より慕はるゝ人は可なれども先方より御身を慕ふ者は悉く排斥せられよ、換言すれば御身が慕はるゝ故に止むを得ず養子にならうかと云ふ位の淡泊なる氣高き人を夫とせられよ、斯る人は後に必ず御身を愛せん。

△肥前の兎村女へ――御兩親を以て今月早々申込まる可し、貴女と先方とは甚だ良縁なれば家庭圓滿疑無し、但し先方は豪放なる所、特長にして少量の飲酒位に事業を誤る人に非ざれば、耶蘇教者的に禁酒せしめんとするは却つて不幸を招くの憂あり。

△大阪苦悶生へ――貴女の欲せらるゝ事は恰かも蛇無

くして舟行せんと欲するが如く、必ず目的を達せられざれば、兩親の言はるゝ儘に養子を迎へらるゝ方末吉なり。

△山中の不幸女へ━━姉上を再び呼び迎へて御身は他出せらるゝやうに、御身より熱心周旋せられなば、御身にも良縁從つて來る、けれども之を早急に行はんとせば必ず災難あるが故に急いで急がず急がずして急ぐの態度を取られよ。

△島町貞子へ━━紳士との結婚吉なり、早々婚約を結ばる可し。

△片山里の小波女へ━━占はざるも直ちに判斷するを得可し、何となれば御身は子宮に故障あるが故に月經痛あり、月經痛あるが故に妊娠せざることとなれば大醫の治療を受けられたら妊娠疑ひ無し、活斷へ訴へらるるよりも寧ろ衛生顧問へ尋ねらる可き問題なり。

△北越の心配女へ━━今年九月六かし、來年は必ず目出度なる。

△越前子を思ふ母へ━━留學年限は意外に長引くけれども成業歸國は期して待たる可きなり、愛妾との關係は自然消滅に歸するなり。

△西國の疑問女へ━━包んで隱せば必ず凶、開いて示せば却つて吉なり、故に御身より心の次第を御兩親へ請求ある可し、言はざれば言はぬに勝る恥あり。

△明治二十年生の女へ━━枯草に油を注ぎて燃すが如き卦ある益々盛んに益々强し、何をか憂ひ何をか悲まん。

△未婚者へ━━吹き來る風を拂はんとするが如し、拂はるゝものに非ず、自然に風の止むを待たる可し、來年の春頃運勢向はん。

△片田舍の山口しづか女へ━━今年の暮に迫りて良縁あり、上京は却つて後難を招くの憂あれば、御地に止まらるゝ方萬事吉なり、將來益々志を高潔にし、富貴や美觀を羨まず「孤きても窶れがもなし水仙花」の趣あらまほし。

△若菜女へ━━教育者の方は初夏の趣、滿州者の方は晩秋の趣あり、何れも長所無きに非ずと雖も御身は

前者に身を任せらるゝ方末吉なり。

△春夏秋冬女史へ‖渡す可き物は渡し、拂ふ可き物は拂ひ、赤裸々となつて見せれば、人亦これに同情を寄せ、運勢徐々に來り、今を昔に語つて笑ひ賑ふ時は四五年の後に在り、御一同心を低くし、屈す可き時に屈し居られよ、必ず伸る可き時あり。

△九州女親へ‖姉上は婉柔なる性にして、妹君は剛邁なる風なれば各々反對なる氣質の夫を有たれよ、即ち姉は軍人的妹は醫師といふやうに撰ばれたら各々運勢宜し。

△野のゆり子へ‖馬に鞭つて敵を逐ふが如き卦あり一歩早ければ早き程吉なり、然れば御身より此の由を打明けて寧ろ請求されなば漸くにして今年初冬に纏まるなり。

△白萩女へ‖順風へ帆を上げて來りし舟の陸に近づかんとするや俄かに颶風に逢ひ難船したる卦なれば此の縁談纏らず、而して次の婚期は來春中頃なり。

△呉の喜美子へ‖物に譬ふれば花木の如し、陰鬱なれば花咲かず實らず、陽氣なれば榮ゆ、何事も威勢よく活動せられよ。

△子無女へ‖子は無し、然れども無きものと諦めらるれば平和圓滿になり、却つて憂なし。

△遠賀八幡志野女へ‖來年の初夏に貴家と同業の養子を迎へ、末吉なり。

△茨城の松乃子へ‖此の答見るゝ頃は既に齊ひ居らん、若し此期を過れば來年の冬となる。

△芝の新世帶女へ‖良人は才に富み而も困苦を忍んで行り通す所の美質あれども、又一方には下婢を輕んずる風あるより他人よりは高貴に媚び諂ふ人なりとの誹を受けて圖らざる災あるが故に之を愼まるれば運勢向ふ、又貴女は正直にして人を憐れむの美風あれども肝癪有り且つ他人に欺かれ易き失あるが故に之に注意せらる可し、二年の中に姙娠し萬事幸運向ふ。

△近江の不幸女へ‖治療上及び病狀豫後等の事は衞生顧問へ質問せらる可し。

女學世界百號紀念 景品福引

注意の個條

▲番號箋――讀者諸君は本誌の第一頁に福引番號が摺込でありますから、御注意してお買いなさい。次に其の番號札は六月十五日發行本誌定期增刊第七卷第九號の出る時まで大切に保存して置かねばなりません。

▲抽籤――福引の抽籤は六月三日午前十時から當博文館(日本橋區本町三丁目)に於て警官立會の上執行致します、見たい方は現場へ御出下さい。

▲當籤の披露――當り籤(何番の籤が第何等に當ツたといふ事)の披露は六月十五日の發行女學世界定期增刊誌上に發表します。

▲景品の配達――讀者は右六月十五日發行の誌上を御覽になツて、若し當籤であツたならば早速番號箋を切取ツて、其内へ希望の品物と住所姓名とを記入して御送りに相成れば、直ぐに品物を調へて小包で發送致します。

但し番號箋は途中紛失してはならぬから成可く書留でお出しなさい又品物の指定がなければ當方から等級に應じた品を見計つて發送します

▲景品の價格――景品の總價格は金千圓で、其内譯は別表の通です籤に當ツた方は等級の範圍内で隨意に品物を選ぶ事が出來ます、又景品は市内有名の商店からそれ〴〵新規流行の品を選定したものです。

景品の等級

壹等　參拾本

博多帶側、琥珀帶側、縞セル、節糸織、金帶止、伊勢崎銘仙、米琉、大島絣、金指環、女持懷中時計、奉書紬、女持絹張洋傘　（右價格百二十圓）

貳等　四拾本

秩父縞、絹張洋傘、小柳繻子、帶止、寫眞ブック、絹張洋傘、新御召、花色ぎぬ、空色ぎぬ、紅ぎぬ、夏ショール、本カシミヤ、メレンス友禪、置時計、銀匙、珠入指環、手風琴　（右價格百二十圓）

參等　五拾本

綿セル、女持洋傘、富國セル、駒下駄、紅きぬ、縮緬帶上げ、指環、蒔繪硯箱、洋傘、ハコセコ、上等紙入、白毛布、金城琉球、縮緬帶揚、白薩摩絣　（右價格百二十圓）

四等　六拾本

色繻子、山吹織、久留米絣、帶止、新柄中形、白薩摩絣、絹レース、裏地、夏シオール、蝦夷茶モスリン、駒下駄、東髮ぐし、食匙、蒔繪硯箱、帶止　（右價格百二十圓）

五等　七拾本

中形縮、新節糸、半襟、駒下駄、寫眞ブック、束髮櫛、蒔繪硯箱、紡績大島絣、

ハコセコ、絹レース、指輪、博多結城、四季袋、白瓦斯縮、瓦斯明石、鹽瀬ふくさ、紙入、ブローチ（右價格 百 圓）

六　等　　八拾本

帶止、西洋菓子、束髮櫛、絽半襟、衛生襦衣、指環、寫眞挾、硯箱（右價格百圓）

七　等　　百　本

新意匠絹ハンカチーフ、半襟、ブローチ、絹糸、指環、帽紗、銀貨入（右價格八十圓）

八　等　　百貳拾本

箱入香水、銀貨入、羽織紐、半襟、絹足袋、枝折、短冊、ナイフ、タオル（右價格七十圓）

九　等　　百五拾本

煉白粉、メレンス風呂敷、懷中鏡、ハンカチーフ、銀貨入、羽織紐、半襟、枝折、短冊（右價格七十圓）

拾　等　　三百本

リボン、紐カザリ、化粧石鹸、襟留、繪はがき、白粉、齒磨、香水、煉齒みがき、懷中鏡、ハンカチーフ（右價格百圓）

以上　當り籤總計　壹千本

附記　品物の等級は前號豫告の分と少しく相違あれどすべて本號の規定による事と御承知ありたし

六月號記事（六月五日發行）

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內（定刊數）	十二册
內（增刊四回）	一、四、七、十月價格同一
郵稅	一册二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	四十圓
一等	五十八錢	十七圓	三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年五月五日發行　第七卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

女（後付の二）

文學士 大町桂月君著

日本文明史

文學博士 高山林次郎君著

世界文明史

白河文學士 國府種德君合著

支那文明史

文學士 常磐大定君著

印度文明史

女(後付の三)

文學士 久保天隨君著

朝鮮史

第一編 太古期……古朝鮮◉半島の原始的住民◉箕衛二氏の朝鮮◉前三韓

第二編 上古期……三國鼎立の世◉三國の興起◉三國の中世◉三國の爭亂◉新羅の隆盛◉隋唐の來侵◉濟麗の滅亡と新羅の統一◉新羅の治世◉新羅の末路

第三編 中古期……高麗時代◉太祖成宗の治◉契丹の關係◉女眞の役◉李資謙及び妙淸の亂◉鄭李の逆◉崔氏の專擅と蒙古の關係◉倭寇の起原と元寇の襲◉元室の專制◉恭愍王の失政◉辛氏の簒位◉倭寇◉高麗の滅亡

第四編 近古期……朝鮮時代◉太祖太宗の創業◉世宗世祖の至治◉士林の禍◉南北の黨爭◉豐臣秀吉の征韓◉日本との和好◉滿州の入寇と講和◉黨禍及び英祖正宗の治◉半島の衰運

第五編 現代期……今帝時代◉大院君の攝政◉耶蘇教徒の虐殺と佛米二國軍艦の來襲◉日本の交渉及び開國◉壬午甲辰の亂◉露國勢力の發展◉日淸戰爭前の形勢◉日本の扶植と內政の改革◉日露の抗衡と衝突

法學士 須崎芳三郎君著

現代露西亞

緒論
第一章……表面の露國
●自然的露國●政治的露國●教育●經濟狀態
第二章……露國の人種
第三章……露國の宗教
第四章……社會の組織(特に農民)
第五章……政治
第六章……革命の氣運
第七章……革命黨
第八章……中央政界
第九章……國際に於ける露國
第十章……侵畧の國是
第十一章……露國の外交
第十二章……露國の財政
第十三章……露國の陸軍
第十四章……露國の海軍
第十五章……結論

法學士 須崎芳三郎君著

露國侵略史

緒言●滿韓に對する[illegible]●日露と滿韓外九項

第一章 露國小史●ツアーの意義●ニコラス二世外四十八項

第二章 西比利亞の[illegible]取◉露人侵入前の西比利亞●侵掠の速度外廿項

第三章 黑龍地方の横[illegible]●露人南進の氣運●ボヤルコフの派遣●カーバロフ●[illegible]進の[illegible]止んで南進の潮流起る外卅一項

第四章 中央亞細亞の掠取●中央亞細亞經營の濫觴●ベコビッチの使命●キーバの陰謀●キーバの降服●パミール問題外卅二

第五章 波斯の侵畧●露波第一の接觸●駐波公使の召還外十三項

第六章 土耳其の侵畧…巴爾幹問題●スラブとコンスタンチノープル外卅七項

第七章 西比利亞鐵道●第一の提議●黑龍線●改良設計●工事外廿一項

第八章 滿洲問題●還遼の勅●三國干涉の由來●我國の失策外廿四

第九章 結論●迅速なる膨脹●露國失敗原因戰後の注意外十二

法學士 山內正隆君著

世界殖民史

第一編 總論◉[illegible]◉殖民の意義◉殖民の種類◉殖民の利[illegible]◉殖民の要件◉人種の盛衰◉マーカンチルシステム◉勞働問題◉附錄總論參考書目

第二編 古代史◉埃及◉東方諸國◉フイニシヤ◉カルセージ◉希臘◉羅馬

第三編 中古史◉アマルフイとピザ◉フロレンス◉セノア◉ベニス◉附錄第二編第三編參考書目

第四編 近世史◉緒論◉葡萄牙振興時代、衰微時代◉西班牙新大陸發見と其殖民の初期、南米殖民の盛衰キューバ殖民地、ポルトリコ殖民地、比律賓殖民地、◉和蘭 和蘭の興起、東印度會社、東方殖民地の衰頽、十九世紀に於ける東印度、西印度、殖民地と現狀◉佛蘭西 北米に於ける佛蘭西殖民、ギヤナ及アンチニスに於ける佛蘭西殖民地の現狀外二項◉英吉利 北米に於ける英吉利殖民、印度に於ける英吉利殖民、殖民地の現狀外六項

第五編 結論◉附錄 近世殖民史年表

理學士 佐藤傳藏君著

地質學

總論
第一編 地相論
第二編 岩石論
第三編 動力篇
第一章 地熱現象◎火山◎溫泉◎土地ノ昇降◎山岳ノ成生◎地震
第二章 水ノ地質的作用
第三章 氷ノ地質的作用
第四章 風ノ地質的作用
第五章 生物ノ地質的作用
第四編 岩石成因篇
第一章 迸發岩ノ成因
第二章 水成岩ノ成因
第三章 始原紀岩石ノ成因
第五編 地質構造篇
第六編 地史論

理學士 吉田弟彥君著

地文學

總論
第壹編 地球星學 ◎地球の成因◎太陽系◎地球の形狀及び大さ◎地球比重の測定◎地球の重力の測定◎地熱◎地球內部の狀態◎地磁氣◎地球の運動◎經緯度（晝夜の長短、四季及五帶、日蝕及月蝕、地圖）
第貳編 氣圈學 ◎大氣◎氣溫◎氣流◎大氣中の水分◎氣圈に於ける光の現象◎天氣及び氣候
第參編 海洋學 ◎海の分布◎海水の性質◎海水の溫度◎海氷◎海底◎海水の運動（波浪、海流、潮汐）
第四編 陸圈學 ◎陸地の分布◎陸地を構成する岩石◎地史系統◎地層の排置◎陸海の種類◎平原及び臺地◎山嶽及び溪谷◎河川◎海岸線◎陸界の變動（內力の働き、溫泉、地震、山脈の成因、陸地の變遷、外力の作用）
第五編 生物編 ◎生物の分布◎生物の移動及び變遷◎地球上に於ける人類の位置◎日本の文明と天然の關係◎地球上人種の分布

法學士 山本信博君著

政治地理學

第一章 國家……◎國家の觀念◎國境◎領土と人民◎領海（領海、港、灣、海峽、運河、河川）
第二章 國家の種類
第三章 政體……◎政體の區別（總論、主權總攬者を標準としての區別、元首を標準としての區別）
第四章 君主……◎君主國の君主（君主の國法上の地位、君位繼承法、共和國の元首）
第五章 國務大臣
第六章 議會……◎總論（議會の性質、議會の組織、上院の組織、下院の組織、議員の特權及義務）◎各國の議會
第七章 司法……◎總論◎各國の裁判所
第八章 財政……◎總論（歲入と歲出、豫算、租稅と手數料、官業の收入、公債）◎各國の財政
第九章 軍備……◎總論◎各國の軍備
第十章 教育……◎總論（國家と教育との關係、初等教育、中等教育及高等教育）◎各國の教育
第十一章 人口……◎總論（人口の密度、人口の聚積、人口の年齡別、人口の增加、出產數、死亡數、男女の數）◎各國の人口
第十二章 屬地……◎總論◎各國の屬地

法學士 永井惟直君著

商工地理學

第一編 總論
第一章 商工地理學ノ概念
第二章 商工業隆衰ノ原因
◎地文的狀態五項◎政治的狀態六項
第二編 各國商工ノ形勢
第一章 亞細亞洲……十四項
第二章 亞非利加洲……六項
第三章 歐羅巴洲……十四項
第四章 北亞米利加洲……五項
第五章 南亞米利加洲……十一項
第六章 濠太剌利洲……四項

女（後付の六）

法學士 岸崎昌君著

稅關倉庫論

第一編 稅關

●稅關の概念●稅關と通商條約●稅關の管掌及組織●稅關通過稅と輸出入稅、財政的關稅と保護的關稅、關稅の賦課、關稅の徵收、關稅の擔保及假納)●噸稅●各種手數料●戾稅及交付金●船舶●貨物(貨物の分類、貨物の輸出入稅戾及回漕、貨物の收容)●保稅倉庫(貨物の藏置及運搬、官設保稅倉庫「預證券、私設保稅倉庫)●關稅警察及犯則處分●處分に對する救濟手段●制裁●臺灣の稅關

▲附錄 協定稅率と國定稅率の對照表

第二編 倉庫

●倉庫の概念●倉庫と商業●貨物の保管(保管貨物の範圍、保管義務附たり返還義務、賠償責任、保管料其他の費用)●預證券及質入證券(倉庫證券の性質及要件、倉庫證券の交付、倉庫證券の流通)●貨物の出庫●競賣附たり質權者の請求權●附隨的業務●英佛の倉庫業●倉庫業と銀行業

法學士 野口弘毅君著

銀行新論 附 外國爲替

第一編 汎論

⊙銀行の定義⊙銀行の作用⊙銀行の種類⊙銀行の組織(銀行の多少、銀行の大小、支店組織と獨立組織との得失)

第二編 銀行各論

⊙紙幣發行銀行(紙幣發行銀行の性質、紙幣發行法八項)⊙商業銀行(預金、割引、貸附、爲替、取立)⊙貯蓄銀行⊙農業銀行⊙動產銀行⊙信用組合

第三編 外國爲替

⊙外國爲替の起原⊙國際間に貸借の起る原因⊙爲替相場の說明⊙正貨輸送點以外の爲替相場⊙爲替相場の建方⊙爲替相場の逆戾矯正法⊙間接爲〇

法學士 菅原大太郎君著

運送法

第一章 總論

第二章 運送者の權利義務……⊙運送人の種類⊙慣習法上の權利義務⊙寄託⊙委任⊙過失の程度外四件

第三章 運送業者……⊙運送業者の定義⊙船舶外十件

第四章 運送業者の承諾義務(引受義務)……五件

第五章 運送契約……⊙運送契約の種類⊙受取證⊙船荷證書⊙船荷證券の效力⊙傭船契約證外七件

第六章 運送業者に對する物品の引渡……三件

第七章 運送行爲に關する運送業者の義務……⊙運送行爲の開始及び遂行⊙水路運送⊙失路外九件

第八章 運送品に對する運送業者の責任……⊙運送品の保險者⊙責任の除外⊙日本商法の規定外廿件

第九章 運送業者の運送品引渡……十七件

第十章 運送業者の權利……⊙占有者の權利外十二件

第十一章 船舶及び船員……⊙船籍⊙救助外廿一件

第十二章 共同海損……⊙共同海損の定義外九件

第十三章 旅客運送……⊙旅客⊙旅客たる資格の終了⊙旅客運送業者の義務⊙[illegible]力[illegible]防⊙[illegible]務外六件

第十四章 接續線の運送業者……⊙接續線の運送業者か組合たる場合⊙運送品占有の推定外五件

附錄 成文法と慣習法……⊙成文法の淵源外十九項

法學士 赤松梅吉君著

船舶論

第一編 緒論

●船舶の變遷及種類●汽機の種類●働及馬力●噸數、吃水及節

第二編 經濟的及法律的研究

●海運業の沿革(古代、中世近世に於ける狀況)●海商法の沿革及特質●船舶所有權(船舶の意義、船舶所有權の取得及移轉、船舶の國籍及登記)●船舶所有者、船舶管理人及船舶賃貸借(船舶共有者間の權利義務、第三者若くは船員に對する船舶所有者の權利及責任、船舶管理人、船舶の賃貸借)●船員(船長の義務、船長の權利、海員の權利、海員の義務)●運送契約物品の運送契約五項、旅客の運送契約三項)●海損(共同海損三項、單獨海損、衝突、救援及救助)●海上保險(海上保險の沿革、海上保險契約の成立、保險者の引受くべき危險、保險者の引受けさる危險、遭難の場合に於ける手續、委付)●船舶債權者(船舶債權の順位、船舶の登記、船舶債權の消滅)

理學士 奥村英夫君著

保險通論

序論 保險の歷史

第一編 總論

第一章 古代歷史に現はれたる保險的事實

第二章 保險の淵源

第三章 近世保險事業の發達

第二編 保險の普通本體

序論

第一章 保險の目的

第二章 保險の本質

第三章 保險の形式

第三編 保險技術論

序論

第一章 保險料定の技術

第二章 損害分配の技術

第四編 保險法論

總論

第一章 保險契約法論

第二章 保險業法論

法學士 佐々木雄二郎君著

金融論

第一編 金融の原理

◎總論◎國庫金の收支（國庫の組織、公債、租税）◎國際貸借關係（貿易關係以外の原因による國際貸借關係、國際貿易に因る國際貸借關係）◎經濟諸機關資金の需給◎貨物の生產並聚散上に要する資金◎支拂期◎通貨の增減◎地價及有價證券相場の騰落

第二編 金融に附隨の現象

◎金利◎正貨の出入◎有價證券相場の騰落◎恐慌◎銀行の破綻

第三編 金融の機關

◎銀行（總論、銀行資金、銀行資金の使用、準備金、我國に於ける各種銀行の沿革）◎手形仲買人及「ヂスカウント、ハウス」（總論、手形仲買人及「ヂスカウント、ハウス」の資金、其資金の使用並に準備金外一項）◎信託會社◎手形交換所（交換所の性質並に其便益、萬國手形交換所、我國に於ける交換所の沿革）◎金融救濟聯盟

第四編 金融の手段

◎貨幣（硬貨、紙幣外一項）◎手形◎小切手（四項）

第五編 明治卅年以降我國に於ける金融の概況

法學士 清水泰吉君著

商業經濟學

第一編 商業の概

第一章 商業の起源……◎

第二章 商業の意義……◎　の意義◎法律上の意義（各國の立法例、日本商法）

第三章 商業の種類……◎形式上の類別◎實質上の類別

第四章 商業の發達……◎商業發達の要素◎商業發達の利害◎商業發達の時期◎商業發達の沿革

第二編 商業經濟の理由

第一章 總說……◎商業經濟學の意義と地位

第二章 商業經濟の要素……◎商人◎商品◎商務

第三章 商業經濟の機關

第四章 市場關係……◎市場◎市場價格◎市場の狀態

法學士 添田敬一郎君著

商法汎論

第一編 緒論

○商法の地位○商及び商學の分類○商事及び之に適用すべき法律○商法の沿革○商行爲

第二編 商の主體

○概說○商行爲能力○商業登記○商號○商業帳簿○營業所○商人○商業輔助人○會社

第三編 商の客體（商行爲）

○總則○賣買○交互計算○匿名組合○代理營業○仲立營業○問屋營業○運送取扱營業○運送營業○寄託○保險

第四編 手形

○總則○爲換手形○約束手形

第五編 海商

○船舶○船舶所有者○船員○運送○海損○保險○船舶債權者

女學世界

（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）　第七卷第七號　（明治四十年五月五日發行 毎月一回五日發行）



（定價金貳拾錢）